
猫又と色情狂

遠堂 沙弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又と色情狂

【Zコード】

Z3216

【作者名】

遠堂 沙弥

【あらすじ】

幼い頃から幽霊や物の怪が見える猫又 ねこまた 君彦は、アメシヨーもどきの猫又に取り憑かれていた。一方、異性から異常なまでにモテまくる志岐城 しきじょう 韶子は色情靈に取り憑かれたせいで男性不信に陥っていた。

そんな一人が出会いつて、果たして恋は芽生えるのか？

作者にとって初めてのドタバタラブコメディー、一応ほのぼのを目指していたりな・・・そんなお話を

猫又と青年（前書き）

この小説の主人公は、一人です。

話の展開によつては視点が変わつたりしますので、出来るだけ誰の視点かすぐに

理解出来るように配慮するつもりですがそれでも読みにくかつたら申し訳ありません。

猫又と青年

正直なところ、オレは『変な人』である。変な人ではあるが決して『変態』ではない、あくまで他人より少し変わった人だ。

変な所、その1。

オレの名前は『猫又 君彦』^{ねこまた きみひこ} という。

幸い名字を理由にイジメられたことはなかつたが、からかわれたり笑われたりするのはもう日常茶飯事である。

今ではすっかり慣れたということもあって、猫又という名字のせいで特に思い悩んだりとか、そういうのはなかつたりする。

変な所、その2。

物心つく前から普通の人には見えないモノが見えたる、いわゆる『幽靈』とか『物の怪』・・・そういう類のモノだ。

幼い頃から『そういうモノ』が普通に見えていたので、それが『死んだ者』だという自覚が子供の頃にはなかつたのだ。

生きている者と死んでいる者の区別がつかず、どうして他の人は見えないのか幼い頃には不思議に思つっていた。

今となつてはそういう区別は一応ついてるので、出来るだけ見ないように・・・見えないフリをしようとして試みる。

しかし、・・・幽靈というものは随分と自己顯示欲が強かつたりした。

誰もが幽靈となつた自分に目もくれない中、自分のことが見えている、存在を認識しているとバレたからさあ大変。

こぞつて自分の存在をアピールしていく幽靈達に、毎日ストーキ

ングされる始末。

おかげで幽霊が見えない回りの人達は、まとわりつく幽霊を払いのけているオレの姿を見て、『危ない高校生』だと認識されてしまったのだ。

正直、猫又なんて名字でほんの少しだけ悩んでいた昔の自分がバカらしくなつてくる。

だがしかし・・・！

オレには『その2』をも上回る、もっと迷惑極まりない変な所があるのだ！

ぶつちやけこいつに比べたら『頭のおかしい危ない青年』だと思われる方が、どんだけマシか・・・っ！

『なあ～～にをさつきからぶつべを壱つてんだよ、君彦』

無視だ、むしムシ無視！

『おい、君彦つてばよう・・・返事位しろよなあ』

馴れ馴れしく話しかけるな！ 猫なで声出したつて無駄だ、オレには通用しないからな！

『・・・おつ、あそこ見えるは愛しの黒依じやねえか？』

「なあにい～～！？ 黒依ぢやん！？ ビジだよビジだぞ！ だ、力
ワイイ黒依ぢや～～んつ！～！」

ハツ！

・・・オレの、バカ。

『ほんと、お前は可愛いやつだよ・・・』

「ひめい、オレの頭にまとわりつくな！ あつ、バカ！ カバンを持ち上げるな、通行人が見たらどうすんだよ！」

・・・そう。

オレの頭に、脇腹に、足元にまとわりついちゃうとしたこのアメシヨーもどき。

尻尾が2本・・・、つまり二又の尾を持つたこの猫。

何かの冗談か、シャレのつもりか？ 座布団やれねえぞこのレベルじや。

そう・・・私こと猫又 真彦は、どうこうわけか猫又という物の怪に取り憑かれているのだ！

『けけつ、いいじゃねえか・・・。一人っ子のお前にや、オレ様みたいな愛玩動物は心の癒しだろ?』

つるさい、黙れ、普通の猫ならまだしも小生意氣な言動が目立つお前なんぞ願い下げだ!

黒髪のショートヘアにメガネ、背格好は至つて普通の平々凡々、趣味は料理と・・・ぢこからぢつ見ても世間で言ひつ『草食男子』な猫又君彦。

見た目はアメリカンショートヘアだが、本人(本猫か?)曰く血統書付きだと言い張る、雑種の『猫又』との奇妙な共同生活。

この数分後、君彦はある女子高生と出会つことになる。
果たして猫又に悩まされる君彦に、幸せは訪れるのか・・・?

猫又と青年（後書き）

見切り発車のよつに始めてしまつたこの小説。
他にも連載を多数抱えていますが思い付いたら即執筆！・・・とい
う、いい加減な作者ですがどうぞ読んであげてください。

悩める女子高生（前書き）

今回はもう一人の主人公、響子の視点です。

悩める女子高生

ぶつちやけ、あたしはものすごくモテる。

あつ！ 今のセリフでカチンと来たからって、足元に転がってる石を投げつけないでよつ！

理由は・・・もとい、それがあたしの意志とは程遠いものだってことを今から説明するから・・・つ！

あたしの名前は志岐城 韶子、どこからどう見ても至って平凡な女子高生。

特に美人というわけでも、ものすごくブスってわけでもない。家が金持ちってわけでもないし、・・・正直自分でもあまりに平凡過ぎてウンザリする位。
・・・にも関わらず。

回りの男共はあたしに言い寄つて来る。

ナンパしてくる。

痴漢してくる。

ストーカーしてくる。

あたしが急にモテ始めたのは、12歳の時。

当時片思いだった男の子に卒業式の日に告白して、それからあたしの人生は一変した。

全然あたしに興味のない素振りを見せていた彼だったのにあたしの告白に即OK。

当然ビックリしたけど、初めて出来た彼氏にあたしは舞い上がりててそんな些細なこと・・・その時は全く気にならなかつた。

それ以降、あたしは自分でも頭がおかしくなる位・・・突然モテ始めた。

中学生になつて新しいクラスメイトの男子生徒全員から、なぜか毎日のように告白されるようになつたわ。

違うクラスの男子生徒からも。

先輩からも。

果てには先生からも！

その時からあたしの不幸は始まつていたわ・・・。

回りの態度が絶対おかしいことを彼氏に相談したら、よりにもよつてこんなことを言つてきたの！

「オレの彼女がモテないわけがない、そんなこと気にしなくていいから早くやろうー！」・・・つて！

顔面パンチしてソッコー別れてやつたわよ。

でも事態はどんどん悪くなる一方・・・。

最初は学校内だけだったのに、町ですれ違つ通行人からも猛烈なアタックを受けるハメに・・・。

いや、確かに異性からモテたいなあ～っていう願望はあつたわよ？だからといつてどうしてここまでモテるのか、あたし自身理解に苦しんだわよ。

何度も鏡を見て、どこも変わった所はなかつたし……。自分で言うのもなんだけど……。

顔はホント普通だし。

モデルみたいに細いわけじゃないし。

胸だつて言う程大きくないし（あ、ホント自分で言つてショック）

性格も・・・おしとやかじゃないし、癒し系でもないし・・・どちらかと言えば凶暴な方だし。

異性にモテそうな要素をどんなに探しても、これといつて全く手掛かりなし！

かえつて自分が落ち込む結果を引き起こしただけだったわ！

そんなこんなで、あたしは7・8回田の痴漢に遭つた時点でボクシングを始めた。

全ては身を守る為・・・自分の身は自分で守るしかないとゆうやく悟つたのよ。

なんでボクシングかつて？

勿論最初はオーソドックスなところで、空手とか柔道とか合氣道とか・・・そういう道場に通つた時期もあつたわ。でもね・・・それらはあたしには向いてなかつたの、てゆうかあまり意味がなかつたの。

相手に触れる、もしくは密着する技がある限り・・・身を守る」と繋がらないつてわかったから。

練習相手が寝技ばかり仕掛けで来たモンだから、相手の股間に蹴りを入れてやめてやつたわ。

試行錯誤した結果、ボクシングに至ったというわけ。

これなら女性専用のジムもあるし、相手が男でもこっちから先にパンチ入れてやれば近付かれることもなかつたし、あたしにはこれが一番向いてたのよね。

それからというもの・・・、あたしは必要以上に接近してくる相手には容赦なく抵抗する「防衛本能」が芽生えてしまったわ。

でもあたしの不幸はそれだけでは終わらなかつた。

あまりに男を避け続けるものだから、あたしはだんだん「男」自体に嫌悪感を抱くようになつてしまつたの。

男はみんな敵、男はみんなケダモノ・・・！

防衛本能があたしに刷り込みしてしまつて、あたしは男性不信に陥つてしまつたわ。

だからといって恋愛対象が女になるわけでもない・・・、あたしはノーマルだもの。

ただ・・・何気なくクラスの女子と恋バナに発展した時に、あたしが発した言葉で回りを凍りつかせたことがあつたわ。

その時の話題は、好きな男の子のタイプ。

普通だつたら「スポーツが出来る人」とか、「優しい人」とか、

そういう感じで盛り上がる所なのにあたしは本音を言つてしまつた。

「あたしに興味がない人」

あの時の沈黙は忘れない、でも今でもそれは変わらないわ。

あたしの好きな男の子のタイプは、あたしに全然興味がない人！

これに限るの。

モテるといつことは、それはあたしに興味があるからであって・・

あたしに対しても興味がなければ、執拗に言い寄つて来ることはな

い！

痴漢して來ることもない！

無理矢理キスだの体だの求めてくることもない！

だつて、「興味がない」んだもの！

何度も聞かれてもあたしがそう答えるモノだから、その場にいた女子全員があたしに向かつていつ言つたわ。

「あなたの好みのタイプって、絶対自分を不幸にするだけよーー？」

・・・今までに不幸よ、なんだつたら代わつてよつて言いたい。
でも仕方ないじゃない！

毎日ストーキングされたら、誰だつてそうなるわよーー？

電車に乗る度、満員でもないのに100%の確率で痴漢に遭えれば
誰だつてそうなるわよーー？

痴漢をとつ捕まえて連行しても、痴漢被害者の常連となってしま

つたあたしの方が実は誘つてんじゃないかつて、逆に痴女扱いされたら誰だつてそうなるわよ！？

あたしは公共わいせつ物か！？

そんなこんなであたしは出来るだけ目立たないようになり、誘つてんじゃねえかつて思われない為に努力してるわ。

回りから「暗い」って印象を与えるように、田元ギリギリでパツツンパツツンに切った前髪。

ホントは茶髪が地毛なんだけど、わざわざ黒髪に染めて天然パーマのロングヘアはダツサダサのおさげにして。

学校以外で外を出歩く時は必ずと言つていい程、上着ともジャージで・・・しかも紐！

スカートどころか、足が出るだけでもアウト。

出来るだけ肌を露出しないように、誘つてるような見えないうに・・・。

あたしだつて・・・ホントはオシャレのひとつもしたいわよ。

普通の女の子みたいにオシャレして、可愛い服着てメイクして町の中を歩き回りたいわよ。

でも今のあたしにはそんな行為は許されない、・・・てゆうか自殺行為。

高校へは女子高を希望したかったけど、あたしが14歳の時に両親と他界。

他に身を寄せる所もなくて遺族年金から出せるお金は公立高校が限度だった、なので結局地元の高校へ行くハメに・・・。

ここまでこんな状況が続くのかはわからない、でもあたしをナン

パしてくる男がいる限りあたしの戦いは終わらない。

あたしは原因がわからないまま、今も孤独な戦いを続いている。

ある日、あたしは買い物をする為に町へと出かけた。

いつものようにダツサダサな格好で、出来る限り人目を避けて大通りを歩かないようにしてたら・・・一人の男の子があたしに話しかけてきたわ。

バラ色と言われた高校生活を満喫出来ずに、苛立ちが募っていたせいかもしね。

ただ単に間が悪かつただけかもしね。

あたしは自分に話しかけて来た男の子に奇声を上げながら、気付けば思い切り殴り飛ばしていた。

彼があたしを・・・このモテモテ地獄から救い出してくれる運命の人とは知らずに・・・。

幽める女中高生（後書き）

最初この話を想付いた時は、「君彦サイド」「響子サイド」として別々で投稿しようと思つていました。

でもそれじゃ一重投稿になるかもしかつたので、各話で視点を変えることにしました。

どうしても君彦は君彦の、響子は響子の思いや考えなど、一人の心のすれ違いを書きたかったので、視点をそれぞれ固定することに。・。・。

後に猫又視点も登場します、楽しみにしていてください。

君彦と響子、出会い?

君彦は人通りの多い場所などを避ける傾向があつた。

猫又に取り憑かれてからというもの浮幽靈などが君彦にくつついて来ることは少くなつたのだが、それでも出来るだけ目撃を避ける為に自然と通行人の少ない道を選ぶ習慣がついてしまつているのだ。

幽靈は人通りの少ない寂しい場所を好むように思われているが、実は案外人通りの多い場所を好んでいたりする。

人混みに紛れ、あわよくば誰かに憑いて行こうという『念』が強いせいだと、君彦は猫又に教わったのだ。

君彦は新しいバイトの面接を終えてアパートの自宅に帰る途中で、目の前を歩く一人の女性に注目する。

足元をぼてぼてと歩く猫又も、君彦と同じタイミングで見つけた。

『おいおい、こりやまた大層なモンに憑かれてるみたいだな』

君彦は足を止める。

黒髪で長いおさげを結つたジャージ女性には、まるで白蛇が全身に絡まつてまとわりつくようにしつかりと憑いていたのだ。

しかし白くて半透明な幽靈は蛇ではなくいつの時代の女性なのか、妖艶な笑みを浮かべながら君彦の方を向いてにつこり微笑む。

目が合つた瞬間、君彦は全身に奇妙な感覚を覚えた。

金縛りとは違う・・・。

まるで全身に電気が走つたような痺れを感じて、ジャージ女性の後ろ姿を見ただけでも胸が熱くなつて来る。

心臓の鼓動が速くなり、全身が火照った時・・・突然猫又が君彦の顔の辺りまでジャンプして強烈な猫パンチをました！

『しつかりしゃがれ、君彦っ！ ツツシャアツー！』

「いだあ つづ！」

左頬に猫パンチを喰らった時、一緒にメガネも飛んで行く。悲鳴を上げて・・・左頬の痛みに君彦は我に返つて猫又を見据えた、今さつき自分が一体どうなつたのかよく覚えていなかつた。片手で血の滲んだ爪痕つめあとに触れながら、君彦は舗装された道に落ちたメガネを拾い上げて割れていなか確認する。

「いきなり何するんだよ、お前は！」

出来るだけ小声で猫又に文句を言いながら、無事だつたメガネをかけた。

猫又の姿は君彦にだけ、・・・もとい靈力の強い人間にしか見えないらしい。

しかしテレパシーなどで会話が出来るわけではないので、どうしても猫又と話をするには声に出さなければいけなかつた。外で猫又と会話する姿を何人かに目撃されて、君彦が『変人』だという評判が広まつてしまつた原因のひとつでもある。

『何言つてんだ、オレは惑わされたお前を助けてやつた恩人だぜ？ 君彦・・・あれはな、一種の色情靈つてやつだ』

鋭い眼差しで猫又が言った。

君彦は少し驚いた表情になり、もう一度ジャージ女性の方へと視

線を走らせる。

しかしさつきのよきのような奇妙な感覚はもうなく、まとわりついている幽靈と田^たが合つても特に何も感じなかつた。

「色情靈つて……、確か人間を……その、違ひの意味で『襲^しう』惡靈のことか……?」

『一般的な色情靈は人間を犯すモンだがな、あいつは逆タイプみたいだぜ! 取り憑いた人間の色香を高めて、周囲の人間に犯される……。一般的のヤツに比べたら質がワリーな。君彦、お前も色情靈の色香に惑わされて危うく痴漢に成り下がるトコだつたんだ、氣を付けな』

「でも、今は全然平氣だけビ?」

『そりやオメー、このオレ様が憑いてんだから影響が少ないだけだ。オレ様に感謝すんだな! それより……、さつさと行こうぜ! オレ腹減つちまた! つて君彦!? お前どこ行くんだよつ……!』

「あんな^{もの}靈に取り憑かれたままだなんて、……放つておけない! 色情靈の存在をあの人に教えてあげて、早くお祓いするようにしなきゃダメだ!」

『だからそういうお節介はいい加減にしろつて言つてんぢろうが、おい君彦つ……!』

猫又の制止も聞かず、君彦は真つ直ぐと色情靈に取り憑かれている女性の元へと歩いて行つた。

君彦の接近に気付いた色情靈は、なおも君彦を誘惑するが通用し

ない。

「あの・・・、すみません！」

そう言つて君彦がジャージ女性を呼び止める為に、背中を叩いた時だった。

勢いよく振り向いた女性の瞳の奥には炎が燃え盛つており、歯を食いしばりながら怒りを露わにしている。

そして・・・。

「ナンパされんのもいい加減ウンザリしてるので、・・・言つてん
だろうがあああ つづー！」

右ストレートが見事君彦の頬にクリーンヒットして宙を舞つ。突然の出来事に何が何だかわけがわからない君彦は、愕然としたまま倒れ伏してしまった。

そして猫又も一本足で立ち戻したままガ ンと・・・、口をあんぐり開けている。

『 も・・・、も・・・、も・・・、君彦 』

幽霊と書く、出合ひへ。(後書き)

幽霊・物の怪に関する知識は、実際のものとは多少設定を変えていますので、「了承ください。」

あと基本的には今回のような書き方で物語は進行していきます。
「了承してほしこ」とねつかりですが、どうぞこれからも続きを読
んであげてください。

物の森の魔界へようこそ

紺色のジャージを着た黒髪のおさげ娘、もとい志岐城 韶子に殴り飛ばされた君彦はそのまま気を失ってしまった。

ハツキリ言つて君彦はケンカが弱い、運動神経も鈍い、ボクシング経験のある響子の右ストリートを避ける反射神経などを持ち合わせているはずもない。

完全に伸びてしまった君彦の回りを一本足でじょろじょろと走り回りながら猫又は、前足をバタバタとバタつかせて慌てふためく。

『君彦っ！？ 君彦 つ！！ しつかりしろ、傷
は浅いぞっ！ 不死鳥の如く蘇りやがれえ つ！
そんで早く家に帰つてオレ様にメシをたらふく食わせるんだああ
あ～～～～～つ！！』

所詮猫の考えることなど、飼い主（？）より食い扶持である。響子は伸びた君彦を毛程も気にすることなくそのまま立ち去りつとしたので、猫又の目がキランと殺意に満ちると一足歩行で追いかける！

ぼてぼてとお腹を揺らしながらー

『おいためー、待ちやがれいっ！ オレ様の食い扶持に何でことしやがんだ、しかもそのまま見捨てて立ち去らうたあどうこうア見だクラアツ！』

びしぃと左前足を突き付けるが、当然響子に猫又の声どひつか姿すら見えていない。

響子にまわりついている色情靈はクスクスと含み笑いを浮かべながら、冷たい眼差しで見据えている。

『カツチ　　ン！　完全にキレたぞ・・・このオレ様を
馬鹿にしたらどうなるか！　身を以て教えてやるぜ、ツツシャアア
ア　　！』

牙を剥き出しにして威嚇すると猫又は全身の毛を逆立てて、ぽつ
ちゅりした体とは思えない程高く高くジャンプした！

その優雅で華麗なジャンプはフイギュアスケートのようにどとも
しなやかで、猫又は多少自分に酔ったような表情を浮かべながら大
股を広げて、160センチはある響子の頭の上を軽々とまたいで行
く。

それから見事に四本足で着地して、満足げな笑みを浮かべた。

『ふつ・・・・、華麗に決まつたぜ！』

猫又にまたがれた響子は突然、持っていたエコバッグを落として
そのまま硬直していた。

まるで金縛りにでもあつたかのようにじっと立ち廻りしたまま、
怪訝な表情を浮かべて視線をきょろきょろさせる。

（え・・・今のは何!?　何か急に全身が軽くなつたような・・・
、なんだか頭がスッキリしたような??）

言葉ではうまく説明出来ない奇妙な感覚に頭を悩ませていると、
自分の目の前に立っているものがふいに目に入った。

毛色はアメリカンショートヘアを思わせるが、模様はマーブル状
ではなくトラネコそのものである。

子猫とは到底思えないそのふてぶてしい顔はどうひいき田に見て
もせいぜい7~8歳といった所、メタボ気味なぼつてりとした体型
と普通の猫とは思えない巨大な体。

小型犬にすら匹敵する・・・いやそれ以上かもしれない大きさであり、響子はこれ程までに大きな猫を今まで一度も見たことがなかった。

なぜか挑戦的な眼差しでこちらを振り返ったポーズのまま、響子をじっと見据えているではないか。

そして何より・・・体型や大きさ以前に、その猫は今まで響子が見て来た猫とは明らかにオカシイ所があつた。

(え！？ 何、・・・え！？ 尻尾が・・・、
尻尾が2本生えてる！？ ええつ！？)

奇妙な沈黙が流れた。

響子は商店街の裏道でナンパしてきた男の子を殴り飛ばした後、変な猫と一触即発な雰囲気に直面している。

と、まさにその時だつた。

「ひう～～ん・・・、いたたあ・・・。」

響子の後ろで氣を失っていた君彦が意識を取り戻して、呻きながら起き上がつた。

それを確認した猫又が声を上げる。

『情けねえぞ君彦、女のパンチで伸びるなんざ男じゃねえぜー。』

「 えつ！？」

響子は耳を疑つた。

後ろを振り向いた途端、猫がいた方から声がしたのだ・・・おっさんみたいな声が。

そしてもう一度瞬時に振り返るが、田の前におひさんなビームで
もいない。

いのちはブサイクな猫だけ。

まさか・・・と思いつつも、響子は顔を引きつらせながら冷や汗
をかいている。

響子が震える手で猫又の方を指さし、口を金魚のようにパクパク
させているのを見た猫又は面白げに、悪巧みを思い付いた笑みを浮
かべた。

動物が笑つたり怒つたり出来ないと思つことなかれ、特にこの猫
又は・・・。

君彦は殴られた頬をさすりながら呆然とした仕草で田の前の光景
に目をやる、そこには色情靈に取り憑かれている女性・・・響子と
猫又が向かい合つていたのだ。

事情がうまく飲み込めない上、猫又の姿は普通の人間には見えな
いと理解していたので、余計に向かい合つている光景が不思議に思
える。

「・・・え？ 何この風景。 何が一体どうなつてるんだ！？」

君彦がこちらの状態に気付いたのを合図に、猫又はひょうきんな
笑みを浮かべながら軽くジャンプすると一本足で着地して、この間
テレビで見たバートたしのコマネチを完コピして見せた！

『「コマネチっ！」』

それをバッヂリ目撃した響子は悲鳴を上げる。

同時に君彦は響子の絶叫を聞くなり、この女性には猫又が見えてい
ると瞬時に把握した。

物の森の世界へようこそ（後書き）

基本的に他の小説と違つて、こちらの方では短めの掲載といたします。

ギャグ・コミックス感覚で書いてるので気持ちの方をリラックスさせて、頭の中の方もゆるゆるにして読んでいただけたらと思います。

ちなみに、猫又のモデルは作者が現在飼っている愛猫をそのまま描写しております。

今年の夏で15歳、猫は10歳を超えると猫又の修行期間に入り人語も理解するとのこと。

うちの猫も猫又の修行中、現在人語を（一応）解しておりますが猫集会には参加していないので試練を受けることはないと思われます（・・・ほつ）

第一印象から決めてました！（前書き）

今回は響子視点を中心に進められます。
やつぱり「口」視点が変わるのは「せ」しゃ感じられますね。

第一印象から決めてました！

なぜかあたしは喫茶店に来ていた、あたしの向かいにはさつき殴つた男の子。

フザけているのかからかつていてるのか・・・、自分の名前を『猫又君彦』だなんて・・・。

このあたしが見知らぬ男と喫茶店！？ 全く・・・『冗談じやないわよつ！？

それもこれもゼ~~~~んぶ、この奇妙な猫のせいだわっつ！

この尻尾が2本ある不気味な猫は、猫又君彦の隣の椅子に座つて後ろ足で首の付け根あたりを搔きまくる。

や~め~て~つ！ 猫の毛が飛び散つてるから！ ノミとかいないでしおうねつ！？

「あ・・・あの、さつきも言つたと思つけど」と、猫又君彦が改まつた口調で切り出してきた。

「あ〜、あたしに靈が取り憑いてるってヤツ！？ 残念だけどそんなナンセンスなナンパ法じや、このあたしは引つかかんないから。つーかそれ以前にあたし、男に全く興味ないし？ むしろ大嫌いだし？ 侮蔑の対象だし？」

どうやらこの男、あたしに靈が取り憑いてるから面倒なことになつてるとかなんとか・・・忠告しに来たみたい。

それ以前にあたしはこの不気味な猫について説明してほしいんだけど！？

大体このあたしがわざわざ時間を割いて大嫌いな男の誘いを受けてまで、この不気味な猫について聞いてやろうとついて来てやつ

たつてのに。

あたしが猫又君彦に田もくれずカフェラテを飲んでたら、『いつ・

・・あたしの田の前で猫と会話をし始めたっ！

田の前で内緒話つ！？ 天然か、こいつわつ！！

「をい猫又・・・。 ど〜〜してお前の姿は見えてるのに彼女、肝心の色情靈が見えてないんだよつ！？ 色情靈を見るようにしないとどれだけ説明しても信じてもらえないじゃないか、一体どうすんだよ！」

『あんなあ・・・、そもそもお前。 見える見えない以前にこの女に忠告してやるつと意気込んでたんじやねえのかよ！？ こういう時だけオレに頼つてんじやねえって、その辺はお前が何とかしろよな』

「でも彼女・・・、一足歩行で言葉を喋るお前に興味津々みたいじゃないか。 ほら、さつきからお前の方をちらちら見てんぞ！？ カフェラテ飲みながらちらちらと何か言いたげだぞ！？ お前から説明してやれば納得するんじゃないのか！？ お前、物の怪の親玉みたいなモンだろうが」

『ヤだよメンドくせえ・・・、大体オレあ誰が何に取り憑かれてようがどうでもいいんだよ』

「無責任なこと言つてんなよ、彼女がお前のことを見えるようにしたのはお前の仕業なんだろうが！？ ちゃんと責任取つてだなあ・・・・つ！」

「あのおー？ 特に用事がないんならあたし、もう帰りたいんだけどー？」

我慢出来なくなつたあたしは、イライラとした態度を隠しもせずに言ひ放つてやつた。

すると猫又君彦は慌てるよつと両手をバタつかせながら何かを訴えようとしている、動きがほんとバカっぽい。

猫について話す気がないんなら、こんなもやしつこに用はない！
あたしは引き止めようとする猫又君彦のことを思い切り無視して席を立ち上がつた、すると・・・。

「よお姉ちゃん、そんないかにもな童貞君は放つておいてこのオレと遊ばね？」

「・・・はあ！？」

金髪のワーゼントにグラサン、JJJはハワイかつて格好をした、いかにもチャラい男があたしに話しかけて来る。

どうやらこいつ・・・すぐ近くの席で食事中だった所にあたしが店に入つて来て、席を立つまでずっと狙つてたみたい。

あたしはあからさまに嫌悪感たっぷりな表情を浮かべて睨みつけやる、じついう手合いは攻撃系で対処するに限るからー。
チャラ男があたしの方に掴みかかるうとした時・・・。

「 つー？」

チャラ男の腕を掴んだ猫又君彦は、怖がる様子もなくあたしをかばうように立ち塞がつた。

当然自分に逆らつた相手に怒りを隠せないチャラ男の顔がみるみる赤くなつていく、ヤバイ・・・こいつ下級不良タイプだわ！？（見た目からそうだけど・・・）

自分よりも明らかに弱い相手に限つて、生意気な行動を取られた

らすぐさま戦闘態勢に入るといつ弱い者にじめタイプ！－

「すみません、彼女は今オレと話をしてるんです。用事があるなら後にしてもらえませんか？」

「何なに！？ 何なのその余裕つ！？ 何、実はケンカが強いとか！？ サっきあたしに殴られて伸びてたじやない！」

明らかに弱かつたじやない！ なのにどうして自分よりケンカが強そうなキャラ男に向かつてそんな強気な態度ワケ！？

やっぱバカ！？ こいつバカなの！？

・・・う、動搖してるのはあたしの方みたい、とにかく！

「ちょっとあんた・・・、無理してんじやないわよ。あたしのことは大丈夫だから、巻き込まれない内にわっせとビックリ行つてよね！」

「そうはいかないよ、だつてこの人・・・君の色情靈の力に惹きつけられて惑わされてるだけだから。悪霊に惑わされた人間はすぐ根源から引き離さなくちや大変なことに・・・」

ん？ それってちょっと待つて！？

猫又君彦の言い回しに引っ掛けたあたしは懸命に湧き上がつて来る怒りを抑えながら、こいつの胸ぐらを掴んだ。

「それってなに？ つまりあんたが止めに入ったのってあたしを助ける為とかじやなくて、このキャラ男が大変なことにならないように、あたしから引き離そうとしてるだけってこと！？ 今言った根源つて・・・、諸悪の根源はこのあたしの方だつてか！？」

「え、だって・・・君のパンチって結構スゴかつたし、オレが助け
る必要性を感じなかつたわけで・・・。それにオレが言いたいのは
は諸悪の根源つてのは君に取り憑いてる色情靈のことであつて、別
に君がどうじうつてわけじゃないよ！？」

あつ、

ホラ！ 今、色情靈がこの人のこと誘惑してゐつ！―― 惑わされて
自我を失う前に早いとこ何とかしなくちゃ！」

「、こいつ！

あたしのことは・・・、アウト オブ 眼中！？

今までこんなことは有り得なかつた。
いやいや、別に自意識過剰とかそういう意味じゃなくて・・・
っ！

あたしが自分の意志とは関係なく周囲からモテ始めてからと言う
もの、あたしに注目しなかつた男は今まで存在しなかつたとい
う意味であつて・・・っ！

え・・・？ なに、つてことはもしかしてこいつ。

もしこいつの言つ『色情靈』つていう話が本当だつたとして、最
初からこの人・・・。

あたしに興味があつて近付いたんじゃないってこと?
むしろあたしに取り憑いてるつていう『色情靈』を何とかする為
に、あたしに声をかけて・・・お祓いしようとしてただけつてこと
！？

あたしの心臓が大きく跳ね上がる。
急に鼓動が早くなつて、顔がだんだん熱くなつて來るのがわかつ
た。

あたしとブサイク猫との絶叫が綺麗にハモる。

猫又君彦は何を思つたのか、椅子で毛づくろいしていたフサイケ
猫の首根っこを掴むとあたしの頭の上に乗せて來た。

た臭いが、あたしの顔面を襲う。

第一印象から決めてました！（後書き）

平々凡々な草食男子である君彦クンが、ヤンキーに堂々と立ち向かう姿。

やはり違和感ですか？（笑）

なぜ彼が恐れることなくヤンキーに逆らえたのか、それは後日近い内に語られることになります。

あ、前話でも書きましたけど君彦クンが「ケンカが弱い」って設定は変わりません。

ですから「実はケンカが強かつた！」みたいなことにはならないので、「安心を！」

猫又活用法（前書き）

今回は君彦視点で「じざ」こります。

「書く」分には慣れましたが、続けて「読む」と違和感があります。
もう少し工夫するべきかもしれません、まだしばらくの間この手
法でお付き合い願います、すみません。

とりあえずオレは勘を頼りに、椅子で無関心を決め込んでいる猫又の伸びきった首根っこを捕まえて、色情靈に取り憑かれている女性・・・志岐城響子さんの頭上にいる（ヤンキー風の男を今まさに誘惑している）色情靈曰がけて猫又を突き付けてやつた。

殆ど、志岐城さんの頭の上に乗せる形になってしまったが。

だがしかし、案の定・・・！

猫又の靈力は他の靈を鎮める力があるのか、靈界に関する知識が特に詳しいわけでもないから本当の所はよくわからないけど。

とにかく志岐城さんにまとわりついている女性の姿をした色情靈が、猫又の存在によつて苦しそうな表情を浮かべるとそのまま志岐城さんの体から離れて行くのがオレの目には見えた。いつもならあれだけハツキリ見える靈だと声や悲鳴が聞こえて来そうなものなんだけど、あの色情靈は姿が見えているオレに対して何も言わなかつたな・・・。

生きている人間に取り憑く靈の大半が、大体何かを訴える為に人間に取り憑くものなんだけど・・・。

オレがそんなことを思いながら猫又の体重が志岐城さんにからないように、ずっと首根っこを捕まえて頭の上にソフトに乗せていた時だった。

色情靈の力によつて惑わされていたヤンキーは、我に返つたように志岐城さんることを上から下へ確認するように見つめている。

もつともグラサンをかけているからどんな目つきなのか、本当に見つめているのかオレには確認のしようがないけど・・・。

ようやく自分が惑わされていたことに気付いて、頭をぼりぼり搔

きながら嫌悪感を露わにした表情を浮かべる。

「チツ・・・、なんだよこのイモくせえ女はー、なんでこのオレが
こんなダセヒ女を口説かなきゃなんねえんだよ、胸クソワリー！」

渋谷系のような喋り方で文句をたれると、男はそのまま不満たつ
ふりにブツブツ咳きながら喫茶店を出て行ってしまった。

・・・勿論、ちゃんとお金は払つて行つたようだが。

とりあえず良かつた、何事もなく済んで。

だがしかしホツとするのも束の間、オレは安堵していく猫又を志
岐城さんの頭の上に乗せっぱなしにしていたのを忘れていたのだ！
志岐城さんと猫又が大声を張り上げた後にオレの名前を何度も叫
ぶのが聞こえるまで・・・、オレは不覚にも全く気付かなかつた。

また志岐城さんを怒らせてしまつた・・・。

とりあえずヤンキー男の態度の豹変を見て不審に思つた志岐城さ
んは、改めてオレの話を聞く気になつてくれたみたいだ。

そのままオレ達を置いて喫茶店を出て行かず、志岐城さんは再び
椅子に座ると両手を組みながら今度はカプチーノを注文する。

「
で？」

ぶすっとしかめつ面をしながら、志岐城さんはたつた一言・・・
オレ達に事情説明を求めた。

オレは不意に右隣の椅子に座つている猫又の方に視線を送るが、
わつき首根っこを掴まえたことをまだ怒つているのか・・・。

いつけの方はふくれつ面をしながらそっぽを向きやがつた。

ともかくまずはわつきのことを謝つた方がいいよな、・・・理由
を説明しながら。

「あの、さつきのはホント……」めんなさい。志岐城さんをナンパしようとしてた男の人、が色情靈に惑わされているのを見て、猫又を使えば色情靈の誘惑を断ち切ることが出来るのかと思ったから。・・、ついあんなことを」

「あ、そう……それで？ その色情靈とか言ひやつは退治出来たわけ？」

「いや、オレは別に靈媒師とかそういうのじゃないから靈魂を鎮めたり成仏させたりする能力は持つてないんだよ。 オレに出来るのはこの世に彷徨つている幽靈とか、猫又みたいな物の怪が見えるってだけで……。 さつきのはあくまで、猫又で一時的に志岐城さんから引き離したってだけなんだ！ 多分……、志岐城さんの周辺に猫又の気配がなくなればまた戻つて来ると思つけど」

重い沈黙が流れる。

オレの話をちゃんと信じてくれてるのだから？ それとも頭のおかしい奴だと疑われてるんだろうか？

突然オレの脳裏に、昔の記憶がフラッシュバックする。

中学生の時、幽靈が見える話をクラスの友達にしてしまつて……避けられたことを。

その時オレのことを助けて、かばってくれた黒依ちゃんの笑顔を。

黒依ちゃんの笑顔を思い出したら、勇気が出て來た。

「でも、諦めちゃダメだよ！ きちんとした靈媒師の人に相談してお祓いしてもらえば、今みたいなことはもう起こらないから！ オレも手伝つかうぞ、だから志岐城さんも一緒に頑張ろつよー！」

だが志岐城さんはオレを睨みつけたまま・・・まるで踏みするような眼差しで無言を貫いている。

やつぱり会つていきなり「悪霊に取り憑かれてますよ」って言つても、信じられるはずがないよな。

でも・・・オレは諦めたくない、目の前で困つてゐる人がいるのに。しかも靈絡みで悩んでる人ならなおさら、靈を見ることが出来るオレが何とかしてあげなくちゃ!..

と、オレがもう一度説得しようとした時だつた。

「・・・あんたが言つてる」と、びつやら本氣でホントみたいね

深い溜め息をこぼしながら、志岐城さんは觀念したような口調で肩を竦める。

ちょうどその時志岐城さんが注文していたカプチーノが来たわけだが、必死で説得したせいで声が大きくなつたオレの台詞をカプチーノを持って來たウエイトレスが聞いていたようだ。

微かに笑いをこらえて、しかもオレを見る目は変人扱いする眼差しそのものだつた。

・・・まあ、今更変人扱いされるのは慣れてるからオレはいいとして・・・志岐城さん、変人ワールドに巻き込んでみません。

オレはウエイトレスが完全にどつかへ行つてしまつのを横目で確認してから、さつきの志岐城さんの言葉に感謝の言葉を述べた。

「オレが言つたこと、信じてくれるんですか!-?」

「信じるも何も・・・そこの不可解な猫が存在している時点で疑いようがないでしょ!?」この喫茶店、ペット入店お断りの看板をする位ペットの出入りを厳しくしてゐてのに・・・誰一人とし

てその猫の存在に気付かない上に、注意すらして来ない。そいつがあんたとあたし以外に『見えてない』って、そう思うしかないじゃないの。だからその・・・何だっけ、色情靈？ それがあたしに取り憑いてるってのも、一応・・・百歩譲って信じてあげることにしたの！』

志岐城さんがオレの言つことを信じてくれたこと、思わず嬉しくなつてオレは思い切り安堵の笑みを浮かべた。

あれ・・・？ 志岐城さんの顔が赤い、どうしたんだろ・・・。オレが不思議に思つていると、すかさず猫又の奴が茶々を入れて来る。

『だから言つたるー、オレ様の姿を見えるようにすりゃどんなに頭の固いやツだつて、お前のすつとんきょーな話を信じやれるを得なくなるつてな・・・！』

「そんなこと一つ言も言つてないけどなー！」

相変わらず偉そうな態度をしている猫又の丸まつた背中を、オレは片手で逆撫でしてやる。

・・・と、猫又の相手をしている場合じやなかつた！

オレはすぐに志岐城さんの方に向き直つて、早速色情靈を祓う為の話題に切り換えようとした。

しかしまたしても猫又が口を挟んで来やがるー！

『君彦、意氣揚々としてる所ワリーケどな・・・。その女に憑いてる色情靈の淨靈を、そんじょそこいらのインチキ靈媒師に依頼しうとしても無駄つてモンだぜ？』

「何でつー？ 一体ビリーニングだよ、猫又ー？」

オレだけではなく志岐城さんも猫又の方に注目した。

しかも鈍感なオレは、志岐城さんの田の前で思い切り動搖した態度を取ってしまう。

一番不安で心配しているのは彼女の方なのに、本当に全く

オレのバカ！

猫又活用法（後書き）

今回出て来た「淨靈」について。

そもそも靈を祓う用語（方法）として、除靈と淨靈という2種類の言い方が存在します。今回私が選んだ淨靈といつものは、除靈に類似した言葉として使われることが多いらしくその場合、除靈も淨靈も、人に取り憑いて災いをなす靈（惡靈や怨靈、水子の靈など）を除去するための靈能力、または儀式のこと指します。

この2種類の違いとして除靈の方は、惡靈や怨靈などと「対決」して「強制的」に排除しようとする靈能力の事だと、この小説ではそういう扱いをさせてもらっています。

そして今回猫又が言っている淨靈とは、憑いている靈の不淨な部分を浄化させることで清めて、向上・・・または納得させることで災いを止めさせ、解決しようとするもの、として扱っています。

基本的に争い事を好まない君彦に対して、響子に取り憑いている靈が例えタチの悪い惡靈と言えども「除靈」という荒々しい方法は選ばない。

そんな猫又の、君彦に対する「愛」から選び取った救済方法だったのかもしれません。

純粹過言のも、かえつて罪

猫又が放った言葉に君彦だけではなく響子も少なからず驚いていた、君彦はともかく響子については『靈』に関してはテレビで『本当にあつた怖い話』や『怪談モノ』をたまに見るだけという程度の知識なので、全然詳しくないと言つても過言ではない。

かくいう君彦は『靈が見える』と一口に言つても、靈に関する詳しい知識を持つているわけでもなく、ましてや靈に関する調べたりした経験もない。

むしろ『靈が見える』だけにテレビで怖い話や幽靈モノをしていたら、怖くて見ることが出来ないといつ・・・。

君彦にとってそれはテレビの中での話ではなく、実体験に基づく内容でもあつたりするので悪靈に対する恐怖感は『靈が見えない人』に比べたらその上をいった。

もしかしたら響子よりも靈に関する知識は乏しいのかもしない。そんな状態の一人に向かつて猫又は、響子に取り憑いている色情靈を祓うことが出来ないと呟つてゐるように聞こえて動搖していたのだ。

「ちょっと・・・それどうこうことよー? こいつの話じゃお祓いすればあたしは色情靈から解放されるんじゃないのー? 話が違うじゃない!ー」

不安で一杯なんだろうと心配していた君彦は、響子の口調がより一層強くなっているのを聞いて少しだけほつとしていた。

てつゝきりシヨックが強くて落ち込まれるかと思っていたのだが、これだけ声を張れるなら君彦が思つてはいる程そんなに傷付いてるわけではなさそうだと思ったのだ。

猫又がテーブルの上に乗ると、左手を舐めて顔を洗う仕草をしな

がら説明し出す。

『オレ様が見たところ・・・、お前に憑いてる色情靈は相当根強い念を持つてる。そんな手強い悪靈相手にだぜ？ 適当に転がつてるだらうつてだけの話よ』

「・・・そんなに質の悪い靈なの！？ あたしに憑いてる奴って・・・」

響子の顔色が悪くなる、それもそうだらうと君彦は内心思つた。ただでさえ自分が悪靈に取り憑かれていることを知つたばかりなのに、それが普通の靈媒師では歯が立たないと言われてしまつ。やはり不安にならないはずがないのだ、ほんの少しでもほつとした自分にムカツ腹が立つた。

『まあ、大抵の色情靈は自分が取り憑いた相手を犯すモンだからな。同性の靈つてのもあるかもしけねえが、それでも取り憑いた相手に被害が及ぶよう周囲に惡意をばら撒くつてパターンはオレもそんなに聞いたことがねえよ。それだけお前自身が、それとも先祖代々が恨みを買つてるか・・・。どつちにしろこれだけの念はよっぽどだぜ？ だから諦めな、凄腕の靈媒師なんぞ稀だ』

再び沈黙が走つた。

響子は口をつぐんでうつむいている、ぎゅっとももの上に置いてる両手を握りしめた。

(・・・あたしが異常に異性を刺激していた理由、これだつたんだ。それなら納得いくかもしれない、あたし自身が特に変わった所なんてないし・・・そう考えたらこいつらの言つてることを信じても

いいかもしない。あたしがおかしくなったのは、その色情靈つていう悪靈のせい……。そいつのせいであたしの人生は狂わされた……！　あたしがこんな風になつたのも、全部いいつに取り憑かれていたせいだつたんだ！）

そう思つと悲しみより怒りの方が増して来る。

しかし原因が分かつても対処法がどうしようもないならお手上げ状態である、とその時。

君彦がハツとした顔つきに変わると沈黙を破つた。

「……方法があるかも！」

君彦の言葉に響子は田の前に座つている男の方へと視線を送る。

これまで……、色情靈に取り憑かれてからと云つもの響子が異性を真つ直ぐと見つめたことはなかつた。

原因がわかつたからかもしれない、もしかしたら君彦にだけは色情靈の影響がないからかもしれない。

それでも響子が異性のことを真つ直ぐに見つめたのは、12歳以来だつた。

君彦もまた響子の瞳を真つ直ぐと見つめ返して屈託のない笑みを浮かべる、途端に響子は視線を逸らした。

「猫又だよ！」

「はー？」『はあつー？』

またも一人の声がハモる、もしかしたら一人は意外にも息が合ひのかもしない。

そんな二人の奇妙な反応に臆することなく、君彦は突破口を見つ

けた喜びに自然と声が弾んだ。

「ほー、さつき志岐城さんに猫又をくつつけたら色情靈の誘惑効果が相殺されたじゃないか！ それなら色情靈を祓うことが出来る靈媒師を見つけるまでの間は、志岐城さんの側に常に猫又を常備されれば色情靈の力を弱めることが出来るんじゃないかなー！？」

『お前な、オレのことを装備品か何かと勘違いしてねえかー…？』

「あたしにこの猫飼えって言つわけ！？ 言つておくけど保護者が猫アレルギーな上に、あたしのマンショーンはペット禁止なんだけど！ ・・・あ、こいつ他の人には見えないんだっけ？」

しかし他に方法がない、君彦は一人の文句には耳を貸さずに何とか押し通そうとする。

「今まで志岐城さんが色情靈のせいでどんな目に遭つて来たのか、オレには想像するしか出来ないけど・・・。男性不信に陥る位ヒドイ目に遭つてるってのはわかつたつもりだよ。 それならせめてほんの少しでも、どんなに小さくても試してみる価値はあると思うんだ！」

『お前・・・ひょっとしてさつ氣なく厄介払いしようとしてねえか！？』

猫又が疑わしそうに君彦を睨みつける、しかしこの屈託のない笑顔と確信した強い眼差しは裏も何もない・・・。

本音から響子のことを案じて、そして提案しているんだと猫又は察した。

『わかった・・・、お前の言いたいことはよくわかっただけどな！ 残念だけどそれも無理だ、オレはお前に取り憑いてんだぜ？ 他の奴に取り憑くつもんならそれは一重契約と一緒にになっちまつ、だから駄目なの』

君彦が猫又の口と鼻の先まで詰め寄つて反論した。

「何だよその一重契約ってのは！？ 言つとくがオレはお前に取り憑いて欲しいなんて頼んだ覚えはないぞ！？」

『靈界の何たるかも知らないド素人がオレに反論か？ お前に覚えがなくても、オレはお前に取り憑くようになつてんの！ とにかく！ オレが四六時中この姉ちゃんの側に居憑くことは出来ねえ、どんな理由があつともな』

万策尽きた、と誰もが思つた。

しかし君彦は全く諦めておらず、それなら仕方ないなといつ程度に肩を竦めると最後の方法と言わんばかりのテンションで告げる。

「それじゃ・・・、猫又に取り憑かれてるオレが志岐城さんの側にいるしかないな」

「えつ！？」

響子の心臓の鼓動が早くなつた、口をぱちくつさせた金魚のように口をぱくぱく。

君彦の爆弾発言に響子が言葉を失つていると、猫又は野次馬根性ならぬ野次猫根性でにやりとしていた。

君彦のモットー

君彦の何気ない言葉に、猫又と響子は口をあんぐりとさせながら絶句していた。

猫又に関しては絶句と共に含み笑いすら浮かべているが、一人のそんな反応を見て自分が何かおかしいことでも言つたのかと全く自覚がない態度で君彦は首を傾げている。

『をいをい、エライまたスピードィーな展開じゃねえか。まさか会つていきなり交際宣言たあ、お前も隅に置けねえなあ・・・って黒依はどうすんだよ？ ああ、一股？ 一股君彦つか？』

「お前は一体何の話をしてんだよつ！ オレが言いたいのはそういうことじやなくてっ！！ 猫又に取り憑かれてるオレが志岐城さんと一緒にいることで、その間だけでも色情靈を何とか出来ないかつて意味でだなあ！ 全く・・・オレはともかく志岐城さんに失礼だら

「

君彦からハツキリとしつ訂正されて、何とも複雑そうな表情を浮かべる響子。

本来ならばこんなぞんざいな扱いをされる方が響子にひとつては願つてもないことなのだが、ここまで眼中にない扱いをされるのも色情靈に取り憑かれて以来滅多にないことであった。

とりあえず君彦の言いたいことはわかつたのだが、どう考えてもその案が無謀かつ有利得ないという事実だけは否めない。

「言つとくけどそんなのあたしは絶対お断りだからね！？ ただでさえ男が大嫌いなのに、何で今日初めて会つたばっかのあんたところから先もずっと一緒にいなきゃなんないわけ？」

「確かにそうかもしれないけど・・・、せめて凄腕の靈媒師が見つかるまでの間だけでもな」

「却下ー。」

『もつやめとけって君彦、本人がイヤだつてんだから放つておきやいいんだよ』

「あんたは黙つてなさいよー。」

響子が苛立ちを猫又にぶつけると、猫又もまた響子に向かつて『フーッー！』と威嚇した。

このままでは埒が明かないと思つた響子は君彦を睨みつけながら、本当の目的を尋ねる。

やはりどうしても君彦のことが信用出来ない。

自分に色情靈が取り憑いているといつ点に関しては認めるとしても、響子と全く関わりがない上に放つておいても君彦自身に何か災いが降りかかるわけでもない。

響子を助けることに何の利益も発生しないのに、なぜ君彦はいつもまでして響子を助けようとするのか理解出来なかつたのだ。
ましてや君彦はれつきとした『男』だ、『オス』だ、『male』

だ。

色情靈に取り憑かれている限り響子が戦い続けなければならぬ最大の敵である。

だから響子は、君彦ですら心から信用することができずについたのだ。

「・・・ひとつだけ聞くけど、何であんたはあたしなんかの為にそこまで必死になつて助けようとすんの？ あたしを助けてあんたに

何か得があるわけ？ 仮にあんたのお陰であたしが色情靈から解放されたとしても、あたしがあんたにお礼をすることは限らないのよ。

だつてあんたが勝手に一方的に助けようとしてるだけだもの。

先に言つておくけど、あたしに見返りを求めてるつもりなら全くの無駄だから。 さ、どう？ あたしなんかを助ける気持ちなんて綺麗さっぱりなくなつたでしょ？

かたくなに拒絶する響子の姿を見て、君彦は真つ直ぐと・・・真剣に見据えた。

響子もまた、これで君彦が男としての本性を現わして自分の前から去ってくれることを願つている。

見返りも何もなしに、自分のような敵対心剥き出しの女なんかを助けようとする男がこの世にいるわけがない。

どうせ結局は・・・最終的には見返りを得ようとするとばずだ、男はみんなそうなのだから。

響子はまるで自分にそつ言い聞かせるよつこ、心の中で何度も繰り返した。

「オレのお祖父ちゃんが・・・

「・・・え？」

君彦の声が囁くよつこに少へくべ、響子は思わず聞き逃す所だった。

「オレのお祖父ちゃん、すゞく靈感が強くて靈媒師みたいなことをしてた人だつたんだ」

突然身の上話を語りだした、響子は少し動搖しながらも君彦の言葉に割つて入ることが出来ずについた。

祖父の話をする君彦の表情がとても寂しく、孤独を感じさせるよ

うな・・・そんな物憂げな雰囲気を感じたからだ。

猫又は顔を洗うフリをして、窓の外に目をやる。

「別に商売として悪霊退治をしていたわけじゃないけど、お祖父ちゃんも幽霊や物の怪のことで困つてゐる人達を放つておけない性分だつたみたいでさ。たまに知り合いから悪霊退治みたいなことを頼まれたりして、それでたくさんの人達を幽霊や物の怪から助けて來たんだよ。オレ・・・ずっと幼い頃に両親を事故で亡くして、以来ずっとお祖父ちゃんとお祖母ちゃんに育てられたんだ。

色々な人達の頼み事を聞いて、そして感謝されてるお祖父ちゃんを見て、とても尊敬してた・・・。

困つてる人を見たら助けてあげること。

自分に出来ることなら、最後まで頑張つてみること。

お祖父ちゃんからもらった最期の言葉なんだ、・・・結局オレが10歳の時に亡くなつたんだけど。だからオレはお祖父ちゃんみたいに誰かの役に立ちたいって思うようになつたんだよ、助けたいつて。見返りとか、お礼とか・・・そういうのは関係ないよ。だつて言い変えてみればこれはオレの自己満足のようなものだし、そんなものを求めるものじゃないからね。志岐城さんが困つてから助けてあげたいって思った。自分に出来ることがあるから、最後まで諦めないで頑張りたいって思った。・・・ただそれだけだよ」

本当の気持ちを告げた、包み隠さずにして・・・ありのままを。

ただ、『信じて欲しい』から。

だから君彦は祖父のことも話して聞かせた、今まで友達の誰にも・・・君彦が想いを抱いている黒依にすら話していないのに。

田の前にいる女性を助けたい一心で、君彦は自分の過去を話して

聞かせたのだ。

言つべきことは全て云えたつもりだ。

あとは・・・、響子次第。

響子が君彦を信じてくれるかどうか、全てはそれにかかっていた。

君彦のモジター（後書き）

響子がなかなか君彦のこと信じてくれないので話が進みません（泣）

余談ですが、お互い自己紹介はきちんと済ませております。一応本名をフルネームで明かしておりますが響子に至っては住んでる所を始めプライベートな内容は一切君彦に話していません。いつの間にやら君彦が響子のフルネームを知っている状態からスタートしていたので、不思議に思っている方へ参考までに。

響子のクセ

響子は迷っていた。

これ程かたくなには響子が、異性に對して心を開かないのもちゃんとした理由があった。

しかし今ここでその理由を会つたばかりの君彦に話す氣には到底なれない、響子が心の狭い人間であると君彦に誤解されても別に構わない」とさえ思った。

それだけ響子にとつて異性から受けた仕打ちは、深く心の傷として刻まれていたのだ。

勿論君彦の熱意が伝わらない響子ではない、それでも相手が異性といつだけでも萎縮してしまう。

拒絶反応が出てしまう。彼だけは他の男と違つと……、そう頭でわかつていても……心がついて行かなかつたのだ。

だがいくら君彦のことを拒絶しようとも、彼がこのまま黙つて響子を放つておいてはくれないことだけは理解出来る。

そこで響子は妥協することに決めた。

大きく溜め息をつきながら、頭を抱えるように渋々折れてやる。

「……わかつた、とりあえずあんたが言いたいことはわかつたわよ。生活に支障が出ない程度にはあんたの案に乗つてあげるわ、だからと言つて四六時中あんたと一緒にいるのだけは勘弁だけどね。だつて……、普通に考えても当たり前でしょ！？ のび太としずかでさえ一日中一緒になんていしないんだから。 そうね……とりあえず学校内だけとか、人通りの多い場所を練り歩く時とか……その程度でしょうね。 ……つて、よくよく考えてみりややつぱ限度があるじゃない！？ あんたにだって自分の生活があんだから・・・、あたし一人に合わせることなんて出来っこないわよ」

君彦の案に乗つてはみたものの、口に出してみればやはり無謀な策であることに変わりはなかった。

身内とかならともかく全く生活環境が異なる他人同士が、常にお互い側にいる生活など出来るはずもない。

しかしそれがわかつた響子はむしろホッとしている、異性と一日中一緒にいることが不可能と分かつた途端、肩の荷が下りた気がした。

気持ちも幾分か楽になつたおかげで、都合の良い時だけ君彦を利用することが出来ると・・・プラス思考で捉えることが出来るからだ。

安心している響子とは裏腹に君彦は難しそうな表情を浮かべながら、何かを考えている様子だ。

何がそんなに不満なんだらうと響子が首を傾げていると、君彦がおもむろに響子の方に視線を走らせて尋ねて来た。

「志岐城さん・・・、今学校がどうのって言つてたけど・・・。もしかしてオレが通つてる高校を知つてるんですか？」

「え？ ああ・・・だつてあんた風詠^{かぜよみ}高校の生徒でしょ？ 曰曜の真つ昼間から風詠の学ラン来て何してんのか知らないけど・・・、あたしもそここの高校に通つてんの」

「も、もしかして先輩でした？」

年上相手にタメ口をきいてたかもしれない、君彦は少し冷や汗をかきながら聞いてみる。

だが響子自身はそんなこと全く気にしていないのか・・・、しつとした態度で答えた。

「今年入学した1年生よ、1-B」

「あ・・・、隣のクラスだつたんだね・・・よかつた先輩とかじやなくて！ オレも今年入学したんだよ、1-A。ビックリしたく、志岐城さんつて大人っぽい雰囲気の人だから本当は大学生位じゃないのかなって思つて・・・！」

心底ほつとしている君彦の様子に、響子は呆れた顔になりながら心の中でつっこんだ。

（そもそも大学生が、こんな紺色のジャージを着てうるさいするか？）

『んで？ 話はまとまつたのかよ。オレとしてはさつと家に帰つてメシを食いてえんだけどさ・・・』

つまりなさそうに猫又がそう言つと、君彦も同意して一人（と一匹）は喫茶店を出て行つた。

すると君彦は何のためらいもなく響子に向かつて右手を差し出し、それを見た響子は思い切り不快な表情を見せる。あまりに堂々とした拒絕に、君彦はたじろいだ。

「・・・何、これ？」

「えと、一応これからもヨロシクって言つ・・・握手のつもり、なんだけど」

当然、男嫌いの響子が君彦と握手をするはずもなかつた。差し出された右手を見送ると、響子の視線が・・・自然と下の方へと下がつて行く。

まるで汚らわしいものを見下すような、そんな視線に君彦が気付
き・・・そして背筋が凍つた。

(な・・・、なんか・・・、視線で犯されてるような気がするつー！)

苦笑いしながら君彦は何とか響子の視線から逃れようと、手に持
つていた学生カバンで響子の視線の先を隠そうとしてみる。
響子が釘付けレベルで凝視していたのは、君彦の股間周辺であつ
た。

勿論・・・、響子の男性不信に大きな関わりを持つこの行動は、
彼女にとつての防衛手段の一つでもある。

響子に求愛行動を示してきた異性は、大きく分けて3種類に分類
出来了。

1つ目は、内気な「目惚れ」や、「ナンパタイプ」。

これらの症状を示した異性は、「目惚れタイプ」の場合は交際以前
にまず親しくなるうと試みるので、すぐさま抵抗の意思を見せれば
案外脆く崩すことが出来る。

続いてナンパタイプの場合は、最初から交際目的ではなく、一種
の火遊び感覚を楽しもうとするだけなのでこれも前者と同じくすぐ
に抵抗の意思を見せれば割と危険度が低く、適当にあしらつておけ
ば特にどうということはない。

それでもその人物の人柄によつては危険度が増したりするのだが、
自己防衛の手段を持つ響子にとつては大きな問題にはならない。

2つ目は、積極的に交際を求めて来る、もしくはストーカータイ
プ。

これは厄介、適当にあしらおうとしてもしつこく交際を迫つて來
るので長期戦を余儀なくされるパターンが多い。

響子が最も疲れるタイプである、あまりにしつこベストーカーしてくる男がいたので、響子は過去に一度しつこいストーカーを正当防衛の名の元に半殺しの目に遭わせて病院送りにしたことがあった。

3つ目は、繁殖期タイプ。

響子が最も嫌悪感を抱くタイプである、彼等はよっぽど女に飢えているのか。

今思えば色情靈の靈力に強く惑わされたせいか、彼等は響子を見るなり欲情し性欲全開で近付いて来る。

いわゆる痴漢や変態、強姦といった犯罪タイプであり、見分けるのは簡単。

その男の股間を見ればいいのだ。

彼等のほぼ半数以上が、響子を見て勃起している。

・・・とまあ、響子は自己防衛をする為とはいえ無視することが困難となる異性に対して、自然と視線が下の方へと向かってしまうクセがあるのだ。

当然、響子のそんな悲しいクセを知らない君彦は、股間を真剣に見つめられて恥ずかしくて仕方がない様子である。

結局、君彦と握手を交わすこともなく・・・響子は君彦の股間を凝視したまま、その場を去ることとなつた。

響子を見送るようすに喫茶店の前で立ち尽くす君彦、そして彼の足元で響子の背中を見送っている猫又が一言漏らす。

『・・・変な女と関わっちゃったな、お前。ま、類は友を呼ぶつて言つし・・・明日からお前の学校生活が随分と楽しいものになりそうだな』

猫又の発した言葉に、君彦は少しだけ不安になつた。

最後の彼女の行動から本当に一筋縄ではいかないかも知れないと、
君彦は力一杯覚悟を決める。

響子のクセ（後書き）

別に読まなくても物語に支障がないコーナー。

猫又君彦のプロフィール。

猫又君彦、16歳、4月12日生まれ、A型、172センチ。

趣味は料理、好きな食べ物は和食で嫌いな食べ物はない。

特技は幽霊や物の怪が見えること（一部の人間は知ってる）、料理がプロ並。

性格は至って温厚、人付き合いが良く他人に優しい、天然、猫又に對しては辛辣な態度で接する。

黒髪のショートヘア、視力が少し悪いのでメガネを愛用、日本人の淡白な顔立ち。

肌の色は普通（白くも黒くもない）、運動は苦手だが逃げ足・・・一直線に走るだけなら普通より少し早い方、勉強は比較的苦手な方で成績は良くも悪くもない。

君彦が3歳の頃に両親を交通事故で亡くし、父方の祖父母に育てられる。

その後君彦が9歳の時に祖母が亡くなり、翌年には祖父も他界。15歳まで施設で暮らすが中学を卒業後、両親と祖父母が残した財産で施設を出て一人暮らしを始める。

現在は安アパートで暮らしており、近所付き合いもそこそこなす。将来のこととはあまり深く考えていないが、出来るだけ早く社会に出て働きたいと思っている。

料理を作るのが嫌いではないしそれなりに自信があるということもあって、将来希望する職業にコックや板前を目指すのも悪くないと考えている。

猫又に取り憑かれたのは中学生の頃。
このことに関してはまた後ほど本編にて語りさせてもらいたいと思います。

初めまして今晚は（前書き）

今回新キャラが登場します、かなりのキーマンです（笑）
これからも重要人物が登場しますので、楽しみにしていてください。

初めまして今晚は

響子がマンションへ帰る途中、相変わらず不審な男に付け回され、ナンパされ、何度も道や時間を尋ねられた。

いつものように適当にあしらつてようやく自宅に辿り着く。独身用のマンションの5階、一応セキュリティシステムが万全にされているので不審者はここまで来れないようになっている。特にこの5階は響子の保護者の知り合いが部屋を借りて住んでるので、気兼ねなく出入りすることが出来るのだ。

つまり響子に言い寄つて来る不審な男がこの5階をうひつけば、すぐさま管理人や警察に通報されるという寸法になつているのである。

マンションの鍵を開けて中に入るなりリビングの方を覗く、時計の針は6時。

まだ早いがシャワーに入ろうと、響子はもう一度室内の戸締りを厳重にチェックしてから着替えを取り出しシャワー室へ行く。

ジャージや下着を脱いでシャワーに入るが、響子は普通の女の子とは少し違ついてものすごく入浴時間が短い。

最短記録で3分、最長でも10分程度しか入らないのだ。

テキパキとシャンプー、リンスを済ませると、花のせっけんを泡立てたスポンジで全身を磨き、あとはサッとシャワーで流す。

「はあ～～、サッパリした！」

満足気にシャワー室から出て、バスタオルでロングヘアの水気を取る。

「それにしても・・・、ホント今日は変な一日だったわ。まさかこのあたしに向かつて悪霊が取り憑いてる・・・なんて言つて来る男、

今までいなかつたからね。・・・悪いヤツじゃないみたいだけど、男であることに変わりはないし。一応警戒だけは怠らないにしても・・・明日から面倒臭いわね、ずっと一緒にいるって・・・もしかして登下校とか弁当時間とか休み時間とかも一緒ってわけじゃないわよね・・・!? でも、本当ならどこにいようと声をかけて来る男が後を絶えなかつたのに・・・今日あいつと一緒にいる間はそれ程声をかけられたりしなかつた。もしかして本当にあの猫又つていう化け猫と一緒にいることで、あたしに取り憑いてる色情靈つて奴が退いてたことになるのかしら・・・!?

本当の所はどうかわからないが、あの猫又が普通の人間に見えて
いない事実だけは否定しようがなかつた。

大きな溜め息をつきながら響子が顔を上げて洗面台にある鏡で自分の姿を見た時・・・・。

卷之三

シャワーの湯気に紛れて響子の顔のすぐ横に、まるで平安時代かそこらの古めかしい雰囲気をした花魁風の若い女が、鏡越しに響子に向かって微笑んでいるのがハッキリと目に映った！

半透明でうすらうらと/or>しているが、見間違いても何でもなく……
まとわらつてよこしつかりと響子の背後にしがみつく形で取り憑
いている色情靈を田にした響子は悲鳴を上げた。

すぐさま鏡の前から身を隠し、しゃがみこむ形で腰を抜かした響子は恐怖の余り自分の足で立つことが出来ずについた。

で曇る鏡を涙目で見つめながら震える。

「そ・・・つ、そんなんつ！！！ あれが・・・あれが幽霊、嘘でしょ！？ 本当にこのあたしに悪霊が取り憑いてるって言つわけ！？ 「冗談じやないわ・・・あんなのがあたしのすぐ近くにずっといるなんてつ！！！」

殆どパニック状態に近い形で響子が脅えていると、どこからか響子の名前を呼ぶ声と共にまるで牛が突進して来るような騒音と振動が近付いて来た。

野太い声が響子の名前を呼びながら迫つて来ている。

「どうしたの？」

響子のマンションのドアがものすごい音を立ててこじ開けられて、『何』かが室内に侵入して来た。ドドドと大きな足音を立てながら近所迷惑などお構いなしに声を荒らげる。

早く出て行かなければすぐさま警察に電話をするかもしれない勢

いに、響子は急いで用意していた着替えを着て出て行つた。

リビングの方へ歩いて行くとそこには身長190センチ、盛りに盛りまくつた茶髪のヘアスタイル、がつしづとした体型にも関わらず着ている衣装は豪華絢爛な着物。

「・・・蘭子さん、あたしなら平氣だから」

懸命に何事もなかつたかのような笑みを作つて、響子はその巨大な物体を安心させるように落ち着いた口調で声をかけた。

響子の声を聞いた物体はものすごい反射神経で振り返ると、皿に涙を一杯浮かべながら唇を噛み締めていた。

「んもうー、驚かせないでちゅうだいよ、響子ちゃんつーー。私つたら・・・本当に心配してたんだからねー！」

「ホント、じめんなさい蘭子さん。ただ・・・その、体重が増えて思わず悲鳴を上げちゃつたって言つかーー何と言つかーー。」

蘭子と並ぶ名の物体が響子の手を握り、涙を流しながら再度確認する。

響子は何とか納得してもう一つに説得し続け・・・ようやく安心すると蘭子は気を落ちさせて、笑顔を取り戻した。

「響子ちゃん、私はい・つ・で・も・響子ちゃんの味方だからね！？ 可愛い姪っこを傷付ける奴はこの私が絶〜〜つ対に許さないんだから、安心していいのよ。それじゃ私、もうお店に行くから・・・私が出た後はしっかり鍵をかけて、ね？」

「はいはい、ありがと蘭子さん。それじゃお仕事頑張つてねー！」

まだ後ろ髪引かれる様子であったが、響子は大きな背中をぐいぐい押して部屋から出した。

パタンとドアを閉めて鍵をかけようとするが蘭子の馬鹿力によつて壊されたドアの鍵を見て響子は絶句する、しかし以前にも同じことがあつたので響子は平静を保ちつつ玄関の靴箱の中に隠し持つていた換えの鍵を取り付けて、何とかその場を凌ぐ。

先程の巨大な隣人、名前は蝶野蘭子（本名・志岐城則雄）ちょうの らんこ（ほんめい・しきじょう のりお） 韶子の母親の実の兄であり、現在はゲイバーのママをしている。響子の両親が他界した後、彼女の身元引受人・・・もとい保護者として面倒を見ている人物だ。

男性不信の響子がなぜ彼（彼女？）だけ受け入れることが出来ているのか・・・、それは蘭子が伯父（伯母？）という理由もあるが・・・それ以上に蘭子は全身の工事を全て済ませている、いわゆる完全なニューハーフなのだ。

故に心は正真正銘完全なる『乙女』なので、さすがの響子でも蘭子に対しては『女性・同性』として接することが可能なのである。

「はあ～・・・、あたしこれからどうしたらいいのー?」

幽霊に取り憑かれている。

それはまるでストーカーのように、自分の生活の全てを覗かれているようで実に気分が良くない。

ストーカーや変態を撃退する方法ならある程度心得ているのだが、幽霊だけは専門外だつた。

どうすればいいのかわからない響子はこの時だけは心底、幽霊が見えるという君彦の存在がとても有り難く感じられた。

「・・・ムカつくけど、明日あいつに幽霊を気にしないでやり過ぎ

す方法でも聞いてみよ」

余談であるが、この晩・・・色情靈の存在がずっと気になっていた響子は結局一睡もすることができなかつた。

初めまして今晚は（後書き）

別に読まなくとも物語に支障がないコーナー。

志岐城響子のプロフィール。

志岐城響子、15歳、8月23日生まれ、O型、160センチ。

趣味はオシャレすること、買い物、一人カラオケ。

好きな食べ物はフライ系、嫌いな食べ物はホルモン系。

特技はボクシング。

性格は本来は心根の優しい女の子なのだが色情靈のせいで極度の男性不信に陥つてゐる為、若干凶暴性が増している。男相手だと口が悪く、暴力を振ることもある。

現在は黒髪に染めているが、本来は茶髪でウェーブがかっており腰の辺りまで長い。視力は良い方、少しハーフっぽい顔立ち。勉強や運動は比較的得意な方だがコモリニケーション能力が劣つている。

響子が14歳の時に両親と他界、その後ニュー・ハーフの蘭子が保護者になりマンションで一人暮らしを始める。蘭子は響子の隣の部屋。同じ階には蘭子の知り合い＝ニュー・ハーフや、キャバ嬢達が暮らしている。

響子の詳しい過去は、本編で明かしますので今回はこの辺で・・・。

毎朝の洗礼（前書き）

1話からその存在が謎に包まれていた美少女が遂に登場です。
実は彼女もメインキャラ、さて・・・彼女のキャラが吉と出るか凶
と出るか。

今後の活躍からその性格^{キャラ}が明らかになって行きますので、楽しみにしていてください。

朝、風詠高校では新入生が入学してから2週間が過ぎようとしていた。

通学路には新品の制服に身を包み楽しそうに通う生徒も少なくない、そんな中・・・一際幸せそうに登校する男子生徒が一人。

風説高橋の校門は人で行き交うとしている豊やかな黒髪をした女子高生に向かって走って行くと、明るい声で挨拶をした。

黒髪の女子高生が振り向くと、にっこりと微笑んで挨拶する。

「君彦ケン！ お世よ、アーヴィー。」

くじつとした大きな瞳、雪のように白い肌、サラサラのストレートロングの髪の毛は背中の辺りまであり、線の細い黒髪は動く度になめらかなツヤを出しながらサラリと揺れる。

天使のよつた微笑みに可愛らしい声で挨拶をされた衝撃と感動で、君彦はそのまま卒倒しそうな位の勢いでクラクラしていた。

(超~~~~~、カワイイんですけどお~~~~~！）

もはや君彦ビジョンから見る黒依は、後光が差す程の輝きを放つ女神のように映っていた。

中学の時から全く変わり映えのしない君彦の反応に、足元で呆れ顔をしている猫又。 そんな猫又の反応もお構いなしに君彦は一日で最も楽しいひと時『黒依との会話』を楽しむ気満々である。

「そういえば君彦くん、日曜日にバイトの面接に行ってくれって言ったよね。面接の結果はもう出したのかな？？」

「うん、何か普通に面接した後になぜか厚焼き卵を作つてみろって言われてさ。普通に家で作るみたいに作つたら、何かよくわからなければ採用だつて。」

「あれ？ 確かお料理屋さんのホール係とか雑用で面接受けに行つたんじゃなかつた？」

「黒依ちゃんもそう思うでしょ！？ オレも何でかな～つて思つてたんだけど、でもオレに作れつて言つた人・・・お店の店長みたいでさ。ものすごくいかつくて怖そな感じだつたし、お店のコックさんもチーフとかもその人に逆らえないので囂氣たつぱりだつたんだ。よく意味がわからなかつたけど・・・、でももし厚焼き卵のおかげでバイトの面接通つたんならラッキーだつたかもね」

「そうだね、君彦くんのお料理ものすごく美味しいもん！ もしかしたら君彦くんのことをコックさんにするつもりでテストしたんじやない？」

普通に両手で学生カバンを持ちながら歩いて行く黒依とは異なり、君彦は全身に力が入つたように・・・まるで軍隊の行進のようにしゃきしゃきと歩きながら黒依と楽しそうに会話をする、二人がそのまま校舎の中へと入つて行こうとした時だつた。

後方から地鳴りのような音が聞こえて君彦は何事かと思いながら後ろを振り向く、すると校門の方から土煙を上げながら何かの集団が校舎に向かつて突進してくる光景が目に入る。

「な・・・、何だ一体！？」

驚く君彦に、黒依が校舎の出入り口の端の方へと逃げながら教えてやる。

「あれ、君彦クン知らないの？ あたし達が入学してから毎日この時間になると繰り広げられてる光景だよ。1・Bにものすごい美人の生徒がいて・・・、あの集団はその人を毎朝追いかけ回してるんだって」

「1・・・の、B？」

聞き覚えのあるクラスだった、君彦は顔を引きつらせながら集団の先頭を走っている人物に向かつて視線を凝らす。

ウエーブがかつた黒髪を振り乱し、必死な形相で興奮しまくった男集団から逃れようと全力疾走で向かつて来る女子高生。

昨日見た格好とは随分異なるがそれでも殺気に満ちた顔つきだけは決して忘れない、そして彼女にまとわりつくようにしつかりと取り憑いている女の色情靈、それを見れば一目瞭然であった、見間違はずもない。

「ね～～こ～～ま～～たあ
さつさと色情靈を何とかしなさいよ
つ！～！」

「し・・・つ、志岐城さんつ！？」

響子はものすごい脚力で、あつといつ間に校舎の前で立ち尽くしていた君彦に追いつくや否や、君彦の足元に隠れていた猫又を拾い上げるよつに手を伸ばす！

『つおおおおお～～～！　乱暴に掴むな、ソフトに優しく抱き上げ・・・つ、ぐはあつ！』

一本足で慌てふためく猫又の両脇を鷺掴みするよしほむんすと抱き上げた瞬間、響子に憑いていた色情靈が不快な表情を浮かべるとそのままするりと響子の体から離れて行つた。

色情靈が空へと消えて行つた瞬間に、響子を追いかけ回していた男性陣が色情靈の色欲から解放されて我に返つて行く。

彼等の殆どがまるで自分を失つていたかのように、首を傾げながら辺りを見回す。

田の前にいる響子をちらりと見るも、さつきまでの欲情がなくなつているのでそのままぞろぞろと校舎の中へと大人しく入つて行つた。

響子は彼等の変わりようを田の当たりにして、やはり今自分が両手に抱き抱えている猫又が自分の近くにいれば、色情靈による効力がなくなつて周囲の男達も平常心を保つことが出来るのだとハッキリ認識する。

難を逃れた響子であつたが、問題は少しだけ残つていた。

「ねえ・・・、君彦クン。　その人と知り合いなの？」

きゅっと握った片手を口元に当てて、君彦と響子を交互に見つめながら少し困った表情を浮かべた黒依が質問をした。

そう・・・、響子が口走つた『猫又』とは当然・・・君彦の足元にいる猫又のことを探している。

しかしこの猫又は靈感の強い人間、もしくは猫又にまたがれて強制的に靈力を付けられた者だけ田にすることが出来るのだ。

君彦はとっさに響子との関係を黒依に誤解されないと勘違いして、急激に青ざめる。

慌てる君彦を尻目に、響子は君彦と一緒にいる黒依が一体誰なの

か・・・状況が掴めていない様子でぽかんと突っ立っていた。

毎朝の洗礼（後書き）

別に読まなくても物語に支障がないコーナー。

狐崎 黒依のプロフィール。

狐崎黒依、15歳、12月12日生まれ、B型、156センチ。

趣味は、お菓子作り、洋裁など。

好きな食べ物は甘いもの、嫌いな食べ物はドリアン。

特技は裁縫。

性格は良く言えば人懐こい、悪く言えば八方美人。 人見知りや物怖じすることなく誰とでも仲良くなれる。 反面鈍い所もあり非常にマイペース。

君彦とは中学生の時に出会いつゝ、その頃から友達となり高校も同じ風詠高校へと進学する。両親と黒依との三人家族で、中流家庭。

黒依に関することは、今後本編で明かします。

無駄な努力

黒依から質問されたまさにその時だつた、始業ベルが鳴つた瞬間に黒依は自分の質問を即座に抹消して君彦の手を引っ張つた。

「大変、授業始まっちゃうよっ！！君彦ケン、早く教室に急がな
くちゃやーー！」

そう言つなり黒依は君彦の腕を取ると急いでクラス別に区切られている下駄箱がある方へと連れて行こうとする、しかし猫又と響子のことが気になつたのか君彦は少し戸惑いながら一人と一匹の方へと視線を走らせた。

「そんじや話は後でね、
猫又はあたしが預かつとくわ」

『はあああつ！？』
おこお前、何勝手なこと抜かしてやがんだよつ

しつかりと両脇を抱えられている猫又は体をよじらせて抵抗するものの、響子の束縛から逃れられない様子である。

「ご、ごめんね志岐城さん！ それじや 1時限目が終わつた後の休み時間にでも僕の方からBクラスに行くから・・・っ！」

『ぐおら君彦つーーー何あつさりと見捨ててんだテメーつーー』

猫又の絶叫もむなしく・・・結局響子に抱えられたまま猫又は君彦から引き離されて、響子のクラス1・Bへと連れて行かれる羽目になってしまった。

響子は猫又をしつかりと抱えながら教室へと入つて行く、すでに始業ベルがなつていたといふこともあり教室に辿り着くまでの廊下では誰からも声をかけたりはしなかつたが、それでも内心ハラハラしながら教室のドアを開けた。

開けた瞬間教室内にいた生徒の何人かが響子の方を振り向いたが、特に気にする様子もなくすぐにまた視線を逸らせる。

そんな彼等（特に男子生徒）の様子を確認した響子は小声で呟いた。

「ふう～ん、やつぱあんたがあたしの側にいることで色情靈とやらの効力はなくなつてしまつてゐみたいね」

『つかお前のそのイモい格好見れば誰だつて興味を示さねえと思つけどな・・・』

猫又は響子に抱きかかえられたままの状態で上から下まで眺めながら指摘する、響子は髪型こそ三つ編みをほどいているがセーラー服のスカートの下には春だといつにジャージをはいでいる。

「あのね・・・、色情靈がべつたりとあたしに取り憑いてる間はどんな格好をしていようが男共がそりやもうわんさか群がつて来てうつとうしげつたらなかつたんだからねつ！？」

響子が文句を言つついに猫又に食つてかかつてゐる途中で、何かが引っ掛けた。

「・・・ん？ 待てよ！？ といつことは、いくらあたしがイモい格好をしていようが・・・結局のところ意味がないってことにならない？ あたしに発情した男共が群がつて来てたのが全部色情靈の仕業だつたんなら、あたしがどんなにダサイ演出をしようが効果がないも同然なわけで・・・」

まるで推理小説で犯人を探すように響子はゆっくりと順序良く、自分が今置かれている状況を整理し始めた。

そんな時担任の先生が教室に入つて来たのでとりあえず席に着いてからゆっくりと推理の続きを始める響子に、猫又はやつと『抱き抱えられ状態』から解放されると大人しく響子の足元に待機しながら、響子の推理に参加する。

『ま、お前がどんな努力をしようが全部無駄だつたつてワケだわな。お前に群がつて来たつて言う男共はお前の外見に惹かれてたワケじゃなく、色情靈の誘惑に惑わされてただけだし』

猫又の無情な発言に響子は愕然とした。

口をあんぐりとさせて顔面蒼白、それから急にめまいがしてくる。クラクラと搖らぐ頭を押さえながら響子は机の上に伏せつてうなだれた、ぶつぶつと何かを呟きながら響子は今までの苦勞人生が走馬灯のように脳裏を駆け巡つている。

そんな響子のショックに、我関せずを決め込んでいる猫又は毛づくろいをしながらぼんやりしていた。

『はあ～・・・、今頃君彦のやつビリしてつかなあ？』

遠くを見つめるような眼差しで猫又は、今夜の晩ごはんに思いを馳せていたのは言つまでもない。

無駄な努力（後書き）

どんどん私の頭の中で物語が広がって行く半面、それをなかなか文章として表現出来ず、唸つて いる間に数日過ぎてしまいました。これから の展開には、シリアルスあり！ 笑いあり！ お涙あり！ なものを構想中なので、ぜひともよろしくお願ひいたします。まあ、基本「ほのぼの」をを目指しておりますが・・・。

相性、最悪！？

ようやく一時限目が終わり、早速君彦は隣のBクラスへ向かおうとした。

終業ベルが鳴った途端に席を立つて出て行こうとする君彦に、斜め前の席に座っていた黒依が気付き声をかける。

「あれ？ 君彦くん・・・ビ」行くの？」

「隣のBクラスだよ、ほら今朝志岐城さんとの会話が途中になっちゃつたからね」

黒依に声をかけられすっかり緩んだ顔になつた君彦は、満面の笑みで答える。

一瞬だけ君彦の答えに首を傾げた黒依は、にっこり微笑むと席を立つて君彦について来た。

「ねえ、あたしも一緒に行つていいかな？」

「うんうん勿論！ 全然構わないよ～！」

何の疑いもせず憧れの黒依に付き添われ全く悪い気のしない君彦は、天にも昇るような思いであつたりと承諾してしまつ。

君彦と一緒に教室を出て、そのまま向かつて左隣のクラスへと向かつ。

教室はすぐ隣なので時間がかかる」となくすぐに到着するが、その間にも二人は会話を交わしていた。

「君彦くんつて今朝会つた志岐城さんつて人とお友達だったの？」

あたし全然知らなかつたな～』

『実は昨日初めて知り合つたんだよ、それまでは志岐城さんが同じ学校に通つてゐることも知らなかつたんだけどね』

ガラツ！

君彦がBクラスのドアを開けようとした瞬間、突然ドアが勢いよく開いて思わず驚く。

すると田の前には響子が立つていて、当然その足元には猫又が眠そうな顔をしながら座り込んでいた。

ぎりりと君彦を睨みつけて来る響子に君彦はたじろぎながら、片手を上げて挨拶をする。

(怖っ！)

響子はいかにも不満たっぷりの顔で君彦を凝視して来るので、君彦は猫又が何か余計なことをしたのかと思い・・・呑気にあぐびをしている猫又に向かつてしゃがみこむと、思い切り睨みつけて問い合わせた。

「猫又・・・、お前まさか志岐城さんに何か迷惑をかけたんじゃないだろうな！？」

両手で顔を掴まれ、そのまま顔の皮膚を横に引っ張られた猫又はあられもない表情になる・・・(猫又はオスだが)

『何もしてねえって、むしろ大人しくしてたつーの！』

『じゃあ何で志岐城さん、こんなに怒つてんだよ！』

「別に怒つてないわよ、ただ1時限目の間ずっと自分の今までの人生の空しさを振り返つて腹が立つだけ。大体こいつが足元で

」

「わあ～～、もしかしてここに猫又ちゃんがいるのー？」

急に空気が乱された。

響子の話の途中に割つて入つた黒依の黄色い声が響き渡り、一瞬Bクラスの教室内にいた生徒がこちらを振り向く。

それでも黒依は気にすることなく君彦が掴んでいるであろう場所を見つめながら、につこりと羨ましそうに微笑んでいた。

突然会話を中断させられて、響子は呆れた表情になりながらしゃがんでいる君彦に向かって話しかける。

「つか、この子誰ー？ 確か今朝もあんたと一緒にいたような気がつたような・・・？」

そう問われ、君彦は頬をピンク色に染めながら黒依を響子に紹介しようと立ち上がる。

急に君彦の態度が急変したように感じた響子は、眉根を寄せた。

「ああ、彼女はオレと同じクラスの狐崎黒依ちゃんって言つんだ。^{じやざき}黒依ちゃんとオレは・・・、その・・・」

「単なるお友達だよ！」

可愛い声で断言する黒依に、君彦は少しだけ・・・ほんの少しだけ肩を落としてがっかりとしていた。

それから再びしゃがみこんでぶつぶつと独り言を呟き出す。

「友達・・・、そう・・・友達だよ。そうなんだけど、何だろ・・・この寂しい気持ち・・・」

『まあまあ、所詮お前はイイ人止まりなんだからあんま気にすんなつて、な？ 君彦』

苦笑しながら寂しげに涙を堪える君彦の肩にぽんと片方の前足を乗せて、慰めるポーズをする猫又。

そんな君彦と猫又のことは無視して、響子は黒依のことをじろじろと見つめた。

すると黒依は始終笑みを浮かべたまま、響子に向かつて片手を差し出し声をかける。

「初めまして、志岐城さん！ あたしのことは黒依って呼んでね、良かつたらあたしともお友達になつてほしいな」

唐突な申し出に響子は当然困惑、しかし全く物怖じせずに握手を求めて来る黒依の姿に響子は押されて思わず頷いてしまつ。

そして初めて友達になろうと言つて来た黒依に対して、握手に応じようとしたその瞬間だった。

再び2時限目の授業が始まるベルが鳴り出し・・・。

「あっ！ 次の授業がもう始まっちゃう、君彦クン・・・教室に戻るー！」

そう叫ぶと黒依はしゃがみこんでいる君彦の腕を引っ張つて、Aクラスの教室へと戻つて行つた。

当然・・・片手を差し出したままで固まっている響子、ひくひくと笑顔が引きつる。

「何・・・あれ、

わざとかつ！？」

急に怒りが込み上げて来た、そして狐崎黒依とは気が合わないかもしれない瞬時に悟った響子に・・・猫又は興味のない顔でアドバイスらしきものした。

『気にはすんな、黒依は大体いつもあんな感じだから』

「大体あんな感じって、どんな感じよ！ 向こうから友達になろうって手え差し出して来たのに、ベルが鳴つた途端置き去りにして行くか普通つ！？」

『だから気にはすんなって、あれが黒依にとつての普通なんだよ。興味のない話には未練がないし、人の話も・・・まあ大体聞いちゃいねえけどな。でもそんなに悪い女じやないぜ？ 扱いに慣れさえすれば・・・だけど』

響子はまだ腑に落ちない様子で席に戻ると、まだもやもやとした感情がなくならず悶々としている。

それから急に、突然に・・・なぜ君彦が黒依と共にこの教室へやつて来たのかが気になって来た。

(・・・あの一人、一体どういう関係なわけ？ わつききつぱりと友達つて断言してたけど、猫又君彦の方はそうでもない素振りだつたし・・・。大体なんで猫又迎えに来んのにあの子も一緒に来るわけ、意味わかんないんだけど。・・・あれ？ そういうえばさつきあの子、猫又の存在を知つてるっぽくなかった？ まあ見えてなかつたみたいだけど、何あの子は猫又のこと知つてんのよ・・・。あ――全然わけわかんない！ てゆうか、何でこんなにイライラす

るわけ！？ 何かよくわからないけど無性に腹が立つ！ すつーい
ムカついて来た！）

完全に黒依に対しても絶反応が現れた響子は、その後も授業の合間の休み時間に教室に訪れて来る君彦と黒依をあしらひ度に苛立ちがどんどん募つて行つたのは言つまでもない。

そして遂に、昼休みになつたら一緒に弁当を食べようと誘われた響子は、ムカつく気持ちとは裏腹に猫又や色情靈に關して話したいことがあつたのも事実なので、結局誘いを断ることが出来なかつた。

相性、最悪…？（後書き）

基本的に今回のよつな日常的な学園生活が繰り広げられます、この小説は。

猫又やら物の怪やら幽霊やら出て来ますが、決して靈界探偵モノではないのでバトルとかそういうた展開にはならないと…と思われます、きっと。

友達宣言

昼休み、三人と一緒に学校の中庭にあるベンチに座つて弁当を食べることにした。

真ん中に黒依が座り、左側には君彦が、そして右側には響子が座り、猫又は響子の足元でぽかぽかの日差しを気持ちよさそうに浴びながら「口」口と寝返りを打っている。

三人が殆ど同時に弁当箱を開けると、なぜかみんなして互いの弁当を見せ合っていた。

「うわあ～！ やっぱり君彦くんのお弁当はいつ見てもすっごく美味しそうだね！ 本当に自分で作ってるの？ それにしては本格的だよ、本当に料理が上手なんだね君彦くんはー！」

黒依のベタ褒め攻撃にまんざらでもない君彦はくねくねと奇妙な動きをしながら、照れまくっていた。

「そんなことないよー、あ・・・ほらー 黒依ちゃんのそのきんぴりりぽうなんてとっても美味しいうじやないか！」

「これ、冷凍食品だよ」

「そ・・・、そつ」

恵びれた様子も、傷付いた様子もなくあつさりと笑顔で認める黒依に君彦のテンションは少し下降する。

そんな二人のバカツブルぶりを横で見ていた響子は、全身に鳥肌を立てながらドン引きしていた。

(・・・何これ、何なのこの壁は！？ 明らかにあたしと狐崎さんとの間に言葉では言い表し難い、分厚い壁が立ち塞がつてんだけど！？ これは一体何のプレイなわけ！？ 置き去りプレイ？ 放置プレイ？ 村八分プレイ！？)

顔を引きつらせながら硬直していると、響子の様子が目に入った君彦はすかさず気を使って言葉をかけて来た。
黒依に見せるようなメロメロな笑顔ではなく・・・・親切そうな無垢な笑顔だ。

「あ、志岐城さんの弁当もすこく美味しそうだね。お母さんの手作り料理とかかな？」

突然話題を振られた響子がハッと我に返ると、思わず素直に返事をしていた。

「え！？ ああ、一応自分で作った弁当だけ？
それが何・・・・。」
「うわあ～～～！ 志岐城さんも手作り弁当なんだあ！ すっご～～～いっ！」

響子が最後まで言葉を発する間もなく黒依の黄色い声が響子の鼓膜を刺激した。

そんな黄色い声が響く度に、響子の苛立ちが徐々に募っていく。ひくひくと笑顔を引きつらせながらとりあえず我慢し続ける響子であつたが、すでに我慢の限界は近いのかもしれないというのは当然、

「いつまでもないことだ。

（つか、この女さつやと黙らせろや猫又君彦つ！ いつまでもこんな調子を続けてたら、幽霊に関するアドバイスとかが聞くに聞けな

いじやないのよつー

だがしかし幾度となく訪れた休憩時間の時の黒依に対する君彦の態度や言動をずっと傍から見ていたことから、君彦が騒がしい黒依を諭して大人しくさせるなんて奇跡は決して訪れたりはしないのだろうと、心中で絶望していた。

結局40分しかない昼休みの約20分位は弁当に関する話題で盛り上がりながら食事する、という行動しか取れなかつた。

ようやく昼休みの残り時間があと10分を切つたところで、さすがに響子の目が虚ろになつて来ていることに気付いた君彦がものすごく遠慮気味に黒依を大人しくさせることに成功。

約30分もの間よく我慢したと、響子は自分で自分を褒めたかた位だ。

そしてやつと・・・、響子は君彦に向かつて幽霊に対するアドバイスや猫又に関する話を聞けることになつた。

君彦からまず何が聞きたいのかを聞かれた響子は、とりあえず猫又が側にいない間・・・色情霊が自分にまとわりついていることに関して聞くことにする。

響子にとって幽霊といつ存在を目にしたのは昨夜が初めての体験だったため、どうしても色情霊と目が合つた出来事が頭から離れずに一晩中気になつて一睡も出来なかつたのだ。

普段から幽霊が見える君彦が、一体どのように対処しているのか・・・とにかくまずはその話を響子はどうしても聞いたかつた。

「あたし・・・靈感とか全然ないタイプだから、幽霊なんてものを見たのは昨日が初めてだつたわけ。だからこれから先も幽霊を気にしないで生活するにはどうしたらいいのか、それを聞きたいんだけど・・・。あんた確かに普通に幽霊が見えるって言ってたわよね？ 一体どうこう風にしたらそんな普通に出来るわけ！？」

「うへーん、オレの場合物心ついた頃にはすでに幽霊とか見えてたから・・・あまり意識したことはないんだけど。普段見えないものが急に見えたりすると、やっぱり気になるものなのかな」

「あつたり前でしょ！？ あんたの場合はどうだか知らないけど、あたしなんか女の幽霊がべつたりとまとわりついてんだから・・・っ！ それを考えただけで気持ち悪いわ、気になつて仕方ないわ、とにかく気が散つてしまふがなのよつ！」

「いいなあ・・・・・、あたしなんか靈感全然ないから幽霊なんて見たことないし・・・。てゆうかあたしの場合は幽霊が見えるようになりたいんだけどな」

「・・・悪いけど、今はちょっと黙つてくれない！？ 」こう見て本当に深刻に悩んでんだから、休み時間も残り少ないんだし・・・。

「

「これ以上黒依のペースに巻き込まれないよつこ、響子はすかさず口止めした。

拗ねた表情を見せながら「えへ～」と言つていたが聞こえないふりをする、君彦に至つては本当に申し訳なさそうに謝つていたが。が違つしなあ」

「確かに家でくつろいでる時位、幽霊にまとわりついてほしくないつて気持ちはわかるけどね。・・・オレは幽霊がハツキリ見えるから直接出て行くように言つてるんだけど、志岐城さんの場合は勝手

「・・・ハツキリ言つんだ、出て行かつて・・・、幽霊こ」

少しイメージと違つていた。

響子はてつきり部屋の四方に幽靈を退散させるお札を貼つているとか、何か靈的なもので幽靈を退けているものとばかり思つていたが、どうやら君彦の口ぶりから・・・まるで近所の子供に言い聞かせる程度の、注意をする的な行為で幽靈を追い出しているだけという事実を知つて響子はほんの少しだけ、君彦にアドバイスを求めたことを後悔してゐる。

『間違つてもインチキ靈媒師から買つた札を、部屋中に貼り付けたりなんかすんなよ？ あれは素人がやつちまつたら幽靈を逆に刺激するだけになるからな、ま・・・幽靈に喧嘩売つちまうようなもんだ』

「え・・・、そなうのか？」

「あんた、知らなかつたの？」

「まあ、オレはお札に頼らなくとも大体の幽靈は口で言つたら言つこと聞いてくれるから・・・。でもお札がダメとなると・・・、やつぱり幽靈の存在を忘れるようにするしかないんじやないかな。志岐城さんは幽靈が常に見えてる状態なの？」

響子の悩みに対しても真剣になつて相談に乗る君彦の姿勢だけは買つていたが、それでも確実な方法を考え出してくれないことにはどうしようもない。

「えへへっと・・・あたしが見たのは鏡ごしだけだったけど、それ以外は別に」

「それじゃ、鏡ごしにだけ気を付けて・・・それ以外は幽靈の存在

を忘れるようにすることは出来ないかな？ 最初は無理かもしれないけど、慣れればどうにかなるかもしないよ」

猫又を借りるわけにはいけない、そう考えたらやはり慣れるまで我慢するしかないのかもしない。

響子は眉根を寄せながら難しそうな顔をする、同じように君彦も両手を組んで必死に考える、黒依に至っては一人の顔を交互に見つめながら首を傾げているだけだった。

「ねえ、やっぱりほんのちょっと話すだけじゃ解決方法を見つけるのは難しいんじゃないかな？ これからもお話しする機会を増やしてみんなで考えて行けば、もしかしたらもっと良い方法が見つかるかもしれないよ」

「・・・狐崎、さん」

響子はとても意外なものを見た気がした。

まさか黒依が自分の為にほんの少しでも、何か良い方法がないかを考えてくれていたとは思っていなかつたからだ。

しかしこの言葉に誰よりも賛同したのは他の誰でもない、

君彦だった。

「さつすが黒依ちゃん！ その通りだよ、うん！ 志岐城さんに何か困ったことがあつたらオレや黒依ちゃんがいつでも力になるし、これからも友達として一緒にいれば話す機会もどんどん増えるよね。だから諦めないでこれからも色情靈をどうしたらいいのか、一緒に考えて行こうよ！」

さつきまでイヤでたまらなかつた黒依が響子に向かつて笑顔を見せ、君彦は真つ直ぐな瞳で宣言した。

この一人が自分の為にここまで親身になってくれて「こと」に、響子は不覚にも感動してしまっている。

しかし長い間他人との交流をあまりしてこなかつた響子は思わずそっぽを向くと、唇を尖らせながら不服そうな口調で君彦の言葉を受け入れた。

「ま・・・まあ、そこまで言つなり・・・別にあたしはそれで構わないけど」

響子の言葉になぜか二人は異常に盛り上がると、勝手に友達宣言をされてしまった。

しかし悪い気のしない響子は苦笑いを浮かべながら初めて黒依と握手を交わす、当然君彦には触れることさえ出来なかつたが。

そんな光景を他人事のように見つめていた猫又は呆れたような表情を浮かべながら、ぼそりと呟いた。

『お前等・・・、中學生の青春日記、じやあるまいし・・・熱いねー』

それからタイミング良く始業ベルが鳴ると、三人は仲良く教室へと戻つて行く。

当然猫又は、学校にいる間は君彦ではなく響子の方へと付き添うことになつていた。

猫又だつてキレる

響子が君彦と黒依について悶々としていると、猫又が机の上に飛んで来て面白げに話しかけて来た。

『よひへ、お前もしかして黒依にヤキモチとかやいてんのか?』

「はあ! ? 何言つてんのあんた、酔つ払いの親父かその発想」

出来る限り小声で響子が反論する、回りの生徒には猫又の姿が見えないという面倒なルールがあるせいで響子は変な目で見られない程度に話さなければいけない。

しかし当の猫又は響子が大きな独り言を話す変人に見られようがどうじょうがお構いなしで、顔を洗いながらにやにやしていた。

『まあ安心しな・・・ってのも変だが、ありやあ完全に君彦の独走だからな・・・気にはすんな。オレ様としてはどつちかつーとお前の方を応援してやつてもいいんだぜ? 色情靈に関してはオレ様が君彦に憑いてる限り害はないし、むしろ抵抗力のある君彦しかお前にや望みがねえかもな』

生意気なことを口走る猫又を睨みつけながら響子は苦虫を噛み潰したような顔になり、完全否定する。

「だ・か・ら! なんでそうなるのよー あたしは別にあんなやつ・・・、何とも思っていないんだから! 色情靈を何とかする為にあいつを利用してるだけなんだかんね、その辺勘違いしないでよつ! ?」

『ほお〜〜、ま・じうでもいいけど。んなことより実際どつすんだ

よ、お前・・・毎日こんなこと続けるつもりか？ べつたりと君彦に付き添つてもそれ以外のプライベートじゃ何の進展もないんだぜ。

四六時中、君彦の側にいるつもりかよ。つーかそれ以前にオレ様の方がお断りだぜこんな毎日、本当なら今頃屋上でのんびり昼寝してゐ頃合いなのに・・・』

ぶつぶつと猫又が文句をたれるが事実を突き付けられた響子の耳には、猫又の言葉が半分程度しか届いていなかつた。

そうだ、結局のところ何の解決策も見出せていない響子は学校以外のプライベートをどうするのか何も考えていないのだ。

猫又に改めて言われなくともそんなことはわかっている、だからこそ確実な解決策が見つかるまで君彦達とアイディアを出し合いつと いう方向で乗り切ろうとしていたのだ、しかし・・・。

「そう言つけどね、それじゃあ聞くけど！？」本つ 当にあんた・・・色情靈の祓い方を知らないわけ！？」

聞かないフリをしているのか、響子のシシコリヒヤツボを向くような仕草で猫又は毛づくろいをし出した。

そんなんあからさまに不審な態度を取る猫又に、「こいつ絶対何か隠してる！」と疑いの視線を向けているとようやく本日最後の授業が終わり、全員が帰り仕度を始めてしまつた。

『おー、よつやく終わりか、あーーー疲れた。普段ならこの時間は昼寝タイムなんだが、慣れない場所だと落ち着いて昼寝も出来やしねえ。そんじやオレ様は君彦ん所に戻るぜ、あばよー。』

そう捨て台詞を吐くと猫又はぴょんっと机を飛び降りて足早にAクラスへ向かおうとしたので、響子は慌てて猫又を追いかけた。当然帰り仕度をさつさと済ませてから走つて行く。

Aクラスの方も帰り支度をして部活へ行く者、そのまま残つてダ
べる者などすっかり放課後の風景になつていた。

君彦も帰り支度を終えて帰宅しようとした時に猫又が走つて来た
ので思わず声を上げてしまつ、先程も説明したが猫又の姿はAクラ
スでは君彦にしか見えていない・・・。

なので当然周囲にいた生徒は「また猫又が何か叫んでる」という
目で見つめていた。

「お前・・・つ！ 志岐城さんは一体どうしたんだよ、一応学校に
いる間は志岐城さんの側にいるつて約束だつたろ！？」

せっかく愛らじい飼い猫の如く飼い主の元へ舞い戻つて来たとい
うのに、まるで厄介者扱いするような君彦の口ぶりに猫又はぶすつ
とした表情に変わると、拗ねた口調で文句を言つた。

『なんだよお前は、しきじょーしきじょーって・・・あーーーやだ
やだ！ オレ様飽きた！ もうヤダね、これ以上あの女と一緒にい
んの！ 明日からは自由にさせてもらうから、もう付き合つてら
んねえよ。 じゃあな、君彦！ アリー・ヴェーデルチ
／＼！』

本当に怒つてしまつたのかと思った君彦は慌てるように猫又を追
いかけようとするが、猫又は教室を出て行く生徒達の合間に縫うよ
うに素早い動きで走り抜けて行つたので、あつといつ間に姿が見え
なくなつてしまつた。

「あ・・・つ、ちょっと待てって

「猫又あつ！――」

「お～～い、猫又が猫又呼んでるそ～～つ！」

「あっはははつ！！」

君彦の叫びを聞いたクラスメイトがからかうように笑い飛ばした、そんな君彦の様子が気になつた黒依が心配そうに近付くと響子がAクラスに飛び込んで來ると、それは殆ど同時の出来事だつた。

猫又だつてキレる（後書き）

こちらの小説では出来る限り主要となる登場人物を、極力少なめにしようと思っています。

どつかの超長編異世界ファンタジー小説のようにどんどん思い付く限りキャラクターを出していったら、その分どんどん話が膨らみ過ぎてしまつて收拾がつかなくなつてしましますので・・・（私が）なのでこちらの小説ではシンプルで書いて行きたいので、ご理解の程よろしくです。

まあそれでもすでに私の脳内では現在登場している主要人物も含め、合計11人位登場する予定になつてますが・・・（意味ねえじやん！）

響子は君彦がイジメに遭つてると思つていた、しかしそれがただの勘違いであつたことはすぐに理解することが出来た。

まだ教室に残つていた何人かの生徒から笑われている時でも君彦は照れ臭そうに、「あ、聞こえちゃつた?」程度の反応で呑気に頭を搔いていたのである。

このクラスではこれが日常茶飯事なのかひとしきり笑い終わると他の生徒達は君彦から興味がなくなつて、再び友達と会話の続きをしようとした時・・・せつかく場の空気が和もうとしていた矢先に、一人の男子生徒が君彦の方へと歩いて行つた。

見た所　　あからさまな不良タイプ、髪は茶髪に軽くパーマをかけており拗ねた顔つき、学ランのボタンは止めずに中に着ている派手なシャツを見せびらかしている状態の・・・そんな生徒である。

彼は君彦に向かつて文句を言つのかと思いきや、回りの生徒達に向かつていきなり怒声を浴びせた。

「テメーらあーつー今こいつのことをバカにしやがつただろー！」

当然しんとなる、呆気に取られている響子も思わず猫の方の猫又を追いかけていたことを忘れて呆然としていた。

何が何やらわけがわからないまま、その後も場の空気を全く読めていない不良の怒りは続く。

「初日ん時からも言つただろーつが、もしこいつのことをバカにしたり笑い者にしたり・・・ましてやイジメなんぞしゃがつたらこのオレが黙つてねえつてなあー！」

「えへっと・・・春山、違うんだよ」

「てゆうかあ、誰も君彦クンのことバカになんてしてないと思つけど?」

一人で勇んでいる不良

春山に向かつて、君彦が苦笑

笑いを浮かべながら仲裁に入る。

黒依は黒依でのほほんとした口調のまま春山の暴走を面白がるようを見つめていた。

「だけどよお！ わひきにじつり・・・っ！」

「あれはいつもの冗談みたいなものじゃないか、別にイジメとかそんなんじゃないって。だから落ち着けよ」

君彦の言葉に大人しく従つている不良、そんな光景を眺めながら響子はますますわけがわからなくなつていた。

そんな響子の存在に気付いた黒依が駆け寄つて来る、君彦はまだ春山を落ち着かせようと必死な様子だった。

「あ、志岐城さん・・・一体どうしたの？ そんな所で〜」

「え？ あ、いや・・・何かわけのわかんない展開が繰り広げられてるなあ～って思つて。てゆうかあの不良と猫又と、一体どういう関係なわけ？」

響子が春山と君彦の方に指をさして怪訝な表情を浮かべる、黒依はそれを見て納得したのか笑顔になつて説明した。

「あ～春山竜次クンのこと？ 大丈夫だよ、あれって別にケンカとかしてるわけじゃないから。春山クンはね、施設で君彦クンと一緒にだったんだって～。あたしはよく知らないんだけど最初春山クンは君彦クンのことをイジメてたらしいのね。でもある時、春山クンが心靈体験で悩まされてたことがあって・・・それを君彦クンに助けてもらつてからは、イジメるのをやめて君彦クンとお友達になつたみたい。今ではすっかり君彦クンのボディガード気取っちゃって、ああやつて事ある」と勝手に首を突っ込んで来るようになつたの」

「え？」

黒依の説明の中にいくつか聞き捨てならない内容が含まれているような気がした。

「どうか言葉の中に棘があつたような・・・、そんな気が。

「ま・・・まあともかく、あれはこちやもんつけられてるとかそういうんじゃないんだ」

「そ！ だからそんなに心配しなくても大丈夫だよ？」

そう返され、響子は飛びのくように後ずさりすると顔を真っ赤にしながら否定した。

「なつ！ 別にあたしはあいつがどうなるうと知つたこいつちやないわよつ！？ 心配とかなんて全然してないんだから！」

しかし黒依はそんな響子のオーバーリアクションにも動じずにつり微笑んだまま。

昼休みに友達宣言されたとはい、どうにも黒依といふと調子が

崩れてしまつようじに感じた響子は口をへの字に曲げて視線を逸らす。

「・・・つーか、あたし猫又探しに来たんだった・・・」

ようやく用件を思い出した響子はそのまま問答している最中の君彦の元へ歩いて行くと、威風堂々とした態度で声をかけた。

「ちょっとー 猫又君彦ー あんたの猫又探しに来たんだけど、一
体どこにいるわけ！？」

なぜこんなに偉そうな態度を取つてしまつのか、響子自身にもよくわからなかつた。

ただどうしても媚びるような態度や友達感覚で話しかける」とこ抵抗を感じていた響子は素直になれず、どうしても君彦・・・異性の前では壁を作るような態度を取りはずにはいられなかつたのだ。

そんな響子の態度に当然、君彦至上主義である春山竜次も黙つていない。

「ああん！？ どこの誰か知らねえが何だその口の利き方わあつ！
？」

勢いよく振り向いた先に仁王立ちで立つていた響子を見るや否や、春山竜次の時が止まる。

田をぱちくりさせて動きが完全に止まつている春山に、君彦が一
体どうしたのかと声をかけるが何も反応しなかつた。

響子は無意識に異性から間合いを取るクセがついていたので、勿論一定以上の距離を保ちながら もうひとつクセである股間凝視も発動させている。

だが響子の視線に気付くことなく春山の体温は急激に上昇してい
き、顔は真っ赤になつていた。

(ビ・・・ビ・・・、ビュリフオオオ ッッ!—!)

春山の鼓動は最高潮に達し、完全にハートを射抜かれてしまった様子である。

そう・・・春山竜次はものの見事に響子に一目惚れしてしまったのだ。

響子のことをじつと見据えたまま微動だにしない春山竜次に怪訝な表情を浮かべるも、すぐさま響子は君彦の方に視線を移して更に問い合わせようと声を荒らげようとした。

響子の勢いに君彦は慌てて両手でガードするような仕草をしながら笑顔を取り繕つて説明する。

「ちょ・・・待って、落ち着いて志岐城さん！？ 猫又のやつならさつき来たんだけど、何て言うか・・・すぐに教室を出て行っちゃつてさ。今追いかけよつとした所にこの騒ぎだつたもん、猫又を見失つたつて言つか・・・」

「はあ！？ それじゃ猫又は一体どこに行つたつてのよ、心当たりとかないわけ！？」

猫又がいなければ再び色情靈が戻つて来て響子に悪影響を与える、それを恐れている響子は怒り心頭な顔つきで今にも君彦のことを殴り倒しそうな勢いであつた。

「まあ、どうせ先に家に帰つてると想つんだけどさ・・・オレもちよつと今帰宅しようとしたところだし、良かつたら志岐城さんもオレの家に・・・」

「行くわけないでしょ！ 猫又がいらないんじゃしじつがないじゃない、これ以上あんたに詰め寄つても意味ないし。
ともかくどうせ今までの状況と何も変わらないだけなんだから、ここは我慢したげるわよ」

これ以上君彦を責めたところで彼が悪いわけではない、それだけ

はちゃんとわかつている響子は不服ではあるが怒りを抑えて君彦から距離を離した。

しかし本当はそれだけではなく、猫又に言われたことも響子の中に重くのしかかっているせいでもある。

いつまでも猫又が付き添うわけじゃない、だからと書いて君彦にべつたり付きまとつわけにもいかない。

他の解決方法を見つけない限りは結局のところ何も変わりはない、しかしそれは決して君彦が悪いわけじゃない。

あくまで響子自身の問題なのだ。

それを十分に理解している響子は、これ以上君彦に迷惑をかけるわけにはいかないと自重することにしたのである。

がつかりと肩を落として落ち込んでいる様子の響子に、君彦が元気を出させる為に声をかけようとした時だった。

我に返った春山竜次が突然しゃきんとした姿勢になつて・・・、わざと顔つきが凜々しく見えるようにしている姿に君彦と黒依は、春山がどこかで頭でもぶつけたのかと怪訝な表情で見つめている。

「あの・・・、オレの名前は春山竜次って言いますー。」

面と向かつて響子に自己紹介をする。

突然の改まつた自己紹介に響子は虚ろな眼差しになりながら、漏れるよくな返事をした。

「へへへ・・・、だから?」

「あなたの名前は何て言つたですか、ち・・・それが美しくお名前なんでしょうねっ!」

「春山？ 一体どうした、顔が真っ赤だぞ！？ てゆうか何だよその喋り方、変なものでも食つたのか？ お～～いつ！？」

春山の奇妙な言動に不審さを感じた君彦が、春山の目線を遮るように手を振つて見せるが春山の視線は完全に響子に釘付けになつていた。その様子を見ていた黒依は面白そうな表情に早変わりすると、君彦にそつと耳打ちをする。

「邪魔しちゃダメだよ、君彦クン。春山クンつてば、きっと志岐城さんに一日惚れしちゃつたんだよ・・・！」

「ええっ！？」

推理小説でものすごく意外な人物が犯人だったように驚愕した顔で君彦が低い奇声を上げた、そして再び春山と響子を交互で見つめる君彦であったが・・・響子の方は明らかに面倒臭そうな、迷惑そつな顔で凝視していたのでわずかに危険な空気を感じ取る。

(まづい、あの顔は許容範囲内に近付いた獲物を捕らえる時のハンターの顔つきそのものだ！ 放つておいたら春山のやつ、確実に志岐城さんの強烈なストレートパンチを食らつてしまふ…)

そう咄嗟に判断した君彦が春山に注意を促そうとした瞬間、突然背筋が凍る程の悪寒に襲われて背後を振り向いた。

「あ・・・っ、あれはっ！」

君彦がそう声を上げた時には遅かった、君彦が感じた悪寒の正体・・・それは響子に取り憑いていた色情靈が、猫又の気配が消えたこ

とを察知して再び取り憑こうと戻つて来ていたのだ！

花魁風の若い女性は妖艶な笑みを浮かべながら宙を漂つよつ、元よりみづから
しかし真っ直ぐに響子の方へと向かつて行く。

君彦は懸命に響子に取り憑かせまいと両手を振つて色情靈を捕ま
えようとするが、相手は当然実態のない幽靈。

いくら靈の姿が見える君彦といえども幽靈を直に手で掴むという
芸当は出来ない、騒がしく両手を振つて暴れている君彦の姿を見た
クラスメイトが再び笑い出す。

何もない場所で両手を振つて踊つている君彦の滑稽な姿
、しかし彼は周囲から笑われようがどうしようが・・・そん
なことはどうでもよかつた。

この色情靈を再び響子に取り憑かせないよつに懸命に戦つも、
・結局は君彦の惨敗に終わつてしまつ。

再びするりと響子の体にまとわりつくように取り憑いた色情靈の
瞳が怪しく光り、くすくすと笑つて周囲の男達を惑わせる。
それまで君彦のことを見て大笑いしていた男子生徒が急に笑うの
をやめて、教室にいる一人の女性に視線が釘付けとなつた。

教室内の空気が一瞬にして変わる。

色情靈の姿を見ることはおろか、気配を察知することも出来ない
響子であつたが　　回りの雰囲気が変わつたことにだけ
はさすがに気付いた様子である。

「え、なに！？」

自分を見る男達の視線が、いつも感じている視線へと変わつてい
る。

響子の体を舐め回すよつな視線、
ではなく男達の視線に鳥肌が立つた。

「志岐城さん、色情靈が戻つたから氣を付けて！」

君彦が必死に叫ぶ、すると響子は焦ったように周囲を見渡すといつ之間に教室内にいた男子生徒が立ち上がり・・・響子の方へとゆっくり近付いて来ていた！

色情靈に惑わされた男がどうなるか、君彦はその全容を実際に見てきたわけではない。

初めて会った日に入つた喫茶店で響子をナンパしてきたチンピラ風の男の例を見たことがあるだけで、それ以外には響子が一体どんな被害に遭つて来たのか君彦は想像するしかなかつたのだが、・・・今までにその実例を目にしようとしている。

焦つたように身構える響子、いつ襲いかかって来てもすぐに対処出来るようになり、ファイティングポーズを取るように構えると自分と最も近くにいた春山にも注意を払った・・・が！

卷之二

響子の凝視スキルが発動する、当然その視線の先は・・・春山の股間。

彼の股間を日にした瞬間に響子は汚らわしいものを見るような顔つきへと変わり、やがて闘争心剥き出しの野獣へと変貌する。

そう、ただでさえ色情靈の効果がない状態で響子に惚れてしまつた春山は更に色情靈の効果までも浴びてしまつて、自我を抑制出来ないまでに性欲を全開にされてしまつてたのだ！皆まで言つことないが、当然ながら春山の股間は相当大変なことになつていふ。

二二二

力一杯、相當な憎しみを込めた響子の右ストレートが春山の左頬を見事に捉えた！

そのまま机や椅子をなぎ倒し、春山の体は2回程床を跳ねながら教室の隅にあつた清掃器具用のロッカーに背中からぶつかる。

「春山つ！…！」

君彦が慌てて春山の方へと駆けて行く、それを息を切らしながら見つめていた響子は愕然とした眼差しで固まっていた。

それから春山を殴り飛ばした時に落としたカバンを拾い上げると、そのまま響子は教室をまるで逃げるよう走つて出て行く。

「あつ、志岐城さん！？」

その様子を見ていた黒依が響子に向かつて声をかけるが、響子の耳には届かない。

黒依の目の前を走り去った時に一瞬だけ見えた響子の横顔、
、気のせいいかその瞳は濡れているように見えた。

それぞれの思惑

嫌われた！ 絶対に今まで嫌われたっ！！

響子は涙目になりながら廊下を走り抜ける、響子の元へ戻つて来た色情靈の効力ですれ違う男子生徒が群れをなすゾンビの如く、響子に近付こうとして行く手を阻んでいたが、響子はなんなくそれらをかわしてそのまま校舎を出て行ってしまった。

靴を履き替えることすら頭になく、全力疾走で駆ける響子。

今も響子の目に焼きついで離れない光景

彦の友である・・・その彼を響子は殴り飛ばし、そして君彦は友の方へと駆けつけた。

君彦は何の迷いもなく、魔の手が響子に忍び寄っていたにも関わらず君彦は響子ではなく友を優先したのだ。

少なくとも響子はそんな風に感じ取つてしまつた、春山の方が悪いんだと。

しかし我に返つた頃には、時すでに遅し。

少しずつ冷静さを取り戻していく響子は失速し、やがて立ち止まる。

（何やつてんだろ、あたし・・・別にあの春山つてのが悪いわけじゃないじゃない、あいつは単に色情靈の力に惑わされてただけなんだから。前までなら男はみんなケダモノだ、男がみんな悪いんだって決めつけることが出来たけど・・・今は違う。あたしに取り憑いてる色情靈があたしの回りにいる男達を惑わせているだけなんだ、男達が悪いわけじゃない。 でも！ それでもやっぱ怖い！ どうしても男なんて信用出来ない！

頭ではわかっていても心や体が拒絶しちゃうの、抵抗しなきやつて相手を拒むの！ でもそんなの・・・アイツは知らない、だから春山って奴の方を心配して・・・あたしのことなんか全然眼中になくつて！）

春山の方へと駆けつけた君彦の姿がどうしても頭から離れない響子の目に、再び涙が溢れる。

目頭が熱くなつて止めどなく溢れて来る涙に、響子自身が驚き戸惑つていた。

どうして自分は、泣いてるのか

？

なぜこんなにも苦しいのか、わからない。

それが『誰かを好きになる』ところに響子自身が気付くのは、まだずっと先のことであった。

一方、1-Aの教室内では。

響子が教室を出て行つたことによつて色情靈に惑わされていた男子生徒は全員我に返つて、先程の不思議な感覚に戸惑つている様子だつた。

そんな中・・・大きなダメージを食らつてまだ床に伏せつている春山を抱き抱えるようにして声をかけ続ける君彦、ようやく意識を取り戻した春山は腫れ上がつた左頬に触れ・・・そして君彦に訴えかけるように、春山は涙目になりながら一生懸命弁解した。

「猫又・・・信じてくれ、オレは・・・違うんだっ！ オレは別にやましい気持ちがあつてあんな風になつたんじゃ・・・ないんだ

つ！ オ・・・ オレの中に潜む別の生き物が・・・ つ！ オレのだけどオレの意志とは関係なく暴走・・・ をつ！」

春山が何を言いたいのかわかる、

男として。

しかし本当の所・・・ 春山の性欲が活発に活動してしまったのは、言つてみれば響子に取り憑いている色情靈のせいであることに間違いない。

だが春山の過去の心靈体験以来、彼は靈に対しても異常なまでのトラウマを抱いてしまっている。

よつて君彦は春山に面と向かつて色情靈の話をすることが出来ず、にいた、靈に関する話を春山にしたら彼はその恐怖によつて更にパニック状態に陥つてしまつからである。

君彦は苦笑いになりながらも、春山に向かつて大丈夫だと言つて聞かせた。

「わかつてゐよ春山、だからさつきのことはもう忘れた方がいいよ。左頬ものすごい腫れてるけど保健室に行くか？ 今ならまだ保険医の先生もいるだらうし」

そう言つて君彦が春山に手を貸して立たせる、それから教室を出て行こうとした時に響子のことを思い出した君彦は目の前で心配そうに見つめている黒依に尋ねた。

「あ、黒依ちゃん！ オレ今から春山を保健室に連れて行くから、どれ位時間がかかるかわからないし・・・ 悪いけど先に帰つてくれれるかな？ ホントごめんね、それと・・・ 志岐城さんどこに行つたか知らない？」

黒依はじつと君彦を見つめ、それから人差し指を口元に軽く触れさせながら

ふつと視線を逸らす。

随分と考え込んでいる様子に君彦が怪訝に感じて眉根を寄せた時、黒依はすぐさま満面の笑顔になると君彦の質問に答えた。

「志岐城さんなら急ぎの用事があるとかで先に帰っちゃったみたいだよ？」

「そつか・・・、春山のこと誤解してなきゃいいんだけど」

「大丈夫なんじゃないかな？　だって原因が何なのか志岐城さんの方がもつとずっとわかつてははずだし、また明日お話すればいいだけじゃない」

響子に殴られた左頬が相当痛いのか、君彦と黒依の会話が全く耳に入つていないうらしく春山はうへんうへんと唸つたまま響子の話をしていくも何の反応も示さなかつた。

君彦に至つても黒依の話を聞いて少し安心したのか、挨拶だけ交わすとそのまま春山を連れて教室を出て行つてしまつ。

そんな二人に片手を振つて見送ると、途端に黒依の顔から無垢な笑みが消え失せた。

「じめんね、君彦くん。でも志岐城さんは君彦くんにとつてあんまり良くない存在だから、

「悪く思わないで」

ぼそりと、誰にも聞こえない程度の小さな声でそう漏らすと

黒依は再び作り笑いを浮かべ、カバンを手に下校した。

そんな光景を校舎の屋上から全て覗き見ていた猫又は、イライラと後ろ足でアゴを搔いてから怒鳴り散らした。

『うがあ

つ、そりじゃねえだろ君彦

つ

!! このオレ様がせっかく氣い利かせてやつたってのこ、お前は何でヤローの方に付き添つてやがんだよおつー!!』

両前足で頭をぐしゃぐしゃっと搔き乱し、それから息を切らしながら再び座り込む。

『あいつマジで何も気付いてねえのな・・・。響子に取り憑いた色情靈の効力が君彦にだけは効かない、んでもって色情靈がどんだけ響子のヤツに悪影響を及てるのか。オレ様がいなくつても自分で打開策見つけられるように、プラスそれがきっかけで一人に発情期が芽生えるようにオレ様がお膳立てしてやつたのに・・・まるでお子ちゃまだなアイツら。しゃーねえ、こうなりやオレはもう何も言うまい。』

腹減つたし帰るか!』

見切りをつけた猫又はすぐに開き直るとそのまま校舎の屋上から優雅に飛び降り、君彦と一緒に住んでいるボロアパートへと足早に帰つて行つた

勿論君彦は春山の手当てに最後まで付き添つていたので、結局猫又はすぐに夕飯にありつくことが出来なかつた。

それぞれの思惑（後書き）

今「猫又」を書くのが楽しくなってしまってます。
というのもこの先の話を早く書きたくてウズウズしているせいです、
相変わらず毎日更新というわけにはいきませんがどうぞこの先もよ
ろしくお願ひします。

*しばらく一人称視点は「無沙汰にならう」です。

暴たー（前書き）

今日はすつと前からせりつけたかったネタをすつと披露出来ました。
皆様に笑ってもらえたらいいのですが・・・。
ちなみにタイトルの正しい読み方は「あばたー」です、さて一体誰
のことでしょう？

春山竜次の手当てに付き合つて少し帰りが遅くなつてしまつた君彦は、響子のことも気になつたがとりあえず黒依の言葉を信じてそのまま家に帰ることにした。

それ以前に響子のことが気になつていても彼女の連絡先どころかどこに住んでるかもわからない君彦には、これ以上どうしようもなかつたのが本当の所である。

下校の時に猫又の機嫌を損ねてしまつたのを少しだけ気にしながら、君彦は急いで走つた。

築30年以上はありそうなボロアパート、一応風呂やトイレは個別に付いてるれっきとした1LDKである。

アパートを取り囲むようにセメントで出来た塀が見えて来ると同時に小柄な中年の女性も目に入った、彼女はこのアパートの大家であり話によると君彦の祖父と親しい仲だつたらしい。

祖父母が亡くなり君彦が施設へ行くことになつた時、祖父が遺した家財道具などの一部を保管してくれていたのだ。

おかげで君彦が施設を出て一人暮らしを始めたことになつた際に、大家さんがこのアパートを紹介してくれた。

それと同時に預かつてくれていたタンスやテレビなどの家財道具も一緒に君彦が引き取ることが出来たので、また一から揃える必要がなかつた君彦にとっては大助かりだつた。

故にこの大家さんは君彦が自立してから、一番最初にお世話になつた人物でもある。

「あら君彦くん、お帰り！」

いつも元氣で明るい大家さんはこうして君彦が学校から帰るまで、毎日のようにアパートの塀の前で待ってくれている。

君彦もこつものように笑顔で挨拶した。

「君彦クン、空き巣対策もいいけど・・・テレビの音量なんだけどねえ、もう少しだけ小さくしてもらえたかい？ ほら電気代が高く付くといけないだろ」

「あ、はい・・・すみません大家さん。すぐに音を小さくして来るんで！」

猫又だ、君彦は瞬時に悟り表情を歪める。

君彦が学校に行ってる間、猫又は24時間ずっと君彦の側にいるわけではない。

学校で特に面白いことがないと思えば猫又は好き勝手に、自由気ままに町中を歩き回っているのだ。

度々君彦が家にいないのにテレビが付いていたり電気が付いていたりするのを大家に知れ、苦し紛れに空き巣対策だと言い繕つているのだが大家のこの様子だともうそろそろこの手が利かなくなる頃合いだと君彦は察する。

急いでカバンの中から鍵を取り出しどアを開けるなり、目の前でバラエティ番組を見ながら大笑いしている猫又を発見した。

一応猫又の姿は普通の人間には見えないので急いでドアを締めることなく普通に帰宅しているのを装う。

玄関のすぐ横がキッチン、そして奥がお風呂。

キッチンにある硝子戸を開けるとすぐ目の前が六畳間の和室になつてゐる、その和室で猫又は座布団の上に親父のよつに座りながら呑気に笑い声を上げていた。

君彦はすぐにテレビのチャンネルを捲むとボリュームを急激に下げてやる、するとそれを見た猫又が更に大声を上げた。

『あっ！ せつかく今イイとこだつたのにー』

「何がイイとこだ！　お前は～・・・相変わらぬ口口口と態度を変えやがって！　お前が教室を出て行つてから色々大変だったんだぞ、わかつてんのか！？」

『ふ　　ん、知ったこっちゃないね！　んなことより早い所メシにしようぜ、お前が帰つて来んのずっと待つてたんだかんな！　もうオレ様、腹減つて死にそうだつツーの！』

「お前の頭ん中は」飯とお笑い番組のことしかないので…？

『あ、あと散歩も忘れずに！』

そんな問答を約5分位続けてから、ようやく君彦は夕飯の準備に取り掛かる。

今日は帰りが遅くなつたこともあり在り合わせのものをいくつか適当に作つて、早速食事となつた。

勿論猫又には猫用の缶詰である。

メタボ気味な猫又の為に君彦が食事の量を制限しているが、この辺はやはり妖怪。

君彦が見てない間に缶詰の残り半分やキャットフードを勝手に開けてはつまみ食いしているので、全く意味を成さないのだ。

それでも君彦はいつものように缶詰を半分だけ皿に取り分けて猫又に差し出す、それを不服そうな目で見つめる猫又。

「何だよその顔は、そんなイヤそうな顔したつてこれ以上やらなければならん！？　お前自分の腹を見てみろよ、だるだるのぶよぶよじやないか。いくら妖怪だからってメタボは全国共通・・・もとい、全生物共通で健康に良くないぞ」

『いや、君の際量はどうでもいい。それより今日の……じゃない、昨日の朝じはんも晩、じはんも今日の朝じはんもだ！何で猫用缶詰の中によつこもよつて一番マズイ、安物の「ニヤオ」なんだよー。』

猫又のツッパリ、君彦は気まずそつになりながら視線を逸らすと

小声で答える。

「いや、大安売りしてたから」

『大安売りしてたから、じゃないだろっ！ 安い＝マズイって公式がお前の頭では成立しねえのか、オレだつてたまには「モンプレティ」が食べたいんだよつー！』

一又の尻尾をばしばしと畳に叩き付け、同時に怒りを表現する為に前足をばんばんとテーブルに叩きつけながら訴える。

しかしこれにはさすがの君彦も反論した。

「仕方ないだる、出来るだけ食費を削らなきゃいけないんだし！ それに何だよ「モンプレティ」って！ それ猫用缶詰の中で一番高いヤツじゃないか！ 颗沢言つくな！」

『モンプレティ』　つー　モンプレティが食べたい

つー　こんなパサパサのツナじゃオレ様の腹は満たせない
つー　』

だだをこねるように畳の上で仰向けになると、そのまま前足後ろ足をバタつかせて暴れる猫又。

そんな猫又の暴挙に君彦はたまらず怒鳴り散らす。

「子供みたいにワガママ言つうなよー！ 大体お前が毎日毎日つまみ食

いするから、買い置きの缶詰やらキャットフードやらがすぐになくな
るんじやないか！ 結局またお前の『』はんを買い足す羽田になつ
てんだから、安物の缶詰しか買えなくなつてんのは一体誰のせいだ
と思つてんだ！』

『モンブティ つー もんづるをこつー 知らん知らん！ 一人で
モンブティが食べたいのぉ つー』

「あ つー もんづるをこつー 知らん知らん！ 一人で
勝手に叫んでるー。」

愛想を尽かした君彦が最後にそう怒鳴ると、猫又は本当にしばら
く一匹で叫んでいたが 本当に相手にしてもらえなかつた
ので叫ぶのをやめて、途端に静かになる。

そして叫んで疲れたせいか・・・結局あれだけマズイと言つてた『
ミヤオ』を勢いよく、綺麗に全部といらげた。

暴たー（後書き）

どうでしょうか、猫又の呑の呑えよつわ。
こんな感じで今後それぞれの日常生活を紹介していくので、樂
しみにしてください。

カマ騒ぎ（前書き）

今回君彦も響子も黒依も猫又も出ません、そんなとんでもない回になつてしましました。

少々下品かもしませんが、ご了承ください。

「響子おおおおおおお
つ！ デリしたの
つ！？ 一体何があつたのよおおおおお
つ！」

夜7時 、響子の伯父（伯母？）である蝶野蘭子がもうすぐ出勤時間だと呟つのに、独身用マンションの5階にある響子の部屋の前で野太い声を張り上げていた。

金髪に近い茶髪に盛りに盛りまくった髪型、スパンコールをふんだんに使ったきらびやかなワンピースに身を包んでいる身長190近くの大男（大女？）が、力一杯響子の部屋のドアを叩きつけてくる。

ドアが変形しそうな位の力で叩きつける音と蘭子のパニック状態になつた奇声は完全に近所迷惑となつており、周囲の隣人達が次々と部屋から出て来て蘭子の状態を見に出てきた。

「うようとー、一体ビーハイのよ蘭子ママ」

オレンジ色の縦ロールヘアにチャイナ服を着込んだ女性、もといオカマが迷惑そうな顔で蘭子の周囲に集まつて来ている女性達に声をかけた。

するとすぐ側にいた黒髪のショートボブをしたキャバ嬢が答える。

「それがね、学校から帰つた響子ちゃんがママの携帯に出なつてんでこの騒ぎよ。いや、私もあんま事情とか知らないんだけどさ。どうせまた男絡みとかなんじやない？ ほら、響子ちゃん美人だし。私程じゃないけどね」

「何言つてんのよ、あんたみたいな錢ゲバと響子ちゃんを一緒にし

ちや蘭子ママから怒りの鉄拳が飛んでくるわよー！」

「そうよそうよう！ 蘭子ママにとつて響子ちゃんはアナルに入れても痛くない位力ワライんだからっ！」

でしょ!?

顔が汚けりや言葉も汚いと言わんばかりに、悔穢を込めた眼差しでキヤバ嬢が訂正した。

蘭子の懸念が叶へし才俊、遠い恋愛に心を惹かれた。而してかねた蘭子が一喝する。

「んもうー、あんた達ひるみこわよおおつーー、近所迷惑になるじやないー！」

「あんたが一番つむりせんでんだよ、」のイボイノシシがつー。」

「誰がイボイノシシよ、ちよつと今言ったの誰！？」あたしちよつと傷付いたかもっ！」

両目にたつぷり涙を浮かべながら両手を胸の前に組んで傷付いてる素振りをする蘭子に、チャイナ服のゲイが事情を聞く。

「そんな」と呟つマ、響子ちゃん一体どうしたの？ 多感な年頃なんだからあんまり干渉するの悪くないんじゃない？」

「もうよねえ。ただでさえママったら響子ちゃんにべつたりなんだから。そりゃこんな化け物にべつたりまとわりつかれちゃグレたくもなるわよ」

周囲にいる男女殆ど全員が大きく頷くと、蘭子は心外とばかりに首を大きく横に振つて否定する。

「響子ちゃんはグレたりなんかしないわよっ！　このあたしが子供の頃からちやーんと愛情たっぷり注いで育てたんだから！」

「いやだから、近頃の子供は愛情注ぎ過ぎもかえつて逆効果なのよ？」

「んもうあんた達ツ！　いんなんじゃ話がちつとも前に進まないじゃないのさ！　蘭子ママ、詳しく教えてよ。もしかしたら私達にも何か助けてあげられることがあるかもしれないわ！　なんたつてここにいる娘達はみんな苦勞ばかりしてきてるからね。三人寄れば文殊の知恵って言うじやないつ！（何より早いとこ）蘭子ママ黙らせないと本当に警察とかに通報とかされそつだもの」

チャイナ服のゲイが宥めるように蘭子に声をかけるとよつやく落ち着きを取り戻した蘭子が話し始めた。

「・・・『めんねみんな、実はあたしもよくわかってるわけじゃないのよ。ただあたしがお店に出勤する時にはいつも毎日響子ちゃんに欠かさず携帯で行つてきますの電話をするんだけど、今日に限つて響子ちゃん・・・全く電話に出てくれないの。もしかして何かあつたのかと思つて部屋に来たら鍵がかかつてるし、でも部屋にいるのは間違いないの！　響子ちゃんがものすごい勢いでドアを閉める音があたしの部屋にまで聞こえて來たし・・・耳を澄ませてみたら氣のせいか泣き声みたいなのが聞こえて来て、あたし・・・心配になつてきちゃつて！」

泣き出す蘭子にキヤバ嬢がハンカチを差し出すと思い切り鼻を噛

まれてべつとりとした半液状のスライムが出現した、それを小汚い雑巾を持つように手に取るとキャバ嬢の表情が歪んだ。

その横でチャイナ服のゲイが状況を整理する。

「つまり学校、あるいは下校途中に何かあつた響子ちゃんが急いで帰宅して・・・部屋で一人泣いてると、ママの携帯に出ない位ひどく落ち込んでるんじゃないかと思つたママは、響子ちゃんに何があつたのか聞いただす為この騒ぎを引き起こしたと・・・そういうわけね？」

「あの子とつても我慢強い娘だもの、外で痴漢に遭つて帰つて来ても決して辛い顔をあたしに見せるようなことはなかつたのよ。それが今は何があつたのか知らないけどあたしからの電話に出ない位、玄関の前でこんなに訴えかけても出て来ない位ひどく落ち込むなんて今までになかつたんだから。きっととつもない目に遭つたに違いないわ！ 男絡みよ、それしかないもの！ 血も涙もない鬼畜生野郎に痴漢以上の何かをされてショックを受けたに違ひないのよつ！ 可哀想な響子ちゃん・・・！」

蘭子の被害妄想のようにしか感じられない隣人達は互いに顔を見せながら、何とか蘭子を落ち着かせようと努めるが・・・自分達も響子の性癖を知らないわけではなかつた。

男を親の仇のように毛嫌いする響子、そしてそんな男相手にも全く引けを取らない強さを持つ響子・・・。

そんな彼女が男に何かされたからという理由だけで、今までにない行動を取るだろうか？

遂にキャバ嬢がある推測をする。

「もしかしてさあ、響子ちゃん・・・男に恋してショック受けた、とかじやないかしら？」

「はあっ！？ 何でそつなるのよ、あの響子ちゃんよ！？ 男なんてミトコンドリア以下の存在にしか感じないあの響子ちゃんよ！？ そんな響子ちゃんがどうして男なんかに恋するって言うのよ、頭オカシイんじゃない！？」

まるで『恋』 자체を否定するかのように、蘭子が食つてかかつて反論してきた。

「だつて、今までにないことって言つたらそれ位じやん？ 韶子ちゃんが男にイヤなことをされてきたなんて日常茶飯事でしょ。でもそんな響子ちゃんが今までにない位ショックを受けるって言つたらさあ、やっぱり自分が毛嫌いしてきた男を好きになっちゃつて・・・ そんな自分に『惑つてるつて風にしか考えられないじやん』

キヤバ嬢の言つくりと一緒に理あると踏んだチャイナ服のゲイも頷き、賛同する。

「恋したことない響子ちゃんが、初めての恋に『惑い・・・動搖する。うん、それ有利得るかも！ 私だつて自分が男を好きなんだつてわかつた時、ショックで涙が止まらなかつたもの！』

「それは種類が違ひ過ぎるでしょ、誰だつて同性に恋心萌生えたら驚き戸惑つでしょうが」

周囲の隣人達が何の根拠もなく肯定していく中、ただ一人だけかたくなに否定する人物がいた

蘭子である。

「有利不得ないわ、あんた達・・・響子ちゃんのことを何も知らないからそんなことが言えるのよ。『あんなこと』を体験した響子ちゃん

異性に對して好意を持つなんて・・・天地が
引つくり返つても有り得ないんだから」

「だーかーらー私達、響子ちゃんの過去だの何だの聞いたことない
んだから知らないに決まつてんでしょー? 大体聞いたつてママ教
えてくんないじやん」

「教えられるはずないわ・・・、あんな外道な出来事・・・つ!
口が裂けても言えるはずない・・・つ!」

肩を震わせながら悲しい表情を見せる蘭子にただならぬ空氣を感じて、いよいよどうしていいのかわからなくなつてくるオカマ達に一人の若い新米キヤバ嬢があっけらかんとした口調で空氣をぶち壊した。

「あ、そういうえばあたしいこないだの日曜に響子ちゃんが知らな
い男と喫茶店で仲良くお茶してたの見たわよおー?」

「えー!？」

一瞬にして空氣が変わるが、新米キヤバ嬢はそれにも氣付かず淡々と甲高い声で続けた。

「なんかあー響子ちゃんと同じ高校の制服かなあー? メガネかけたもやしつ子と一緒にいて楽しそうだったわよー! あたしそれ見てえー、あ・響子ちゃんカレシ出来たんだあーつて思つてたんだけどおー。もしかしてもう別れたとかーそんなんじゃない?」

新米キヤバ嬢の言葉に一同凍りついた、特に蘭子は顔面蒼白になり完全に石になつてゐる。

そんな蘭子を見た黒髪のショートボブのキャバ嬢が咄嗟に新米キヤバ嬢の腕を引っ張つて、蘭子の視界に入らない場所へと連れて行つてしまつた。

「あんたっ！ 最近ここに越して來たばかりの娘よね、今から私の言つことをよく聞きなー！ このマンションではあの蘭子ママが全ての実権を握つてゐるようなモンなのー！ いい？ ここでは蘭子ママにて逆らう者は全てお水業界で働けなくなるのと一緒に一つー？」

「えへへ、そうだつたのぉー！」

「そうだつたのぉー？ ジゃないわよつ！ あへへ全く、余計なことをしてくれたわねアンタ！ あの蘭子ママにとつて響子ちゃんつて娘は世界そのものなの、蘭子ママの命そのものなのよ！ だからこのマンションに住む住人・・・もといこの町のお水業界で働く者にとつても響子ちゃんは大切な存在になるわけよ、まあそんな邪な考えなくともこのマンションの住人はみんな響子ちゃんのことが好きなんだけどね。響子ちゃん強いからしつこい常連客や、借金の取り立てに来たチンピラから助けてもらつたキヤバ嬢も少なくないし。とにかく蘭子ママの目の前で響子ちゃんの交友関係を無闇に口にするのはタブーよ、わかつた！？」

「・・・何かよくわかんないけどおー、とりあえずわかつたかもお

」

「それより、わたくしの話は本当に本当に？ 間違いないわけ？」

「うふ、だつてこの辺で響子ちゃんみたいな美人で目立つ娘つて他にいないしいー」

「相手はどんな男だった？痴漢つぽい奴？ストーカーつぽい奴？」

「本当に普通の男の子だったよお～？なんかあ～いかにも草食男子つて感じでえ～冴えない感じだつたかなあ～？」

ショートボブのキヤバ嬢がそれだけ問い合わせると、そのまま新米キヤバ嬢を部屋に追い返してから一息ついた。

思い悩んだように難しい顔になりながらタバコを吸い始める、とりあえず落ち着きを取り戻してから考え込むキヤバ嬢。

「響子ちゃんについて本当に私達は何も知らないけど、もししさつきの話が本当だとしたら・・・大変なことになるわよ。相手の男が誰であろうとこのことが蘭子ママの耳に入つたりなんかしたら・・・そいつ、ヤバイことになるわね」

結局その後、お店に早く行かないといけないという理由をつけて響子の部屋の玄関前から蘭子を引きずるように連れて行つたゲイ達。当然玄関前の騒ぎは響子の部屋の中まで筒抜け状態であり、一部始終蘭子が恥ずかしい行動を取つていたことはわかっていた。

最初の内は確かに君彦のことがどうしても頭から離れない響子は、その苦しさからずつとベッドに伏せつて泣いていたのは事実であったがその後は蘭子が部屋の前で騒ぎ出してからほどんどん隣人達も集まつて收拾がつかない状態になり、響子自身も焦つていたのだ。

しかし響子は泣き腫らした目でみんなの前に出て行くのを躊躇い、そのまま事が治まるまで沈黙を保つていたのであった。

(「めんなさい、蘭子さん。明日ちゃんと謝るから。」)

・・だから今日はホント、あたしのことは放つておいて)

カマ騒ぎ（後書き）

忍び寄る悪意

「あたしの好きなタイプは、あたしに興味がない人！　これに限るわ」

本当に？

『だったらどうしてこんなに苦しいの？』

『アイツはあたしのことなんて最初から眼中にないし、それ以前に暴力を振るつたあたしなんかより親友である男友達の方を選ぶに決まってるんだから・・・気にするようなことなんかないじゃない！』

『恋しいの？　あの男のことが』

『わからない。』

『自分を見て欲しいのね？』

『違う、あたしを見る男はみんなケダモノよ。』

『だったらなぜ泣く？』

『そんなのあたしの方が知りたいわよ！』

『・・・そう、まだ気付いてないのね。　自分の本当の気持ちに・・・』

・芽生え始めた感情に』

わからない、知らない、気付きたくない、知りたくない、理解したくもない。

『ふふ・・・それでいいのよ。お前に恋や愛など語る資格はないのだから・・・。この私が憑いてる限りお前に言い寄る男など皆、下心を持つた性欲の固まりのみ。お前が「女」になった時から、「私」という怨念が蘇つたのだ。私が受けた仕打ち・・・そう、この恨みを晴らす為に

私はお前に取り憑いたのだから』

翌朝、結局響子の様子が心配で仕事から帰った後も一睡もすることが出来なかつた蘭子は目の人下に大きなクマを作つたまま、虚ろな眼差しで窓の外を眺めていた。

何度も何度も携帯の履歴を確認するが、やはり蘭子から響子へかけた履歴以外何もない。

響子から蘭子への電話は一度もかかつて来なかつたのだ。

「 はあ 」

切ない溜め息を漏らしながら蘭子は洗面所の方へと重い足取りで歩いて行くと、伸びかけていたヒゲを剃り始める。

そんな時、隣の

響子の部屋のドアが開閉する音が聞こえて来て蘭子は即座に反応した。すぐさま顔をきれいに洗い流すと大きな足音を立てて部屋から飛び出る。

すると田の前には学校のセーラー服に身を包んだ笑顔の響子が立つていて、蘭子は一瞬幻でも見ているような感覚になりながらも瞳を潤ませて名前を呼んだ。

「響子ちゃんっ！」

蘭子は嬉しさの余り響子に抱きつこうと両手を広げて接近したが、素早い身のこなしで回避されてそのまま顔面からコンクリートの床に倒れてしまった。

『おはよー、蘭子さん』

熱烈なハグを拒否されても蘭子は嬉し涙を流し、床にぶつけた衝撃で鼻から血を垂れ流しながら立ち上がる。

『んもう、昨日は一体どうしちゃったのよー。あたしものす』く心配してたんだからねつ！？』

『じめんなさい、昨日は少し疲れてたから早めに休んでいたのよ。でも今はもう大丈夫だから心配しないでちゅうだい。それじゃ私、今から学校とやらへ行つて来ます』

『？』

奇妙な違和感を残したまま、蘭子は片手を振つて見送つた。ゆつくりと、優雅な足取りで歩いて行く響子の後ろ姿に蘭子は言葉では言い表し難い不自然さを感じていたのだ。

「あの子、いつもあんな風に笑顔を見せたことがあったかしら？いつもならもつと子供らしい無邪気な笑顔で笑つてたのに、せつきの響子ちゃんは何ていうか・・・妙に大人びてるつて言つたか、艶っぽさがあるつて言つたか・・・」

『

恋に目覚めた女は雰囲気変わるつて言つしね！』

突然背後から太い声が聞こえて驚いた蘭子は反射的に相手を殴りつけていた、そして周囲から悲鳴がこだまする。蘭子が殴り付けた相手は同じ階に住んでいるオカマバーのメグミだったのだ。

「ちょっと！ 後ろから急に声をかけるからでしょっ！？ 大丈夫メグミー？ おい救急車！」

「蘭子姉さん、声太過ぎ！ 朝だから仕方ないかもしねいけど、今のトーンは完全に男入っちゃってるわよっ！」

上品に、しゃなりしゃなりと歩く姿に周囲の視線は熱かつた。響子自身は鏡で見る自分の姿がとても平凡な女の子だと信じ込んでいたが、それは一般的な美的感覚からではない。

実際響子の外見は生粋の日本人ではなく、ハーフっぽい外見をしていた。腰までの髪はウェーブがかっており、すらりとした体型に白い肌。少しキレ長だが瞳は大きくハツキリとした一重でまつ毛も長い、意志の強さを感じさせる眉に鼻筋も綺麗に通っている。

淡いピンク色のふっくらとした唇は周囲の視線を意識してか、始終笑みを絶やさなかつた。

学校へ向かつているはずの響子だが、その足は徐々に学校へ続く道から逸れて行く
まるで最初から別の場所へと向かっているかのように・・・。

だが時折交差点や十字路など、道が分かれる場所まで来ると急に足を止めて何かを探るように考え込む。そして目的の方向が決まると瞳を開いて再びゆっくりと歩き出す。それを何度も繰り返しながら、響子はどんどん住宅街の方へと入つて行った。

やがてコンクリートの壙に囲まれた古めかしいアパート、『トキワ荘』という看板を掲げている場所へと辿り着く。

響子がトキワ荘に近付くと突然何かに弾かれたかのように後ろへと飛び退つた、瞬間 韶子の顔に苦渋が滲み出てトキワ荘を睨みつける。

そしてもう一度、今度はトキワ荘のコンクリートの壁にそつと左手で触れよつとした。

刹那、まるで感電したかのようにすぐさま壁から手を離すと指先がほんの少しだけ火傷したよつに傷付いている。

『チツ、小癩な……！』

小さく罵りの言葉を口にする響子であつたが、そんな彼女に声をかける人物がトキワ荘から出て来た。

「……あれ、志岐城さん！？」

響子に向かつて声をかけて来た人物の方へ視線を走らせるが、そこには学ランに身を包んだ君彦が学生鞄片手に学校へ登校しようとして来た所であった。

君彦の姿を見つけるなり、すぐさま周囲を見渡す。

君彦の周囲に猫又の姿がない。

響子がすぐに辺りを見渡したので、彼女が猫又を探しているんだと察した君彦はいつもの屈託のない笑みで教えてやる。

「ああごめんね志岐城さん、猫又に用事があつてここまで来たんだよね？ 実は昨夜つまらないことで喧嘩をしちやつて……猫又の奴、またいつものプチ家出をしちやつたんだよ。まあどうせ食事時

になつたら戻つて来るとは思ひつけど

猫又が不在と聞いた響子は、まるで好都合とでも言ひよつに妖艶な美しさを醸し出しながら、君彦に向かつて微笑んだ。

(志岐城響子、お前がこの男を欲するといふのなら

私がその望みを叶えてやろう。私の色香でこの男を快樂に酔い痴れさせ、思う存分この体で抱かせてやる・・・嬉しいだらう? そしてまた地獄を見るがいい、お前を心から愛する男なんぞこの世のどこにも存在しないといふことをー)

忍び寄る悪意（後書き）

「 昨夜つまらない」とでも喧嘩しあひやつてや 「 もう、どうな」とで喧嘩してしまつたのでしょうか? 「 理由がつまらぬとするだら」

さて、私個人としましては蘭子さん非常にお気に入りだつたりします。描写がへタなので外見のイメージとしては、「 北斗の 」 に出て来そうな濃ゆい感じで想像してくれたらよろしくかと・・・(笑)

狙われた童貞（前書き）

君彦、逃げるおお

つづ――！

狙われた童貞

猫又が側にいない君彦に向かつて響子はにっこりと微笑む。

『ねえ、少し話があるんだけど・・・いい?』

どこか媚びるような甘い声でそう聞かれた君彦は腕時計を見てから少し眉根を寄せると、すぐに笑顔を作ると返事をした。

「学校までまだ時間があるし・・・構わないよ。それじゃオレの家でいいかな?」

『ダメッ!!』

君彦の言葉に響子の顔は一瞬にして恐ろしい形相になるとドスの効いた声で拒絶する、そんな響子の余りの変わりようには君彦は少し驚いたせいか一瞬目を丸くした、すると響子はハツと我に返ったようになつて顔色を悪くする。唇をつぐんで視線を下に逸らす姿はどこか拳動不審に見えた。

『えっと・・・、それじゃ学校に行きながらじや・・・ダメかな?』

『・・・いえ、いい所があるわ。私について来て』

そう言つなり響子は素早く君彦の腕を掴むとぐいぐい引っ張つて歩き出した、まるで女性の力とは思えない程の握力の強さに君彦は不審な眼差しで響子の後ろ姿をじっと見つめる。

(いつも螺旋を描くようにまとわり憑いてる色情靈の姿

が、見えない！？）

響子に引っ張られながら辿り着いた先は君彦達が通う風詠高校からさほど離れていない工場地帯の、建設中止となつた廃工場であった。周囲には他の工場へ出入りするトラックや従業員の車が通つて、工場地帯ではどうしても浮いて見える高校生一人に工場関係者達はこぞつて不審そうな眼差しで見つめていた。

だがそんな視線に構うことなく響子は堂々と廃工場に張られたブルーシートの、一部分だけ人一人が出入り出来そうな場所を見つけるなり中へと入つて行く。

「ちょ 志岐城さんっ！ 勝手に入つたらさすがにマズイんじゃないかな!? それにこここの廃工場つて飛び降り自殺する男の子の幽霊が出るつていう噂だし、・・・まあオレは見たことないんだけど。とにかくやめといた方が・・・」

『いいから来て』

君彦の言葉に耳を傾けることなくブルーシートの隙間から誘うよう眼差しで君彦に手招きする響子、手を差し伸べる姿にこのまま抵抗するわけにもいかないと観念した君彦は溜め息を漏らしながら渋々中へと入つて行つた。

ブルーシートをぐぐるとそこには鉄筋や廃材などが置き去りにされていて君彦と響子以外には誰もいない、まるでブルーシートをくぐった先は別世界のように周囲の工場から聞こえてたはずの機械音やトラックのエンジン音などが、今では遙か彼方で鳴つているようにすごく遠くに感じられた。

外界から閉ざされた空間に、今では君彦と響子しかおらず

さすがに不安が増して来る。

しかしそれでも響子はどんどん鉄筋で組み立てられた途中の廃工場の中へと入つて行つた、慌ててついて行く君彦であつたが廃工場の中へ入つた途端にぞくりと悪寒がして全身鳥肌が立つた。

足を止めた君彦に響子が振り向くと、ウエーブがかつた長い髪が顔に半分だけかかり その姿がとても艶っぽく見える。

そんな状態の響子が妖艶に色っぽく微笑んで来るものだから、君彦は思わず頭の芯がとろけるような感覚に陥つた。

響子に見つめられてる間、君彦の心臓が早鐘を打ち全身に熱を帶びていく。先程感じた悪寒はいつの間にかなくなつており今はただ響子の視線に心地良ささえ感じていたのだ。

響子が一步君彦に近付くと、君彦は一步後ろに下がる。

『どうして逃げるの？』

「あ・・・えっと、その

」

君彦が返答に困つていると響子はからかうよつこくすべくと笑いながら手を差し伸べる仕草をして、それから君彦の頬に触れた。

(なんて冷たい手なんだ)

優しく撫で回すように頬に触れて、それから親指を君彦の唇に押し当てる。君彦は響子の異常に気付きながらもその場から動けずにいた。すぐ目の前で自分を求めるよつこく見つめて来る響子の瞳から逃れられないよつこく。

顔を真つ赤にして直立不動のまま固まつてゐる君彦を見て、響子は面白がつて君彦の耳元に囁いた。

『そんなんに固くならなくていいのよ、

あなたが求める

ままにしていいんだから。私があなたを求めるよつ』

君彦の顔に響子の柔らかい髪の毛がかかり、芳しい香りが鼻をくすぐる。そんな甘い匂いに更に頭の芯がボーッとして来て、君彦は思わず生睡を飲み込んだ。

すると響子は挑戦的に見える上目使いで君彦の口と鼻の先まで顔を近づけながら、セーラー服のボタンをひとつ・・・またひとつと外していく。パチン、パチンという音から君彦は直感的に響子がセーラー服を脱いだとしているんだと察した。

わざかに残っていた理性で君彦が響子の誘いを断り、セーラー服を脱ぐのをやめさせようと思いつて声に出そうとした時・・・響子は君彦が拒絕してくれることをいち早く察知したのか・・・すぐさま君彦の硬直した片手を掴むと、そのまま自分の胸へと誘導した。

狙われた童貞（後書き）

さて、君彦の運命やいかに！？（笑）

予想通り

妖艶に、妖しく微笑む響子の たわわに実る胸へと誘導する手を掴むと、君彦が真っ赤な顔で声を張り上げた。

「やつぱり駄目だよ、いのちのはつ…」

力一杯拒絶しようと奮闘する君彦に、響子は更に自分の体をすり寄せて君彦を求める仕草をした。

『 駄目じやないわ、私がこんなに貴方のことを欲しているのに・・・』

しかし君彦の意志は固く、響子の両肩に手を置いてぐいっと自分から体を引き離す。それから真っ直ぐに響子の目を見つめながら君彦は真剣な眼差しで告げた。

「だつてあなた、志岐城さんじやないんじよ？」

君彦の迷いのないハツキリとした言葉に響子は両手を見開き、固まつた。その表情にはどうしてそれがわかつたのか・・・疑問に満ちたものへと変わっている。

「志岐城さんはオレに、 男に触れることを極端に嫌うんだ。こんな風に平然とした態度でオレの手を引っ張つたり近付いたりするなんて有り得ない、・・・ずっとおかしいと思つてた。でもこれでようやくハツキリしたよ。今オレの目の前にいるのはオレの知つてゐる志岐城さんじやない。志岐城さんに取り憑いている色情

靈なんだって」

図星だったのか、君彦が断言した言葉に舌を打つと響子は乱暴に君彦の手を振り払うと後方に飛び退った。セーラー服のボタンが外されたまままで響子の白い柔肌と下着を纏つた胸が君彦の目につりついて、咄嗟に視線を逸らす。

『ここまで誘惑されながら、なぜこの女を抱こうとしない…？ 私の色香が通じないわけじゃないだろ？』

そう真剣な面差しで問われ、君彦は顔を真っ赤にしながら「…」もる。全く効果がなかつたわけではない…むしろ何度も欲にかられたか、それを認めるに自分が凄く穢れた人間のように思えて仕方がないかったのだ。君彦は話題をすり替えようと響子の体を乗つ取つている色情靈に向かつて懇願した。

「何の目的があつてこんなことをしたのかわからないけど、早く志岐城さんの体を返してあげてください！ その体はあなたが自由にしていい体じゃありません。あなたはとつぐに…亡くなつてるんです。どうして志岐城さんに取り憑いているのかその理由はわからませんが他人を呪つても決して幸せになんてなれませんよ。あなた自身の為にも、どうか安らかに成仏を…！」

そう言いかけると響子の顔が恐ろしい形相に変わり、怒りを露わにした。まるで田の前で突風が巻き起つたかのように君彦は色情靈の威圧感に押されて思わず足元がよろけてしまう。

『勝手なことを抜かすな、汚らわしい男めつー お前なんぞに私の気持ちがわかつてたまるものか！』

しかし君彦も負けてはいられなかつた、猫又がいない以上響子を救えるのは自分しかないと・・・君彦は懸命に色情靈を鎮めようと一步・・・また一步と近付いて行く。距離を縮めようとする君彦の姿に色情靈はなぜか恐れを感じたのか、差し伸べようとする手から逃れるように後退していく。

『私に触れるな・・・つ、やめろつー。私は成仏なんてしない！この者を使って私は・・・私は・・・つ！』

叫ぶ色情靈に君彦が触れた瞬間、さっきまでの突風が止んで辺りが急に静まり返る。それからがくんつと倒れるように響子の体がふらついたので慌てて君彦が抱き抱えた。意識を失っている響子を見るなり、恐らく色情靈が響子の体から出て行つたんだと察してほつと一息つく。

「よかつた・・・、一時はどうなるかと・・・」

響子を抱き締めたまま君彦が安堵していると、響子はすぐに意識を取り戻して目と鼻の先にいる君彦とバチッと目が合つた。自分を抱き締めている君彦、そしてゆっくりと自分の胸元を確認するとそこにはセーラー服のボタンが外されてブラジャーをした胸が露出しているのに気付く。

「あ、志岐城さん・・・、気がつい・・・
「あやあああああ
「いつ！」

胸を隠す前に君彦を思い切り殴り飛ばす響子、君彦は内心こうなるんじやないかと予想だけはしていたが結局響子の強烈なパンチを避けることも出来ずにノックダウンされてしまった。

そんなやり取りを遠くから見つめる瞳があった。遠くの廃材の上から虚ろな眼差しで・・・半ば呆れたように見つめる一匹の猫。

『はあ・・・結局、いつなるわけか、アホらし。こんな調子じゃ、君彦にメスとの交尾なんて当分の間は無理だな』

それだけ呟くと、猫又は廃材から飛び降りるとそのまま君彦のことを見捨てて、いつもの散歩コースへと戻つて行つた。

猫又は季節の中で一番春が好きだった、ぽかぽかと暖かい陽射しの中 散歩も昼寝も、どちらも気持ち良く過ぐせるからである。朝から君彦と響子によるドタバタ劇を日にしてた猫又は、恐らくこのまま一緒に居ても何か文句を言われるのではないかと思つて今日一日は君彦や響子に近付くことをやめることにした。

君彦と口喧嘩をして猫又が一時的に家出をするのは日常茶飯事であつたが、そのタイミングにまさか色情靈に体を乗っ取られた響子が現れるとは猫又ですら予想出来ていなかつた。自分がその場に居れば色情靈を響子の体から追い出すことは朝飯前であつたが、つい・・・思わず君彦が一体どうするのか？ という好奇心がわいてしまつたのだ。

結果的には君彦自身の力で響子の体から色情靈を追い出すことに成功したのだが、その後に自分が姿を現したらどうせ「こんな時にどこ行つてたんだ」とか何とか・・・面倒臭いことを言われるのかと思つたので、そのまま見て見ぬフリを決め込んだのである。

猫又は天気の良いぽかぽか天気のお陰で上機嫌だったので、鼻歌交じりに歌しながら家々の塀の上を歩いて行く。そんな時・・・。

『やあ、猫又さん！ 今日は随分と機嫌がよろしいようで、何か良いことでもあつたんですかい？』

近所の野良猫達が2~3匹程たむろしており、猫又の姿を見つけるなり話しかけて来た。猫又の姿は靈感の強い人間にしか見ることが出来ないが、動物や他の幽靈達には当然猫又の姿を目視することが出来る。

『うんにゅ、ただ天気が良いから絶好の散歩日和だと思つてな』

堀の上から猫又が答えると、ブチ猫が何かを思い出したかのよう^{ひつ}に話しかける。

『あ、そういうやう丁目の猫娘さんが最近猫又さんが来てくれねえつてんで寂しがつてましたぜ？ 上等なお酒用意してゐからたまには顔を見せて欲しつゝさ、こよつ！ この色男！』

『大人をあまりからかうんじゃねえよ、でも・・・やうにや最近酒飲んでねえからな。今夜辺りにでも顔見せに行くかな』

『そん時はオレたち達にも声かけてくださいね、おじぼれおじぼれ！』

『つたくお前等はホント調子良いくんだからよ、やつぱやめた！ 抜き打ちで行く』とにする！』

(・・・それなら毎晩猫娘さんの所にお邪魔するだけさね)

ぶいっとそつぽを向いて再び猫又が散歩コースに戻つて歩を進めようとした時だった、遠くの方から半透明の物体が飛んで來たのでそれを野良猫達がいち早く気付き、その存在を猫又に教えてやる。

『猫又さん、浮幽靈のカナぢゃんだぜ』

『あ？』

野良猫達の言葉に猫又が上を見上げると慌てた様子で10歳位の姿をした女の子が、真つ直ぐに猫又の方へ飛んできた。

『猫又ちゃん ん！ 大変だよー。』

『あいや君彦のダンナに何があつたんじゃね？ カナちゃんてほら。
・・確かに君彦のダンナのことが大好きだつたかんね。その気持ちを
利用して猫又さんがダンナの監視役を・・・』

『おーおー、猫又さん鬼だねえ』

『猫の風上にも置けない畜生だねえ』

『怖いこわい』

『だあ もう、お前等つるせ つづー。』

猫又がシャ ッと威嚇すると、野良猫達はだら
しなく笑い飛ばしながら毛づくろいなんかをし始めた。

『どひしたんだよカナ、言ひとくが君彦のことならわかってんぜ。
どひせあの色情女にいこみひて振り回されてんだろ？』

『今日はお兄ちゃんのことじやなこよ、全く・・・昨日の夜は一体
どこに行つてたの！？ あたし猫又ちゃんのことずっと探し回つて
たんだからね！』

『わかったわかった、とにかく一休どひしたつてんだよー。』

猫又が面倒臭そうに適当にあしらいながらカナに続きの話を早く
するよひに急かした。するとカナは何かを怖がるよひな表情で話し
始める。

『1丁目の野良さん達に聞いたんだけど、最近この町にどつても怖い人が来たんだって！ あたしが見たわけじゃないんだけど、その人・・・この町の物の怪とか幽霊とかを苛めて回つてるの！ 逆らつた物の怪さんの中には返り討ちに遭つてそのまま除霊されたり怪我させられたり・・・、それ三日前の話でね！？ 昨日の夜には2丁目にその人が現れて・・・、2丁目の物の怪さんや幽霊さんは喧嘩つ早いのばっかりだからたくさん怪我人が出たつて！ だんだんこっちの方に近付いて来てんの！ 猫又ちゃん、どうしたらいい！？』

早口に言葉を並べ立てるものだから話の内容をすぐに理解することができず、猫又は一旦カナに落ち着くように宥めようとした。他の家の屋根の上に上がり、そこでもう一度順を追つて話を聞く。その場にいた野良猫達も興味からか一緒になつて聞いていた。

『つまり・・・そいつがだんだんこの4丁目に向かつて来て、物の怪退治してるつてんだな？』

『うん、でも退治されちゃったのはその人に喧嘩を仕掛けた人達だけなんだって。でも・・・何かを探してるみたいでその質問に答えられなかつたら結局暴力を振るわれて、怪我させられちゃつたみたい』

怯えるカナを見て猫又は安心させるように左前足で背中を撫でてやつた、しかしせつかく猫又がカナを宥めているすぐ隣で完全にパニック状態に陥つた野良猫達が慌ただしく逃げる準備をしていろ。

『やつべ、そんじやオレ達もさつさとーンズラしねえと！』

『怪我はイヤー！ 暴力反対～っ！』

『どうしようオレ、もうすぐ子供が生まれるんだけどな・・・』

『ツシヤ ツ！ お前等つるつさこつてんだ
ろうがつ！ ともかくカナ、お前は心配すんじやねえよ。この4丁
目にはオレ様がいるだろうが。この町内仕切ってんのは一体誰だと
思つてんだよ、そんな物騒な奴が現れてもこのオレ様が返り討ちに
してやんぜ。でももしまだ怖いってんならお前は今夜からウチに来
な、君彦が側にいれば安心だろ、な？』

（カナがいれば君彦もオレ様に向かつてあれこれと口うるわしく言わ
なくなるかも知れないし・・・）

そんなことを考えながら猫又は今から町内パトロールを強化する
ことに決めた、カナには学校に行けば君彦がいるから自分が戻るま
では君彦の側にいるように指示して、それから謎の人物に襲われた
物の怪がいるという2丁目へと出かけた。

散歩コース（後書き）

何やら不穏な空気が・・・はてさて猫又達は一体どうなつてしまふのか？ 戦闘シーンの描写が苦手なのでバトル突入だけはほしくないものです（笑）

力ナちゃん

「はあ～～～・・・」

授業中のみならず休み時間も教室の自分の席で深い溜め息をつく君彦に、黒依は首を傾げていた。聞いてみたところ今朝方志岐城響子に色々と誤解をされてしまい、そのまま喧嘩別れをしたということで君彦は落ち込んでいる様子だった。

黒依はおもむろにノートの切れ端に何かを書き、それをすぐ隣の君彦へと手渡す。君彦はきょとんとした顔で四つ折りされた紙切れを広げてそこに書かれているメッセージを読んだ。

『きちんと話せば誤解はすぐ解けるから、元気出してね。黒依』

(黒依ちゃん・・・っ！ 君は何て心優しい女の子なんだ・・・) れぞまさしく地上に舞い降りた天使っ！)

自分が落ち込んでいる姿を見て心配してくれているのだと察した君彦は感激の余り嬉し涙を流す、それから隣で自分に微笑みかけてくれる黒依に向かつて能天気な笑みを浮かべながら手を振つた。しかし誤解を解くと言つても廃工場での出来事の後、響子は君彦を殴り飛ばしてそのまま走り去つてしまつた。当然君彦は遠のく意識を必死で堪えながら響子を追いかけたが結局のところ見失つてしまい、学校で会つてから改めて話し合おうと思ったが響子のクラスに行くと欠席してると言われてしまったのだ。

（・・・よつぽどシヨツクだつたんだろうな、無理もないけど。て
ゆうかあれつてオレの方が襲つたことになつてんのかなやつぱり！
？早い所誤解を解きたいけどオレまで学校を欠席するわけにいかな

いし、志岐城さんの担任の先生に聞けばビート家があるのか教えてもらえるかな……？）

そんなことを考えながらふと窓の外に視線を向けたら、思わず吹き出してしまった。窓の外には二階であるにも関わらずワンピースを来た女の子が宙に浮いたままこちらに向かって手を振っているではないか。それを見た君彦は思わずその女の子の名前を呼びそうになるが、今までに授業中であることを思い出して言葉を飲み込んだ。

カナはスウーツと窓ガラスを通り抜けて君彦の元へと到着し、笑顔で話しかけて来る。

『君彦お兄ちゃん、カナ邪魔しないから今日はずっとお兄ちゃんの側にいてもいい？』

突然そう聞かれ、君彦は驚きながらも周囲に視線を走らせ小声で問う。

「…………って、いきなりどうしたの！？ 今オレ学校があるからカナちゃんと遊んであげること出来ないんだけど……」

しかしそれで全然構わないのか、カナは無垢な笑みを浮かべながら大きく頷いている。

『カナ、大人しくしてるから！ 猫又ちゃんも今日はずっと君彦お兄ちゃんの側にいろいろ言つてくれたし！』

（猫又の奴……、また余計なことを……つ！ てゆうか一体何を企んでるんだ、あいつわ！）

それから力ナは休憩時間以外は君彦の教室の中を沈黙のままふわふわ浮かんだり、一緒になつて授業を聞いたりと 本当に約束通り大人しくしていったことに君彦はほつとしていた。以前力ナが授業中の君彦の元へ遊びに来た時は色々とイタズラをしていたので、君彦が軽く力ナを叱つたことがあつた。それを覚えているのかどうかはわからないが、ともかく何の問題もなく今日一日授業を無事に終えることが出来て安心する君彦。

黒依に関しては、君彦が幽霊が見える体质であることやたまに知り合いの幽霊や物の怪なんかが君彦にちよつかいをかけてくることをあらかじめ話しており、それを理解してくれているので君彦にとってはこれ程有り難い存在はなかつた。

力ナのこともあつたのでとりあえず今日も黒依と下校することが出来なくて残念そうな君彦であったが、黒依はそんなことを気に病む様子もなく満面の微笑みを浮かべて別れたことに少なからず寂しさを感じていた。

家に帰る途中に君彦はどうして急に力ナが君彦の元へ来たのか直接本人に聞いてみたが、力ナは思い切り何かを隠している様子で何も話そつとはしない。まるで誰かに口止めされているようにあからさまに言葉を濁すだけであつた。

『あたし・・・久しぶりにお兄ちゃんと一緒にいたかつた・・・それだけだよ？ ホントだよ？ だから猫又ちゃんが帰つて来るまではお兄ちゃんと一緒に居てもいいでしょ？ ・・・ダメ？』

「いや、それは構わないけど。ただ力ナちゃんが猫娘さんの所に帰らないのが珍しいなつて思つただけだよ。力ナちゃんつてお母さんを恋しがつていたから、その母親代わりに猫娘さんがなつてくれてすごく喜んでいたからさ・・・」

『お姉ちゃんはお店があるから・・・、あそこには物の怪や幽霊のた

まり場だし……狙われやすそうだからって猫又ちゃんが……』

「……え？ 猫又がどうしたって？」

思わず口が滑ってしまった力ナは慌てて誤魔化そうとする。

『な・・・っ、何でもない！ そんなことより、早く帰ろー…？ お外が暗くなる前に早く帰った方がいいよ！ 危ないよ！』

どうにも拳動不審な力ナに違和感を感じながら、これ以上力ナを追及するのは可哀想だと思つて何も聞かないことにした。続きを当然猫又に聞くことにして、君彦は力ナと一緒に家路を急いだ。

猫目石

3丁目のとある一角、人通りが少なくさびれた路地沿いに古めかしい飲み屋が一軒あつた。木造でかなりガタが来ているその飲み屋には赤いのれんがかかつており、それには『猫目石』と書かれている。まだ午後の3時なので準備中なのが、ガラリと硝子戸が開いて1匹の猫が入つて行つた。その猫を見るなりこの店の主が嬉しそうな笑顔を見せる。

艶のある黒い結い髪に真っ白い肌、キラキラとガラス玉のようなキレ長の瞳は緑に金色がかかつてゐる。舞妓のようにうなじや肩を大胆に露出した着物を着た妖艶な女性、外見で言えば20歳前後の美しい彼女こそ3丁目で最も美しい物の怪とそれでいる通称猫娘こと、名を涼子といつ。

『あら、猫又さんいらっしゃい！　でも残念、まだ開店していないんだけど・・・でも猫又さんなら特別だわ』

涼子に歓迎されながら猫又はひょいとカウンターの椅子に飛び乗ると、両前足をテーブルに乗せてくつろぐ。

『いや、今日は遊びに来たんじゃねえよ。カナの奴から気になる話を聞いたんだな、ちよいとパトロールのついでに立ち寄つただけだ。涼子は何か知らねえか、最近ここいらを荒らし回つてる退治屋について・・・』

飲み屋をしているなら情報が早いはずだと踏んだ猫又であつたが、涼子はきょとんとした顔でコップを拭き拭きしている。

『退治屋？　さあ・・・』の辺りは平和そのものだけ、猫又さん

のお陰で。でも退治屋だなんて穩やかじやないわね。一体何なの?』

猫又は念の為、涼子にカナから聞いた話をそのまま話した。すると涼子は怯えるでもなく、かといって猫又の話を『冗談だと思つている風でもない余裕の笑みを浮かべるだけだった。

『随分物騒な話だけじ、よつするにその退治屋が現れたら相手にしないやいいだけの話でしょ? 何か聞かれても適当にあしらひわよ』

全く危機感を見せない涼子の態度に、猫又は少し呆れた声で注意した。

『おーおい、そんなのほほんとした状況でもねえだろ? が。相変わらずお前は危機感ねえというか何とこ? うか・・・』

涼子の樂觀ぶりに猫又は頭痛を堪えるような仕草をして、左前足で頭を押されて首を左右に振った。すると涼子はくすくすとからかうように笑うと、にっこりと微笑んで猫又に顔を近づけ危機感のない理由を言つて聞かせた。

『だつて、いざとなつたら猫又さんが助けてくれるんでしょ?』

ウチは信じるもの、猫又さんのこと

妖しい色氣をかもしだしながら猫又の耳にふうっと息を吹きかけると、猫又はぞくつと全身の毛を逆立てて息を吹きかけられた方の耳をパタパタさせた。それからすぐにカウンターの椅子から飛び降りるとまるで逃げるように出入り口に向かう。

『と・・・とにかく! 退治屋のことが片付くまで店は閉めときな! 物の怪や幽霊の溜まり場になつてることのが一番狙われやすいん

だからなー!』

猫又の言葉に涼子は突然樂觀的な表情からプライドを傷付けられたような表情へと豹変し、声を荒らげる。

『お店は閉めないわよ!? ウチの入れる熱燗を楽しみに来てくれるお客様がいるつてのに、営業は続けるからね!/? 何かあつたら猫又さんが来るまでウチがお客様を守るわよ!』

『涼子・・・だから危ないって・・・』

『ふん! 気が向いた時にしか来てくれない猫又さんにはウチの店の良さがわからないのよ! わかつたらさっさと出てつて! 町内パトロールでも何でもしてくれればいいじゃないのそ! 猫又さんのバカつ! !』

挙げ句に熱々のおしごりを投げつけようとする涼子の勢いに、猫又は急いで店を出て行つた。

仲直り（前書き）

なんか、これでいいのか？って位に短いですが・・・。今後ともこんな調子でお付き合いをお願いします。

読み手側に出来るだけ苦痛や疲労を感じさせない程度の量で提供していくつもりと思っておりますので。

逆効果だったら更にごめんなさいです。

仲直り

その夜、君彦は自宅で浮幽霊の力ナと一緒に過ごしていた。力ナは幽霊なので食事をすることが出来ないが、君彦と一緒にテレビを見ながら大笑いしている。一緒に喋ったりテレビを見て笑つたり、君彦は力ナの笑顔を見て少しホッとしていた。

(昼間に来た時の力ナちゃん、少し様子が変だつたけど・・・今は大丈夫みたいだな)

家の用事、そして学校の宿題をこなしながら君彦はふと
猫又のことを思つ。

(それにしても猫又の奴・・・まさか今夜も家に帰らないつもりなのかな。一日連続で家出するなんて今までなかつたのに。それに今やつてるバラエティ番組はアイツが大好きなコントだから、今日位は家に帰つて来てテレビに釘付けになると思つてたんだけどな。本当にアイツは・・・どこで何をしてるつてんだよ! このオレに心配させるなんて!)

そんな風に憎まれ口を心の中で叫びながら、君彦は眠りにつくまでずっと猫又の帰りを待つていた。

翌日

、昼間の間は平氣なのか・・・力ナは君彦に挨拶だけすると一日母親代わりである猫娘の涼子の元へ帰ると言いだした。君彦は気をつけて帰るように力ナに言つとそのまま何の変わりもなく学校へ登校する。

「 猫又つ！」

その言葉に君彦は思わず周囲を見渡して猫又の姿を探した、しかし
それは誰かが猫又を見つけた掛け声ではなく自分に對して放たれた
言葉であった。周囲を見渡した時に後ろを振り向いたらそこには
響子が仁王立ちしており、少しバツの悪そうな顔で君彦を見据えて
いる。君彦は響子とずっと気まずい別れ方をしていたことを思い出
す、今まで忘れていたのは
家に帰らない猫又のこと
を考えていたからであった。

「 志岐城さん つ！ えつと、おはよつ」

「 おはよつ・・・じやないつ！」

乱暴に足を踏みならしながら君彦の近くまで来るも、やはりそれ
なりに一定間隔の距離を空けてはいる。男のことを極端に避ける傾
向にある響子の今の行動から、君彦は目の前に居る人物がこの間の
ように色情靈に体を乗つ取られているわけではなく、正真正銘響子
本人であることを察した。

しかし当の本人は色情靈に乗つ取られた記憶がないのか、君彦の
周囲に視線を走らせながら何かを探している様子である。君彦は響
子の仕草を見て猫又を探しているんだと瞬時に判断し、少しだけ顔
色が曇つてしまった。

「あ・・・『めん、猫又の奴・・・今いないんだ。ちょっと色々あ
つて・・・」

抑揚のない声に響子は怪訝な表情を見せる、それから再びバツの
悪そうな顔に戻るとあからさまに視線を逸らしながら話しかける。

「えっと、その・・・こないだは『ゴメン』

「え?」

響子の唐突な謝罪に君彦は目を丸くした、まず何のことで謝罪しているのかわからなかつたのが一番の理由であつたがそれと同時に氣の強い響子が君彦に向かつて素直に謝罪する姿を初めて見たので、驚きを隠せなかつたのだ。

「ほら、昨日の! あの後家に帰つた時に蘭・・・つ、親戚の人には教えてもらつたの。あたしの様子がおかしかつたつて。あたし・・・昨夜寝てから学校に登校するまでの記憶がなくて、登校する時の親戚とのやり取りを直接聞いて・・・あたしの記憶がない間に何かあつたんじやないかつて昨日ずっと考えてたわけ。あの場所であんなことになつたのって多分だけど、あたしに取り憑いてる色情靈が何かやらかしたつてことじやないの!? ・・・別に何やらかしたのか知りたくもないけど、ちよつと氣になつたから」

それを聞いた君彦は少し安心した、響子自身に大事がなくて良かつたと胸を撫で下ろす。

「オレもずっと氣になつてたんだよ、志岐城さんに何かあつたらどうしようつて! でもオレ志岐城さんの家がどこにあるのかわからぬいから様子を見に行くことも出来なかつたし、ごめんね。結局何も出来なくて。でもホント良かつた!」

君彦の素直な反応に響子は顔を真つ赤にさせながら突然否定的な態度を取る。

「ばっ・・・・、別にあんたがどうとか・・・、あたしは別につ！ た
だあのまま何事もなくするのはあたしの気分が悪いってだけで！」

「うん、志岐城さんは優しいもんね」

(や・・・やめりゅあおお つ！ 純粹無垢な眼差しで
あたしを見つめないでよ、自分がものすごく汚れて見えるじゃない
！)

君彦のこの「誰も何も疑わない真っ直ぐな心」に当てられて、響
子は自分の屈折した心がひどく醜く思い知らされるようでいてもた
つても居られなかつた。すぐさま君彦を振り切るよつに早足で学校
に向かう。それを見て君彦は全く自覚がないのか、一緒に登校しよ
うと響子を追いかけた。

仲直り（後書き）

徐々に、しかし確実に魔の手が忍び寄る・・・。
うまくいけば（？）次回には新たな展開へと突入いたします。

名前を呼んで

学校にいても相変わらず君彦は上の空であった、ほんやりと窓の外を眺めたり溜め息をついたり何度話しかけても反応がなかつたり・・・ここまで来ればさすがの黒依も少し心配になつて来て、猫又について訊ねてみる。

「ねえ、もしかして猫又ちゃん・・・まだ帰つて来てないの？」

「うん、小むこいとで喧嘩するのはしちゃうだ
から特に気にしてなかつたんだけど、今回さすがにひょっと・・・
ね」

いつもならどんなに失礼なことでも空氣を読まない行動に出る黒依であつたが・・・、今回ばかりは少しだけ空氣を読んでみた。すると君彦は思い詰めたように真剣な表情で後悔した
よつて呟いた。

「アイツがそんなにモンブティを食べたがつてたなんて・・・つ!
家出する位ならオレ・・・1個位フンパツして食べさせてやれば
良かつた・・・つ! ああ〜、オレの馬鹿 つつ!」

黒依は満面の笑みを浮かべながら黙つて自分の席へと戻つて行つた。

昼休み、黒依は屋上で弁当を食べるよつて君彦を誘つた。まだ落ち込んだ風であったが青空を見ながら美味しい弁当

を食べれば少しは気が紛れるかもしれないという黒依の心遣いである。いつもの君彦ならそんな心遣いに気付かないわけないのだが、猫又を心配する余りどうにも思考がうまく働かない様子だ。黒依は懸命に明るく振る舞いながらスキップするみたいに階段を駆け上がり勢いよく屋上へ続くドアを開けた。

「 げ

一瞬、黒依の清廉潔白な可愛い顔からは想像もつかないような声が聞こえたような気がした。君彦はぼんやりと黒依の背中を見つめながら一体どうしたのかと同じように屋上を見る。するとそこには響子が一人で弁当を食べている姿があつて、君彦は一体どうしたのかと声をかけた。

「あれ・・・志岐城さん、そんな所に一人で一体どうしたの!?

声を掛けられて響子が顔を引きつらせながら振り向く、そこにはきょとんとした顔の君彦と笑顔が引きつる黒依を見つけた。

「どうした・・・つて、見りやわかんでしょう...? お弁当食べてんじやない」

「えへへ? こんな所で一人で食べてるの!? 寂しくない?」

極上の頬笑みで可愛らしく黒依が聞く、当然一人で弁当を食べて楽しい人間がいるとは思えない響子はその言葉がイヤミにしか聞こえず、返事をするのも億劫になつた。そもそもどうしてこの一人が揃つてこんな場所まで来るので予想だにしていなかつたので、響子はすっかり居心地を悪くしている。しかし君彦は少しきこちないが笑みを作つて響子の隣に座つた。

「な 何よ！？」

「オレ達も屋上で弁当を食べようと思つてたんだ、志岐城さんさえ良かつたら一緒に食べようよ。ね。黒依ちゃん！？」

黒依の顔は笑顔を保つたまま蒼白になる、それでも君彦の嬉しそうな顔を見て 少しでも笑顔が戻つて良かつたと思う気持ちに嘘はなかつた黒依は、ひくひくしながら従つた。

君彦を真ん中にして座りお弁当を食べながら、響子は今朝の話を思い出したのでもう一度君彦に聞いてみる。

「それよりさあ猫又、あんた・・・猫の方の猫又は一体どうしたのよ！？ 色々あってとか言われても、あたしは猫又がいなきやこの色情靈に憑きまとわれて迷惑でしようがないんだけど。ま、まあ・・・別にあんたのせいとか言つてるわけじゃないんだけどさー！？ ただちょっと 猫の方がいないどどうにも調子が狂うと言つか・・・」

響子がたゞたゞしく訊ねてる途中で、突然目を丸くして大声を張り上げた。

「 つて、猫又あつ！」

「え・・・何、突然？」

しかし今度は君彦のことではなく本物の猫の方であり、後ろを振り向くと猫又がすました顔で座つていた。当然それを見つけるなり君彦はお箸を握り締めながら響子以上に大声を張り上げる。

「猫又あつ！　お前今までどこせりつを歩いてたんだ、危うく心配するところだつたじゃないか！」

精一杯強がるも、その顔は心底ほつとしている顔でどこか嬉しそうでもあった。しかし当の猫又はしれつとした態度で一又の尻尾をふりふりしながら君彦達の方へ歩いて行く。

『オレだつてたまには、ぶらつと旅をしたくなるんだよ。お前もどこの過保護な母親みてえなこと言つてんじゃねえよ』

「な・・・何を　　つ！？」

（心配して損した、損しまくりだつ！　じつ全つ然反省しないじゃないか、むしろ何だこのふてぶてしかつ！　このすました顔が余計に腹立つ！）

『んで？　お前等随分仲良しになつてゐてえじゃねえか、三人一緒に昼飯つてか。青春なこつて』

猫又のイヤミつたらじこ台詞に響子は猫又の首根つじをつまんで持ち上げようとする
がしかし、子猫程度ならこれで持ち上がるものが猫又は相当なメタボだつた為これ以上持ち上げようとしても皮が伸びるだけで無駄だつた。

『いいでえ　　つ！　皮をつまむな！　引っ張るな！　持ち上げようとするな！　オレの体はお手軽に出来てねえんだよー。』

「へぬをこいつ！　大体あんたがこいつの側にいないせいだエライ目に遭つたんだから、あんたも猫又ならちゃんと猫又に取り憑いてなさこよつ！」

「志岐城さん、何を言つてゐるかわからんだけど…？」

響子が「猫又」とこの名を連発するものだから、君彦のことなんか猫又のことなのかわからない黒依がたまらずツツコモを入れた。しかしこの何気ない一言が大きな問題へと発展していく。

「つまりい、志岐城さんが君彦クンのことを『猫又クン』って呼ぶか・・・猫又ちゃんの方を『猫又ちゃん』って呼ぶか。呼び方をハツキリ分けた方がみんな理解しやすいと想つのよね」

黒依の言葉に異論がないのか、君彦自身も響子に呼ばれる度にどちらの方に向かつて呼んでるのか時々わからなかつたので、ナイスアイディアだと思っている。猫又に至つては全く興味がないのか太陽の日差しを満面に受けるようにならうと屋上で淫らに仰向けになつて、しかし響子はなぜか反論していた。

「あ・・・あたしがここにこのことをクン付けで呼べって！？ ジ・・・・つ、冗談じやないわ！ こんなヤツ呼び捨てで十分よつ！」

その言葉に君彦は泣き笑いを浮かべながらがつくりと肩を落として落ち込んでいた。

「だつたら猫又ちゃんのことをちゃんと付けで呼べば、ビッチのことがすぐにわかるわよね！」と、黒依。

「こいつのふてぶてしい猫のどこが『ちゃん』なんて可愛らしくものになるつてのよ！ こいつもせいぜい呼び捨てレベルだわ！」

『ワガママ言つたじやねえよ、色情女』

「誰が色情女だ、このメタボ猫つ！」

「ま、まあまあ落ち着いて二人とも！ と、とにかく・・・オレはともかく黒依ちゃんに関して言えば猫又の姿が見えないわけだから、志岐城さんがオレと猫又のことを同じ呼び名で呼ぶからややこしいだけってだけなんだから。そうだな・・・、それじゃこうじゃない？ 猫又に名前を付けるんだよー！」

『まあつーつ』

君彦の思ひがけない提案に猫又は仰向けのまま、頭が引っくり返つたままの状態で驚愕していた。そんな猫又の反応とは裏腹に黒依と響子の方は異論がない様子である。

「あ、それいいかも！ 猫又ちゃんに可愛い名前を付けてあげれば、君彦クンのことはそのままいいもんね！」

「・・・あんま可愛くない名前でいいんでない？ こいつを体現する呼び名であれば・・・」

かくして弁当を食べ終わった後の君彦達の暇つぶしは、猫又の名付け親大会となってしまった。そこで黒依がにこにこと楽しそうな笑みを浮かべながら思いついた名前をどんどん並べて行く。

「フランソワーズ、ジャスティン、リッチー、マイロー、ハヴァンジェリン、ウルシズヴォワセノーズとか・・・」

次々と外国の名前を出していいので当然、猫又の姿がバツチリ見えている君彦と響子はそれらの名前が全く猫又に当てはまらないので苦笑いを浮かべていた。猫又に至ってはなぜかムキになって名前を付けられることを拒絶している。黒依はこの中から猫又の名前を決めようとしているので、とりあえず危険だと判断した響子はさり気なく却下した。

「長過ぎるわよ、・・・『たま』でいいじゃない」

「ええ～～つ、それじゃありきたり過ぎるよー、それならケンコバとか、ツツチーとか・・・」

「どこかで聞いたことのある名前に、響子は疑わしそうな眼差しで黒依を見つめながらとりあえず聞いてみる。

「あんた、もしかして昨夜アメトーク見てたわね？」

図星だったのか黒依は否定することもなく、満面の笑顔のまま大きく頷いた。

「あ、わかった？ 昨日はアメトーク家電芸人SPだったの！ 君彦クンも見てた？」

「えー？ いや、テレビのチャンネルをずっと『コント特集にしてたから・・・』

『あ つ、しまったあ つ！ コント特集見るの忘れてたあ つ。』

話が脱線してしまい、再び戻そつとする三人に遂に猫又がキレ出

した。

『オレに名前付けようとしてんじゃねえよ、オレは猫又のままでいいんだよー。』

2本足で立ちながら君彦と響子に向かつて文句を言つ、しかしそれを聞き入れてしまつたら響子は君彦のことを名前かクン付けで呼ばなくてはいけなくなつてしまつので、負けじと響子も反論しようとした矢先だつた。

猫又は全身の毛を逆立てて両目を大きく見開くと皮を剥き出し、君彦達に向かつて猫又が本気で怒つた。

『オレ様に名前を付けていいのは、オレが認めた主人だけだつ！勝手に名付けようとしてんじゃねえつーー。』

その余りの迫力に、君彦と響子は思わず息を飲んで黙りこくつてしまつた。すると猫又はあるで我に返つたようにハツとすると、バツの悪そつな顔になり ぶつ毛りまつに謝つた。

『わらい、今オレ ちつと機嫌良くなえから・・・もつかい散歩して来るわ。君彦 オレの帰りが遅くても心配する必要ねえからな・・・』

君彦達に背中を向けて歩いて行く猫又の姿が、ビートなく孤独を感じさせたので君彦は余計に心配になつた。

「あいつが 、あんな風に怒つたの・・・そういうえば初めてだな」

猫又が何で機嫌が悪いのかわからない、そして先程の台詞

猫又の主人について何も知らない君彦はなぜか無性に胸騒ぎがして仕方がなかつた。

その夜、君彦が帰宅したのを他人の屋根の上から確認すると猫又は再び巡回を始めた、昨日は謎の退治屋が現れなかつたといつともありもつ一度3丁目を回つてみることにする。

夜の10時、猫目石の女主人である猫娘の涼子は4丁目の猫集会に参加していた。とこりより殆ど野良猫や浮幽靈達の溜まり場と化している空き地でいつもならお酒を飲んだり踊つたりの宴会騒ぎをするだけの集まりであるが、今回に限つては謎の退治屋の件で町に住む物の怪や幽靈達が脅えているのでその情報交換や注意を促す為に緊急で集まつていた。

涼子は力の弱い物の怪達に身の守り方を教えてやる、といつてもせいぜい身を隠すか退治屋に逆らわないようにアドバイスをするというだけであったが……。

『とにかく猫又さんがこの退治屋を何とかするまでの間だけでいいから、みんな自重してくれないかしら。不満もあるでしょうけど命を狙われるよりはマシでしそう、とにかくこの退治屋が何を探して回っているのかわからぬけど抵抗だけはしないようにね！？』

涼子の言葉にみんなが互いに視線を送り合いながらざわめく、猫又がこの町を仕切つてからというもの平和が保たれていたせいで危機感を感じていないので、それとも必要以上に怯えているせいか・・・じりじりじりしきりみんなの反応はまちまちだった。

『でも涼子さん、退治屋つて物の怪を退治するのが仕事なんでしょう？ 抵抗しないから助かるってのもおかしい話じゃないかい？』

『 そうだよ、普通は抵抗しなかつたらそのまま浄化や成仏させられ
ちやうじゃん』

『 大体探し物つてのが何なのかわからんじや、それが見つかる
までそいつがずっとこの町をうろつくことになるんじやないの？
いくら猫又さんでも物の怪の天敵である退治屋相手じや、さすがに
ヤバイと思うけど・・・』

『 はあ～あ、こんな時・・・征四郎さんせいしろうがいてくれたらにゃあ・・・』

『

一匹の猫が溜め息を漏らしながら口にする、するとその場にいた野良猫や物の怪、幽靈達がこぞって注目した。突然周囲から視線が集まつたことに気付いた猫は瞳を大きく見開いて失言だつたことを謝罪する。眉根を寄せて悩ましげな顔になりながら涼子が頭を押されていた。

『 全く・・・この場に猫又さんがいなかつたからいいものの、一度とその人の名を口にするんじゃないよ！？』

『 はい、じめんなさい・・・つい』

そんな時、話が見えない別の猫が隣に居た物の怪に小声で話しかける。

『 ねえ、今の人ってだあれ？ 猫又さんとビリビリの関係なの？』

すると老人の姿をした物の怪が周囲に視線を走らせながら小さく答えた。

『いいか、ワシから聞いたことは誰にも言つなよ？ 征四郎さんといふのは、まあ一言でいえば猫又の好敵手^{ライバル}じゃな。人の身でありながら妖怪の中でもトップクラスの実力を持つ猫又と幾度となく戦い続けて来た仲でのう、征四郎さんはとある凶悪な妖怪との戦いで命を落としてしまったんじや。それ以来猫又は征四郎さんの遺志を継いでこの町を守護する役目を一手に引き受けたんじや』

『ふーーん、人間の中にも凄いのつているんだねえ』

猫集会を始めておよそ30分、なかなか收拾^{ツカツカ}がつかずに涼子が困り果てていると突然カナが蒼白な顔を更に青くさせて涼子に寄り添つて來た。

『・・・どうしたの、カナちゃん？』

『涼子さん、怖いよ！ 強い氣が近付いて来る！』

カナの言葉を聞いた涼子が顔色を変えて立ち上がり、空き地一帯に注意を払つた。すると突然近くから悲鳴が上がつた！

『ぎこちああああああ～～～！ た、助けて～～～！』

見るとそこには一人の若い男が立つており、三毛猫の首根っこを掴んだままこちらを見据えていた。全員がその男の殺気に当てられて一団散に逃げ出した。まるで蜘蛛の子を散らすように一瞬にして殆どの妖怪や野良猫達が逃げ惑つ中、涼子はカナを背に男を睨みつける。

『あんた一体何者なんだい！？ その子を離しておやり、可哀想だ

ひつー。』

すると男はあっさりと掴んでいた猫を解放すると、同じように鋭い眼光で涼子に狙いを絞っていた。男の異常なまでの威圧感に涼子は足が震えて今にも腰を抜かしそうだが、同じように腰を抜かして逃げることが出来ない物の怪や野良猫達を見捨てるわけにはいかず、何とか気丈に振る舞つていた。すると男は低い声で涼子に話しかけてくる。

「お前、猫娘という妖怪だな。どう見ても『娘』には見えないが、まあどうでもいいか。そんなことより聞きたいことがある」

静かな口調で訊ねて来る男に、涼子は噂通りだと思つた。猫又の話では退治屋は探し物の在りかを聞いて回つてゐるそうで、いきなり攻撃を仕掛けて来るわけではなくまずはその探し物に関して尋ねて来るそんなど、そして今までに男は涼子に訊ねて來ている。しかしこれにうまく対応しなければ、怪我人が出てしまつことに間違ひなかつた。

(あの格好、君彦さんと同じ制服ね。ということは少なくとも君彦さんとさほど年齢が変わらない、しかも同じ学校に通う生徒ということになるわ。どうしてそんな奴がいきなりこの町の物の怪達を襲うよつた真似を?)

「質問は単純明快だ、
誰だ」

『つー！ー。』

涼子は思わず動搖してしまつた、強い衝撃を受けたよつた心臓が

跳ね上がる。しかし周囲に居る物の怪達を見て、何とか必死に恐怖心を取り払おうと努めた。

『はつ、そんな奴知らないよ。あたし達はちゃんとルールを守つて静かに暮らしているだけさ。町を仕切るだの何だと、随分物騒な話じゃないの。そんな大層な奴、この町にいないわね！』

そう勇んだ瞬間、目の前に居る男以上の恐怖が涼子達を襲つた。暗闇の中に何かがいる。野獸か何かの唸り声のようなものが聞こえて来て、男の背後に居る何かに目を凝らす。するとそこから現れたのはとても大きな犬　　、ライオン程の大きさはありそくな巨大な柴犬が牙をむき出しにして涼子達を威嚇していたのだ。それを見て腰を抜かしていた物の怪の老人が震えた声で叫んだ。

『そいつは　　まさか、犬神かつ！？　お前・・・犬神使い
だつたのか！？』

『犬神使い？』

涼子が繰り返す、すると物の怪の老人は腰を抜かしたまま後ずさるように答える。

『数多の物の怪、妖怪、魑魅魍魎ちみもうりょうをその鋭い牙で葬つて来た上位妖怪だ、そんじょそこらの妖怪じや歯が立たん！』

すると犬神使いの男が一步、涼子達の方へと距離を縮めて来た、それに合わせるように涼子達も無意識に一步ずつ下がる。男の殺気だけでも相当な威圧感があつたと言うのに、その後方に犬神が控えていたことで更に圧倒的な力の差を見せつけられて成す術もなかつた。

(た
、助けて・・・猫又さんっ！)

犬神使いの男がすぐ近くで震えている猫に向かって睨みを利かせた、するとそれに応えるように後方に控えていた犬神が唸り声を上げながら3匹で固まつて震えている猫に先程の質問を浴びせた。

『ひいいつ！ 命だけはお助けをつ！』

ブチ猫が震えながら叫んだ。

『なら言え、この町をおさえてる妖怪は何者で今どこにいるー？』

犬神が叫ぶと涼子はその場に動けなかつたが、何とか目線で野良猫達に訴えかけた。

(あんた達、絶対猫又さんについて何も口にするんじゃないよ！？ 猫又さんのことを話したら猫又さんだけじゃない、一緒に住んでいる君彦さんにまで危害が及んでしまうんだから！ それだけは絶対にさせちゃダメなんだからねっー？)

『この町を仕切つてるのは猫又つていうアメリカンショートヘア的な毛並みをした妖怪ですうつ！』

『猫又さんは4丁目のボロアパートで猫又君彦つていう人間と一緒に住んでますうつ！』

(バカ
つつつー！)

あつさつと白状してしまつた野良猫達に心中でツツコむ涼子、

今すぐにでも3バカ野良猫達を締め上げたい所だつたがすでにそんなことをしても意味がないことはよくわかつていた。見ると男は無愛想な顔のまま、探している者を突き止めたのか・・・空き地に居る物の怪達に興味を無くして、犬神と共に涼子達に背を向けて去つて行つた。

へなへなと地面に腰を抜かして倒れ込んだ涼子は、その男の背中を見送り・・・それから全身の力が抜けてしまう。

『あいつの狙いが猫又さんだなんて・・・つー今すぐ逃げてちょうどいい猫又さん、さすがの猫又さんでもあの犬神使いには勝てつこないわ。怪我だけじゃ済まない』

住宅街を歩きながら犬神使いの男は鋭い三白眼の瞳で夜空を見上げた、それから自分が探し求めていたものに關して小さく呟く。

「猫又・・・、そいつがこの町を仕切つているのか。それにその妖怪に取り憑かれているであろう男、猫又君彦。・・・奇縁だな」

『どうした慶尚?』

犬神使いの男、慶尚という名の男に向かつて犬神が声をかける。すると慶尚は無愛想な顔に少しだけ笑みを作り、鼻で笑つた。

朝、響子はいつものように学校へ登校していた。以前なら出来るだけダサく見えるように腰まで伸びた長い髪を三つ編みにしていたのだが、どんなに外見をダサくしても色情靈のせいであく効果がないことがわかつて以来ずっとウエーブがかかった髪をそのままにして学校に通っている。

色情靈の力が絶好調に發揮されていた頃、登校時間も他の生徒より早めにマンションを出していた。なぜなら登校途中で色々な男達に言い寄られたり痴漢まがいなことをされたりで、それらを振り払っていると完璧遅刻してしまうからだ。しかし君彦と猫又に出会つてからは気のせいいか今までの周囲の男達の発狂ぶりが少し鎮静化されているので、普通に登校しても間に合ひようになつていてる。

学校近辺に近付くにつれて響子に興奮し後を付けて来る男達が一人、また一人と増えながら響子は徒歩で登校していたのがいつの間にかダッシュになつている。いくら鎮静化されているとはいっても、やはり完全に目立たないようにするには無理があった。

響子は鬱陶しそうに全速力で駆け抜けて行き角を曲がった瞬間、安全確認をせずほぼ直角に方向転換したせいでゆっくり歩いて通学していた男子生徒にぶつかってしまう。かなりの勢いで走っていたがその男子生徒は190近い長身で体型も結構がつりとしていたこともあって、響子にぶつかっても体勢を崩して倒れることもなく逆に響子の方がぶつかった衝撃で跳ね返り尻もちをついた。

「いつたあ～～っ！」

男子生徒の背中に顔面をぶつけた響子が顔をさすつていると、反

応が鈍いのか・・・ぶつかつた男子生徒がワンテンポ遅れてから振り返り、響子に向かつて手を差し伸べて来た。

「 大丈夫か?」

年齢の割に低く渋い声で言葉をかけて来る男を見上げる響子、黒髪の短髪に少し日に焼けた肌、目つきが非常に悪い三白眼で表情は全く変わることのない無愛想であつた。ぶつかつて来たのは響子なのだが長身の無愛想男が手を差し伸べている姿に、あからさまに拒絶的な眼差しで無視する響子。

自分で立ち上がりセーラー服のスカートに付いた砂を払い、そのまま声をかけることもなく通り過ぎようとした。そうこうしている内に後方から響子を追いかけていた男共が追いついて來たので、響子は舌打ちしながら再び走ろうとした

その時だ。

「 おい、ちょっと待て」

一本調子な低い声で響子に話しかける、当然男性不信の響子がその無愛想男の相手をするはずもなく無視して逃走の続きをしようとした時

、突然男が響子の肩を掴み背中を軽い力で叩いた。

男に触れられたことで頭に血が上った響子が理性を失つたように振り返つて、自分に触れた男を殴り飛ばそうとしたが

なぜかそんな気が一瞬にして吹き飛んでしまっている。

(え?
これってどういふことー?)

まるでずっと重くのしかかつていたものが取れたような感覚になつて、男の方を振り返つたまま呆けていた。わけのわからない展開に響子が言葉を失つていると、後方から追いついて來た男に気付い

て再び逃げようとしたら無愛想男に再び声をかけられる。

「色情靈なら祓つたから大丈夫だ」

「え！？」

信じられない言葉を聞いた気がした、目を丸くして固まっていると自分めがけて追いかけていたはずの男達が普通に歩き出し・・・。自然なテンションで響子の前を通り過ぎて行く。展開に全くついて行けない響子が自分を通り過ぎて行つた男達と、自分の背中を軽く叩いた無愛想男とを交互に見つめて絶句している。

すると無愛想男は響子に一言だけ声をかけた、変わらずの一本調子な低い声で。

「完全に祓つたわけじゃないから時間が経てばまた元に戻る、だが今日一日位は色情靈に付きまとわれることはないはずだ。

じやあな」

それだけ言うと無愛想男は響子に名乗ることもなく、そのまま歩いて行つてしまつた。響子が走つて追いかければもつと色々聞くことが出来たはずだが、それが出来ない。彼が何者なんか全くわからないし、学ランを見れば同じ風詠高校の生徒であることはわかるが自分に全く興味を示すことなく、しかも色情靈の取り憑かれていることを見抜き、なおかつその厄介な色情靈をあつさり祓つたと言うその男の突然な登場に、響子は思考能力が完全に停止してしまつて行動に移すことが出来なかつたのだ。

「あいつ、一体何者なの！？」

何事もなかつたかのように学校に向かつて歩いて行く男の後ろ姿

を目で追いながら、響子は一瞬幻か幻覚でも見たかのような錯覚に陥った。そして目をこすつて何度も確認する。

その男の側に寄り添つて歩くようになり、とても大きな犬

が男と一緒に歩いている姿が見えたような気がした。

響子と無愛想男（後書き）

今回ちょっと文章的にわかりにくいかもしません、調子が悪かつたつてのもあるかもしれません・・・唐突な展開ですが、うまく伝わってくれたらいいのですが。

無愛想な転校生

「君彦くん、おはよー。」

「おはよー、黒依ちゃん！」

教室で君彦と黒依が挨拶を交わす、どうやら昨日は家出をしていた猫又が無事だったことに安心したからなのか、君彦にいつも明るさと笑顔が戻っていたので黒依は内心ほっとしていた。いつものように他愛のない会話をして笑つているとすぐに始業ベルが鳴つて全員が席に着く。そんな時、周囲の生徒達からある噂が持ち上がりついて、君彦もその噂について席が近い黒依と小声で喋る。

「そういうえばみんな噂してるね、この中途半端な時期に転校生が来てるって。しかもうちのクラスらしいし」

「どんな人なのかなあ、楽しみだね！」

黒依の微笑みに君彦が『テレテレ』になつてているといつもなら担任が教室のドアを開けて入つて来るのだが、ドアの前で何やら話声が聞こえて来てなかなか入つて来ないから全員が訝しげに外の様子を気にしていた。すると担任がどうやら怒声を上げて怒つている様子だつた、最初は教室内がざわざわとしていたが担任が誰に対しても何を怒つているのか気になつた生徒の殆どが耳をダンボにして盗み聞きをし始める。

「全く君と言つ奴は！ 本当なら今週の月曜から学校に来るはずだつたらうー。転校初日から何堂々と無断欠席してるのはねー？」

しばしの沈黙、その微妙な間から察するに相手は明らかに言い訳を探している様子である。そして彼が導き出した答えがこれだつた。

「いや、新調した学ランが小さくなつたのでサイズを合わせました」

「どんな成長期つ！？ 転校決まってから一週間経つてないよね？ 元々成長期だから制服作る時点で割と大きめに作るはずだよね！？ つくならもう少しマシな嘘つこう？」この際法事でも仮病でも何でもいいから正当そうな理由考えて？ いちいちツツツむの先生しんどいからひあ！」

担任が怒鳴つている相手はどうやら噂の転校生らしく、すりガラス越しから見えるシルエットから察するに190近くはありそうな長身で細長い『何か』を持つている。声は高校生にしては渋い感じの低さで何となく肝の据わつたような口調だった。

担任の先生相手に全く怯むことなく、どことなく一本調子に聞こえる台詞から怖いもの知らずというイメージをクラス全員が抱いてしまつている。それからやっと話がまとまつたのか担任が教室のドアを開けて入つて来た。しかし顔は完全に不機嫌になつており、ひくひくと顔面が怒りから痙攣していた。そのすぐ後に転校生が入つて来る。彼が入つて来た途端 教室内が一瞬にして静まり返つた。

転校生を見た瞬間、クラス全員が一致団結したかのように同じ反応を示している・・・それは。

怖つ！

高校生にしては身長が高く体も結構がつしりしていて見た目には

スポーツマンに見える、日に焼けた浅黒い肌に後頭部は少し刈り上げられている黒髪で基本的に短い髪型、目つきの悪い三白眼で本人は普通にしてるかもしれないが、目が合った相手を睨み殺すかのような鋭い眼光である。口は無愛想を表現したかのようにきゅっとつぶんだままの状態だつた。

片手に持つてるのは一メートル半はありそうな真っ直ぐとした物を白い布で覆つてある。布の包み方から見ても剣道部がよく手にしている物と似ていたので、それが竹刀か木刀だと察することが出来た。

クラスの誰もが転校生が入つて来た途端に、特に男子は視線を落とした。目が合つたらいやもんをつけられるかもしだいと思つたせ이다。逆に女子に関しては彼の硬派で強そうなイメージから、急にそわそわと騒ぎ出している。

クラスの殆どの女子が同じような態度をしていたので君彦は急に心配になつて來た、自分の前の席に座つている黒依もあの転校生のことがカッコイイなどと思つていなか・・・それだけが気がかりであった。すると黒依は椅子を後ろの方にずらして君彦に小声で話しかけて来る。

「君彦クン、あの人つて何だかちょっと怖そうな人だよね」

黒依の反応はクラスの女子とは真逆のものだったので安堵の息を漏らす、そして君彦は嬉しさを隠せない表情で返事をした。

「そうだね、でもきっと大丈夫だよ！ オレ達はクラスであまり目立たないタイプだから、こっちから話しかけて来ない限り関わり合いになる要素が見当たらないからね」

もはや君彦の思考回路から転校生の存在が消失してしまつたよう

で、黒依が再び元の位置に戻つてもにこにこと満面の笑みを浮かべたまま上機嫌な様子である。そんな君彦のことを転校生はじっと鋭い眼差しで見つめ続けていた。

(あれが、猫又君彦か・・・)

そう心中で呟きながら、転校生は白い布でくるまれた竹刀か木刀を握る手に力を込めた。

無愛想な転校生（後書き）

はい、黄金パターンとか王道とか好きなんです。

Wikipediaで「転校生」と調べてもやはりこのパターンはよくある
ネタのようで（笑）

一応連載当初からメインキャラとして出す予定をしていました人物で
す、彼がどのように君彦や猫又と関わって行くのか楽しみにしていてください。

彼の登場は君彦達にとってとても大きなものとなります、キャラ
的にも気に入つていただけると嬉しいのですが・・・（＾＾）

問題児、1・2・3！

「犬塚慶尚です、よろしくお願ひします」

君彦のクラスに転校してきた無愛想男が自己紹介をした、名乗つた後には大体自分の趣味とか得意なこととかを話すものだが、犬塚は名前を名乗つただけでそれ以上何かを話す素振りを見せない。いきなり沈黙に包まれてしまったので担任がそれとなく言葉を付け足した。

「あ～～、犬塚君？　何か趣味とか・・・得意なこととかないのかね？」

そう聞かれた犬塚は視線を斜め上にしながら考え込む、10秒程考えた後に何かを思いついたのか犬塚は担任に向かって答えた。

「特にないです」

「ないんかいっ！　ないなら何でそんなに考え込むの！？　本当はあるのに言わなかつただけじゃないのか！？　面倒臭いからはしおつただけとか、そういうのじゃないのかね！？」

「じゃあネットサーフィン」

「じゃあって何だよ、じゃあって！　何でそんないい加減？　どうして何気に不快そうな顔になつてんの、先生が悪いのか！？」

「せんせーー、話が前に進まないので早くしてくださーーい！」

単調な犬塚の受け答えに対し担任一人が派手にツツコミを空振りしまくるので、一人の生徒が業を煮やして文句を言った。そんな様子を見ている君彦も犬塚のキャラクターが掴めず、呆気に取られている。

担任は犬塚の態度に腹を立てながら空いてる席に座るよう促す、その時何となく犬塚の手に持っていた物が目に入ったので試しに訊ねてみた。

「犬塚君、手に持つてると犬塚は手に持つている物に視線を落とし、もしかして君、剣道部に入るつもりかね？」

担任にそう尋ねられると犬塚は手に持つている物に視線を落としそれから相変わらずの一本調子な口調で答える。

「いえ、剣道部に入るつもりはありません。てゆうかオレ、こう見えてインドア派なんで・・・」

「インドア つ！？ そんな体格にちよつと筋肉質な体型でインドアって、そりやないだろう！？ どう見ても屋内より屋外の方が大好きな外見でしようよ！？」

「それにコレ、竹刀とかじやなくて『真剣』です」

「ちよつと何、思い切りインドアのくだけはスルーするのか！？ もう興味ゼロなのか！？ 面倒臭くなつたのか！？」

「せんせーー、そこはいいから真剣の所をもつとツツコんだ方がい

いかと思いまーす！」

再び痺れを切らした生徒の一人が担任を注意する、殆ど肩で息をする位に血圧の上がっている担任をよそに犬塚は全く素知らぬ顔で指定された席に向かおうとしていた。そしてそれを当然止めて、担任が真剣に閑して鋭く追及する。

「犬塚君、剣道部に入らないならそもそも学校に竹刀とか木刀とかを持つてきたりダメになつてるんだよ、それが校則つてもんなんだよ
わかるかね？ それから竹刀とか以前に『真剣』は日本人としてもつとNGなのわかつてるかね？ ナイフでも包丁でも普通に持ち歩いたらダメなの、それが日本の法律つてやつなの。
君、ちゃんと歴史の勉強してる？ 廃刀令つて知つてるかね？」

「せんせーー、そこまで遡らなくとも銃刀法違反でいいと思いまーす！」

そんなやり取りが繰り広げられて、クラス中がいい加減馬鹿らしく感じて来た様子だ。それまで犬塚の外見だけでものすごく怖い印象を持つていたが、口を開けばものすごくいい加減な言動や態度が目立つたということもあり
もしかしたら外見とは裏腹に案外面白い男なのかもしれないと殆どの生徒はそう感じ取った様子だった。しかし担任に至つてはそう思つていない。

(このクソガキ・・・つーこいつは要注意人物と認定したぞ、どうして私の受け持つクラスには問題児ばかりが揃つてゐるんだ！)

そう心の中で叫びながら君彦と黒依の方を睨みつける。

(クラスの問題児その1、猫又君彦！ 授業中だらうがいかなる時でも突然奇声を発してわけのわからないことを口走る！ 見た目は全く持つて目立たない普通の生徒かと思ひきや、一番の曲者だ！)

それから次に君彦の前の席に座っている黒依の方を睨みつけた。

(クラスの問題児その2、狐崎黒依！ 四六時中微笑みつ放しだが歯に衣着せぬ言動で最もドス黒い要注意人物！ サリ気なく自分に被害がこうむらないようにする立ち回りと腹黒さから、猫又君彦以上に質が悪い！)

自分が受け持つたクラスの生徒に難癖を付けながら、担任は犬塚を席に追いやつて ようやく授業に入ることが出来ると安心した矢先のことだった。犬塚は指定された席の方とは全く逆の方へ歩いて行き、なぜか君彦の前までやつて来たのだ。自分の目の前に立ち塞がる犬塚に君彦は目が点になる。

「お前に話がある、ここじや何だから昼休みに体育館裏で待つてから必ず来い、いいな」

明らかに宣戦布告だった、犬塚の異様な雰囲気にクラス全体が沈黙に包まれる。そして今の一言でつい先程まで好印象を与えたばかりだったのに、あつという間に最悪な印象が植え付けられてしまつた。犬塚は見た目通りの怖い人物、そう決めつけられ・・・更にそのターゲットに選ばれた君彦のことを助けようとする人物は誰もない。黒依がほんの少しだけ不安そうな表情を浮かべながら担任の方を振り向くと、担任は黒板の方に向いて何も見ていないフリをしていた。明らかに見えない、聞こえないを貫いている。担任が当にならないとすかさず察した黒依は次に君彦の盾となれる人物

春山竜次の方へと視線を走らせる。

しかし春山自身もよっぽど犬塚が怖かつたのか、担任と全く同じように教科書を立てて視界を遮っていた。

「ちょっと、春山クン！　君彦クンのピンチなんだから今こそ春山クンの出番でしちう！？」

黒依に名指しで注意されるが、それでも春山は涙を大量に流しながら逆に助けを求めていた。春山も当てにならないと踏んだ黒依はもう一度君彦と犬塚の方へと向き直り　　一人の様子を窺つた。犬塚は喧嘩をふっかけているようにしか見えない堂々とした態度で、両手をズボンのポケットに突っ込んだまま・・・真剣だと言っていた布にくるまれた物は細長い紐が付いているので、それを肩に掛けながら君彦を見据えている。

両者の間で火花が散っているかと思いきや、君彦は自分の身に何が起きているのか理解していないのか　　ぽかんとした表情で犬塚を見上げているだけであった。

犬塚の話（前書き）

今回は久々に長いです、そして珍しくシリアルスマートモードに突入いたします。

どうか応援してあげてください。

犬塚の話

休憩時間　　、犬塚の回りには黄色い声を上げながら色々と質問攻めしている女子の集団。そしてそれを妬ましそうな眼差しで見つめ続ける男子生徒達。まだ犬塚のことによく知らない君彦達であったが、屈強そうな外見から勝手に不良のイメージを抱いてしまっている黒依は君彦に向かつて心配そうに声をかける。

「ねえ君彦くん、やっぱり昼休みは行かない方がいいと思うんだけど

昼休みに体育館裏へ来るようすに直接言われた君彦は特に気に留めていないのか、そんなことよりもむしろ黒依が他の女子と同じように犬塚の方へ行かずに自分の側についてくれているという事実に有頂天になっていた。

「もしかしたら何か大事な話があるのかもしれないし、無視するわけにはいかないと思うんだ。だから一応行つてみるよ」

「でも・・・もしいきなり暴力振るつて来たりしたらどうするの？」「犬塚クンって何だかすごく怖そudduうだし・・・」

困った表情を作りながら黒依が少し離れた場所の席に座っている犬塚の方に視線を送りながら、人差し指で口元を押さえる仕草をした。仕切りに自分の心配をして来る黒依に対して君彦は嬉しくて仕方のない様子だ。

（黒依ちゃんがオレの心配を・・・！　本当に何て優しい娘なんだ・・・まさに地上に舞い降りた女神のようだつ！）

結局黒依が何を言つても君彦は樂觀的な態度で深く勘ぐつたりしよつとはしなかつた、そんな君彦の性格を少なからず把握している黒依はちらりと春山竜次の方へと視線を移す。彼は最初に訪れた君彦のピンチの時に全く役に立たなかつたのでかなり落ち込んでいる様子だつたので、彼にボディーガードを頼むのは速攻で諦めた。

（仕方ないわね・・・不本意だけど君彦クンに何かあつたらあたしが困るし・・・。ここはケンカに強いって噂の志岐城さんを使うしかなさそうだわ）

一方的にそう決めた黒依は昼休みに弁当と一緒に食べるフリをして響子に君彦のボディーガードをさせようと田論んだ、勿論黒依がそんな計画をしていることなど全く知らない能天氣な君彦は鼻歌を歌いながら、今夜の夕食に何を作らうか献立を考えていた。

昼休み、終業ベルがなつた途端に犬塚は君彦の方へ目線で合図を送る。当然君彦だけではなくクラス全員が二人の様子を窺いながら息を飲んでいた。そして黙つたまま一人一緒に教室を出て行く、最初は黒依も一緒について行こうとしたが犬塚に制止されてしまった。君彦と二人だけで話があると、
鋭い眼光で睨まれてしまい黒依はそれ以上文句を言つことが出来なかつたのだ。

君彦と犬塚が廊下を歩いて進んで行ったのを見送ると、黒依は大急ぎで隣のクラスにいる響子の元へと走つて行く。ガラリと勢いよくドアを開け、すぐさま響子と田が合つた。

突然の来訪者に響子は田を丸くしながら驚いている様子だ。黒依は他の生徒が変な目で見ていよつと気のことなく、いつもとは全く違つたスピードで響子の元へ歩いて行つて声をかける。

「志岐城さん、ちょっと頼みたいことがあるから一緒に来てちょうだい！ お願いつ！」

「はあ！？ ちょっと・・・一体何だつて言つのよ」

いつもなら黒依の側には君彦がいるはずなのに彼の姿がないことに違和感を感じる、響子は黒依に何となく嫌われているように感じていたので黒依自身が響子にお願い事をしに来るとは思つていなかつたせいもあつた。黒依と知り合つてほんの数日しか経つていなが、それでもある程度彼女の特徴を把握しているつもりである。

黒依は実に回りの空気を読まない位のマイペースさで、余程のことがない限り慌てたり取り乱したりしないような・・・そんな女子だと思つていた。

しかし今響子の目の前に居る黒依は何か焦つてているような、ひどく取り乱している様子だったので響子は不審に思つ。

「一体何があつたの、ちゃんと説明してくれない？」

響子のその言葉に黒依はようやく落ち着きを取り戻した様子だつた、黒依自身も響子に對して良い印象を与えているとは思つていなが、響子の方から自分に向かつてこんな言葉をかけて来るとは思つていなかつたようである。呼吸を整え、強く訴えかける眼差しで黒依は犬塚について話出した。

一方、君彦と犬塚は校舎の屋上に来ていた。君彦は眉根を寄せながら犬塚に訊ねる。

「えと・・・体育館裏じゃ、なかつたつけ？」

君彦の問いに犬塚が丁寧に答える、見た目はかなりいかついが聞かれたことに対しては面倒臭くない程度にきちんと返事をするようなので、外見とは裏腹に意外と律儀な人間かもしれないと君彦は思つた。

「他の奴等に邪魔されたくなかったからな、みんなの前でああ言つとけば野次馬なり仲裁なり

全員体育館裏の方へ行く

だろ？」

そうまでして邪魔されたくない話というのは一体何なんだううど、君彦は余計にわけがわからなくなつた。とりあえずこちらから敵意を見せないようにして

極力無抵抗の意を見せる為に

平然を装つてみる。黒依に向かつて仕切りに「大丈夫だ」と言つていたが、いくら楽観的な君彦でも全く不安がなかつたわけではない。内心では何を言われるのか、突然暴力を振るわれたらどうしよう

など、色々と試行錯誤していたのだ。そして遂に犬塚の方から話を切り出してきた、しかしその話の内容は君彦が想像していたこととは全く異なるものである。

「单刀直入に聞く
取り憑かれているだろ？？」

「え！？」

時が止まつたように感じられた、犬塚の言葉に即座に反応して心臓が一瞬跳ね上がる。次第に鼓動が速くなつて頭の芯が熱くなつてくる、明らかに君彦は動搖していた。

（な
　　なんでこいつ、猫又のことを！？　てゆうかそれ

以前にこいつ・・・猫又とか幽霊とか、そういう物の怪の存在を信じてる人間なのか！？）

君彦の顔色が変わり明らかに動搖している様子を見て確信をついた犬塚は、君彦の返答を待つこともせず話を続ける。口調は至つて淡々としており、挑発するわけでも諭そうとしているわけでもない。ただありのままを話し始めた。

「オレはお前と同じように靈を見ることが出来る、そして淨靈する能力も持つてこる。この町にはびこっている物の怪はある程度退治してたら、あることに気付いた。この町の物の怪達は他の町の奴等とは明らかに違う所があつたんだ。まるで大きな一つの勢力にまとめて上げられているかのように、定められたルールに従いそれぞれが人間との共存を図ろうとしている。それはオレの知る所じゃない。そんなことが出来る奴が一体何者なのか知りたくて、オレはこの町までやって来たんだ。そしてようやくその親玉を見つけた」

そこまで話して一旦言葉を切る、まるで君彦に理解させるようわざと言葉を切ったようにも取れた。犬塚の言葉のひとつひとつを聞いて、君彦はゆっくりと理解していく。パズルのピースをゆっくりとはめこんでいくように。そして最後のピースがはまつた時、君彦は息を飲んだ。それを介した犬塚は再び話を続ける。

「 そう、それがお前の知っている猫又のことなんだよ

「そ・・・っ、それが一体どうしたって言うんだ！？　まさか・・・猫又が何か悪さをしたとか・・・そんなこと言つてんじゃないだろ？　な！？」

君彦は途端に怖くなつた、彼の言葉・・・靈を見ることが出来て

なおかつ淨靈することが出来る人間。つまり猫又を退治する力を持つてゐるということになる、なぜ彼がここまで来て君彦に対してこんな話をするのか・・・君彦の脳裏に最悪なイメージが浮かんでは来る。

(もしかして
つは!?)

そう思つた瞬間君彦は犬塚に対して身構えた、喧嘩が強いわけでもない君彦はなぜか犬塚に対して抵抗の意を示していたのだ。彼が何を企んでいたとしても、彼の思い通りにさせるわけにはいかない!

「いや、オレは別に物の怪を退治するのが仕事つてわけじゃない、ここへ来る途中に退治して来た奴等もちょっとばかり悪さが過ぎた妖怪だつたから、念のために退治しただけなんだな。お前の知つている猫又つて奴が無害ならば別に無理矢理退治してやろうなんてしないから安心しろ」

「え! ? そうなのか! ?」

君彦はますますわけがわからなくなってきた、ようするに犬塚が一体何を言いたいのか その意図が全く掴めないので。とりあえず猫又を退治するわけじゃないといつ言葉を聞いて安堵する。あの猫又が人間に危害を加えるような邪悪な化け猫だとは思えない、君彦は心中で強くそう思つた。

ワガママで口が悪くて食べ物の好き嫌いが激しくて、猫のクセに寝言を言つたりいびきをかいたりするし、尻尾が2本あつて人間の言葉を話せるということ以外、本当にそれほどの猫と何も変わらない猫又。

そんな奴が邪悪であるはずがない、君彦は中学生の時から猫又のことを知っている。それからずつと一緒に暮らしている。猫又に関しては犬塚なんかよりも自分の方がもつとずっと、何でも知っているのだから！

君彦には自信があった、犬塚が何の目的でこうして君彦に確認を取っているのか知らないが・・・彼の思い通りになることは有り得ない。そう思つて君彦の顔に平常心が戻つた時、犬塚もまた再び口を開いた。

「お前、猫又という化け猫がどうやって物の怪になるか知つてるか？」

またしても唐突な言葉だった、先程から犬塚の切り出してくる言葉はどれも予測不可能なものばかりで君彦はその度に呆気に取られてしまう。本当の所　　彼が一体何を言いたいのかわからぬままだが、とりあえず犬塚の気が済むように君彦はそのまま素直に答えていった。

「いや、別にオレは幽霊とかが見えるだけでそういう知識とかは殆どないから・・・。それに考えたこともなかつたし・・・」

君彦の言葉に少しだけ間を置く犬塚、彼の無表情な顔から何を考えているのか読み取るのは非常に困難であったが・・・どこか君彦に対して真実を述べることを躊躇つていてるような

そんな感情を抱いているようにも見える。それから犬塚は考え込んだ仕草の後に、顔を上げて君彦を真っ直ぐ見据えると少し声色を抑えたような口調で話した。

「猫又という妖怪はな・・・、自分の飼い主を噛み殺すことによつて妖力を得て

化け猫へと転生する

「

「つづーー！」

再び君彦の心臓に痛みが走る、瞳を大きく見開いて荒らげそうになつた言葉を飲み込んだ。

「つまり、だ。お前が今一緒に住んでいりという猫又つて妖怪は自分を飼つていた飼い主を噛み殺して『猫又』になつたといひことなんだよ」

「そ そんな、だつて・・・そんなことつてー・」

それ以上言葉が続かない、猫又に関しては目の前にいる犬塚よりも自分がもつとずつと理解しているはずだつた。何でも知つてゐると思つていた。 それが、今は違つ。

猫又の飼い主のことなんて、知らない。そんな話・・・猫又はただの一度だつてしたことがなかつたから。猫又がどこから来て、どうして君彦の元へ来たのか・・・聞いてもいつも言葉を濁したり、はぐらかしたりして 結局本当のことと口にしたことなんてない。

君彦は猫又のことを知つてゐるよつて、 何も知らなかつた。

君彦の自信が揺らぐ、 猫又への思いが揺れる。

そして新たな思いが生まれる、 猫又のことを信じてもいいのだろうか？

君彦の中に初めて『疑惑』という感情が生まれた。

それは君彦と猫又との間に、亀裂が生じた瞬間でもあった。

猫又の飼い主

「お前の身近に 親戚に、不審な死を遂げた人物はないか？」

校舎の屋上で言われた犬塚の言葉が忘れられなかつた、午後の授業に出席したもののは記憶を手繕らせ、何かを思い出そうとする。しかし頭の中にもやのようなものがかかるて、詳しく思い出すことが出来なかつた。

君彦の両親は君彦が3歳の時に事故で亡くなり、その後は父方の祖父母によつて育てられ・・・9歳の頃には祖母が、そして翌年には祖父まで亡くしている。親戚で不審な死を遂げた人物がいないか問われても、君彦の身近には次々と大切な家族が亡くなつてゐる。しかしどれをとっても家族の詳しい死因を思い出すことは出来なかつたのだ。

(もしかしたら、トキワ荘の大家さんなら何か知つてるかもしれない)

気になり始めるともう止められなかつた、猫又への疑いを晴らす為なのか それとも猫又に関して調べる為なのか、どちらが本当の気持かわからないまま君彦は担任に早退を申し出で、そのままアパートへと帰つて行く。

全力で走つてアパートに辿り着くといつもアパートの入り口付近を掃除している大家さんの姿が見えず、大家さんの部屋のドアをノックしても返事がなかつたので買い物に行つたのかもしれないと思つた君彦は、とりあえず自分の部屋へと戻つた。

ドアを開けて中に入ると不気味な位に中は静かで、時計の針が時を刻む音しか聞こえない。

「そういえば 、オレが学校から帰る頃にはいつも猫又が勝手にテレビを見ながら大笑いしてたっけ・・・」

『お、遅かつたじゃねえか君彦！ おかえりー！』

君彦が帰るといつも親父のように寝転びながら、猫又がこんな風に声をかけて来た。しかし今部屋の中には誰もいない。静まり返つた室内に入つて行つて、それから居間にある仏壇に手を合わせて祖父母に挨拶をした。

「・・・ただいま帰りました、征四郎おじいちゃん
ハルおばあちゃん」

それからゆづくりと顔を上げて目の前に飾つてある祖父母の遺影を見つめた、優しく微笑む祖母・・・そして優しさの奥に厳しさも兼ね備えた祖父の顔。君彦は黙つたまま二人の写真を見つめ続けて、それから何かをハツと思い出した。

焦燥の色が隠せない様子で君彦は遺影の一人に謝罪しながら仏壇の手前にある引き出しに手をかけて、中にある遺品を探り出す。そこには祖父母が大切にしていた物がしまわれており、手紙や写真、数珠と何かの札・・・それから君彦の手に当たつてチリンという音が鳴る。

「 つ！？」

君彦は鈴の音のした物を引き出しから取り出して、それをじっと見つめる。心臓の鼓動が速くなり、息を荒らげながらそれを調べた。それから祖母が大切にしていたであろう写真の方へ自然と目が行き、そこで君彦は確信した。

静かな室内にいたせいかもしれないが、突然全く別の世界に迷い込んだかのような奇妙な感覚が君彦を襲う。動搖から耳鳴りまでして来て、君彦の額から一筋の汗が流れ落ちた。

祖父母の遺品から見つけた品物、
それは

古びた猫用の首輪と、・・・祖母が女学生だった頃の写真にはアメリカンショートヘアのような毛色をした太った猫が、当時まだ17歳位の祖母と一緒に映っているモノクロ写真。

モノクロなので毛色がハッキリわかるわけではなかつたが、その猫の外見はまさに
どこからどう見ても君彦が知つて
いる猫又そのものであつたのだ。

「ハルおばあちゃんが
そんな・・・つ
、猫又の飼い主・・・！」

君彦は首輪を手に握つたまま力なく座り込み、呆然とした顔で遺影を見つめる。犬塚の言葉が頭から離れないままショックを隠しきれない君彦に、祖父母はまだ柔らかい笑みを浮かべているだけだつた。

猫又

その日の夜、猫又は犬神使いの青年に襲われた野良猫達から事情を聞き、君彦の住むアパートへと急いで帰った。しかし猫又は、自分が犬神使いの退治屋に狙われているということだけは君彦に伏せておくつもりであった。ただでさえ自分の素姓や目的などを一切君彦に告げることなく、今までのらりくらりとかわし続けてきた猫又にとって『それ』はどうでもいいことだと考えているのだ。

しかし心の奥では君彦に余計な心配をかけたくない、

それが本音であるが猫又はそんな自分の思いを鼻で笑いながら猫又専用の出入口である小窓から部屋の中へと入つて行く。

中は真っ暗で電気どころかテレビすらついていなかつた、君彦はすでに就寝しているものだと思っていた猫又は部屋の片隅に黙つて座り込んでいる君彦の存在に、不覚にも全く気付かず飛び上がる程ビックリして声を荒らげる。

『
　なつ、なんだよ君彦！　暗い顔して座り込んで…
・ほんのちょっとだけびびつちまつたじやねえかつ！』

暗闇の中でも猫又はハツキリと君彦の姿が見える、言葉使いは悪いが一応声をかけた猫又に対して君彦は焦燥しきつた顔でぴくりとも動かない。心中で猫又は『どうせ学校で黒依と何かあつたんだろう』程度に思いながら君彦がまだ寝ていないなら、テーブルの上に置いてあつたりモコンのスイッチを器用ににょきつと出した鉤^{かぎ}爪^{づめ}でテレビの電源を入れる。

それからチャンネルを変え続けて猫又が大好きなバラエティ番組に当たると、そのままテレビの前に座つて観賞し出した。暗い部屋

の中ではテレビの明かりしかついていない異様な光景に、それでも君彦は疲れ切った眼差しで猫又の背中を見つめ続けている。ちらりとすぐ横にある仏壇の方に視線だけ動かして、君彦に向かつて微笑んでいる祖母の遺影を見つめ……ようやく意を決して猫又に話しかけた。

「猫又……、話があるんだけど」

しかし猫又はテレビに夢中なのか、それとも君彦の声が小さすぎてテレビの音にかき消されたのか、猫又は返事どころか振り向きもない。君彦は何度か猫又に声をかけて学校から帰つてからずっとと思つていたことを聞こうとしていた。

『ちよつと待てよ、今イイところなんだ。後にしてくれい』

面倒臭そうに返ってきた猫又の言葉に、君彦は奥歯を噛みしめ・・・そして勢いよく立ち上がると猫又の方を睨みつけた。胸の奥に込み上げて来る怒りにも近い感情を懸命に堪えながら、君彦は全身の力を抜くように深く深呼吸をして氣を落ち着かせる。しかし君彦の顔に笑みが作られる事ではなく、今度は押し殺すような口調で

猫又の名前を呼んだ。

「お前に話があるんだよ、嘉助」

『つづ…』

君彦の声のボリュームは今までと変わらない、それどころか声を押し殺した分さつきより少し小さく声を出していた。にも関わらず猫又は小さな物音すら聞きわかるような反応で全身がぴくりとし、二又の尻尾はぴんっと真っ直ぐに立つて毛が逆立つて倍に膨れ上がり

つているように見える。

暗い室内にテレビから漏れる音しか聞こえないまま、猫又は君彦の方を振り向くことなく大きな瞳を更に大きくしながら、まるで石のように固まってしまった。猫又の反応は尻尾を見て確認できていた君彦は、眉根を寄せながら言葉を続ける。

「お祖母ちゃんの遺品から見つけたんだ、これ
お前の首輪だろ？」

「もう隠さなくていいよ、全部お祖母ちゃんの遺品で確認出来たからさ。猫用の首輪と・・・」の[写真]。どこからどう見てもこれ、お前だもんな。つまり　　お祖母ちゃんがお前の飼い主だつたってことだろ？」

「もう隠さなくていいよ、全部お祖母ちゃんの遺品で確認出来たからさ。猫用の首輪と・・・」の[写真]。どこからどう見てもこれ、お前だもんな。つまり　　お祖母ちゃんがお前の飼い主だつたってことだろ？」

猫又の口から真実が聞きたくて、君彦は言葉を途切れ途切れにしながらひとつひとつ確認していく。しかし猫又が何も言葉を発しないので本当の所はどうなのかハツキリさせることは出来ないが、沈黙が答え何だと・・・君彦は暗黙に了解した。

「今日学校に転校生が入ったんだ、そいつ・・・いきなりオレに向かって猫又　　お前に関することを聞いて来た。そいつが言うには、ただの猫がどうやって猫又っていう妖怪になるのか・・・それをオレに教えてきた」

だんだん君彦の声が震えて行く、これ以上先の言葉を続けるのが

よほび辛いのか

猫又のことを睨みつけていた君彦の眼

差しあいつの間にか泣きそうな瞳になっていた。

「お前

お祖母ちゃんを殺したのか？」

『…………』

またもや猫又の全身がぴくりと動き、後ろ姿しか確認出来ない君彦の目からは
というだけしかわからなかつた。しかし君彦はそれ以上猫又の細かい動きを観察する余裕はない、一番口にしたくなかった言葉を出したことでもはや君彦は衝動を抑えられなくなつてしまつ。まるで急き込むようにだんだんと声が大きくなつて、殆ど泣きながら訴えるように必死になつて思いの丈を黙つている猫又にぶつけて行つた。

「隠すなよ、黙るなよ！　お前はそんなことしないだろ？　だつてお前のことはオレが一番わかってるんだからさ！　転校生が言つてる言葉の方が嘘に決まつてるんだ、だつてもしお前が飼い主であるお祖母ちゃんを殺して猫又つて妖怪になつたんならさ・・・計算が全然合わないじやないか！　だつてこの写真のお前には尻尾が一本しかない、写真のお祖母ちゃんはどう見ても今のオレと同じ位だ！　もしお前が猫又になつたつてんならもつとずつと後になるだろ？　それじゃ猫の寿命から考えてもおかしいよ、オレのお祖母ちゃんが亡くなつたのはオレがまだ9歳の頃だ！　だつたらお前は一体何歳になるつて言つんだよ、な？　おかしいだろ？　どう考えてもお前が猫又になる時期が一致しないじやないか、つまり転校生の言つてることがおかしいつて

「どうだら？　何とか言えよ

「猫又つー！」

最後には殆ど怒鳴り散らす形で君彦は今までに出したことがない

位大きな声を張り上げた、肩で息を切らしながら猫又が振り向くのを待つ

猫又が「そうだ」という言葉を待つた。すると猫又の尻尾がうなだれるように下にだらんと垂れると、すっと顔だけ振り向いて君彦を見つめる。やっと猫又がこっちを見たと

そんな安堵する気持ちには到底なれなかつた、猫又のそ

の瞳はまるで獲物を狙う獣のように大きく光つてあり

暗い部屋の中で光るそのガラス玉のような瞳が逆に不気味に思えて、一瞬君彦の背筋が凍つた。今まで見たことがない位に鋭い瞳で射抜くように見つめて来る猫又に、君彦は『ぐくん』と生睡を飲み込む。

『 それがどうした?』

「・・・え! ?」

君彦は耳を疑つた、というより全く予想だにしなかつた返答に君彦は即座に反応することすら出来なかつた。猫又は今度は体ごと君彦の方に向き直ると、二又の尻尾をぱたぱたと動かしながら言葉を続ける。

『確かにオレの飼い主はハルだ、だからそれがどうした? 高齢の猫がどうやって猫又になるのか・・・それはその転校生の言う通りだぜ? 10年越えた猫には妖力が宿る、それを更に高めて高位妖怪になるには試練が与えられるんだ。つまり自分の飼い主を噛み殺してその血を我が物にすれば、猫又になれるんだよ。

オレは血を浴びて、こうして猫又になつてる。何か問題あるか?』

君彦の頭にカツと血が昇つて目の前が真っ暗になつた、怒りで我を忘れた君彦は平然と祖母を殺したこと認める猫又を非難した。

「お前、自分が何を言つてゐるのかわかつてんのか！？」

？〔冗談なら質が悪すぎるぞ、いい加減にしろよ！〕

『嘘は言つてねえ、ほら・・・』うしてオレが猫又でこることが何よりの証拠じやねえか』

「本当のことと言えよつ！ そんな言葉を聞きたいんじゃないつ、オレはそんなの聞きたくないつ！！」

何もかもが信じられなかつた、今までずっと一緒に暮らしてきた猫又自身が 猛彦の愛する祖母を殺したという事実を受け入れたくなかったのだ。猛彦は半狂乱になりながらも両手で耳を抑え、猫又の口から放たれる残酷な言葉を必死になつて拒絶する。そしてひとしきり泣き叫んだ後、両耳を抑えていた手を猛彦が放したのを確認するように猫又はタイミング良く再び話しかけてきた。

『オレからお前に言えることなんて何もない、どうせオレはお前に取り憑いてるだけのただの化け猫だからな』

「何もない？

ただ取り憑いてるだけ？

本当に オレとお前との繋がりなんて、たつたそれだけの関係でしかないのか・・・？

膝をついた猛彦は息苦しそうに呼吸しながら、ゆっくりと右手で小窓を指差した。猫又は猛彦の合図の意味がわからず指をさした小窓と猛彦とを交互に眺める。すると猛彦は必死に呼吸を整えてから、

腹の底から懸命に声を出した。力一杯、憎しみを込めて・・・。

「出て行けッ！ 一度とオレの前に現れるなッ！」

絞り出せた言葉はそれだけだった、後は何も覚えていない。ただ様々な思いが君彦を襲い、色んな感情が渦になつて君彦の頭の中をかき乱す。自分が何で泣いているのかわからない、何に泣いているのかわからない。

祖母を殺された憎しみから？ それとも猫又にずっと騙されていたこと？

あるいは

。

ずっと家族と思っていた猫又に、何ひとつ『覚える』ことが出来なかつた自分の無力さに

？

その日から、猫又が君彦の目の前に現れるることはなかった。

「おはよー、志岐城さん！」

朝、学校に登校している途中で君彦とばったり会つた響子は満面の笑顔で挨拶をして来る君彦に対して冷たい、白い目で見据えていた。何の根拠もなくにこにこと上機嫌に微笑む君彦に、どこか気持ち悪さを感じた響子は眉根を寄せながら小さく「おはよう」と返す。その間にも響子の背中にはべつたりと色情靈がまとわり憑いており、ぞろぞろと男子生徒や会社員といった男共が色情靈の色香に惑わされてついて来てたのだが、君彦と会つた途端に色情靈は拒絶反応を起こすように響子から距離を離した途端

響子の後ろをついて來てた男共は正気に戻つていた。

「猫又の妖力がまだお前に残つているのか？」

君彦と響子の後ろから低い男の声が聞こえて振り向くと、そこには布にくるまれた長い物を手に犬塚慶尚が無愛想な表情で立つていた。彼の姿を見た途端に君彦から笑顔が消え、まるで何も見ていないともいつのように歩を進める。

「え・・・、あつ
ひよ・・・つ！」

犬塚に挨拶をするでもなく君彦は足早に学校へと向かつたので、響子は右手を伸ばして声をかけるも何て言つたらいいのかわからず、後を追いかけるタイミングすら外してしまっていた。

「何だ、随分無愛想な奴だな」

「それ、アンタが言つわけ？」

睨みつけるように犬塚を見据えながら響子はじりじりと犬塚との距離を離す、それをちらりと見つめるも犬塚の方は全く気に留める様子もなく、てくてくと歩き出した。響子は口をへの字に曲げながら犬塚の隣にまで追いつくと文句を言つてやった。

「大体アンタが余計なことするからややこしくになつたんでしょうが！」

横目でちらつと響子の方を一瞥するだけで、犬塚は表情一つ変えることなく淡々と答える。

「オレが何したって？」

「とほけんな！ アンタがアイツにちょっとかい出して猫又を追い出すように仕向けたんでしょうが！ 一体どうしてくれんのよ！」

「何でお前がキレるんだ？ お前も猫又と何か関係があるのか」

ほんの少しだけ興味がわいたのが、犬塚は歩調を緩めると小走りに隣を歩いていた響子はやつと普通に歩く速度で会話することが出来た。何を言つても、何を聞いても我関せずといった態度に響子の方も若干苛立ちを感じながら、それでも限界ギリギリまで怒りを抑えながら言葉を続ける。

「アンタも知ってるでしょ！？ あたしに憑いてる色情靈のことはつ！ あたしはアイツに憑いてる猫又を利用して色情靈を追っ払つ

てたのよ、それなのにアンタが何を言ったのか知らないけど猫又が行方不明になるし、アイツはアイツで異常な位ご機嫌を装つてるしこっちはアイツのあんな無理矢理なハイテンションを見せつけられて迷惑してんだからねつ！？」

犬塚はムキになつて睨みつける響子を見据えながら何かを考え込む、そして15秒程思考した後によつやく言葉を発した。

「・・・あいつのことが心配なのか？」

「ちつちつがあ　　つわよつ！！　一体どこのをどんな風に聞いたらそんな展開になるのよ、わけわかんないつ！」

響子は顔を真つ赤にしながら犬塚から視線を逸らした、彼女のこの態度だけで今の犬塚の言葉が図星であつたことは明白である。犬塚は心の中で「心配なんだな」と呟くが、面倒臭いのを決して口には出さなかつた。

君彦のことを心配していると図星を突かれた響子は話題を逸らそうと必死になつて思考を巡らせるが、異性とこんな風に会話をするという行為 자체かなりご無沙汰だつたといつることもあって、拒絶反応と緊張で思うように考えがまとまらずにいると上空の辺りから女の子の悲鳴のようなものが聞こえて来て響子はぎょっとした。

声のする方に視線を走らせると響子は自分の目を疑う、赤いワンピースを来た黒髪の女の子が泣きながら空を飛んでいるのだ。しかしよく見るとその女の子は響子に取り憑いている色情靈と同じように少しだけ半透明に映つて見えたので、あの少女もきっと幽靈か何かなんだろうと思いつつ。

猫又に靈を見る力を与えられたと言つても響子は君彦のように全ての幽靈や物の怪をハッキリと見えるようになつたわけではなかつ

た、最初の内は鏡越し

次第にうつすらと見えるようになつたのだが明らかに「幽霊」と認識出来るものを目にしたのは色情靈以外にはあの少女の幽靈で一人目である。

泣きながら悲鳴を上げて響子たちの上空を飛んで行くと、その後ろから氣味の悪い物体が下品な笑い声を上げて追いかけているのが見えた。緑色の皮膚にカエルやトカゲのようにぬめっとした光沢を放ち、見た目には甲羅を取り上げた亀のような姿をした化け物が太くて短い手足をバタつかせながら少女を追いかけている。

吐き氣がする位に不気味な姿をした化け物を目にした響子は完全に血の気が失せて、今にも腰を抜かしそうになつていた。人型の幽靈なら色情靈でようやく慣れてきたところであつたが、思い切り化け物にしか見えない物体が自分のすぐ目の前に浮かんでいる光景を目にすると、それすら悪夢のように感じられて悲鳴すら出て来なかつた。

『助けて
んつ！』
つ、猫又ぢゃ
ん！ 君彦く

少女の靈が口にした名前を聞いて響子はすぐに我に返つた、犬塚もそれを聞き逃さなかつたようで今までやる氣のない表情だつた顔色がほんの少しだけ真面目になり、両足を肩幅にまで開いて構える。

「犬神、行けっ！」

犬塚の言葉に反応したかのよう、突然何もなかつた場所から巨犬が現れて少女を追いかけている化け物めがけてジャンプした。響子は次々と起つて展開について行けずにただ呆然と事の成り行きを見守るだけであった。

あなたのせい

犬塚の掛け声と共に現れた大きな犬が上空まで駆けて行き、助けを求めている少女の幽霊を追いかけていた緑色の化け物を前足で引き裂き、噛みつくと醜い断末魔を上げて消滅した。何が起こったのか理解出来ていない響子は隣で無表情のまま上を見上げている犬塚の方を振り向くが、彼は淡々とした態度のまま上を見守つているように見えた。そして化け物を退治した犬神はそのまま犬塚の足元まで駆け下りて、大人しくお座りをする。

化け物が消滅しても少女の幽霊はまだ恐怖が拭いされていない表情のまま、響子達の方へと下りて来た。すると少女は響子を見るなり『あつー』と声を上げて指をさしている。

『お姉ちゃん、いつも君彦お兄ちゃんと一緒にいる人だ!』

響子は眉根を寄せながら聞き返した。

「・・・？ そういえばあんた、逃げてる最中に猫又がどうとか叫んでたわね。もしかしてアイツの知り合いか何か？」

半透明の少女に話しかけている自分に多少の違和感を感じながらも、響子は話しかけられた反動で普通に返していた。すると少女は仕切りに犬塚の方を気にしながら少しだけ響子の方に寄り添う形で説明する。

『あたしは力ナ・・・、3丁目に住んでる浮幽霊なの。最近この町に悪い幽霊とか物の怪が増えてみんな困ってるから、涼子お姉ちゃんに頼まれて猫又ちゃんを探してたの。町に悪い幽霊が増えたのは猫又ちゃんがいなくなつたせいだつて、町の縄張りに関係なく飛び

回るにじが出来るのはあたしと野良猫さん達だから

それにこのままだと君彦お兄ちゃんも危ないかもしけないって『

カナの口から次々と説明されて響子は混乱している、しかし犬塚は内容を把握していのか少しだけムツとしたような表情になるとカナの方に一步近付いて詳しく聞こうとするが、犬塚に怯えているのかカナは響子の背中に隠れてしまった。

「あんたのことが怖いんだってさ」

「心外だな、こんなに善人なのに」

しかし犬塚のことを怖がっているはどうやら外見だけではないようで、カナは響子の背中に隠れたまま声を荒らげる。その声には怒りと悲しみが入り混じっていた。

『みんなあんたのせいなんだから！　あんたが猫又ちゃんと君彦お兄ちゃんを苛めたから・・・つ、だから猫又ちゃんがいなくなつたのよ！　おかげで猫又ちゃんに守られていたこの町も悪い幽霊を呼び寄せるようになつちゃつたし、どうしてくれるのつ！　猫又ちゃんを返してよつ！』

カナの勢いに犬塚の足元で大人しくしていた犬神が牙をむき出しにして威嚇したので、カナは再び泣きそうな顔になつて響子の後ろに完全に隠れてしまつた。

怯えるカナを気遣つてか、犬塚は厳しい口調で犬神に命令する。

「やめろ、こいつは悪霊じゃないから除霊対象じゃない

その言葉に忠実に従うように犬神はすぐさま威嚇するのをやめて、それでもカナをじつと見据えたまま再び犬塚の足元でおすわりの態

勢を取る。犬神がこつちを睨みつけているのでカナは恐る恐る顔を出して、犬塚と犬神の方を交互に見つめた。

「猫又がこの町を守っていたのか？
わけじやなくて？」

支配していた
犬塚は相手が子供であろうと優しく話しかけると言つそぶりを見せず、いつもの通り淡々とした低い声で訊ねた。カナは眉根を寄せたままつんとした口調で答える。

『そりだよ、すつぐ怖い妖怪さんを封印した後からずつと猫又ちゃんがこの町を守ってくれてたの。おかげでこの町には人間とか良い物の怪に悪さをする悪霊は出て来なくなつたわ。たまに悪い妖怪が町に入り込んでも猫又ちゃんが退治するか追い出してくれたの、でも今は猫又ちゃんがいないのをいいことに今までこの町で悪さをする為に入ることが出来なかつた妖怪達が入りこんで、ここぞとばかりにやりたい放題……。このまだと君彦お兄ちゃんも狙われちゃうから、だから涼子さんはそうならないようにあたしに……』

カナの説明で響子は慌てるように聞き返す。

「ち、ちょっと待つて！？ 町を守る猫又がいなくなつたから悪い幽霊とかが入りこんでるってのはわかつたけど、なんでそいつらに猫又が狙われなくちゃいけないわけ！？」

『お兄ちゃんは えっと……その……』

響子の質問にカナはしじろもどりになつてきょろきょろと視線を動かしながら拳銃不審になつていて、その理由を誰にも話してはいけないようにカナは何とか誤魔化す言葉がないか一生懸命考えてい

る様子だった。カナの状態を見て犬塚はこれ以上詳しいことは聞けそうにないと判断したのか、カナに礼を言うと足元で大人しくしていた犬神に合図を送り 犬神は軽くジャンプするとその途端に姿が消えてしまった。

「もう変なのに見つかるなよ」

それだけ言うと犬塚はてくてくと学校へと歩いて行ってしまった、響子は呆気に取られたまま自分の後ろにまだ隠れているカナの方へと視線を移す。

『お姉ちゃんもお願い、あたしは猫又ちゃんを探さなくちゃいけないから君彦お兄ちゃんの側にいてあげられない。きっと寂しがつてるから・・・お兄ちゃんと猫又ちゃんは一緒にいなくちゃいけないの。だからお願ひ、君彦お兄ちゃんにも猫又ちゃんを探すように言ってほしいの』

礼儀正しくお辞儀をして頼み事をするカナに響子はあからさまにイヤな顔をした、カナの頼みを聞くのがイヤなわけではなく君彦に必要以上に関わらなくてはいけなくなるということに拒絶反応が出てしまっているのだ。しかし必死に頼んで来る小さな女の子を無下にすることも出来ない響子は、がっくりと肩を落としながら了解した。するとカナは嬉しそうに無垢な笑みを浮かべると、猫又が見つかったらすぐには知らせに行くとだけ言い残して再び空高く舞い上がりどこかへ飛んで行ってしまった。

今までにない奇妙な体験をしたものだと感慨深げになっていた響子はすぐ我に返ると、まだ数メートル先をゆっくりとした歩調で歩いて行く犬塚を追いかける。

「詳しく聞かせてもらおうじゃない、あんたがダブル猫又を引き離

したつて理由を！」

勇んで訊ねて来た響子に向かつて犬塚は淡白な表情で後ろの方を指さす、怪訝に思いながら響子が後ろを振り向くとさつきまでどこかへ行つていたはずの色情靈が戻つて来て、不気味な笑みを浮かべていたので全身に鳥肌が立つた。

「ひつ！ セツキまでどつか行つてたくせに。」

毎日家で色情靈を口にして居るせいか、最初のように絶叫したり
氣絶しかけたりということにはならなかつたがそれでも不気味であ
ることに変わりはなかつた。すると響子は何を思つたのか犬塚の方
を振り向いて、必死に訴えかける。

「ちょっと！ あんた幽霊退治の専門家とか何かなんでしょ！？
さっきのでかい犬を出してこいつ退治してよ…」

「何でっ！？」

考える間もなくすかさず断つて来たので響子は余計腹立たしく思つて、更に声を荒らげた。すると犬塚は響子の体にヘビが取り巻くようにまとわりついている姿を見ながら、普通の口調で説明する。

「前にも言ったる、オレがこの色情靈を祓えるのは一時的にしか出来ないつて。こいつは強制的に除靈しようとしても無駄なタイプなんだよ、それだけこの色情靈の念は強い。」

ば呪詛の類になる、だからオレが強制的に犬神を使って祓おうと思つても呪詛返しに遭つてオレの方に負担がかかつてしまつ、だから出来ない」

専門用語が飛び交つていまいち理解し切れない響子は表情を歪めながら絶句している、そんな時 犬塚は何かを思い出したかのようにハツとした顔になると、おもむろに学ランのポケットから何かを取り出してそれを響子に差し出した。

響子が一体何だとそれを受け取ると、それはブレスレットのようく小振りな数珠であった。

「これは？」

「その数珠にはオレの念が込められている、それを左手に身に着けていればその間だけ色情靈を遠ざけることが可能になるんだ。言つてみればお前が猫又の側にいる時みたいな状態でいられるつてわけだな、
便利だろ」

響子が数珠を受け取った時、後ろを振り向くとついつい自分にまとわり憑いていた色情靈がイヤな物を見るみたいに苦しそうな顔になりながら遠ざかって行く。手に取つただけでこの効果なのだから犬塚の言つてることに嘘はないと思つた。

(こいつ 無愛想で口が悪くて何考へてるかわからぬ
い奴だけど、もしかして実は・・・結構いい奴?)

こんな貴重な物をくれるというのだからきっとそうに違いないと思つた響子が、犬塚に向かつて礼を言おうとした瞬間。

犬塚は右手を響子に差し出して、当然のよつと言い放つた。

「 5万円」

「お金取るならいらないわよつーー！」

響子は憎しみと怒りを目一杯込めて数珠を犬塚に投げつけると、

犬塚はそれを見事にキャッチする。

「いいのか？ これがあればお前は猫又にまとわりつかなくともいいんだぞ」

「おあいにく、靈感商法に引っかかる位なら猫又にまとわりついてる方がミトコンドリア程度にはマシよ！」

響子はこれ以上付き合つていられないと言わんばかりに、犬塚を置いてさっさと学校へと向かつた。すると目の前に校舎が見えて来た途端、始業ベルが鳴り始めたので響子は血相変えて走つて行つた後方を呑氣に歩く犬塚に向かつて吠えながら。

「ほら！ あんたのせいで遅刻しちゃうじゃない、このウドの大木がつ！」

脚力には自信がある響子はすぐさま校舎に入つて行つたが、犬塚はマイペースのままのんびりと校舎へ入つて行つた。

黒依の涙

通学時に色々あつたが響子は全速力で教室まで走って行つたから何とかホームルームには間に合つたが、犬塚は面倒臭かつたのかあって急いだりせずにマイペースで教室に向かつたので案の定遅刻扱いされてしまつていた。すでにホームルームは始まつており担任が朝の挨拶をしている最中にガラツと教室のドアを開けて入つて行く・・・堂々と。

「い～ぬ～づ～か～、貴様は何をそんな胸を張つて遅刻して来てるんだね！？ もうちょっと急ぐとか、息を切らしながら教室のドアを慌てて開けるとか何とかあるだろうが！？」

担任はツバを飛ばしながら犬塚に説教した、しかし犬塚は相変わらずの無表情で淡々と意見した。

「・・・廊下は走つたらいけないんですね」

「そうだけど！ 廊下は走つたらいけないんですけどねっ！？ もうちょっととこうなんかあんでしょうよ！ 何、学級崩壊のつもりか？ 先生潰すつもりか？ お前の両親モンスターペアレントか！？」

顔を真つ赤にして怒鳴り散らす担任を余所に犬塚は視線をあからさまに逸らしながら、耳の穴を小指でほじくる仕草をしながら自分の席へと歩いて行く。その態度に余計腹が立つたのか担任は勇ましく犬塚の学ランの裾を掴んで引き止めようとした。すると担任は犬塚の残りがと言つわけではないが、微かに煙草の臭いがついていることに不審を抱きぐいっと引っ張つて自分の方に向かせる。

「おい、ちょっと待ちなさい。君これ・・・煙草の臭いだろ、そうだろ！？ 貴様、未成年のくせに喫煙してんじゃないだろうね！？」

なおも担任は犬塚の学ランに染みついた匂いを嗅ぎ、それが煙草の臭いであることを突き止めた。さすがにこれにはクラス中がざわつき、全員が担任と犬塚に注目している。しかし君彦だけはまるで犬塚の存在を無理矢理無視するかのように、頬杖をつきながら窓の外を眺めていた。

犬塚は担任を見下ろしながら、黙り込んでいるがしばらく間をあけた後によつやく答える。

「いえ、これは清めの煙です。オレン家、神社なんで」

「え、そつなのか？」

そんな問答をしている間にベルがなり、一時限目が始まろうとしていた。結局犬塚の喫煙疑惑はうやむやにされたまま授業が始まる。君彦が肩を竦めながら淡々と机の中から教科書やらノートを取り出していると、黒依はしきりに君彦の方を気にしながら授業を受けた。

一時限目が終了し、いつものように犬塚の回りには女子達が集まり出していた。話題はホームルームにも出ていた煙草について、吸ってるのか吸っていないのか本当の所はどうなのかという話題から犬塚の家が神社である話題まで、黄色い声に囮まれながら犬塚は少し鬱陶しそうな顔で対応している。

そんな中、ちらちらと君彦の方に視線を送る犬塚に

君彦は気付かないフリをして全部無視していた。たまりかねた黒依が君彦に話しかける。

「ねえ君彦クン、猫又ちゃんがいなくなつてもう一週間以上経つん

だよね？」

黒依に話しかけられるのは心から嬉しかったことだが、その話題が猫又のこととなると君彦の笑顔に少しだけ陰りが見えた。しかし大好きな黒依にせっかく話しかけられたのだから笑顔で対応しないと失礼だと思った君彦は、いつも以上に笑顔を作つて明るい声を出す。そんな君彦の無理した笑顔に気付いている黒依の顔にも、寂しさが滲んでいた。

「うん、もうそんなに経つかなあ。先週からやつとバイトが忙しくなつて来たからすっかり忘れてたよ、家に帰る頃には疲れてくたくただつたからね」

にっこりと微笑む君彦の態度がやけに痛々しく感じられた黒依は、それでも君彦を傷付けないよう根気よく話しかけた。

「ねえ・・・、もう無理しなくてもいいんだよ？ 君彦くん、猫又ちゃんがいなくなつてから無理して笑つてるの・・・あたしわかってるんだから」

「そんなことないよ、黒依ちゃん！ な、何言つてんの？ オレはいつも通りこんなに元気だよ！？」

両手を上にあげたりして「元気で明るい」ということを必死でアピールする君彦、しかし黒依の顔にはもはや笑顔はなく必死で訴えかけるような表情に変わっていた。

「本当は猫又ちゃんがいなくなつて寂しいんだよね？ でもクラスのみんなに心配かけないようになって、無理矢理明るくしてるんでしょ？ だっていつもの君彦くんだったらもっと変で、奇特で、優しいのに・・・」

(

それって、褒めてもらつてんのかな？）

何となく違和感を感じながらも君彦は黒依が必死になつて心配してくることが不思議で仕方がなかつた、どうして猫又がいなくなつた位でこんな風に言われなくちゃいけないんだろう？ 大体猫又の姿は一部の人間にしか見えないのに、黒依ちゃんには見えないはずなのに。存在がどうとか言えるヤツなんかじゃないのに・・・。

たまりかねた君彦は、猫又が消えたことを割り切ろうとしていた自分の考えを黒依に聞かせた。そうすることで黒依にも納得してもらおうと思つたからである。これ以上自分の前で猫又の話題を出してもらわないようにする為に・・・。

「大体さあ、今までがおかしかつたんだよ。猫又なんて妖怪に取り憑かれてるなんて・・・普通じゃないんだよ黒依ちゃん？ そう考へたら今の方が普通だ、自然な形に戻つたつてことなんだよ！ これが本来の日常生活なんだ。だつて猫又がいなくなつたおかげで朝のトイレを順番待ちすることがなくなつたし、ご飯にケチをつけられることもないし、見たいテレビ番組も見放題だし、家中猫の毛だらけにならずに済んでるから掃除もラクになつたし、いいことだけだ！」

君彦は思い出せるだけ猫又がいる不便さを次々とまくし立てた、それを聞いた黒依は「随分猫又に尻に敷かれてたんだな」と思いながら呆気に取られている。君彦は 言つた後に、それらが今後二度と経験出来ないものなんだと再認識させられたような感覚に陥つたのか、少しだけ気落ちした様子だつた。

まくし立てた後、一瞬だけ君彦の顔に孤独に満ちた寂しげな表情が現れた。それを見逃さなかつた黒依は、席に座つたままの君彦の目線にまで態勢を低くするともう一度だけ君彦のことを説得しよう

と試みる。

「君彦クン、それが
いつも一緒にいて、悪いこともいいことも・・・全部一人で分かち合
つてたんじゃないの？ あたしには今の状態の方が不自然だよ、足
りないの」

それから黒依は本当の気持ちを君彦に告げた、この言葉を言える
のはきっと今だけ 今を逃したら一度と話すことが出来なくなるかも知れないと、黒依は宥めるような気持ちで君彦に話
して聞かせた。

「あたし、君彦クンの話を聞いてすゞく・・・すづく楽しかった
んだよ？ 君彦クンが猫又ちゃんに取り憑かれて共同生活を始める
ようになつてから、その話が出来るのはあたしだけなんだって

すごく嬉しかった。君彦クンの制服の上に猫又ちゃんが寝転
んで猫の毛だらけにしちゃつて毛玉を取るのが大変だつたつて愚痴
つたり、猫又ちゃんが魚の骨を喉に刺しちゃつて他の人には姿が見
えないのに動物病院へ連れて行くべきかどうか本気で悩んだつて聞
いた時も

あたし大笑いしちゃつたし。君彦クンにとつては何でもない出来事でも、あたしにとつては毎日が楽しくて羨ま
しくて・・・とても大切な時間だったんだ。あたし一人っ子だから
君彦クンの話を聞いて、まるで兄弟みたいだなって

そんな風に思つてた。だから・・・つ！ だから今の君彦クンは、
まるであたしの知らない君彦クンみたい・・・。猫又ちゃんが何を
したのか、犬塚クンに何をされたのか・・・あたしは知らない、わ
からない。でも・・・でもね？ 君彦クンには猫又ちゃんが必要な
んだと思う！ 一緒にいるべきなんだつて、あたしでもわかるもの
！ だからお願ひ、無理して笑おうなんて思わないで？ 寂しかつ
たらあたしを頼つて欲しい、辛かつたら助けを求めて欲しいの。猫

家族つてものじやないの？ い

又ちゃんがいなくなつて良かつただなんて、そんな悲しいこと言わないで？」

黒依は全てを告白した、中学生の時　君彦と初めて出会つて、猫又に取り憑かれているという話を聞いて黒依にとつて君彦が話してくれる内容全てがとても大切だった、それを君彦に面と向かつて初めて打ち明けたのだ。黒依が必死になつて自分に訴えかけていることを理解出来ない程、君彦は愚かではない。

そんな気持ちを聞いて心が動かないわけではなかつた、しかしそれを言われたところでどうしろと言うのだろうという思いだけは拭い去れない。猫又は祖母を殺した、愛する家族の命を奪つた敵なのだから！

胸の痛みに耐えながら君彦も言わずにはいられなかつた、どうしても自分の気持ちを理解して欲しかつた。猫又のことばかりじやない、自分のことを見て欲しかつたのだ。

「だつたら黒依ちゃんは・・・、自分の家族を殺した殺人鬼と仲良く暮らせつて　　そう言いたいの？」

「　　っ！」

君彦は黒依に八つ当たりするつもりなんて毛頭なかつた、しかし衝動を抑えられない。溢れる感情を止められなかつた。辛くて、苦しくて、今にも悲鳴を上げて暴れ出したい気持ちをようやく抑えらるものの　　猫又の心配ばかりする黒依に、我慢出来なくなつてしまつたのだ。

苦痛に少しだけ表情を歪めながら、君彦は震える手を押さえて

言葉を続ける。

「黒依ちゃんは許せるの？　自分の身内を殺したかもしれない犯人

のことを笑つて許せつて？ オレはそこまでお人好しなんかじゃないよ、そこまで馬鹿じゃない。せめてことをオレに話すまでは絶対に許せないって、誓つたんだ。だから・・・っ！」

最後まで言つまでもなく、君彦は黒依を見て胸が痛んだ。心臓をナイフで突き刺されたような激痛が走り、一瞬だけ呼吸を忘れてしまう程の衝撃を受ける。君彦が言い放った言葉に対し、黒依は大きな瞳から大粒の涙を零して泣いていたのだ。

大好きな女性の涙を見て、後悔に襲われた。君彦は慌てるように椅子から立ち上ると、おろおろしながら謝罪する。

「あ
えっと、その・・・『ごめん黒依ちゃん！ 黒依

ちゃんのこと泣かすつもりなんて全然・・・っ！」

「ひひん・・・、違・・・何でもないから・・・っ。『ごめんね

君彦・・・クン』

黒依は零れ落ちる涙を拭いながらどうしても止められないことを悟ると、自分の席に戻つてハンカチで涙を拭いていた。君彦は追いかけてもう一度謝ろうとするがちょうどその時に二時限目が始まるベルが鳴つたので、君彦は拳動不審になりながらも黒依の方を気にしつつ自分の席に戻つた。

黒依は授業が始まつてからも下をずつとつむいたまま、声を殺して泣いていた。隣に座っている女子生徒に小さく声をかけられ、大丈夫と返事しながらも それでも授業が終わるまでずっと君彦に言われた言葉が黒依の頭の中を反芻している。

黒依ちゃんは許せるの？

自分の身内を殺したかもしない犯人のことを、笑つて許せつて？

（そんなことはわかつてゐ……、わかつてるもの……つ！ 許せるはずがないって……、でもあたしは……つー）

オレはそこまでお人好しなんかじゃないよ。

（・・・許されない、……………これは許されないことなんだ。いくら優しい君彦クンだつて人間だもの、憎しみのひとつやふたつ抱いてたつて不思議じやない。そう、どんなに言い繕つても罪は罪。悪いことは悪いことなんだ・・・つー）

「めん、

「めんね君彦クン。

・・・本当に「めんなさい。

意味ありげな祠の前で・・・

君彦の胸は痛んでいた、ハツ当たりするつもりがなかつたとはいえた憧れの女性である黒依に対して酷いことを言つてしまい、果てには彼女を泣かせてしまつたことに。君彦は授業中ずっと声を押し殺して涙する黒依の方が気になつて仕方なかつた、何度も黒依の方に視線を送るが当然彼女がこちらの方に振り向くことはなく、それどころか黒依の周囲に居る女子から睨まれてしまつていた。

やがて授業が終わり、君彦がすぐさま黒依の方に向かつて謝罪しようとした矢先

「あ、君彦クン！ 今日のお昼休みは屋上で食べない？ もしかしたら志岐城さんつていつも屋上でお昼ご飯食べるかもしれないし、何だか可哀想でしょ？」

満面の笑顔、何もなかつたかのように接して来る彼女に君彦は謝罪の言葉をかけるタイミングを完全に見失っていた。君彦は呆気に取られた顔で情けない返事を返すと、黒依はにこにこと上機嫌になつていつものように他愛ない話に花を咲かせた。黒依が落ち込んでいなくて助かつたという気持ちもあるが、だからといって君彦が言った言葉を全然気にしていないわけではないのだと君彦は察する。何気ない会話の中に黒依は

、猫又に関する話題に

だけは触れることが全くなかったからだ。

その日の夕方、黒依はいつものように君彦と下校しようと話しかけるが君彦は申し訳なさそうに一緒に帰るのを断つた。

「本当に『めんね、黒依ちゃん！』実はバイトの方が本格的に始まつててさ、毎晩出なくちゃいけなくなっちゃったんだ」

「そつか・・・バイトなら仕方ないね、うん
た。それじゃバイト頑張つてね、また明日！」

わかつ

「うん、また明日ね！」

君彦が何を言おうと、黒依はいつも笑顔で許してくれる。思えば黒依が怒ったところや不機嫌そうな顔をこれまでにたつたの一度だつて見せたことがないことに、君彦は急に気になりだした。黒依が泣いた時も、思い返してみれば今日が初めてである。それまではどんなことがあるうと、何が起きようと、中学校の卒業式の時だつて黒依が泣いた所や悲しんだ所、笑顔以外を君彦は見たことがない。

しかし君彦はそんな黒依の笑顔が好きだった、いつでも笑顔でいるということは普通

とても難しい。感情のある人間だからこそ怒つたり泣いたり笑つたり拗ねたりするものだが、黒依はいつも笑顔を振りまくことで回りを明るくさせていた。そんな黒依の気持ちが君彦にとってとても温かくて居心地が良くて、とても素敵に思えたのだ。

(そう考えてみれば オレはいつも黒依ちゃんの笑顔に助けられてたんだよな。黒依ちゃんは知らないだろうけど、オレはいつも黒依ちゃんの屈託ない微笑みに気持ちが穏やかになつて、また頑張るうつて気持になれた。・・・本当に心から感謝してるんだよ、なのに今日は酷いこと言つて悲しませてしまつて、オレつてダメな奴だよな。もつとしつかりしないと…)

君彦は気合を入れ直して、そのままバイト先である料亭へと急いだ。そんな君彦の姿を遠くから見つめるガラス玉の瞳。君彦が住ん

でいる4丁目を一望できる程の高台にある丘には木々が生い茂り、町内で唯一の自然溢れる場所でもあった。そこには古びた朱色の鳥居があり、小さな祠が建っている。

もう誰も手入れしていないせいか

雨風に晒されたままの祠の回りなどは荒れ放題になつており、そこらじゅうに生えた雑草に埋め尽くされそうになつっていた。祠の中には石で彫られたお稲荷様が祭られており、首にかけた真っ赤な前掛けもすっかり汚れている。祠のすぐ目の前は殆ど切り立った崖のようになつており、一般人が入つたらとても危険だと示す有刺鉄線も張られていた。しかしそれさえなければここからの景色はとても絶景であり、心地よい風が吹いて草木を撫でている。

そんな祠の前に座り込んでいる大きな猫、尻尾は一又に分かれグレイと黒のトラ模様の太った猫はどこか寂しげな眼差しで薄汚れた祠をじっと見つめていた。

『なあ

本当にこれで良かつたと思うか?』

祠に向かつて猫又が話しかけた、その声はどこか悲しげでありますても苦しそうだ。

『オレがあいつの為に本当に

何かしてやれたと思う

か? オレが出来ることといつたら、せいぜいあいつの回りに集まつて来る魑魅魍魎ちみもうりょうどもを払い除ける程度だ・・・やつぱ血にまみれた化け物なんかが人間と慣れ合つなんて、出来っこないんだよ』

うつむきながら猫又の瞳に涙が溢れ
ちないように必死で堪えながら上を向くと、今度は丘の上から一望出来る街全体を見渡した。

『なあ

征四郎、オレなんかがあいつの・・・君彦の

それが流れ落

ちないように必死で堪えながら上を向くと、今度は丘の上から一望

為にしてやれることつていつたら一体何なんだよ、教えてくれよ。
オレにはわからねえ、あいつが欲しいものなんて。君彦が望むもの
なんて 何も思い付かねえんだ』

それからまた猫又が祠の方へと向き直つた時、突然背後から人の
気配を感じて瞬時に構えた。するとそこには君彦と同じ学ランを着
た長身の男が立っていた。すぐ側には巨大な犬 犬神
を従えて。

『てめえは つ、どうしてここに！？』

「威嚇するな、別にお前を祓いに来たわけじゃない
宣戦布告に来ただけだ」

『それ聞いたら威嚇するなつて言う方が無理あんじやねえかつ！
てめえの目的は一体何なんだ、答えろつ！』

猫又は一向に威嚇の体勢をやめようとせず、背中を丸めながら一
又の尻尾の毛は2倍近くまで膨れ上がり背中の毛も総立ちだった。
シャーッと牙をむく猫又を白い視線で見つめながら、犬塚は何気な
く頭を搔きながら言葉を続ける。

「そう言えばまだお前には名乗つてなかつたな、オレの名前は犬塚
慶尚だ」

『何 犬塚、だと！？』

犬塚と聞いた途端、猫又は威嚇の体勢を解くがそれでも距離は保
つたままだつた。

「 そうだ、今日ここに来たのは決着をつける日たちを伝える為だ。
明後日から始まるGWの最終日 犬塚神社でお前を待
つ。そこで積年の決着をつけよう・・・そんだけだ、じゃあな」

『 ちょ 待つ、お前の目的は・・・つて行っちゃいや
がつた。なんて無愛想な野郎だ・・・』

猫又にはまだ聞きたいことが山の用にあつたが、犬塚は聞こえないフリでもしているのか背を向けるとさっさとこの場から去ってしまった。一匹取り残された猫又は多少拍子抜けしながらも再び祠の方に向き直り、小さく独り言を呟いた。

『 つたぐ・・・、お前等の家系は一体どうなってんだ・・・。なあ、
征四郎さんよ』

それだけ呆れたように呟くと、猫又は丘を駆け下り
再び行方をくらました。

毎日のように学校が終わったらすぐさまバイトへ行つて夜の11時に帰つて来るという日常を繰り返していた君彦、しかし「ゴールデンウイークに入つてからというもの、君彦は悶々と何かを考え込むことから逃げるように毎日のようにバイトに明け暮れていた。

学校が日曜で休みの時と同じように、6時間労働でバイトを入れて友達と遊ぶ約束もせず、せっかくどこかへ遊びに行こうと誘ってくれた黒依の誘いも断り、君彦は文字通り追われるようになっていました。

基本的に君彦は調理補助を担当しているのだが、料理に関してはとても手際が良かつたせいか・・・補助ではなく殆ど料理 자체を作らされている。

君彦は内心「調理師免許持つてない人間が作った料理をお客さんに出してもいいのか?」という疑問を抱いていたが、料理長の顔がヤクザの親分並に恐ろしかったので口答えすることが出来なかつた。

夜の10時、やっとバイトが終わつてくたくななりながら帰つて来た君彦はドアの鍵を開けて暗い部屋へと入つて行く。もう一週間以上続け様にバイトを入れて疲労がピークに達していた君彦は、虚ろな目になりながら無意識に声をかけていた。

「ただいま猫又～・・・」

そして気付く、猫又が君彦の前から姿を消して数日経つてからといふもの、君彦は意識的に「猫又はもういない」と自分では触れないように努めてきた。しかしそんな意識が吹き飛ぶ程疲れ切っていた君彦はいつものように、日常的に自分の帰りを待つてい

た猫又に向かつて声をかけてしまつたのだ。

自嘲氣味に微笑みながら君彦は靴を脱いで部屋に上がると、電気やテレビを付けて静寂を消そうとする。それから学校の通学用カバンから教材やノート、筆箱などを取り出して残つていった宿題を終わらせる為にテーブルに向かつた。

テレビの音を少しこなしてから宿題に取り組む、と・・・10分も経たない内に集中力が途切れテレビのリモコンを勢い良く掴むと、怒声の入り混じつた口調で大声を張り上げた。

「てゆうか！　あいつはもういらないんだからコント見る必要なんてないじやないか！　オレはコントとかそういうの別に好きじゃないし！　むしろトーク番組とかが見たかったんだよずっと！」

イライラとした口調のまま君彦はムキになつてチャンネルを次から次へと変えまくつた。

「もう邪魔でうるさい奴はいないからな、オレの好きな番組を好きだけ見てやるんだ！　絶対コントだけは見ない！　これからはうたばんだって、ドラマだって見てやる！　ざまあみろ、猫又なんかいない方がずっと自由でやりたい放題なんだ！　いい氣味だ！」

そう言つてリモコンを掲げたまま次々チャンネルを変えるも、特に見たい番組があるわけではなかつた。やがてチャンネルを変えることに飽きた君彦は別に見たくもない適当なチャンネルにしたままリモコンをテーブルの上に置いて、再び無言になる。

何がが物足りない。

朝起きて、朝食と弁当を一緒に作つて学校行つて、学校が終わつたらバイトに行つて、疲れて帰つたらお風呂に入つて宿題をしてそ

のまま寝る。きっと普通の人ならこんな毎日を普通に送っているはずだ、

家族と共に。

しかし君彦は家族との生活を早くに失ってしまった、物心ついた頃には既に祖父母と暮らしていて、それもすぐに失った。施設で暮らしていくても、結局はみんな他人だった。甘えていいのかどうかもわからない、どこまで気を許したらしいのかもわからない。

きっと祖父母を失った後は、今みたいに こんな風に「寂しさ」を感じていたはずだ。だったら一体いつからだりう?

君彦がこんな風に「寂しく」なくなつたのは、

テレビから漏れて来る音が空しく感じる、今日は特に気温が低いわけじゃないのに妙に肌寒く感じる、狭い部屋がこんなにも広く感じられるなんて思わなかつた。

これが孤独というものなのか?

今までと一体何が変わらないというんだろう、
だ「猫又」という奇妙な猫の存在がなくなつただけなのに。

た

君彦は不意に仏壇にある小さな引き出しに手をかけて、再び白黒写真を取り出した。そこには若い頃の祖母と猫又が映つている。まだ「猫又」という化け猫になる前の、猫の姿があつた。

ぶすっとふてくされたような顔をしているが、どこか憎めず、なぜか心が落ち着く。飼い主である若い頃の祖母の顔を見てもよくわかる、きっと大切に思つていたんだろう。祖母は猫又のことを、猫又は祖母のことを。

「この写真を見ていると、とてもじゃないが考えられない。猫又が祖母を殺すなんて、全く想像出来ない。きっと何か深い事情があつ

たんだと思いたいが、それならそうとなぜ猫又は言わないんだろう？ そんな疑問が君彦の頭の中をずっと駆け巡っていた。

それを話してくれさえすれば、こんな風に追い出すようなことしなかつたかもしぬないのに。

「確かにあの時は色々あつて、信じられないことが立て続けに起つて混乱してたつてのもあるけど・・・でもそれなら、どうして猫又は本当のことを話してくれなかつたんだよ。あいつがおばあちゃんのことをとても大切にしてたつて、オレの想像でしかないけどこの写真を見ればそれ位わかる。だからきっと猫又にとつて大切な存在だつたはずなんだ。

それとも・・・オレには話せない事情があるつてことなのか？」

まるで自問自答するように君彦は写真に写っている猫又に話しかけていた、「写真が答えてくれるはずはないとわかつていても話しかげずにはいられない。形として残つている猫又との「繋がり」は、この写真しかないのだから。

「何だつていい、 オレは何だつていいんだ！」

オレはただ・・・お前のことが知りたかつただけだ、ほんの少しだけでも・・・お前の過去に触れたかつただけなんだ。

それがお前にとつてイヤなことでしかないんだとしても、それで もオレはお前が知りたかった

だから。
だつて、一緒に一つ屋根の下で暮らして來た家族
なんだから。

そう心の中で思つた途端、君彦は顔を上げて両目を大きく見開いた。突然何かが閃いたように、何かを悟つたよつこ。

「あ・・・、そうだつたんだ・・・っ！」

写真を見つめながら君彦はよつやく気付いた、いつの間にか零れた涙を拭うことも忘れ、君彦は今ハツキリとわかった。自分が何をするべきか、それが理解出来た君彦はすぐさま黒電話でバイト先にかけた。今の時間ならまだ店長が残っているはずだと。

案の定店長が残っていたおかげで電話が繋がり、君彦は慌てるようになり口で告げた。

「遅くにすみません店長、猫又です！

オレ 急用が出来たんで、明日のバイト休みます！
本当にすみません！」

心配する女の子一人、いや三人

「ゴールデンウイーク最後の日、黒依と響子は前日に連絡を取り合つて学校の前に来ていた。

響子はクラスが違つたので電話をかけたり出来なかつたが、黒依はゴールデンウイークの間ずっと毎日のように君彦に電話をかけ続け、結局いつもバイトだつたり忙しそうにしてたりと・・・。

連日、猫又に関しての話を切り出すことが出来なかつた。

そして最後の日、さすがにこのまま放置しておくわけにはいかないと判断した黒依がわざわざ響子の連絡先を調べて、学校前まで呼び出したのである。

「とにかく！ このままじゃ君彦クンも猫又ちゃんも可哀想だから、あたし達で何とかしよう！」

やる気満々の黒依とは裏腹に響子はいまいちノリ気になれず、しらけた表情で事実を述べる。

「何とかしよう・・・って言つてもや、」れつて普通にあいつらの問題でしょ？

部外者のあたし達が口出しするようなことじやないんじやない？

そりそりと言い放つた言葉に思いのほか黒依がムキになつて反論する。

「そんなんじやダメなのよ！」

志岐城さんだつて学校に居る間中ずっと氣になつてたでしょ！？
猫又ちゃんがいなくなつて放心状態になつてる君彦クンのこと！
あれじやただの抜け殻！ 死人と一緒よ！

「・・・何気に凄まじい」と言つてゐるわね、あんた」

全く会話が成立しないまま数分経過し、それからよつやくこれからどうするのかを本格的に話し合つことになった。しかし黒依が先程から携帯で君彦の家に電話をかけているが一向に出る気配がないので、家にはないと推測する。

家にいないとなればあとはバイト先しか心当たりがないと思つた二人は、黒依が以前バイトに関する話を君彦としていた時に場所も聞いていたので、一人が早速君彦のバイト先に向かおうとした矢先だつた。

遠くの方から女の子の叫ぶ声が聞こえたので響子は思わず振り向き、上を見上げた。すると青空の向こうから赤いスカートをはいた女の子、カナが慌てて飛んでる姿が目に入る。

「えつと、確かあんた猫又の知り合い・・・だつけ？
そんなに慌ててどうしたのよ」

「お姉ちゃん大変なの！」

あたしづつと猫又ちゃんの行方を探してたんだけど、やつと見つけたと思って追いかけようとしたら犬のお兄ちゃんが出て来て、猫又ちゃんと一緒に犬の神社へ行つちゃつたの！

犬のお兄ちゃんも猫又ちゃんもものすごく怖い顔してて、あたし怖くなつて・・・っ！

でも君彦お兄ちゃんの家に行つたら誰もいなかつたから、もしかして学校にいるのかと思つて・・・。

そしたらお姉ちゃんがいたから・・・っ、ねえあたしどうしよう

「！」

咳き込むように喋り出すカナの言葉を整理しながら、もしかしたら事態は結構深刻なのかもしないと察した響子は黒依の方に向こう直る。すると黒依は笑顔でにこにこしたままだったので、黒依には幽霊の類を見たり聞いたり出来なかつたことを思い出した。

「一体どうしたの？ 志岐城さん」

(めんべくわ〜・・・)

と思いつつ響子はカナの言葉を整理した状態で説明する。その間にもカナは相変わらず響子の後ろに隠れたままだつた。
事態を把握した二人は物事を順序良く進める為に打ち合わせをする、主に黒依の提案であつたが。

「それじゃあたしが君彦クンがいそなう心当たりのある場所を探すから、志岐城さんは犬塚クンの方よろしくね！」

「はあっ！？ なんであたしがつー！？」

無愛想な犬塚の顔を思い出すだけで胸の奥がイライラしてくる響子はすぐさま反論した、それ以前に相手は男。響子が最も憎むべき存在の元へ行かなければいけないと言われ、苛立ちは更に上昇する。しかし黒依は正論を述べた。

「あたしには『何も見えない』し『何も聞こえない』けど、今も志岐城さんの後ろに幽霊の女の子がいるんでしょ？」

それに猫又ちゃんの姿もあたしじゃ『見る』ことが出来ないから、志岐城さんが一番つづてつけだと思つんだけど。

幽霊の女の子と一緒になら少なくとも、猫又ちゃんと犬塚クンが向かつた場所がわかるんだから・・・ね？」

「う・・・、まあ・・・確かにっ！」

ズバリなことを指摘された響子は反論する言葉が何もなく、言おうと思っていた文句を飲み込んだ。

これで役割分担が決定し、二人は早速目的地へと向かう。

響子はカナと一緒に犬の神社、すなわち犬塚の実家だという噂の犬塚神社へ。

そして黒依は君彦が立ち寄りそうな場所をくまなく探すことになった。

黒依と別れた直後に響子はふと思つた。

（てゆうか・・・猫又のやつがどこに行つたのか探す方が、よっぽど大変じやない？）

面倒臭いこととかはちゃっかり避けるタイプだと思つてたのに・・・、それとも猫又の行動範囲が極端に狭いとか？）

そんなことを考えながら響子は、自分の背丈程の高さを飛んで行く力ナを追いかけるように走つて行つた。

権の虫の状態（福井や）

長い間更新出来てなくて申し訳あつたせんでした。
久々の再開で、ざわこまく、ヒルアーリ覽くだれこまか。

雨の中の決闘

外は雨が降っていた。

まるで空が悲しんで泣いているよう、元来最近ではすと雨が続いている。

広い神社の敷地内にある境内、そこにて傘を差さず立ちつくしている一人の男。

学ランを来てずぶ濡れになっている犬塚慶尚、そしてその傍らで主を守るような形で威嚇体勢を取つている大きな体をした犬神。対するは一又の尾に毛色はグレイ、そして虎模様の入った小太りの猫が背中の毛を逆立たせて同じように威嚇している。

『お前の用件は何だ、犬塚家の孫。
事と次第によっちゃ容赦しないから覚悟しろよ、オレは今すぐ
る機嫌が悪いんだからな！』

猫又がドスを利かせた声で慶尚に言い放つ。

しかし慶尚は恐れるでも挑発に乗るでもなく、ただ静かな表情のまま手に持つていた獲物の紐を解き、包んでいた布を取り去つた。そこに現れたのは日本刀で、慶尚はスッと鞘から刀を引き抜く。降りしきる雨の中、薄暗い場所で抜かれた刃からは鈍い光が放たれる。

「オレはまだ見極めたいだけだ、お前がこの町にとつて災厄となるか・・・それとも救いとなるのか

猫又との間合いを取る為に慶尚は慎重な足取りで刀を構えたままゆっくりと横に移動する。

その動きに合わせるように犬神も猫又への注意を怠ることなく、いつでも飛びかかる体勢で唸り声を上げた。

慶尚の言葉に猫又は鼻を鳴らすように笑うと、軽口を叩くような

口調で道化を演じる。

『へつ、何が救いだ。

オレはただ住み心地のいいこの町で、のらつくらつとやつていきたいだけさ。

英雄気取るつもりなんてねえ、風の吹くまま気の向くままに自由に生きて行くのが猫の性分ってやつだ』

「それで馬鹿が付く程お人好しなあいつに取り憑いて、自分勝手な自由を満喫してるというのか」

慶尚が君彦の話題に触れた途端、猫又に隙が出来た。その瞬間を見逃さなかつた犬神が先制攻撃を仕掛ける、素早い動きで飛びかかり鋭い爪が猫又を捉えた。しかし身のこなしでいえば猫の方が上であつたのか猫又は体型にそぐわぬ動きで横に飛びのき、犬神の爪が境内の石畳を抉る。抉られた石畳は瓦礫と化し、そのまま瓦礫を石つぶとして利用する為にもう一度前足を振り上げると、猫又めがけて瓦礫の石つぶてが数カ所命中する。

『つっ！ やつたなこのヤ……』

「遅い！」

犬神に気を取られていた猫又は慶尚の接近に気付かず間合いを詰められていた、振り向いた時には慶尚の刀は完全に猫又を捉えて鋭い刃が振り下ろされる。

(しまつた!)

元々無理な体勢で犬神の攻撃を避けた上に、猫又は太り過ぎていたせいもあって自分が思っていたよりずっと動きが鈍っていた。

その叫び声に慶尚の手が止まり刃は猫又に届くことがなかつた、反射的に猫又は素早いステップで後方に飛び退ると声がした方へと視線を走らせる。

町から神社へと続く階段の先に田をやると、鳥居の下には茶髪の響子が息を切らして睨みつけていた。

いだ表情を浮かべながら、キッと犬塚だけではなく猫又の方にも鋭い視線を向けている。

「ほんの少しだけ雨の中あんたら 一体何やってんのよ。」

猫又は愕然とした表情でアゴが外れる程の大口を開けて言葉を失つていた、犬塚に関してはやはり表情は変わらず片手に刀を握り締めたまま黙つて響子の方を見ている。

慶尚と猫又との間にある並々ならぬ雰囲気に響子はどう言葉をかけたらしいのかわからなかつた、ただ幽霊の女の子カナの案内でここまで来たわけだがまさか一人が戦つているとは夢にも思わなかつたからである。

見ると慶尚の手には日本刀が握られていたので、殺すつもりで戦っていたんだと思うと響子は背筋が凍つた。

「あんたら・・・、一体こんな所でそんなモン振り回して・・・。物騒なことしてんじやないわよつ！」

どんな理由があるか知らないけどハッキリ言つて迷惑なのよー。」

言葉がうまく見つからぬまま響子は怒声を浴びせた、今は戸惑いの他にあるのは怒りだけだつたからだ。

響子の怒りに犬塚は首を傾げるような仕草をして問いかける。それは恐らく猫又自身も同じことを思つていたことだらう。

「どうしてお前が怒つていい？』

お前には全く関係ないことだらう、大体どうしてここに来たんだ』

犬塚の側で威嚇したまま牙をむき出しにしている犬神に怯えている力ナは、相変わらず響子の後ろに隠れたまでいた。

響子は無意識に力ナを庇うように、守るように片手で制しながら自分自身が抱いている恐怖感を振り払うように声を張り上げる。

今は虚勢を張ることでしかこの状況の中に立つことが出来なつた。

「あんたらがモメると『あいつ』が拳動不審になつて、そのままこっちが被害を被るわけ！

猫又！ あんたが居なくなつてからあいつ・・・まるで魂の抜けた抜け殻みたいになつてんのよ！

迷惑だからさつと家に戻んなさい、どんな事情があらうとそんなモン却下よ却下！』

『んなつ！ お前そんな勝手に・・・つか、あつさりと・・・つー』

今生の別れのつもりで出て行つた猫又の気持ちを無視する形で言い放つ響子に、猫又は完全に毒氣を抜かれていた。

そして今度は犬塚の方へと人差し指を突き付けて声高々に文句を

『言つてやる響子。』

「特にあんた！ 何が目的か知ったこいつちやないけどこれ以上こいつらを引っ搔き回さないでよね！」

日本刀なんか振り回して、あんたは頭のイカれた侍オタクか！ ともかくこんな馬鹿げたことはもうやめて

言いかけた途端、響子は突然金縛りに遭つた。

言葉を発するどころか体のどこも動かすことが出来ず、響子は短く呻きながらどこか一部でも動かそうともがく。

（な・・・何これ！？ 体が全然動かない！？）

視線だけは動かせるようで響子は慶尚か猫又、ざらりが仕掛けたのか窺つた。

『お前がここに来た・・・ってことは、あいつも来るのか。 だつたらこんな所でモタモタしてらんねえな、 うオレはあいつに会うわけにはいかねえんだよ』

も

（猫又・・・、あんたっ！）

『お姉ちゃん、お姉ちゃんどうしたの！？

このままじゃ猫又ちゃんが危ないよお、あたしじゃあの人を止められない・・・っ！

あたしどうしたらいいのっ！？ 怖いよおお姉ちゃん！』

響子にしがみつくように涙を流しながら必死に訴えかけてくる力ナに向かつて、響子はどうにか思つていることを伝えられないかどうか瞳を動かしてみる。

まばたきしたり目線を動かして、どうにかこの犬塚神社へ向かっているであろう君彦と黒依に現状をカナが伝えに行くように。

今この場でそれが出来るのは力ナだけである、響子は必死になつて鳥居の向こうへ行くよりに目線を右から左へ素早く動かしたりして思いを伝えようとした。

『お姉ちゃん・・・?
もしかしてカナに君彦お兄ちゃんを呼びに行
けつて、言つてる?』

その顔面に繩子は胸団を強くつめつけ、「やうだ」とこゝへ図を送つた。

響子の意図を察したカナは瞳に力を宿し、すぐさま鳥居の向こうへと飛んで行く。

当然カナの動きを猫又だけではなく犬塚も察知していたようで、視線だけカナの姿を追うとすぐさま互いの敵へと戻る。

「お前の真意は犬塚家に代々伝わる」の刀で聞いてやる、覚悟しろ」

『てめえがな!』

響子の必死の呼びかけも空しく、一人の戦いが再開されてしまつ。化け猫と人間との戦いという異様な光景を目の当たりにして、響子は心の中で強く叫んだ。

(これを止められるのはもうあんただけよ、

だから早く来なさいよ、この馬鹿…………つ……（

猫又

猫又を求めて……

雨の勢いがだんだん激しさを増す中、ポロシャツにジーンズといつらつな格好で走り抜ける青年がいた。

彼・・・君彦は、今朝方からずっと猫又を探して走り回っていたのだ。

4丁目を一通り回つて何も見つけられないまま、次は3丁目にある居酒屋へと向かう。

木造の古びた店には「猫目石」と書かれた赤いのれんがかかっており、硝子戸には「準備中」という木札が下げられていた。

一瞬躊躇するも君彦はそのまま硝子戸を開けて中へと押し入る。

「涼子さん！ 猫又！」元気で叫んでませんか？！？」

全身びしょ濡れだったので中に押し入ると言つても入口からそれ以上入ることなく、君彦は入り口付近で立ち止まつたまま店内を見渡す。カウンターには艶やかな着物を着た美女、涼子が驚いた顔で君彦の方へと駆け寄つた。

『君彦さん、びしょ濡れじゃないの！

待つて、今タオルを持ってくるから……』

涼子は急いで君彦の体を拭つてやろうと大きいタオルを探しに行こうとするが、君彦はそれを制して声を荒らげる。

「いえ、それよりも猫又を見ませんでしたか！？」

オレ朝からずっと探し回つてるんですけど、どこにもいなくて……

！

考えてみれば猫又が立ち寄りそうな場所つて涼子さんのお店しか

知らなくて……っ！」

猫又のこと、オレ……何も知らなくて……っ！」

黒い艶やかな髪からほたほたと水滴を落しながら君彦は今にも泣きそうな表情で訴える。

それを見た涼子は悲しげに、そして優しげに君彦に声をかけた。

『残念だけど猫又さんはここには来てないわ、ここ最近ずっと……。町から姿を消したってんで、町内の物の怪達がみんなで猫又さんのことを探し回ってる最中なのよ。

力ナも一緒になつて探してるんだけど、めぼしい手掛かりは未だに何も……。

……『めんなさいね、君彦さんの力になれないで』

涼子の言葉を聞いて、君彦は最後の希望を絶たれたように意氣消沈した。

脱力したようになつむき、その場に立ち伸びて君彦の落ち込む姿を見た涼子の胸がちくりと痛んだ。

君彦は恐らく、猫又がここに来ているんだろうとこいつの希望を胸に涼子の居酒屋を目指して走つて来たのだろう。

店に入った時の君彦の瞳は希望に溢れていた、期待に満ち満ちていた。

その期待は裏切られ、後には何の手掛かりもなく、八方塞がりの状態。

猫又を追いかける君彦の姿を自分と重ね合わせた涼子は、どうにか力になつてやりたいと思ったが自分はこの店を離れるわけにはいかない。無力だと、そう感じた時だった。

突然涼子は眉根を寄せて数歩後ずさりした、涼子の様子に異変を感じた君彦は顔を上げて涼子の顔色を窺う。

もしかして猫又の気配を感じ取つた？

涼子が物の怪特有の何かを感じ取つたのだろうかと思つた君彦は、涼子に向かつて声をかけようと口を開きかけた時。

『君彦さん、今すぐ商店街の方へ行つてちょうだい。
もしかしたら……、導きがあるかもしれない』

「え？ 涼子さん、それってどういう……？」

『いいから早くっ！ 急がないとすれ違つてしまふかもしれないわ
つ。』

いつも穏やかな物言いをする涼子が声を荒らげる姿を見たことがない君彦は驚き、わけもわからず涼子に従つた。

お礼を言つてから再び雨が降つてゐる店の外へと出て行く。
再び店の中で一人になった涼子はその場に立ち去へましたまま、胸に両手を押し当てる祈つた。

『猫又さん、本当に今はもう大丈夫なのよね？
あなたと征四郎さんとで救つてくれたのだから、……信じていよいよね？』

居酒屋「猫田石」を出てすぐ表通りに出れば商店街へと入る、そこには屋根があつたのでこれ以上濡れることもなかつたが、今まで傘も持たずに雨の中を走り回り、すでにずぶ濡れになつてゐる君彦の姿は回りからそれなりに目立つていた。

君彦は商店街の中を、通り過ぎる人々をくまなく目で追つ。

涼子の言葉がどういう意味なのか、何を指して言っていたのかわからず仕舞いだつたがそれでも何かないか探し回つた。

生きてる人間の知り合い？ それとも幽霊の類か？ とにかく猫又に関連しそうなものを見逃さないように、君彦は手掛かりになるものを必死の思いで見つけようとする。

「ああ～君彦クン！ やつと見つけた～！」

黄色い呑気な声が後ろから聞こえ、君彦は驚きながら振り向いた。そこには淡い水色のワンピースを着た黒依が閉じた傘を片手に立つていて、黒髪をツインテールにして学校で会う時と少し印象が違つて見えた彼女の姿に君彦は啞然としていた。

「え……、え？ 黒依……ちゃん？ ビウヒー！」

「」は君彦達が住んでる四丁目からだいぶ離れた場所、黒依が好むやうなお洒落なお店などがあるわけでもないこの商店街で彼女とばつたり会つとは全く想定していなかつた君彦は、その偶然に驚きを隠せなかつたのである。

当然黒依が自分のことを探し回つていたとは露とも思つておらず、目を丸くしている君彦の方へ上品な足取りで近付き、黒依は頬を膨らませてわざとらしく怒つて見せた。

「君彦クンを探してたに決まつてるでしょーー？」

雨が降つて来たからついつい屋根がある商店街の方に入つて來たけど、まさかここで君彦クンを見つけるなんて思つてなかつたわ。

でもちゅうど良かつた！ あ、……はいコレー！」

怒つっていたかと思うとすぐに笑顔になつて、黒依はトートバッグの中からハンドタオルを取り出してそれを君彦に手渡す。

それを手に君彦は未だ黒依の言葉の全てに納得していない様子であった。

「オレを探し」「……って、ビリして？」

「だから～、君彦クンに猫又けやんの居場所を教える為に決まつてるでしょー?」

黒依の口から「猫又」の名を聞いた途端、君彦は相手が憧れの黒依だとこいつとも忘れてもものす」い形相で詰め寄った。

「猫又っ!？ 猫又がどこにいるのか知ってるの黒依ちゃんっ！」

いつも穏やかな君彦がこんなにも声を荒らげ女性に詰め寄る姿を見たことがなかつた黒依は、一瞬ほんの少しだけ驚きはしたもののがわざとこいつといつもの柔らかい笑顔を作つて、君彦を落ち着かせるような口調で言葉を返した。

「うん、今ね……志岐城さんが猫又ちゃんのいる場所へ向かつてゐ所だから、あたし達も早く行こ?」

黒依の笑顔を見てよつやく落ち着きを取り戻したのか、それとも猫又の確実な居場所を聞いて安心したのか、君彦は今の自分の姿を確認してすぐさま後退して行つた。

「あ……黒依ちゃん、その……」めん

そう言つて黒依に失礼のない距離まで下がると、受け取つたハンドタオルで顔拭ぐ。

よつやくこいつもの君彦に戻つたと思った黒依は気が緩み、猫又が

いる場所まで一緒にこつと促した。

「君彦クンも早く猫又ちゃんに会いたいでしょう？
猫又ちゃんは犬塚神社にいるつて聞いたから、今から歩いてけば十五分位で着くんじゃないかな」

黒依の言つた場所に君彦の手が止まる。

「 犬塚、神社？」

「うん、そうだよ？」

犬塚という言葉に、君彦は急に無愛想な男の顔が脳裏に蘇つた。

(あいつは猫又が邪悪だと判断した場合、退治するつて……そう言ってなかつたか！？)

どうして犬塚の神社に猫又が……！？　まさかあいつ、犬塚と！？)

君彦の頭の中に最も最悪なイメージが浮かんだ、その瞬間背筋が凍り全身の血の気が失せるような感覚に襲われた。
こうしてはいられない。

君彦はなりふり構わず、自分を探して猫又の居場所を教えてくれた黒依の存在すら一瞬で忘れ去ってしまい、気付けば犬塚神社へ向けて走り出していた。

後方で君彦の名を叫ぶ黒依であつたが、今の君彦には誰の声も届かない。

猫又！　猫又つ！

早まるな、絶対にあいつと喧嘩なんかするんじゃないぞ！

せめてオレが行くまで無事でいてくれっ！

オレにはお前が、猫又が必要なんだつ！

それを今伝えに行くからっ！だから……一

絶対に死なないでくれ、猫又

つ！

睨み合い

降り続く雨は次第に激しさを増していく、同時に猫又と犬塚慶尚との戦いも熾烈を極めていた。

剣道をしたことがあるのか、慶尚は慣れた手つきで日本刀を振りかざし猫又を追い詰める。

太った体で攻撃を回避するのは相当辛く、息を荒らげながら刀による攻撃を避けながら猫又は更に隙をついて襲つてくる犬神の攻撃にも気を張らなければいけなかつた。

『チツ、くそつー。お前等卑怯じやねえか、一対一なんてよつ。』

宙返りしながら猫又が愚痴をこぼす、そうすることで余裕を見せようとしているが慶尚には通じていない様子だ。

刀を両手で構え直すと慶尚は焦燥すら微塵も見せない表情、口調で反論する。

「化け猫退治に卑怯も何もない」

『退治…つて、お前ひつときオレの真意を見極めるとか何とか言つたじやねえかつー。』

『ぐるるるる、挙げ足を取つてゐる余裕があるのか……化け猫つ！』

主に口答えする猫又を威嚇するよつて犬神が猫又を罵つた、しかし猫又は犬神の言つことを殆ど相手にしていないのかちらりと目線を動かしただけですぐにまた視線を慶尚の方へと戻す。

息も切れ、体中に少しばかり受けた傷から血を流し、猫又は自分の力が落ちていることに気付いている。

本来ならば犬神使いに引けを取らない強さを持つてゐる猫又であったが、この数日間の内に物の怪としての能力が急激に低下していふ感じていたのだ。

「のままでは慶尚に負ける、

殺される。

そう察した猫又は疲労困憊の表情になりながらも懸命に威嚇する、しかしその姿にはすでに迫力がなくなつていた。

「圧倒的に猫又の方が不利な状況を田の当たりにしながらも、体を動かすどころか言葉一つ発することも出来ない響子は、もどかしい思いに打ちひしがれていた。

すぐ田の前で猫又が殺されかかつてゐる、しかし自分は何一つ出来ない。

見ていろ」としか出来ない。

もし「」で猫又が慶尚の手で殺されでもしたら

。

(そんなの……、じつやつてアイツに説明しろッつーのよつー…)

途端に君彦の悲しそうな顔が頭の中に浮かんで来る、その顔を思ひ浮かべた途端、響子も悲しくなつて來た。

胸の奥がズキズキと痛んで苦しくなつて來る。

響子は全身に力を込めてどうにか金縛りを解こうとするが、結局どうすることも出来ずに猫又達の戦いから視線を背けた。両目をきつと閉じ、戦いの音だけが響子に耳に入る。

(猫又つ！ お願い……、早く来てよつ！

「のままじやあのデブ猫が殺されちゃうじやない、あんたの大切な猫なんでしょう！？」

だつたら早い所ここに来てさつとあの無愛想男をぶつ飛ばしちゃつてよね、あんたも一応男なんですよ！

頼むから早く……、お願ひだから……つ！

「んなのあたし、もうこれ以上見てらんないわよ―――っつ
！」

慶尚の一太刀が完全に猫又を捉えそのまま迷いなく振り下ろす、全身の毛を逆立たせて殺氣を感じ取るも猫又は飛び退ひくとした瞬間に水たまりに足を取られ、逃げ遅れてしまった。

その瞬間、全ての時が止まつたかのようにゆっくりと慶尚の鈍く光る刀が猫又を襲う、避けようにもバランスを崩した体は瞬時に体勢を立て直すことが出来ず、大きなガラス玉の瞳に日本刀の切つ先だけが映る。

刹那、白刃の一閃は突然現れた「何か」によつて遮られた。

猫又は力が抜けたように、目の前に現れた「何か」をじつと見つめていた。

両手を広げて猫又を庇つ背中

、見覚えのある黒髪。

『君……彦……！？』

無意識に口から出て来た言葉、猫又は消え入る程に小さな声で囁くように呟いていた。

願わくばこの場に現れて欲しくなかつた人物、これから決して会うことはないと思つていた者。

君彦の首筋に冷たい刃が突き付けられる、寸での所で刀は止まつていた。

猫又だけではなく慶尚もまた、この場に君彦が現れるとは

猫又の盾になるとは思つていなかつた様子である。

しかし動搖することなく慶尚は低い声で警告した。

「どけ」

「嫌だ！」

即答に慶尚の顔がぴくりと、わずかに苛立ちを見せた。

君彦の声を確かに聞いた響子は目を開け、戦いの音が止んだ理由を知る。

猫又をかばうように両手を広げて盾になる君彦の姿、そんな彼の目の前で刀を振り下ろしたまま止めている慶尚。

そんな異様な光景を目にした響子が声を上げようとした時、いつの間にか隣に立っていた黒依がしつと口元に指を当てて静かにするよづに促した。

黒依もまた君彦と慶尚の戦いが緊迫していることを察し、邪魔しないように見守るよづにしているのだ。

「お前の出る幕じやない、それはただの化け猫だ。
人間に害をなす化け物なんだぞ」

慶尚の冷たい言葉に、君彦は断固としてどかなかつた。

「違う！ 猫又は化け物なんかじゃない。

過去に何をして来たかオレは知らないけど、少なくともオレの知つてる猫又は人間に危害を加えるようなヤツじゃない！」

両手を広げたまま、全身ずぶ濡れの姿で慶尚を睨みつける君彦。慶尚もまた刀を引くことなく、君彦の喉元に突き付けたまま殺気を抑えることはなかつた。

「邪魔立てするつもりなら、お前でも容赦しない。

化け物に加担する者としてこの手で処斷するまでだ、それでもい

いのか！？」

常に抑揚のなかつた慶尚の口調に初めて、はつきりとした怒りが現れていた。

鋭い瞳で君彦を睨みつけるがそれに臆することなく、君彦は決して怯まない。

意地でも動かないといつ君彦の力強い眼差し、
それが慶尚の神経を逆撫でし今まで怒りを露わにしなかつた彼が遂に激昂した。慶尚は刀を握る手に力と殺氣を込めて振り上げると、狙いをそのまま君彦に定めて一気に刀を振り下ろした。

本当のキャラチ

『君彦――――――――――つ！――』

慶尚の刀が君彦を斬り付ける寸前、猫又は咄嗟にジャンプすると君彦の顔に飛びかかって自ら攻撃を受けよじとする。

ダメだ、ダメだダメだダメだ！

お前をオレなんかの為に傷付けさせるわけにはいかねえんだ……

だつて……、お前は……つ！

全てが幻のようだった、時がゆっくりと進むように全ての動きが不思議と手に取るよう分かる。

そして運動神経の鈍い君彦の目でさえはつきりと映し出される、自分の顔にしがみついて離れようとしない猫又を慶尚の鋭い刀が捉えている場面を。君彦は声にもならない程の「一瞬」で猫又を両手で掴むように抱いた。

刹那。

雨で濡れた石畳の上に、鮮血が滴り落ちる。

傷口は思いの外浅かったが、それでも刀で腕を斬られた君彦が重傷であることに変わりはない。

君彦はそのまま猫又をゆっくり放すと、激痛で斬り付けられた腕を庇うように前屈みになつて呻いた。

『君……彦……？』

猫又は寄り添つように君彦の側へゆっくりと近寄る、すると君彦

は顔を上げて猫又を見つめた。

優しい瞳で、痛みを堪えながらもこつこつ微笑む君彦が……ようやく猫又に言いたかつた言葉を口にする。

「猫又……、よかつた……お前に怪我がなくて。
オレ……お前に何かあつたらつて、思つと……全然……落ち着かなくて。

黒依ちゃんがお前の居場所……教えてくれて、
してやつと会えたんだ。

オレどいつも……お前に伝えたいことがあって

腕を押さえながら話す君彦に、猫又は動搖しつつ声を荒らげる。
君彦の跪いた足に前足を乗せて顔を覗きこむようにして、必死になつて声をかけた。

『何言つてんだ！ そんなことより早く傷の手当てをしねえと……
つー』

「猫又、聞いてくれ……つー 今言わないとオレ……きっと一生後悔、する……つー」

『お前がオレに何を言おつと……、オレは何も変わりはしねえんだ
よー』

オレはただの猫又……、化け猫なんだ！ 人間を襲う化け物と何も変わりはねえんだよー！

だからそんなオレの為なんかにお前が……、お前がそんな目に遭う必要なんてビijoても……つー』

目に涙をたっぷりと溜めながら、猫又は声を震わせ怒鳴った。

しかしそんな猫又の言葉を遮るように、今度は君彦の方が声を荒

らげる。

君彦もまた……、田にたくさんの涙を浮かべながら声を高らかにして言い放つた。

「家族なんだつー。」

『…………つー。』

君彦の言葉に、猫又の涙が大量に零れ落ちた。

完全に不意を突かれ、全身を小刻みに震わせながら猫又は君彦の顔をじっと見つめる。

腕からどぐどくと血を流しながら、それでも君彦は苦痛の表情を見せず……猫又に温かく笑いかける。

「お前がいなくなつて……、ずっとと考えてた。

最初は口うるさくお前がいないことを喜んでせいせいしたとか言ってたけど、何かが違うんだ。

それが何かずっとわからなかつた……、オレはお前がいなくなつたことにずっと田を背けてた。

本当のことを探るのが怖くて……。

知つたら自分はどうなるのかが全く想像出来なくて、それでオレずっと現実から田を逸らしてたんだ。

お前がいない毎日を過ごして……ずっと何かが物足りなくて、それが何なのか……やつとわかつたんだ。

猫又……、お前がオレのおばあちゃんと何があつたのか……、オレは知らない。

話したくないつて言つない、お前の口から無理矢理聞いつとしないよ。

でも……、これだけは言いたい。

オレにとつてお前はおばあちゃんの仇とかそんなんじゃなくて、

もつと……それ以上のものだつたんだ。

一人になつて、おじいちゃんが亡くなつた後に感じた孤独をもう一度感じて、それに気付いた。

猫又……、オレにとつてお前は
かけがえのない家族
だつたんだよ。

とても大切な……、オレにとつてはとてもとても大切な……、大事な家族なんだ。

一緒に笑つたり、喧嘩したり、ふざけ合つたり、毎日本当に騒がしくて

毎日本当に楽しかった。

お前がオレを寂しい気持ちから救つてくれたんだ、孤独からオレを助けてくれたんだよ。

だから……つ！ もうオレの前から姿を消すような真似なんか、するなつ！

オレにはお前が必要なんだよ……つ！

だつてオレ達はもう……、家族……だろ？ なあ、猫又……つ！

『君彦……、お前……つ！』

君彦の真つ直ぐな思い、心からの言葉、それを受け止めた猫又は涙が止まらなかつた。

からうじて泣き声を上げないように静かに涙を流す猫又が、刀傷を負つた君彦の腕へと視線を走らせどうにか傷の手当てをしようと想い、顔を近付ける。

「
待て！」

すかさず止める慶尚、彼の言葉に猫又と君彦は緊張交じりに慶尚を見上げた。

「化け猫が人間の血を口にするな

慶尚の冷たい言葉に君彦はどうしても逆らわずにほいられなかつた。

「猫又のことを化け猫だなんて呼ぶな！ それに猫又はオレの怪我を治そうと思つてるだけだ！」

「理由なんてどうでもいい。

オレはただ……物の怪が人間の生き血をすすつた時、そいつの妖怪化が進んでそのまま理性を失つ可能性が高くなると言つてるだけだ」

君彦が負傷し、猫又は君彦が現れたことによつて一時的に戦意を失つてゐる状態にあつた。にも関わらず、慶尚と犬神は未だ君彦達への殺氣を消そつとはせずに、いつでも攻撃出来る態勢を保つてゐる。

このままだと劣勢にある君彦達が危ないと響子は蒼白になりながら、どうにか駆けつけたいと思つてゐるが全身の金縛りがまだ解けていない状態なのでもどかしい気持ちになりながら、助けに行けない自分自身に苛立つてさえた。

自由に動ける状態にある黒依に頼んだ所で彼女は普通のか弱い少女、響子は黒依に向かつて君彦達を助けに行けとはとても言えない……例え言葉を発することが出来たとしても、黒依に向かつてそんな無謀なことは口に出来なかつたのだ。

一方黒依は傘の柄を握る手に力を込めながら……じつと様子を窺つてゐる、口元を引き締めて……いつもの笑顔はなかつた。

ただ　　君彦と慶尚の行く末を黙つて見守つてゐるといふよりもむしろ、これ以上君彦達に危害を加えるようならば次は自分が容赦しない……とでも言いたげな表情だ。

雨に打たれながら、一人の睨み合いはなおも続く。

しかし君彦の腕から血が流れ落ち……だんだんと顔色が悪くなつて行く様子を窺い、悠長に事を構えているわけにもいかなくなつた猫又が、君彦の前に立ちはだかつて慶尚に告げる。

『……オレの負けだ、好きにしろ』

「 猫又っ！？』

君彦が弱々しい声で呼ぶが、猫又は振り向きもしなかつた。決意した猫又はその場に座るどじつと慶尚を見据え、静かな口調で命乞いをする。

『お前の刀で殺されようが、そっちの犬つこりに噛み殺されようが構わない。

だがな……君彦だけは！
君彦だけはこれ以上傷付けないでやつてくれ、頼む』

猫又の一又の尾が項垂れるように下を向く、でっぷりとした体型をした猫又の背中がどこか力なく肩を落とすよつて見えて、君彦は痛みを堪えながら猫又に手を伸ばそうとする。

しかし慶尚と、こちらを威嚇したまま睨みつける犬神の殺氣にそれ以上体が動かなかつた。

猫又はガラス玉のような瞳を慶尚に向けたまま慶尚が下す審判を、ただひたすら待ち続けた。

一度と失いたくない

君彦の状態が思わしくないといふこともあり、猫又は数分ほど慶尚の決断を待つてはみたが横目でちらりと君彦の様子を窺い、どうしてもこれ以上時間を取られるわけにはいかないと察した。

座った姿勢から再び立ち上ると、まるでそれを合図にしたかのように慶尚が刀を握る手にわずかに力を込める。田線だけで犬神に合図を送る。すると犬神は牙をむき出しにして君彦に向かつて威嚇の姿勢を取り始めた。

『おい、ちょっと待て!』

しかし猫又の言葉に耳を傾けようとしない慶尚が、すうんと口調で遮つた。

「オレ達犬塚家は邪悪な妖怪共を一掃する為に生きて来た、今更化け猫の言葉に耳を傾ける謂われはない。化け猫に加担し、挙げ句の果てに家族とまで言い放つたそいつもそうだ。

人間にとつて災いとなるものは例えそれが同じ人間であつたとしても、容赦する必要はない。

猫又……、お前だけではなくそいつも同罪となるからには見過ごすわけにはいかない!』

慶尚が刀を今までとは全く異なる構え方で、ありつけの殺気を込める。

まるで慶尚の周囲だけピンと張りつめた空気が漂つてゐるよう、「そこ」だけ異質な雰囲気を放つていた。

猫又は背中の毛を逆立てて臨戦態勢を取るが、正面には慶尚……

そして右方向には犬神が君彦を狙つてゐる。いくら何でも君彦を庇いながら慶尚と犬神を相手にするのは無謀に近かつた。それでも猫又は君彦を守る為に神経を集中させて慶尚と犬神の両方の動きを注意深く警戒する。

ふと、慶尚が動きを見せて刀の握りが音を立てた瞬間
猫又の全神経が慶尚の方へと注がれた隙を狙つて、犬
向かつて襲いかかつた。

脇の激痛でその場から素早く離くことが出来なかつた君彦は、自分に襲いかかる凶暴な姿をした犬神に目を瞠り、声を上げる余裕すらない。猫又は慶尚が音を立てたのはただのフェイクだと察して心臓が跳ね上がつた。

ドックン。

目の瞳孔が開き、後方を振り返るとそこには君彦に飛びかかっている犬神の姿が映し出されていた。

「そのまま行けば犬神の尖った爪は君彦の体を食い込む程押さえ込み、その鋭い牙は迷うことなく君彦の喉笛を噛み千切る。想像するだけで猫又は深い苦しみに囚われる、そして守れなかつた自分を悔やんでもきっと悔やみきれないだろう。

あの時と回りが違う。

猫又にとつて初めての家族を、最も愛した飼い主を……。
この世で一番大切だったハルを守れなかつた時と同じ苦しみを、
……再び味わうことには。

ドックン。

猫又の絶叫と共に周囲が一瞬にして眩い光で覆われた、何が起こ

つたのか分からず、慶尚は目が眩み、その程の光を避ける為に片手で視界を覆つた。同じように響子や黒依も、まるで突然目の前に太陽が現れたかのような……理解し難い展開にただただ目を閉じるしか出来ない。しかし君彦はじっと見つめていた……、確かにあまりの眩しさに視界を覆いたくなるような明るさであつたがその光はとても優しく温かいものだと感じられて、かえつて視線を逸らせずにいたのだ。

「猫……又ー？」

光の正体は、宙に浮かんだ猫又。

猫又の体全身から光を放つていて、そのよりも、猫又の背に突如として現れた「光の翼」が美しい光を放っていたのだ。

それは七色に輝いていてとても美しく、その光景を目にしている君彦の心を魅了する程の神々しさを持っている。

猫又の背に現れた六枚の翼は、ぱたきはしていないが、翼から放たれる凄まじい「神通力」が猫又の体を宙に浮かせていた。

翼を生やした猫又はまるで殆ど無意識となっているせいか夢見心地のような表情で、ゆっくりと君彦を襲おうとしていた犬神の方へと向き直つて六枚の翼を一振りさせた。

『ギャン！』

たつた一振りで嵐が巻き起こつたかのような突風が発生し、その衝撃をまともに受けた犬神はそのまま吹き飛ばされて境内にある大きな木に激突した。

君彦に危害を加える者がいないことを察したのか、放心状態の猫又は宙に浮かんだまま光を放ち続けている。

六枚の翼を生やし、犬神をたつた一振りで撃退した猫又を目の当たりにした慶尚は恐怖を込めて……、まるで神か悪魔を目にしたよ

うな顔で驚愕し声を震わせた。

「まさか、これは

猫神化したといふのか！？」

刀を片手に握ったまま驚きを隠せない慶尚は口を開けたまま、猫又を見つめていた。

すると猫又の背に生えた翼が突然羽ばたき出す。

まるでこのまま空の彼方へと飛んで行きそつた勢いで、何度も翼を羽ばたかせた。

君彦は猫又がどこへ行ってしまうと直感的に察したのか、腕の痛みも忘れて立ち上がり、猫又に向かつて叫ぶ。

「猫又っ！」

しかし光を放ち続ける猫又からの返事はない、まるで君彦のこと忘れてしまったかのように猫又は振り向きもしなかった。

それでも君彦は猫又を呼び続けながら、両手を広げて迎えようとする。

「猫又……もういい、もういいんだ。

オレ達を傷付ける奴はもうどこにもいない、だからもう戻つてもいいんだよ」

宥めるように、諭すように優しく声をかける君彦は猫又の向こう側に居る慶尚の方へと視線を走らせ、刀を捨てるように訴えた。

それを察した慶尚は反論することもなく、君彦の言う通りにする。大人しく刀を石畳に上に投げ捨てると慶尚の方を振り向いた猫又が、投げ捨てられた刀を一瞥するように見つめ、何かを考え込むようじっと様子を窺っている。

「猫又、戻つてこい。

「またオレと一緒に……、貧しいけど楽しかったあの頃に戻る、な？」

君彦の声に今度はちゃんと反応したのか、猫又はゆっくりと君彦の方へと虚ろな瞳を向ける。

両手を広げて、猫又が怯えないよう警戒しないように近付いて、宙に浮かんでいる猫又を受け止めようとする君彦。するとそんな君彦の心が通じたのか、猫又の背に生えた六枚の翼から徐々に光が失われていく。

『君、彦……』

小さく呟くように名前を口にすると、猫又の背から七色に輝く六枚の翼が完全に消失してしまう。

翼が消えたと同時に猫又を宙に浮かせていた「力」が効力を失い、両手を広げていた君彦の腕の中へと落ちて行く。

しつかりと抱きとめた君彦は、愛おしそうに……眠っている猫又の頭を優しく撫でた。

雨なのか涙なのかわからない雫が君彦の頬をひたすら濡らす。

「猫又、
おかげり」

長かつた戦いはようやく幕を閉じ、君彦はたつた一人の家族を再び取り戻した。

猫又の奇跡

深い眠りに落ちたよしひで寝息を立てて眠る猫又を抱き締めながら、君彦は安堵に満ちた笑みを浮かべる。

猫又の変貌に驚きを隠せない慶尚はまだ君彦の腕の中で眠つている猫又を凝視するように眺めていた、犬塚神社の鳥居の前では響子と黒依、そして浮幽靈の力ナガ遠くから君彦達を見つめている。余りに突然の出来事だった為、全員がその場から動けずにいたのだ。

そんな時、猫又が眠りに落ちたことで金縛りが解けた響子であつたが、目の前で起きた不思議な光景に睡然としていたせいで既に体が自由になつていてることに気付いていない様子である。

呆けたように立ちあぐくしてくると、よしひで我に返つた黒依が傘を手に君彦の元へ駆けて行く。

「君彦クン！ 腕の怪我は大丈夫！？」

君彦に声をかけながら黒依はバッグの中からハンカチを取り出そうとする、君彦は猫又が無事だったことに安心していたせいで腕の痛みを忘れていたものだと思っていた。

「あれ、腕の傷が……！？」

見ると君彦の腕に血は付いているが、雨で血が洗い流されると刀傷は跡形もなく消え去つている。

「どうこいつことだ、あんなに痛かつたはずなのに……今はもう全然痛くないし、傷跡すらないなんて！？」

君彦の腕をまじまじと黒依が見つめながらお互い首を傾げていると、刀を鞘に収めながら慶尚が平然とした口調で答える。

「恐らく猫又の力がお前の傷を癒したんだろう」

「えー？」

君彦はきょとんとしながら慶尚と猫又を交互に見つめる。飲み込みが悪いなという田つきになりながら、慶尚が君彦に向かって詳しく説明してやった。

「さつきの現象のことだ。

あれは猫神化、

時に得る姿なんだよ。

羽九尾猫又といって、本来なら野生の猫又が一千年の時を要してその域に到達すると言われてるけどな。

恐らく羽九尾猫又に変化した時に現れた六枚の翼、その翼から発した光によってお前の傷を癒したんだろう」

信じられないような顔で君彦は抱き抱えている猫又を見つめた、それから小さく笑みをこぼすと猫又を抱いたまま立ち上がる。

「オレにはどういうことかよくわからないけど、……でも猫又がオレを助けてくれたってのはわかるよ。

猫又はこんな風になつてまでオレの傷を治してくれたんだ、感謝しないとな」

そう言つて猫又の頭を優しく撫でる君彦に、黒依は傘を差し出した。

「もう全身ずぶ濡れになっちゃつてるから、今更遅いかもしないけど……。」

早く帰つて体を乾かさないと風邪引いちやうよ、君彦クン」

「ありがとう黒依ちゃん、でもオレは平氣だから。

オレに傘を貸して黒依ちゃんが風邪引いちやつたらそれこそ大変だからね」

心配そうになりながらも黒依は笑顔を作る、その笑顔を見て君彦も微笑んだ。

少し離れた雑木林の中から猫又の力によつて吹き飛ばされた犬神が全身を震わせ水しぶきを飛ばすと、むすつとした顔で慶尚の元へと戻つて行く。それから慶尚の足元に寄り添つように立つと、君彦の腕に抱かれている猫又をじつと眇めた。

犬神の目線に君彦の顔から笑みが消え、猫又に手出しさせないようにはぎゅっと抱く腕に力を込める。

ようやく全身の金縛りが解けたことに気付いた響子がハツとして、君彦と慶尚の間に割つて入ろうかとも考えたが男が一人もいる中に飛び込んで行くことが急に躊躇わられて、二の足を踏んでいた時

突然神社の方から怒鳴り声が響いた。

「何をしてある慶尚！ 気を失つとる今がチャンスじゃらうが！ セッセーとその化け猫を殺つてしまがいい！」

境内全体に響き渡る程の怒声に驚いた君彦と黒依は、目を丸くしながら神社の方へと視線を走らせる。

すると建物の裏から袈裟を着た老人が怒りに満ちた表情で現れた、その老人は真っ直ぐに慶尚の元へ歩いて行くと君彦の方へと指を指し、鋭い眼光で睨みつけながら再び怒鳴り散らす。

「さあ、今日こそ犬塚家が抱き続けた積年の恨みを晴らす時じゃ！慶尚よ、遠慮するでない！ さあ殺れ！ そら殺れ！ 今すぐ殺つちまうのじやあああつっ！」

突然現れて猫又打倒コールを叫び続ける老人に、何がどうなつているのかわからずとも猫又に危害を加えようという憎しみだけは十分に感じ取れたので、君彦は猫又を隠すように抱え直した。

老人の勢いを横目で見ながら慶尚は刀を鞘から抜く素振りを見せず、むしろこれ以上の戦いは無益だとでも言いたげな表情になる。そして慶尚は刀を肩に当てながら、小ちく溜め息をこぼしていくもの一本調子な口調に戻った。

「いや、もう止めだ。
今まで大体わかつたから」

あつさりとした慶尚の意外な言葉に老人は口を大きく開けて、まるで顎が外れたかのような表情でショックを受けていく。

君彦と黒依、そして鳥居の前で立ちすくんでいる響子は、慶尚の言葉を聞いて呆気に取られていた。

猫又と慶尚との戦いがまだ完全に終わつたとは言えなかつたが、それでも猫又を取り戻して安心していた君彦達の前に突如として姿を現した老人。

彼のせいで先程まで緊迫していた状況から今度はややこしい状況へと早変わりしたことに不満を覚えた響子が、誰もが思つてゐるであらうごく当たり前の言葉を口にした。

「てゆうか、このじじい一体誰よ

響子が少し離れた位置から呴いたにも関わらず、地獄耳らしい老人は怒り心頭に再び声を荒らげた。

「この小娘が……つ、無礼じゃぞ！
ワシはこの犬塚神社の神主、犬塚慶尚……ここにいる慶尚の祖父
じゃ！」

そう大々的に自己紹介した老人の威風堂々とした態度とは裏腹に、
横でさつきよりも大きな溜め息をつく慶尚の姿がちらりと君彦の視
界に入っていた。

猫又の奇跡（後書き）

この小説を読んでくださってありがとうございました。

今回少しだけ触れた羽九尾猫又……。

実はこの読み仮名は私が勝手に付けました、本来は何て読むか私にもわかりません（ごめんなさい！）

この小説では今後「羽九尾猫又」のことを「はくびねこまた」と読んであげてください。少しだけ慶尚が説明しましたが、また話が進むにつれて詳しく語りたいと思います。

今は君彦達と同じように「よく意味がわからないまま」、物語を読み進めていただきますよろしくお願ひいたします。

一件落着！？

突然姿を現した犬塚慶尚の祖父を名乗る、犬塚呂尚……。彼は相当猫又に恨みもあるのか、戦意を完全に喪失している慶尚を焚きつけるように声を荒らげていた。

「何をしておるのじゃ慶尚！」

憎き猫又が目の前に居るといつのこと、なぜトドメを指さん！

今日こそ我が犬塚家が猫又によつて蔑まれ続けた憎しみを晴らす時じやうつが、さつさと刀を抜けい！」

ツバをたくさん飛ばしながら強要しよつとする呂尚に対し、遂に慶尚の堪忍袋の緒が切れた様子である。

「いい加減これ以上身内の恥を晒すのはやめてくれ、……勝負はついたと言つてゐる」

慶尚は祖父であるうと手加減なしに一睨みする、しかしそんな孫の下剋上に屈服することなく呂尚は負けじと睨みをきかせて怒鳴り散らした。滅多に声を荒らげようとしない慶尚に勝てるのは、声の大きさだけだとどうやら本人にもわかっているようだ。

「何が身内の恥じや、お前は悔しくないのかつ！？」

古来より我等が祀りし犬神様は、世間から凶暴な妖怪と恐れられてきた。

そもそもこれも陰陽師に媚びへつらつてきた猫又一族の汚い策略によつてじや、わかるか！？

仕える者に対する忠誠心は全ての物の怪すら凌駕する、最も情の深い妖怪なのに猫又一族と来たらつ！

自分勝手自由気ままに振る舞つてゐるクセにその並々ならぬ神通力を武器に、陰陽師に付きおつた！

妖怪退治を生業とする陰陽師の手足になることで自らの格を上げたつもりであるうが、ワシは騙されん！

大体ワシはそこにいる猫又だけはどうしても許すわけにはいかんのじゃ！」

そう怒声を上げながら咲尚が指を指し示したのは、なぜか猫又だけではなく君彦にも向けられていた。

君彦は突然怒りをぶつけられ、わけがわからないまま困惑つていふ。

「猫又……、ワシは猫又だけは許せんのじゃ！

このワシから大切な者を一人も奪いおつてから……ハ、よく見なくてわからぬ。

どこのからどう見てもヤツに瓜二つ、まるで若かりし頃の猫又征四郎を見てくるようじやわい！

あ~~~~~っ！ 思い出しただけでまたはらわたが煮え繰り返るつづつ！

「えつ！？ お祖父ちゃんのこと、知つてるんですか！？」

咲尚の口から君彦の祖父である征四郎の名が出た途端、君彦は驚きの余りつい声に出してしまつていた。

すると咲尚はふふんと鼻を鳴らし、両腕を組みながら少し上機嫌の表情で話し出す。

「知つてるも何も、このワシの永遠のライバルだった男じゃ！ その昔一人の女性を取り合い、決闘までした。

数年前にヤツが……」

そう呂尚が口にしかけた途端、慶尚は祖父に向かつて平手チョップを坊主頭に食らわせて無理矢理黙らせた。

孫に攻撃され文句を言おうと思つた呂尚であつたが、慶尚は祖父に向かつて軽蔑にも近い眼差しを向けると呂尚はさすがに大人しくなつてしまい、わざとらしい咳払いをしてから落ち着きを取り戻した。

「まあ、その内わかるじゃろう。

そんなことより慶尚、勝負がついたとは一体どういうことじゃ！？ 猫又の奴はまだ健在じやぞ、だつたら勝負がついたとは言えんの

う

すると慶尚は君彦の腕に抱かれている猫又に視線を向けながら、先程の現象について呂尚に話した。

「あいつは……猫又は人間に危害を加える邪悪な妖怪じゃなかつた、むしろそれ以上の存在だつたんだよ。

猫又君彦の危機を救う為に奴は体内に蓄積していた神通力を解放し、まだ未完成だったが羽九尾猫又に変化した。

尾は二又のままだつたが、背中から七色に輝く六枚の羽根を出現させたんだ……まず間違いない

慶尚の言葉に呂尚の顔色はだんだん険悪になつて行く、先程の猫又に対する憎しみから……猫又が邪悪な妖怪ではないという事実以外にも、猫又がとても高位な妖怪へと転身した事実が悔しくて堪らないといつた感じだ。

「口」よりもながら慶尚から告げられる言葉を聞く呂尚。

「オレとじいさんの約束事……。

それは……猫又が邪悪な妖怪かどうか見極めること、そしてもし猫又が人に仇なす凶惡な妖怪であつた場合には、これを退治せよ……だつたな。だがむしろ猫又はこの町を治める為に尽力していた、つまり退治対象ではなかつたということになる。

「奴の正体を一部でも見極めることが出来たから、そう判断したからオレはとっくに勝負はついたと言つたんだ」

そう結論付けると慶尚はぐいの音も出ない顎くと向き直り、本題に入った。

「……約束は守つ
てもらひにがい。

「猫又の正体を見極めた瞬には……、オレの一人暮らしを許可して全面的に協力すると」

慶尚が悪びれた様子もなく言い放った言葉に、一同耳を疑つた。
君彦も黒依も響子も、全員固まつたように目を丸くしながら慶尚
を瞪つてゐる。

真っ先に食い付いたのは当然、慶尚によつて散々な目に遭つて来た君彦であつた。

「ちょっと待て、お前それ…… 一体ビリーハーとなんだよ？」「？」

当然と言えば当然の反応に、それでも慶尚は平然とした態度で答える。

「だから……猫又が良い妖怪なのか悪い妖怪なのか。

それを判断したら今住んでる実家を出てオレが一人暮らししても

おかげで無事に一人暮らしが出来そうだ、一件落着だな」

他人事のように片手を振つて適当に礼を言つ姿に、普段穏便な君彦が珍しく本氣で怒りを露わにした。

どこからかブチンといつ何かが切れた音が聞こえたよつて、すやすやと深い眠りに陥つてゐる猫又を両腕に抱き抱えたまま君彦は、ウドの大木の如く立ち尽くしてゐる慶尚に向かつて悪口雜言を浴びせ続ける……。

そんな世にも珍しい「キレた君彦」を曰にした響子が呆気に取られながら、黒依の方へと歩み寄つた。

「あいつがあんなにキレて、誰かに向かつて怒鳴り散らす姿なんて初めて見た。

ねえ、あんた猫又と付き合ひ長いんでしょ？ 猫又が怒ったトコつて、他にもあつた？」

何となく、何の氣兼ねもなく黒依に話しかけていた響子は突然ハツとして先程の言葉を訂正する。

「べ……っ、別に付き合ひつて言つても男女の付き合ひつて意味じやなくつて！」

あいつと知り合つてから長いんじょつて意味だからねつ！？
だからといって別にあたしがそんな細かいこと気にしてるつてわけでもないんだから、勘違いしないでよつ！？」

顔を赤らめながら慌てて言い繕う響子であったが、黒依は全く気にしていない様子であった。

どこか元気がないような、まるで響子の声が全く聞こえていないような……そんな虚ろな表情でぼうつとしている黒依を見て、響子は眉根を寄せながら首を傾げる。

君彦の溜まりに溜まつたうつぶんやストレスや愚痴などを散々慶尚に放つた後、慶尚から軽い謝罪があつた程度で「猫又失踪事件」はめでたく幕を閉じたのであつた。

翌日 、黒依を除く三人（と一匹）が軽い風邪を引いてしまつたことは……、勿論言つまでもない。

戻つて来た日常

「ゴールデンウイークが終わって学校へ行く準備をする君彦、ぼうつとする頭で台所に立つて弁当と朝ご飯を作っていると、居間と寝室が一緒になつている部屋から氣だるい声が聞こえて来た。

『う～……、全身が重だるい』

小さな鼻の穴から鼻水を垂らしながら猫又がのしのしと重たそうに歩いて来る、君彦もまた鼻をすすぐながら猫用の底が少しだけ深い皿にキャットフードを田分量で軽く入れた。

猫又は虚ろな眼差しで皿を覗きこみ、それから物言いたげな眼差しで君彦を見つめる。

「体調悪いのに缶詰食べるわけにいかないだろ、今日は栄養たっぷりのキャットフードで我慢しろ。

大体風邪引いたら普通食欲わかないはずなのに……、お前の腹は一体どうなつてんだよ」

ぶつぶつと小さく文句を言いながら君彦は水受けのお皿に水道水を入れると、こぼさないようにキャットフードが入ったお皿の隣に置いた。猫又はしばらくキャットフードを黙つて見つめていたが、とうとう諦めてガツガツと食べ始める。

君彦はズルズルと垂れて来る鼻水に耐えかねて、ティッシュで鼻をぬみながらキャットフードにがつついている猫又をじっと見つめていた。いつもの光景、いつもの朝……。

ついこの間まではこの日常がどれだけ大切なものだったか、気付いてなかつた。

しかし今は違う、こんな何でもない毎日が……いつもと変わらな

い会話が君彦を満たしていたのだ。

メタボ気味な猫又は腹を全部床につけながら座り、キヤツトフードを食べては水を飲み、またガツガツと食べていた。あれだけ文句言いたげな態度を取つていたにも関わらず、結局最後まで綺麗に食べ尽くす猫又。それを君彦は穏やかな表情で見つめていた。

するとここにこしながら見つめている君彦に向かつて、猫又は少し不快そうな顔で言葉をかける。

『おい、君彦……』

猫又の明らかに不機嫌そうな表情に、君彦が微笑ましい顔で見つめていたのを嫌がったのかと思つて、すぐに君彦は反抗的な顔に変わつて文句を言つた。

「な……、なんだよ猫又。オレが笑いながら見てるのが、そんなにおかしいかよつ！？」

すると猫又は左前足で口元を指すと、呆れたように注意した。

『卵焼き、焦げてるぞ』

「つー」

猫又の言葉に急いで君彦は振り向いた、見るとフライパンで焼いていた卵焼きは見るも無残な姿になつて黒い煙を上げている。

「わあわわわわわわわわわ、しまつたああああああああつー！」

どたばたと慌てふためく君彦の後ろ姿を目にしながら猫又は、ふんつと鼻を鳴らして満足そうに微笑んだ。

久々の登校、風邪気味、そして猫又が帰つて来たことで少し浮かれていた君彦は朝から料理を失敗して落ち込んでいた。

テレビを見ながら朝食を食べる、チャンネル権はなぜか猫又に奪われているが君彦は特に気にしていない。

いつものように「今日のにゃんこ」を見ながら、猫又は自分の方が賢いだの、この猫はまだまだなつていないとテレビに向かつて文句を言つてている。

そんな時でも君彦は学校に行く為の準備で頭が一杯になっていた、忘れ物はないか、宿題も提出するレポートも全部カバンに入れたが、たまにチェックする為にもう一度カバンを開けて確かめたりしている。

すると猫又は「今日のにゃんこ」と「今日の星座占い」を見終わった途端に、裏の硝子戸を開けてふらりと出掛けようとしたので君彦は慌てて声をかけた。

「……って、おい猫又っ！」

「お前どこに行くんだよ、一緒に学校行かないのかつー!?」

猫又が振り向くとそこには不安そうな君彦の顔が目に映つた、まるで親に見捨てられて泣き出しそうな子供みたいに、不安一杯の君彦の顔を見て猫又の胸が少しじだけちくりと痛んだ。

いつもなら適当にあしらつてそのまま出て行く所であつたが、ゴールデンウイークの間ずっと君彦に行き先も告げずに姿を消していたことを思い出した。

猫又は足を止めると、大きなガラス玉の瞳を大きく見開いて君彦を真つ直ぐに見つめると明るく振る舞いながら、とりあえず行く予定にしている場所をきちんと告げた。

『なに心配そうなツラしてんだよ、大丈夫だつて。もう行方をくらましたりしねえつて！

ちょっとくら涼子ん所に挨拶しに行くだけだ、犬塚の件で随分心配かけちまつたからな。

あいつも普段穏やかなだけにヒス起こしたら手がつけられなくなるからよ、お前も世話になつたんだろ？

一緒に礼言ひとくから、用事が終わつたらすぐ戻るつて

それだけ言つと猫又はもう一度君彦を見据えながら、最後に言葉を付け足した。

『だからそんな泣きそうな顔で見るなつて、心配すんなよ。
そんじゅ、……行つて来るぜ』

猫又の一叉の尾がピンッと上に立つて振り振りしている、その光景はまるで尻尾で手を振る仕草をしていくようだつた。

君彦はぐつと堪えながら、猫又に向かつて憎まれ口を叩く。

「だ……誰が泣くかよつ！

とにかく夕飯までには絶対に帰つて来いよな、約束だぞつ！

行つてらつしゃい

何だか照れ臭かつた。

考えてみれば猫又はいつも好き勝手に暮らしていたようなものだつたので、やつきのように出掛けの時猫又が君彦に向かつて「行つて来ます」と挨拶したことが、一度もなかつたからである。

だから君彦も家族に向かつて「行つてらつしゃい」と口にするのは、本当に数年振りのようを感じられた。

そんなくすぐつた経験を味わいながら、君彦は一人で学校へと向かつた。

猫又はまだ乾き切つていらない塙の上を歩きながら、猫娘の涼子が経営している居酒屋「猫目石」へ向かわずに別の方向へと向かつていた。途中お馴染みの野良猫に捉まつて適当に話をしながらも、後で猫目石に行くからと言い残して目的地へと急ぐ。

辿り着いた先はさびれた場所、誰にも手入れされていない高台になっている場所にぽつんと立てられた小さな祠。

猫又は祠の中に祀られている石造りの、赤い前掛けをしているお稲荷様の首にかかるついている鈴を前足で猫パンチすると、小さくちりんと音が鳴つた。

それから少しだけ後方に下がり、猫又は社全体を目を眇めるようにして様子を窺う。

すると先程鳴らした鈴から白い靄のようなものが現れて、それが煙のように上へ立ち昇つて行くとだんだん人の形を成していった。人の形をした靄は祠の側にある大きな石に座ると、今度は白かつた靄にうつすらと色や輪郭が少しだけはつきりしていく。

半透明で猫又の前に姿を現した人物は外見だけ見た限りではおよそ二十歳前後、黒髪の短髪に物腰穩やかそうな表情、甚平に下駄を履いた姿へと定着させた。

猫又はその人物を睨みつけながらも、どこか安心しているような表情になっている。

半透明の姿で現れた人物も田の前に座つている猫又を見つめ、軽く笑みを浮かべていた。

先に声をかけたのは猫又だった。

『よお、こうして会うのは何年振りになるだろうな。
なあ……？』

『征四郎』

征四郎と呼ばれた男は何も言わず、猫又に向かつて満足そうに微笑んだ。

猫又征四郎

地面に転がっている石に腰を下ろした状態で、田の前に座つてゐる猫又を見据える征四郎と呼ばれた男。

猫又は不満を露わにした表情で、征四郎に向かつて更に文句を続ける。

『何をそんなのほほんとしてんだよ、こいつら大変だつたんだからなつ!』

一又の尻尾の毛を逆立てるに尻尾は通常より倍の大きさにまでなり、猫又は征四郎に対する怒りがだんだん上昇して行くせいもあって最終的には威嚇する姿勢になつっていた。

『お前と因縁深い犬塚家のヤツまで出て来て、面倒臭えつたらなかつたつんだよつ!』

それもこれもお前が憎たらしい性格してつから悪いんじやねえか、おい聞いてんのか!?』

征四郎はまくしたてる猫又の姿を見て、静かに微笑むと穏やかな口調で話し出した。

『わかつてゐ、ちゃんと見てたさ。

だからこそこうしてお前は私に文句を言いに來ることが出来るし、君彦も無事だつたんだ。

お前が 、私の約束を果たすとわかつていた
からな』

両腕を組みながら満足げに語る征四郎に苛立ちを感じた猫又は、

憎しみをたっぷり込めた言葉使いで言い返す。

『見てたんなら何でお前が行つてやらねえんだよ、お前あいつのジ
ジイなんだらうがっ！

何で……つ！ どうしてあの時……つ！

オレがここに来た時……、何で今みたいに出て来なかつたんだよ

……つ！？

お前が君彦ん所に行つてやつやいいじゃねえか、……オレなんか
じゃなくてよおつ！』

猫又は君彦の家を出た後、この祠に向かつて問い合わせていた時のことを感じていた。

過去のこと、そして自分のことを君彦に突き付けられて逃げ出したあの日

吐くつむりのなかつた弱音を吐いて、結局救いの手が差し伸べられることがなかつたあの時……。

それを思い出すと猫又は悔しさで一杯になる、今じつは自分の前に。

笑顔で……、しかも平然とした態度で姿を現している君彦の実の祖父 征四郎に対して、猫又は激しい怒りと憎しみをぶつけようとしていた。

どうしても悔しくて堪らない猫又は眼光を鋭くさせ、征四郎の口から出る弁明の言葉を待つ。

征四郎もまた、そんな猫又の心中を察してか……すぐに答えようとせず両手を閉じてしばらく黙つていた。

一瞬だがその時だけとても静かで、清々しい気が流れたように感じる。

それからゆきくつとまぶたを開けて、猫又を見据えながら征四郎は語つた。

『私はすでに死んだ身だ……。

君彦の思い出の中でしか生きられない存在……、故に私自らが君彦に救いの手を差し伸べるわけにはいかないんだよ。

お前も本当はわかつているだろ。う。

靈力の強い者が、生と死の狭間に存在する者と深く干渉すると

亀裂が生じてしまう。

その亀裂は君彦に害をなす恐れがある、そつならない為に私が君彦に干渉するには慎重にならなければいけない。

何より私は今回の件に関しては最初から干渉するつもりは全くなかつたよ、必要ないとさえ思っていた。

それがなぜか、わかるか?』

そう言つて微笑む顔が君彦そつくりなせいで、猫又は少し調子が狂つたような表情をするとすぐにまたひねくれた顔を作つて反抗的な態度を保とうとする。

征四郎は片手で猫又を指さし、はつきりと言ひ放つた。

『それは猫又、

お前がいたからだ。

お前なら私との約束を必ず守ってくれると信じていたから、私はお前に君彦の全てを託した。

あの田……、お前は私にこう訊ねたな。

自分は君彦の為に何をしてやれるのかわからない、君彦の欲しいものが……望むものが何なのかわからないと』

その言葉に猫又はムキになつて答えていた。

回りくどく、まるで自分のことを小馬鹿にしているように聞こえたせいか、征四郎に言われる言葉の何もかもが癪に障つて猫又はつい腹が立つてしまふのだ。

『ああ、わかんねえよつ！ 今だつてそうだ！

オレはあいつに特別なこととか、特に大したことなんて何もやつてねえ！

あの時も言つたけどな、オレがあいつにしてやれたことなんて……せいぜい低級な悪靈があいつにまとわり憑かないようじ、周囲にマーキングする程度だつた！

でもそれだけだ、他に何が出来るつてんだよ！？

こんな血にまみれた化け猫が……、大切な飼い主の孫にハルの大切な者に何をしてやれる』

胸が苦しくなつて猫又の放つた言葉は、最後には震えて涙声に変わつていた。

それでも憎い征四郎の前では気丈に振る舞おうとあからさまにそっぽを向くことで、泣きそうになつているのを何とか誤魔化そうとする猫又。

当然そんなことはすでに見通している征四郎であつたが、あえてそれには触れず珍しく自分に自信を持つことが出来ない猫又に対して、征四郎はまたしてもはつきりと教えてやつた。

『まだわからないのか、お前は君彦にかけがえのないものを与えてくれたよ。

君彦も言つていただろう……、お前のことを家族としてとても大切な存在なのだと』

『……つづけ……』

その言葉を聞いて、猫又は昨日の記憶が蘇る。犬塚から自分を守るうと盾になる君彦、最後までつっぱねようとする猫又に向かつて君彦が真つ直ぐに言い放つた言葉。

「家族なんだつー！」

必死な顔で、今言わなければもう一度と伝えられないと思い詰めた君彦の、本心から出た言葉。

それを思い出した猫又はつづむき、どこか後ろめたこよくな雰囲気で小さくいほす。

『オレなんかが……、あいつの家族になつてもいいのかよ。だつてオレは君彦の家族を、死に追いやつたようなヤツなんだぞ！？ そんな化け猫が君彦の家族なんかになれるはずが、いや……なつていいはずが……』

落ち込んだ様子で小さく呟く猫又に対し、征四郎はこれまで穏やかだった態度から一変すると表情から笑みが消えた。

『お前がどう思つていようと、君彦自身がお前のことを家族だと言つてるんだ。 それのどじが悪い、いい加減つまらない罪悪感に囚われるな。 あれは 事故だつたんだ、お前のせいじゃない』

厳しい口調で猫又を諫めながらも、征四郎の表情には苦笑が滲んでいた。

(本当はそんな風に、簡単に割り切れるはずないだろうが。

……あれはお前の家族もあるんじゃねえかよ、無理しやがって

……っ！)

征四郎の辛そうな表情を読み取った猫又は心の中で反論したが、これ以上征四郎と揉めるつもりはなかったのであってそれは口に出さなかつた。気が重くなる話題が出て来たことで互いの間の空気が

張り詰めたが、しばらく沈黙が続いた後それを解くよつた形で猫又はおもむろに話題を切り出した。

『とこりでよ、さつきの亀裂の話があるから別にみなまで言いつもりはねえんだけど。』

お前……いつまでここに居座るつもりなんだ！？
あれからもう何年も経つが……、オレが見た感じじゃ別にこれといつた兆候は現れてねえぞ。』

まだ何かやばいのか？』

猫又は征四郎が座っているすぐ隣にある祠へと視線を走らせ、中に納められているお稲荷様に注目した。

それからまるで悲惨な記憶を思い出すような渋い表情になると、猫又は征四郎の方へと向き直り返答を待つ。

征四郎は遠くを見つめて何かを考え込むように押し黙る、まるで慎重に言葉を選ぶよつこしながら答える。

『せめて……、あの子に笑顔が戻るまでは待つつもりだ』

その言葉に猫又は首を傾げると、こともなげに言い放った。

『……いつもバカみたいにへらへらとよく笑つてゐるぜっ。』

猫又の言葉に征四郎は思わず吹き出し、肩を震わせながら笑いを必死で堪えようとする。

その態度にプライドを傷付けられたよつた気がした猫又は、かちんと来て思わず声を荒らげてしまう。

『な……っ、何だよ！ オレ、何か変なこと言つたか！？』

『いや、別に何でもない。悪かったな……猫又よ。

ただ、私が言ったのはそういう意味じゃなくて

てだな。

私はただ、あの子が本当の笑顔で笑える日が来るのことを……待ち望んでいるだけだ』

そう言ひながら征四郎は空を仰ぐ、梅雨にはまだ早いにも関わらず雨が続いているせいか今も空は雨雲に覆われていた。

猫又もまた征四郎と共に上を見上げて雨雲を見つめた、今にもぽつぽつと雨が降って来そうな天気である。

そんな曇り空を田にしながら猫又は、再び君彦に告げられた言葉を思い出していた。

罪深い自分のことを家族と呼んでくれたあの瞬間を、今にも降り出しあつの空を見上げながら想ひを馳せる。

(ナニこねばあの口も、雨が降つてたつけな……)

そう心の中で呟きながら、大雨の中で全身ずぶ濡れになりながら猫又に向かつて家族だと呼んでくれた君彦のことを思い出し、両手を閉じるとその光景が別の記憶を蘇らせた。

降りしきる雨の中、全身ずぶ濡れになつて、寒くて、お腹もペコペコで。

誰を待つているかもわからずひたすら鳴き続けていたあの田、彼女は目の前に現れた。

持っていた傘を自分の真上に差し出して、雨を凌いでくれた。それからとても優しい眼差しで、自分に手を差し伸べてくれた。あの手の温かさを、猫又は今でも忘れない。

「まあ、こんな所にこると風邪を引いてしまつわ。

良かつたら私の所へ来る？ ねえ、可愛い子猫ちゃん

そう言つて薄汚れた自分を抱いて、連れ帰つてくれた。

とても寒くてひもじかった自分にとつて、それは天の助けにも等しかつた。

震えながら弱々しく小さな声で鳴く自分に
食べ物を、住む場所を、名前を与えてくれた。
そして……。

ハルは自分のことを……新しい「家族」だと、そう呼んでくれた。

『思えばオレのことを家族だと呼んでくれたのは、いつもあんな風に雨が降つてる時だつたな……』

猫又にとつてこの世で最もかけがえのない愛しい女性、初めて自分に家族というものを教えてくれた大切な飼い主。

君彦の瞳は、ハルを思わせる程とてもよく似ていた。

大切な人と同じ瞳をした、大切な人の家族……。

猫又は例え自分の命に代えてでも 、愛する女

性が守ろうとしていた者を。

君彦をハルの代わりに守つてやりたいと……そう思つていた。

ハルと同じように自分のことを家族だと呼んでくれた君彦のこと
を、心の底から守つてやりたいと。

猫又は改めて 、 そう強く思った。

今日の1J機嫌

長い「ゴールデンウイーク」明け、部活をしていなかつた君彦は数日ぶりに登校していた。

思えば連休直前の君彦は慶尚のせいで猫又と喧嘩をしてしまい、挙げ句猫又が家出してしまつて精神的に重苦しい状態にあつたが、今の君彦はそんな重苦しさを微塵も見せていなかつた。

むしろ機嫌良く、いつもの能天氣な笑みを浮かべながら鼻歌なんかを歌つて学校へと向かつている。

そんな時四つ辻に差し掛かつた場所で奇妙なくしゃみが聞こえて来た。

「ふえーっくしょーーーー！」

まるでバラエティの「コントばかり」の派手なくしゃみ。
わざととしか思えないようなくしゃみに驚いた君彦は一体誰がしたのかと思い、くしゃみが聞こえて来た右側の道に目をやる。するとそこには鼻を真つ赤にさせて片手にはティッシュを持った響子の姿があつた。

君彦は鼻をすすりながら響子に挨拶をする。

「おはよう、志岐城さん。

えつと……その、もしかして志岐城さんも風邪引いたやつたの？」

先程までの能天氣な笑顔から一変、君彦はぎこちない笑顔になりながら恐る恐る声をかける。

別に響子のことが苦手だからといつ理由ではなく、響子が明らかに風邪を引いている様子を見て、それが自分のせいであると認識していたからその罪悪感により、無責任な笑みを放つわけにはいかない

いと自重した為だった。

響子は苦虫を噛み潰したような表情で君彦に田をやると、もつひとつ派手なくしゃみを放つ。

今君彦の目の前に居る響子は、君彦が初めて会った時の響子とは全く違っていた。

初めて会った時の響子は出来るだけ周囲の注目を浴びないよう、ひたすら地味な格好を演出していたのだ。

元々色素の薄い髪色をわざわざ黒髪に染めておさげにし、制服のスカート丈も膝より下、明らかに「イモい」格好をすることで自分の周囲に存在する男性から注目されないように努めていた。

しかし今ではそんな努力をしても結局無駄であることに気が付いた響子は地味な格好を封印する、髪色は元の茶髪に戻してウェーブがかつたロングヘアもおさげにせずそのまま下ろし、制服の着こなし方も普通の女子高生の如くスカート丈を膝上に戻していた。

君彦は特に女性のことを外見で判断してきたわけではないが、それでも今の響子は以前に比べるととても自然で君彦の目から見ても、どちらかといえば美人の系統に入っていると思つていた。

そんな風に思つている女性が加藤茶ばかりの大きなくしゃみをぶちかました所を見て、少しばかりショックを受けている。

響子は警戒する様子もなく、じく自然に君彦と共に歩いて学校に向かう。

恐らく本人達はさほど意識しているわけではないようだが、ほんの少し前のことを考えてみればそれは響子にとってつもない進歩であったが、残念ながら風邪の諸症状に苦しむ今の二人にはその変化に気付くことはない。

響子は鼻を嚙んだ後、横田で君彦を見据えると少し不機嫌な表情で返事をした。

「ええ、まあね。

見ての通りさつさからくしゃみが止まんなくして、イヤになるわ

「あはは……、そつか。

何が「めぐね、きつと昨日の出来事が原因……だよね」

君彦は申し訳なさそうに頭をぽりぽりと搔きながら、響子が癪に障らない程度に謝罪する。

すると響子は鼻をすすりながら平然と言い放つ、そこには厭味も照れ隠しもなかつた。

「別にあんたが謝んなくていいわよ、あたしが勝手にやつたことだし。

大体さ、猫又のヤツがいなくなつて困るのはあたしだつて同じなんだから……お互い様でしょ」

今日は機嫌が良いのか？

君彦は田を丸くして響子を見つめた。

てつくり「いちいち謝るんじゃないわよ、鬱陶しい」とか「元はと言えばあんた達が面倒臭いことするから悪いんでしょ」とか言わると、君彦は本氣で思つていたからだ。

響子が本来持つていたのであろう優しい一面に触れることが出来た君彦は、嬉しさの余り満面の笑みを浮かべて今度は感謝の言葉を述べようと前に進み出た。

思えば猫又が無事君彦の元へ戻つて来ることが出来たのは、黒依や響子……そして浮幽靈のカナのお陰でもあった。

だが昨日は色々なことがあり過ぎて、黒依や響子にきちんとお礼を言つことが出来ていなかつたことを思い出した君彦は、今こそお礼の言葉を述べるチャンスだと察して「じじやとばかりに響子の方へと詰め寄る。

「志岐城さん、それでもオレはすゞぐ嬉しいんだ！」

もしかしたらオレや猫又つて、志岐城さんにものすゞぐ嫌われてるものとばかり思つてたからさ。

でも昨日オレ達の為に雨の中すづ濡れになつてまで助けてくれて、本当に感謝してるんだよ！

志岐城さんがいなかつたら、猫又はもう一生戻つて来なかつたのかもしねないんだ。

本当なら昨日の内にちやんと言えれば良かつたんだけど……、本当にありがどづー！」

まるで君彦の背後から後光が差してゐるような、そんな純真無垢な笑顔を見せつけられて響子は硬直していた。

顔がひくひくと痙攣し、口はあんぐりと開いたまま。

響子に對して全く惡意のない男が目の前に……、そう考えただけで響子の胸が高鳴る。

あまりに慣れないう状況に耐えきれず響子は拳を震わせ、自分自身でも心から望んでいるわけじゃない行動に出てしまつ。

「だーーかーーらーーつー

男は近寄るなつて言つてゐる感じがあああああつーー！」

氣付いた時には君彦の頬を思い切り殴り飛ばしていた。

響子は今までの経験から「反射的に男を殴つてしまつ」という癖に、心底嫌気が差していくが後悔先に立たず。

結局いつもと変わらず、響子は自分の許容範囲内に迫つて来た君彦に対しても暴力を振るつてしまつていた。

心のほひ

始業ベルが鳴る少し前、教室のドアが開けられた時クラス全員が一気に注目していた。

それまではそれぞれグループ別に固まって雑談したりしていたが、教室に入ってきた張本人を見るなり突如として沈黙が教室全体を襲う。そんな中、沈黙を破ったのは君彦と小学生の頃から知り合いだった春山竜次だった。

「あああああっ！！ 猫又、一体どうしたんだ————っ！」

それまでたつた一人で席に着き孤独を装っていた竜次であつたが、完全にのびてている君彦を担いで教室に入つて来た慶尚を見て思わず椅子を倒して立ち上がつていたのだ。

慌てて君彦の元へ駆けて行くと慶尚の後ろにはバツが悪そうな顔で響子が立つてていることに気が付き、一気に竜次の胸がときめく。顔を真つ赤にして君彦のことを心配していたことすら既に忘れてしまっている様子だ。

声を荒らげ近付いて来た竜次に、慶尚は無関心全開の眼差しで目をやると突然背中に抱いていた君彦を下ろして竜次に託す。いきなり君彦を預けられて竜次はわけがわからず抱えると、慶尚と響子の方を交互に見て説明を求めた。
しかし慶尚に至つては説明すること自体面倒臭いのか、無表情のまま竜次に向かつて手を振る。

「それじゃ、後は任せた」

「 つて、オレが！？ 何で！？」

てゆうか猫又に一体何があつたんだよ、何でこいつ氣絶してんの

つ！？

竜次の叫びも空しく慶尚は全く聞く耳を持たないまま自分の席へと歩いて行ってしまった。

すると今度は教室の奥から、能天氣な黄色い声が響く。

「あ～～、君彦クンじゃない！

一体どうしたの～？ 何だかほっぺたがものすごい腫れてるナビ？」

黒依から放たれる言葉の一つ一つが響子の心臓を抉り、ますます居心地が悪くなってしまう。

しかしそんな響子の心中を察することなく黒依は満面の笑みを浮かべて、顔面蒼白になっている響子に話しかけた。

「もしかして君彦クンをノックアウトしたのって、志岐城さんだつたりするのかなあ？」

白々しい言い回しに響子はほんの少しだけ殺意を抱いてしまうが、黒依が言つてることは間違つていないのでその怒りを必死に堪えようとする。

「べ……別に悪気があつて殴つたわけじゃないわよ、ちよっと……色々あつて。

あたしが殴つたらこいつ気絶しちゃつてどうなかつて思ついたら、たまたま犬塚の奴が来て……」

「それで犬塚クンが君彦クンをここまで運んでくれたつてこと？」

響子の説明の後半部分を黒依が引き継ぐ。

異性に必要以上に近寄られると拒絶反応が現れて反射的に相手を殴ってしまう癖がある響子は、君彦を殴り飛ばしそのままノックアウトしてしまったのだ。当然男に触れることすら嫌悪感を抱いてしまう体质な為、気絶した君彦を介抱するどころか学校まで運ぶことすら出来ず、道の真ん中で立ち往生しているとたまたまその場に犬塚慶尚が現れたというわけである。

慶尚はその場の状態を目にしただけだが、特に響子に説明を求めるわけでもなく黙つたまま君彦を抱き上げてここまで運んで来た……というわけだ。

慶尚に対して良い印象を持つていなかつた黒依や響子は、既に自分の席についてぼくつとしている慶尚を見つめ、少しだけ見直していた。黒依は口元に指を当ててぼそりと呟く。

「へえ……、犬塚くんって案外イイ人なのかもしれないね」

黒依のその言葉に、響子はかつて自分も同じようと考えたことがあつたのを思い出した。

響子に取り憑いている色情靈を一時的に近付けないように出来る数珠を、5万円で買わされそうになつたという二ガイ思い出。それを思い出した途端、黒依が感じていることが気の迷いであることを教えようとも思つたが、その時ちょうど始業ベルが鳴つてしまつた為、響子は自分の教室へ帰らなければならなくなつた。

「あ、それじゃあたしは教室に戻るから。
その……、猫又のこと……頼んだわよ」

響子は少し照れくさむつに田代の前に居る黒依と竜次にそう告げる
と、黒依はいつものようににっこり微笑んで手を振つていた。

竜次は憧れの響子に君彦のことを頼まれ、必要以上に張り切つて
いる様子だ。

それから響子は自分の教室に戻り、竜次は君彦を肩に担いで保健室へと向かう。

「……ていうかコレ、最初から保健室に連れて行けば良かつたんじやないのか！？」

犬塚の野郎……わざとか！？ 保健室より教室の方が近いからとりあえずここに連れて来たってわけか！？」

竜次が君彦を保健室に連れて行つてる時、黒依は担任に事情を説明する為だと言って教室にちゃつかり残つていた。

その後、保健室のベッドで寝かされていた君彦が目を覚ましたのは、一時限目が丁度終わった頃だつた。

保健医の先生にお礼を言つてから教室へ戻る君彦、今は休み時間の為廊下には数人の生徒がたむろつている。

君彦は一時限目が始まる前に一度響子の教室へと立ち寄つた、休み時間のせいか教室のドアは開け放しになつていて君彦は覗き込むように顔を出す。すると廊下側の席に一人で座つている響子を見つけて、君彦は声をかけた。

「志岐城さん！」

その声に驚いた響子は笑顔を引きつらせて言葉を失つてゐる様子だつた、それも仕方がないこと。

またしても自分のせいだ君彦に怪我を負わせてしまつたのだから、さすがの響子でも罪悪感に苛まれて当然だつた。

しかしそれがわかつていてもどうしても異性に対して素直に謝罪出来ない響子が言葉を詰まらせていると、膨れ上がつた頬がなぜこうなつたのか忘れてしまつたかのように……、まるで何事もなかつたかのよつに君彦は笑顔で響子に話しかけた。

「あのさ志岐城さん、今朝言いそびれたことがあるんだけじね。

実は志岐城さんと黒依ちゃんに昨日のお礼をしようと思つて、みんなの分のお弁当を作つて来たんだよ。

前もつて伝えられなかつたから、志岐城さんも黒依ちゃんも自分のお弁当を持つて来てると思うけど、そんなにたくさんの量を作つて来たわけじゃないから、お昼休みまた一緒に屋上でお弁当食べようよ」

何の企みも悪意もない、そんな君彦の屈託のない笑みに響子はいつも戸惑つてしまつ。

今までなら自分に声をかけて来る異性は全員、響子に必要以上の好意を持つて接して来る。中には悪意を持つて襲つて来る者さえいたのだ、そんな出来事を過去に腐る程経験して来た響子は男の誘いなど全く受けける気になれなかつた。

そんな男性不信が響子の心をかたくなにさせていたのに、なぜか君彦だけは違つていたのだ。

君彦には響子に取り憑いている色情靈の色香が効かないという理由もあるにはあつたが、どうしてもそれだけではないような気がしていたのだ。しかしそれが一体何なののはつきりとした理由は分からぬ。

それでも響子は心のどこかで、なぜか君彦のことだけは信じられたのだ。

だから何の警戒心もなしに響子は、自分でも氣付かない内に頷いていた

とても素直に。

「……わかつた、それじゃ

昼休みに屋上ね

「よかつた！ 約束だからね、志岐城さん！」

約束を交わした君彦は始業ベルが鳴つた途端、響子に手を振つて

自分の教室へと戻つて行つた。

突然目の前に現れて約束をこじつけて去つて行った君彦に、響子

はただただ啞然とするしかなかつた。

わけのわからない安心感に浸りながら……。

天敵

昼休み、君彦は約束通り黒依と響子と共に屋上で弁当を食べようとしていた。

しかし天気がかなり怪しい曇り空だった為、屋上に出来る手前の踊り場で弁当を広げることとなる。

「天気が悪くて残念だつたね。

晴れ晴れとした青空を見ながらお弁当を食べたら、すゞく美味しい感じられただろうに」

君彦はいそいそと弁当の包みを広げながら女子一人ががっかりしないように明るい声を出す。

「そんなことないよ、天気に関係なく君彦クンが作ったお料理つてすゞく美味しいよ」

黒依は満面の笑みを浮かべて君彦を励ました、そんな黒依の言葉に君彦は天にも昇るような気持ちで舞い上がる。

(黒依ちゃん……っ！)

なんて君は心の優しいいい子なんだ。

そんな風に言つてもらえると、朝早くに頑張つておかずを作つて来た甲斐があつたつてもんだ！）

傍から見てもわかりやすいリアクションでテレテレになつてている君彦を白い目で見つめながら、響子は自分の弁当を黙々と食べ始めた。君彦は嬉しさの余り笑いが止まらない様子のまま、黒依達の前におかずが入つた弁当箱のふたを開けて薦める。

「嫌いな食べ物がなかつたらいいんだけど、とりあえず遠慮なく食べてよ。

これはオレからの心ばかりのお礼だからさ」

照れ臭そうに一人が食べてくれるのを待つ君彦、その時君彦が作ったほうれん草の胡麻和えを見知らぬお箸が捉えた。

一瞬にして硬直する三人。

見ると階段下からお箸を持つた手が伸びて、そのお箸で捉えた胡麻和えを口に運んでもぐもぐと食べる男が一人……。

「……美味しい」

「つて、何でお前が先に食べてんだああああああああ！」

絶叫に近い大声で君彦は声を張り上げた、階段下には身長を活かして君彦のおかずを奪つた慶尚が何食わぬ顔で平らげている。

突然の侵入者に黒依も響子も畠然として固まつていた、君彦は女性一人の為に作った料理を先に憎き慶尚に食べられて怒り心頭の様子である。拳を震わせながら田くじら立てる君彦に対し、慶尚は特に悪びれた様子もなく事実を述べた。

「お前からの心ばかりの礼なんだる、この料理」

「ああそうだよ！」

お前のせいで猫又が行方不明になつたから、黒依ちゃんと志岐城さんが心配して手助けしてくれたお礼だよ！」

君彦は憎しみをたっぷり込めながら慶尚に向かつて指を指す、い

つも温厚で穏やかな物腰だった君彦が慶尚を前にした途端にまるで別人のように性格が豹変したので、黒依も響子も少しばかり驚いている様子だった。

むしろ慶尚が突然乱入して来たことよりもずっと驚愕している。

君彦に取つて犬塚慶尚という男はどうしても許せない人物であつた、猫又との何気ない生活をぶち壊した張本人。

果てには猫又の命を狙い、自分に刀傷を負わせた危険人物

理由はそれだけでも十分であったが、なぜか君彦は慶尚のことが苦手で仕方なかつた。

顔を見るだけで胸の奥がむかむかしてくるのだ、クラスメイトに対してそんな態度を取つてはいけないとわかっていても、君彦は猫又の一件以来どうしても慶尚をすぐに許すことが出来ず、少し意地になつっていたかもしぬなかつた。

そんな君彦の心中など全く介せず、慶尚は淡々と言葉を返す。

「だからオレも今朝、気絶したお前を教室まで抱いで行つただろうが。

まあさつきの胡麻和え一口程度じゃ、礼の足しにもならねえけどな」

「そんなんオレは頼んだ覚えないっ！ しかも何て恩着せがましい奴なんだつ！

「だから、食うな！ あつ、今回のメインディッシュまで！」

君彦が罵る間もなく慶尚はどんどん箸を伸ばして弁当の中身をたいらげていった。

唖然とする黒依と響子に、君彦は遂に我慢ならず力強くでもこの

場から邪魔者を追い出そうと立ち上がる。

すると慶尚はある程度おかげを口にして少しは満足したのか、伸ばしていた腕を引っ込めて階段下から少し場所を移した。

「そりゃカリカリ怒るな、オレは別に喧嘩を仕掛けにここまで来たわけじゃないからな。

あ、もしかしてハーレム状態を邪魔されたくなくて怒つてんなら話は別だけど」

「え、ハーレムって？」

慶尚の何気ない一言に君彦の怒りは一気に消沈してしまつ、それからきょとんとした顔のまま自分の田の前で唖然としている黒依と響子の方へと視線を移した。

「両手に花の状態もハーレム状態つて言つのかなあ？」

黒依はあっけらかんとした口調で言い放つ、すると響子は心外とでも言つよう前に顔を真っ赤にさせながら激怒した。

「何バカなこと言つてんのよ！ べ、別にそういうつもりで二三日集まつてるわけじゃないんだからねつ！」

ただ単に弁当食べに来ただけじゃない！」

「そ、そりゃー オレ達が誰どビード弁当食べよつと自由じゃないかつ！」

失礼なこと言つたんだから一人に謝れよ、犬塚つー。」

ただでさえ響子は男に対して不信感を募らせている為、君彦は変な誤解を与えないように何とか言い繕おうとする。

ただでさえ響子は男に対して不信感を募らせている為、君彦は変な誤解を与えないように何とか言い繕おうとする。

すると慶尚は細かい事情を知つてか知らずか、君彦達が弁当を広げている場所まで階段を上つて来るとコンビニ袋に入つたパンとコーヒーを取り出して、自分もその場で食事をし出した。

「だから… 何でそななるんだよ！

てゆうか普通に入つてくんنつて、どんだけフリーーダムなんだお前はつ…！」

けたたましく声を張り上げる君彦に対し、少しだけ機嫌を損ねたように眉根を寄せながら慶尚が適当な言葉を放つ。

「ハーレム状態だつて思われるのがイヤなんだろ？

だつたらオレがこの中に入ればハーレム状態じやなくなる、問題解決だな。

あ、その火星人ワインナーくれ

「タコさんワインナーでしょ？　はい、犬塚クン」

黒依も黒依で慶尚のことを自然に受け入れてしまったのか、彼が要求したタコ型ワインナーの入つた弁当箱を差し出してしまつ。慶尚は普通に「サンキュー」と礼を言つて黙々と、当たり前のようく君彦が作った手料理弁当を平らげていつた。

その光景を目についた君彦はまるでこの世の終わりの瞬間を目撃したかのような表情で、まさにムンクの叫びの如き顔でショックを受けている様子だ。

（黒依ちやあああん！　なんでそんな奴の皿つひとと聞こちやうの…？

しかもそれ黒依ちやんと志岐城さんに食べてもらおうと、オレが朝早くに起きて一生懸命作つた料理なのにいづ…）

ショックを受けた直後、君彦は確信した。

まるで敵に対しても威嚇する猫の如く、目を光らせて今にも「シャアアツ」と言わんばかりの顔で慶尚を睨みつける君彦。

(敵だつ！ ） いつは紛れもなくオレの天敵だつ！

誰が割り込んで来ようと我関せずを貫くように終始笑みを絶やさない黒依、そしてちやっかりとグループの中に入り込んだ慶尚、そんな慶尚に対して敵意をむき出しにする君彦。

そんな奇妙な三つ巴風景を目にしながら響子は、内心アホらしいと思いながら君彦が作って来た手料理を口一杯に頬張った。

天敵（後書き）

久し振りにキャラクター紹介をいたします。

読まなくても今後の物語には一切影響しませんのでご安心ください。

犬塚慶尚、15歳、5月27日生まれ、AB型、身長186センチ。
いぬづかけいしょう

趣味は、AV機器や家電製品などの機械類。

好きな食べ物は、てつちり。

嫌いな食べ物は、特になし。

特技は、除霊・淨霊などの靈媒。

性格は、どこまでもマイペースで滅多なことでは感情を露わにしない。

黒髪で男前カット（笑）、肌の色は少し日に焼けていてアウトドアなイメージのある外見だが、実は意外にもインドアだつたりする。室内での過ごし方は主にPCでインター・ネットしたり、TVゲーム（主にアクション）をしたり、音楽（主に洋楽）を聴いたり、まつたり過ごすのが好き。

出掛ける際の目的地は決まって家電製品の品揃えが豊富な〇〇〇〇へ。

慶尚の実家は代々犬神を祀る神社で、祖父はその神主をしている。

家庭の事情により現在もまだ祖父が神主をしているが、本来は慶尚が後を継ぐことになつていて、しかし理由あつて慶尚はそれをかたくなに拒絶。

実家を出て一人暮らしを希望したのも、神主という役職を継ぐことに反発する為だという理由があるらしい。

慶尚に関する細かい事情は、今後物語の中にも出て来ます。

殆ど無理矢理ですが遂に君彦達のグループに、敵であるはずの慶尚が仲間に加わることとなりました。

敵意むき出しの君彦、二人の間にはまだまだトラブルが続きそうな予感がしますがどうぞ生温かい日で見守ってあげてください。

いつもたくさんのおアクセス、お気に入り登録ありがとうございます。今後も面白い話が書けるように執筆頑張りますので、更新を楽しみにしていてください。よろしくお願ひいたします。

意外な展開！？

君彦とが納得しないまま、結局慶尚は最後まで一緒に昼休みの弁当を食べていた。

もつとも慶尚が持参したものは数種類のパンとコーヒーだけで、物足りない部分は君彦が作って来た弁当で腹を満たしていた。

食事してる間も君彦はまだ猫又の一件を根に持っているのか終始ピリピリとして落ち着かない様子であったが、慶尚に至ってはもう過去の出来事として片付けられているのか全く相手にしていない。

そんな温度差が何となく面倒臭いと思つたのか……、黒依と響子は一人の関係を取り持とうとはせずに君彦が作って来た弁当をありがたく食べ続けていた。

そしてふと黒依が腕時計を見て、もうすぐ午後の授業が始まることに気付く。

黒依が腕時計見たのが合図となつたのか、その場にいた全員が君彦に向かつて口を揃えて礼を言つた。

「いじつけました、君彦クン！ すっごく美味しかったよ！」
「…………ちそうさま。お……美味しかったわよ、確かに」

「お粗末様でした」

「ちょっと待てええいつ！ 最後のヤツ、何だ！？」

人がせつかく精魂込めて作って来た料理を、この中で一番食つたクセにお粗末様だと！？」

約一名の礼の言葉だけ腑に落ちなかつた君彦は怒声を上げて指摘した。

しかし慶尚は怒り狂う君彦を見て見ぬフリするよつとわざと視線を逸らしている様子である。

その光景を見て響子は「もしかしたらわざと君彦を怒らせるよつ

なことを言つてるんじゃ？」という推測をしていた。

壁にもたれて両腕を組み、君彦が居る方向とは真逆に顔を背けて思い切り無視している慶尚。

そんな態度にも苛立ちを覚えた君彦はぶつぶつと文句を言いながら後片付けをする。

一応食事させてもらつた礼として片付けるのを手伝おうと思つた響子であったが、君彦があまりに手際よくてきぱきと片付けて行くので途中で自分の手と君彦の手が当たつてしまつたらどうしようなどと余計な考えが頭をよぎつて、結局話しかけることも出来ないまま後片付けが終わつてしまつた。

君彦は持参して来た弁当箱を片手に階段を下りて行くと、途中に立つている慶尚の方には目もくれずムスッとした表情でそのまま通り過ぎて行く。

他人に対しても怒りを露わにするというそんな珍しい君彦の様子を見て、響子は少し呆れながら驚いていた。

そんな君彦を目に多少動搖していた面もあつたのか、響子は思わずここにこしている黒依に向かつて小声で訊ねてみる。

「あ……あのさ、猫又があんな風に他人に対してもねちつこく怒つてる……なんてこと、よくあるの！？」

眉根を寄せながら君彦の状態を気にする響子に、黒依は終始笑みを絶やさぬ顔で明るく答えた。

「そうね～、滅多にないと思つよ？

君彦クンってすごく人が良いから、相当犬塚クンのことが嫌いみたいだね～」

「ち……、ちょっとあんた。

本人目の前にしてよくそういうこと言えるわね、逆にあんたの神

経験つわよ

じつと黒依と響子の方を見ている慶尚に注意を払いながら、響子は少し後ずたりしながら苦笑いをする。

だがそれでも慶尚はじつと見つめたままその場を動いたりしない、そんな時階段下の方から誰かが君彦を呼ぶ声がして何やら会話するような話し声が聞こえてきた。

一体誰が来たのかと思つて階段上から下を覗きこむと、モヒンモヒン君彦のクラスメイトの男子が立つている。

「猫又、今朝お前が気絶して春山に保健室に連れて行かれたらう? なんかその時のことで先生がお前に話があるみたいだから、職員室に来いってわ」

「え、一体何だら……?」

とつあえずすぐ職員室に行つてみると、わざわざありがとな

教師からの伝言を伝えるとクラスメイトはすべにその場を去り、君彦は上を見上げてわざわざの話を繰り返した。

「黒依ちゃん、志岐城さん、ごめん!」

何かオレ今から職員室に行かないといけないみたいだから、そのまま教室に戻つてくれるかな?」

(……犬塚のヤツが黒依ちゃんや志岐城さんになことしなきやいいけどな)

か弱い(?)女子一人を置いてその場を去るのが心苦しく思えたが、何やら急ぎの用事だと感じられたので君彦は後ろ髪引かれる思いで職員室へと向かった。

ひとまず自然と解散という形になつたが、黒依と犬塚は同じクラスで響子はそのまま隣。

解散といつても結局のところ田的は同じ方向といつてになるが、そもそもとまるで逃げるよつに響子は階段を駆け下りた。

(「いくら猫又と同じように色情靈の色香が通じないからって、男と一緒に教室戻るなんてごめんだわ」)

仮にも慶尚は響子の苦手な男であることに変わりはない、今までにも何度か出くわしたことはあつたがその時はずっと一緒に付き添つていたわけではなかつた。

まるで慣れ合つようになつて一緒に教室に戻るなんて響子にとっては我慢ならないことだったのである。

「悪いけどあたしも先に行くわ、それじゃあね！」

そう言つて響子はそのまま自分の教室へと戻つて行つてしまつた。君彦と響子が去つて行くのを見送る形になつてしまつた黒依と慶尚であつたが、気を取り直して黒依は慶尚に微笑みかけると敵意も何もない口調で話しかける。

「志岐城さんももう少し心を開いてくれたらいいのにねー、でもあれじゃ仕方ないか。

ま、そんなことより……あたし達も早く教室に戻らつかー！」

黒依は君彦のように猫又の一件について慶尚を嫌う態度を取ることなく、他のクラスメイトと接するように分け隔てなく言葉をかけた。しかし慶尚は変わらず無愛想な表情のままで黒依を見据えながら、低い声で呼び止める。

「待て、お前に少し話がある」

その声はまるで威嚇にも近い口調で、一瞬だけ周囲の空気がピンと張りつめた。

黒依は階段を下りる途中だつたので慶尚に背を向けたまま足を止める、それからいつもの笑顔で振り向いて明るく言葉を返す。

「え？ でも早く行かないと午後の授業に遅れちゃうよー？」

「お前の返答次第によつては早く終わる」

慶尚はさつきまでの緩い雰囲気から一変、威圧感を放つように仁王立ちすると黒依を鋭い眼光で睨みつけた。

あまりに態度が違つて見えたので黒依の笑顔がほんの少しだけ凍りつくと、観念したように体ごと慶尚の方に向き直る。

「もう、そんな風に睨んだら怖いよ犬塚クン。

話つて一体なあに？」

少しだけ間が開く。

空氣は相変わらず張りつめたままでほんの数秒が數十分に感じられた頃、ようやく慶尚が口を開いた。

「单刀直入に聞く、 お前は一体何者だ」

慶尚の言葉と共に、背後から犬神が姿を現す。

そして主である慶尚を守るように、犬神は威嚇する姿勢を取りながら慶尚の背後で唸り声を上げていた。

両腕を組みながら仁王立ちで立つたまま、黒依からの返答を待つ慶尚。

慶尚から何者かと問われた黒依は自分を見下ろす慶尚の方に向き合つたまま、それでも微笑みを絶やさなかつた。

お前は一体何者だ。

その問いに黒依は動じることなく、ただ笑顔のまま階段上から見下ろす慶尚を見つめていた。

慶尚の背後では犬神が威嚇するように牙をむき出し、黒依に何か動きがあればすぐにでも迎撃できる態勢である。

しかし黒依は敵意を見せることなくあっけらかんと聞き返した。

「いきなりどうしたの？、犬塚クン？

何だかそんな言い方されると、まるであたしが人間じゃないみたいに聞こえるよ？」

至つて明るい声で、先程の慶尚の言葉を冗談だと捉えるように笑つて言葉を返す黒依。

しかし慶尚に至つては笑み一つない顔で、まだ黒依に対して警戒を解いていなかつた。

黒依がすぐに白状すると思つていなかつたのか、慶尚はゆっくりと説明し出す。

なぜ自分が黒依に対して「何者なのか」と訊ねた理由を。

「オレが初めてこの学校に来た時、途中で会つた色情靈とは比べ物にならない程の邪悪な力を感じていた。

人の姿をしているが犬神だけは誤魔化せない。

犬神は古来より人に化けた物の怪を嗅ぎ分ける能力がある、それはかつて陰陽師に仕えていたと言われる猫又以上の能力だ。

その犬神がお前を邪悪な存在だと察知しているのだから間違いな

い。

現に気合いを入れて視れば、お前からは人間に化ける以前の名残を田にすることが出来る

淡々とした口調でそう告げる慶尚、すると黒依は顔だけは笑みを浮かべたままであったが突然黒依の周囲を取り巻く空気が変わり、慶尚と犬神は息を飲んだ。

まるで冷たい冷氣が発生したかのように、周囲の気温が一気に下がつて肌寒くなる。

気付けば慶尚が息を吐く度に白い息が出ていた。

黒依は微笑んでいた顔のまま、両手をしつかり開いて慶尚を見つめる。

射竦むような瞳の冷たさと力強さに慶尚は一瞬怯んで、ぞくりと背筋が凍つた。

犬塚神社で猫又と対峙した時でさえ、慶尚がこれ程動搖した姿はない。

それだけ今慶尚の目の前に居る黒依の威圧感は凄まじかったのだ。異質な空気を肌で感じながらも、慶尚は最後にトドメと言える言葉を突き付ける。

「お前本当は、
靈が見えているんだろ。

あいつに取り憑いている猫又の姿も見えているはずだ、違うか！？」

今この場に除霊用の刀は持つて来ていない、だがそれでも慶尚はここぞとばかりに黒依の正体を暴いてやろうと思つていた。
緊張感を抱きながら黒依の返答を待つていると、その答えは以外にもすぐ聞くことが出来た。

黒依は肩にかかる黒髪を手で払いのけながら明るい笑顔で返答する。

「バレてた？」

たつた一言、そのあつさりとした返答に慶尚は凄まじい殺氣のようなものを感じて一瞬金縛りに遭つたかのように硬直してしまつ。しかし腹に力を入れるようにして何とか体が強張つているのを解く。黒依はその場から一歩も動くことなく続けた。

「確かに犬塚クンの言う通り、猫又ちゃんの姿も声もずっと前からわかつてたよ。

他の幽霊達も見えてるし、声も聞こえてる。
でもね？ これでもあたしは人間として生まれてるんだよ？
確かに普通の人とは少し違うかもしねりだけど、でもあたしは…
…人間だよ」

人間だと言い張るには黒依を取り巻く力は尋常じやないと察している慶尚は、黒依の言葉を鵜呑みにせず未だ警戒を解く気配はなかつた。そして更に慶尚が言葉で詰め寄る。

「お前の狙いは何だ、猫又君彦か？
あいつに取り憑いてる猫又と同じように、あいつに取り憑いて命を奪う魂胆か」

「違うよ、あたしは君彦クンとお友達になりたかっただけ。
それにさ……仮に、犬塚クンが言うようにあたしが君彦クンを殺すつもりで近付いたら、君彦クンを守る猫又ちゃんが黙つてしまふ？」

猫又ちゃんもあたしのことには気付いているし、最初からわかつていたよ。

でもあたしが君彦クンには絶対危害を加えないって約束したから、

猫又ちゃんはあたしのこと信じて黙つてくれてるの。

あたしは誰にも危害を加えない、

本当だよ」

今まで笑顔で言い繕つてゐるよつて感じじられた黒依の態度であつたが、後半ではまるで慶尚に乞ひよう……自分の言葉を信じて欲しいという願いが込められていた。

それから黒依の周囲を取り巻いていた異様な雰囲気が消え去り、ずつと威圧感を感じていた慶尚の体も正常を取り戻す。

再び黒依は慶尚と、背後に居る犬神に向かつて言葉を投げかける。

「　　お願い、もう少しだけ……このままで居させて
欲しいの。

もしあたしが君彦クンに、他人に対して危害を加えようと/or>暴れたら……その時は遠慮なんかしないで。

猫又ちゃんにもそう言つてあるし、あたしは
の少しでも君彦クンと一緒に居られるだけでいいから。
どうしても返さなきゃいけない恩があるの！
それを果たすまでは、あたし……」

ほん

瞳がわずかに潤む、零れそつたなる涙を片手で拭つて氣丈に振る舞おうとする黒依。

すぐに笑顔を取り繕つて再び口の端を持ち上げて微笑みを保とうとした、慶尚はじつと黒依を観察するよつて眇めていると遂に時間切れ、始業ベルが鳴つてしまつた。

それが合図となり、一瞬で話を切る形になる。

「わかった、ともかく猫又も知つてゐるってんなら話は別だ。

一応猫又は危険な存在でないことを確認済みだからな、猫又に免じてここは放置しどく。

だがさつきお前が自分で言つたよつて、この先誰かに危害を加え

ようとしたその時は……いいな?「

「うん、それでいいよ。

あたしだって今まで、平穏無事に過ぎせるような存在だなんて……思つてないから」

その言葉には深い裏があるように聞こえた、しかし今は教室に戻る方が先決だと慶尚は考えた為あえて追及はしなかった。背後に控えていた犬神に目で合図するとそれに応えて犬神は姿を消す、それを同じように目で確認した黒依は階段を下り始めながら慶尚の方へと顔だけ向き直る。

「やっぱり犬塚くんは、いい人だね。

今だけでもあたしのこと信じてくれて、……ありがとう

どこか寂しげな口調でそう言つと、黒依はそのまま振り返ることなく教室へと走つて行ってしまった。

黒依の背中を見送りながら慶尚は少しの間、考えに耽る。

「猫又君彦……、随分と厄介なものにばかり取り憑かれたものだな

わざかに笑みをこぼす慶尚、どこか面白がるようこそして少しだけ君彦に対しても興味がわいたかのように慶尚は滅多に見せない微笑みを浮かべていた。

不器用ロマンス

君彦達が住む四丁目を見渡すことが出来る程の高台、雑木林が生い茂り住民の殆どは足を踏み入れることのない小高い山。

特に見晴らしの良い場所に造られた祠の前で猫又は君彦の祖父である猫又征四郎と話をしていた、祖父といつても今現在猫又の目に前に居るのは靈魂という存在であり、外見は老人の姿ではなく能力が最も充実していた頃の一二十代半ばの姿で現れている。

犬塚との一件について一通り話し終えた猫又が、今度は世話になつた猫娘の涼子の所へ行こうとした時……珍しく征四郎の方から猫又を呼び止めて話しかけて来た。

『そついえば猫又よ、時にお前……最近能力の方に異変はないか?』

突然わけのわからないことを聞かれた猫又はふと足を止めて、二又の尻尾を左右に振りながら振り向いた。

『あん? 能力って……神通力のことか?
まあ全盛期の頃に比べれば多少の衰えは感じてるけど、別に何か問題があるつてわけじゃ……』

そう言いかけた時、猫又は急に慶尚との戦いの時に感じた違和感を思い出す。

(待てよ、そついえば犬塚の野郎と交えてた時にいつも以上の衰えを感じたな。

まるで神通力そのものがオレの中から失われたみてえに、でなきやこのオレがあんな犬つころに差をつけられるはずがねえ。

いつからだ! ? いつから能力の衰えを感じた

！？）

猫又が征四郎の言葉により自分の異変に気付いて必死に記憶を辿つていると、征四郎は静かな口調で注意を促した。

『お前、しばらくの間は君彦から離れるんじゃない。
出来る限り側にいて本調子に戻るまでは……そうだな、それまで
は犬塚君と一緒にいなさい』

『はあっ！？

君彦に付きまとつのは別に我慢出来るからいいとして、なんでこのオレが犬つこひと一緒にいなくちゃいけねえんだよ！？』

猫又はプライドを傷付けられたように驚愕した表情になると、「冗談じやないと言わんばかりに征四郎に向かつて威嚇した。
しかし猫又がどんなに威嚇しようと全く構うことなく征四郎はマイペースに言葉を続ける、そこに猫又の意思は関係なかつた。

『お前が感じている神通力の衰え、恐らくそれは君彦と距離を離してしまつたことが原因だろう。

元の状態に戻すには常に君彦の側に控え、一又の尾に神通力を蓄積させなさい。

そうすればまた全盛期のような能力が戻るはずだ、猫又という物の怪は年数を重ねる毎に力が増す妖怪だからな。

お前が本当に邪悪な物の怪達から君彦を守りたいと思つなら、まずは自分の状態を整えることだ。

でなければ犬塚君と戦つた時のように力及ばず、君彦を巻き込み、果てには自我を失つた猫神と化してしまつだろ？からな』

諭すような口調で説明する征四郎に、猫又はきょとんとした顔で

先程の言葉を繰り返した。

『え……、猫神？』

猫又の鈍い反応に征四郎は小さく溜め息をつくと、困ったような表情で事の顛末を猫又に教えてやる。

『やはり覚えていないか。

神通力の不足によつて不利な状況に陥つた時、お前は君彦に救われただろう。

そこで傷を負つてしまつた君彦を守りたい一心でお前は我を失い、一時的にだが猫神化したんだよ』

征四郎の言葉を最後まで聞かず、猫又はガラス玉のような大きな瞳をキラキラさせて興奮し出した。

『……ってことは、ようするにだ！

一時的だらうと何だらうと早い話が、このオレが猫神化したつてことだろ！？

本当に猫神になれたんだなっ！？

だつたら何を心配する必要があんなどよ、オレはよびつと長い間猫神化する為にここまで来たようなもんだ！

やつとその苦労が報われたんじゃねえか！

よし、やつたぞ！ これでオレは……っ！』

『まあ待て、落ち着くんだ猫又』

猫又の喜びを余所に征四郎の顔から優しげな雰囲気が消えて、まるで子供を叱りつけるような厳しい表情へと変わる。

そんな征四郎の態度に猫又は自分の喜びを台無しにするつもりな

のかとでも言つたりに、非難に満ちた顔で反論した。

『何だよ、お前だつて言つただろうが！

オレが猫神化することが出来れば天に認められた証として、この身に受けた穢れを祓うことが出来るつて！

それとも何か、今になつてこのオレが猫神化することに反対するつてんじやねえだらうな！

オレはこの田をずっとと夢見て来たんだ、オレの最終目標を邪魔すんじやねえよ！』

『そつは言つてないだろう。

ただ私が問題にしているのは、お前が猫神化した時の状態が完全に自我を失つた状態だつたということだ。

あの時は君彦の呼びかけに応えて何とか元のお前に戻れたからいものの、もし君彦の声が届かなかつた時は……。

もしかしたらあの場に居た者全員、……、お前の手で消失させられたかもしれないといふことだ』

征四郎の重い言葉に猫又は硬直した、さつきまでの喜びが嘘のように静まり返り言葉を失つっている。

『え、それつて……、一体どうこいつだよー？

なんでオレが君彦達を』

『本来、猫又という物の怪が猫神化する場合……何千年といつ長い年月を要する。

しかしお前は自らの力で道を切り開き、短期間で猫神化することを望んでいる。

お前は今までの野生の猫又達とは勝手が違つ。

だからこそ何の準備もなく早急に猫神化することはとても危険な

んだ。

今は焦ることなくしつかり神通力を蓄えて、時期を待て。
お前と君彦との繫がりがお前を正当な猫神化へと、きっと導いてくれるはずだ。』

『……征四郎』

それだけ猫又に告げると征四郎は腰を下ろしていった大きな石からゆっくり立ち上ると、重苦しく空気を払拭させるかのように話題を切り替えた。

『そういえば猫又よ、この町の物の怪達とは仲良くやつているのか？
お前は不器用で社交的な性格じやないからな、何か問題を起こしてないかと心配してるんだが』

につこうと意地悪そうな笑みを浮かべる征四郎に、猫又はケツと地面に唾を吐き捨てる。征四郎を小馬鹿にしたように反論した。

『オレはお前みてえなお人好しじやねえんだよ！
この町のヤツ達はな、このオレの圧倒的な力によつて恐怖を植え付けてやつてるから誰も逆らつたりしねえんだよ！』

オレ様が右を向けて言つたら全員右を向くし、上等な酒を持って来いつて言つたら全員死に物狂いで献上してくんだ！』

『それはそうと何て言つたかな、お前のこと慕つてゐる猫娘の涼子ちゃんは元氣か？

彼女の元へは挨拶しに行かないのか、随分世話になつてゐるんだらび』

『オレの話聞いてた！？ 何思い切り自然にスルーしてんだよ、ち

よつとは訝しんだりしろよ！

言つてゐこつちが恥ずかしいじゃねえかこの野郎がつ！

あることないこと言い放つた自分が恥ずかしく思えた猫又は、まるで顔を真つ赤にして照れているように見えた。無論猫又は猫なので全身毛むくじやらの顔が真つ赤に見えることはないのだが……。

それでも征四郎は聞き流す部分はしつかりと聞き流して、猫又と涼子の関係を興味深げに聞いて来た。

猫又は少しむくれた顔で適当に答える。

『この後涼子の店に行く予定だよ、一応君彦も世話をなつたみでえだからな。

本当は行きたくねえんだけど……、あいついちいちひりせんせえし。こないだまで何も言わずに姿くらましちまつたから、ビラせ会に行つた所で小言言われるに決まつてら。

あ～あ、どうして女つてえのはああもグチグチネチネチとしつこいのかねえ！

特にあいつのヒステリーには頭が痛くなつてへらあ、ちつたあ女らしくなればそれなりに……』

『それなりに……、何のかしら？ 猫又さん

一瞬にして猫又の背中の毛は逆立ち、尻尾は一倍に膨れ上がる。両目をこれでもかとこいつ程大きく見開いて全身から大量の汗が噴き出で来るようだつた。

恐る恐る声のした方へ振り向くと、そこには一升瓶と風呂敷包みを持った猫娘の涼子が満面の笑みを浮かべて立つている。

『り……、涼子……？ なんでお前ここに……！？』

しかし猫又には田もくれず、つんとした態度で無視すると祠の前で苦笑いを浮かべる征四郎の元へと歩いて行った。

『どうも征四郎さん、お久し振りです。今はこんな姿にまで成長したけれど、あの時お世話になつた猫娘の涼子です。

あ、これ……差し入れですわ』

そう言つて手に持つていた一升瓶を征四郎に渡すと、征四郎は苦笑いを浮かべたまま素直に受け取る。

『おや、ありがとう涼子さん。それよりいつもありがとひ、ここに祠に来てたまに掃除をしてくれるのは涼子さんだわ。いつも悪いね』

征四郎の言葉に涼子は嬉しそうに微笑むと風呂敷包みからお猪口を取り出し、それを征四郎に渡すと涼子は一升瓶を受け取つて封を開けるとお酒を注いだ。

『この町の恩人さんだもの、それ位は当然よ。むしろウチ達にはこれ位しか恩を返せないから、もじかしくつて。どこの誰かさんはのらいくらいとしてるだけで頼りないつたらないわ、ホントやんなつちやつ』

『……ぐつ』

明らかにイヤヤミに猫又は何も言つ返せずに、仲良くお酒を酌み合つて征四郎と涼子を恨めしそうに睨みつけた。

それから猫又は手持無沙汰のまま、一人の会話に入ることもその

場から去る」とも出来ず、延々と涼子からのイヤミを聞かされる羽目となる。ようやくイヤミの嵐から解放されたのは涼子が差し入れに持つて来たお酒が半分にまで減った頃。

残りは祠の中に祀られているお稻荷様へと捧げた。

『それじゃ私はこれで失礼するよ、猫又への説教も済んだからね。涼子さん、こんなヤツだが君彦共々よりしく頼むよ』

征四郎は優しい表情で涼子に猫又と君彦のこと話を託した、涼子はしおりしく微笑むと快く引き受けた。

『当たり前よ征四郎さん、猫又さんのことほとんどかく……君彦さんのことは任せちゃうだいな。

君彦さんはとてもいい子に育つてるから苦労する』とはないけれど、ウチ達で見守らせてもらいます。

安心してくださいな』

(……けつ、なんだよ涼子のヤツ！)

オレの前ではそんな風に大人しく言つこと聞きやしねえくせに、
征四郎の前ではやけに素直じゃねえかー)

腑に落ちないという顔で猫又がブツブツと文句を垂れていると、
征四郎はそんな猫又と涼子を交互に見つめながらおかしそうに笑み
を浮かべ、それから最後に猫又に向かってもう一度念を押した。

『いいな、猫又。

調子が戻るまではずっと君彦の側にいるんだぞ。

それから何かあった時の為に、必ず犬塚君と行動を共にして助け
てもいいなさい』

『あーーあーー、わーかつてるって言つてんだ奴うー。

他に話つことないならさつと行つてしまえよ、小つるをこつたらねえゼー。』

『ちよつと猫又さん！ 征四郎さんに向かって何で口の悪き方ー。』

『「ぬせえー、ここにほこれ位がちょいびこいんだよー。』

征四郎と涼子が仲良くしていたこと、そして慶尚と一緒にいると念を押されたことで完全に機嫌を損ねた猫又は荒っぽい口調で怒鳴つた。涼子は両腕を組んで呆れたように溜め息をついている。

そんな二人を見つめ、征四郎はその場からすうっと消えて行った。征四郎の姿が完全に見えなくなつて、少しの間沈黙になる。それから数秒して、その沈黙を涼子が先に破つた。

『ねえ猫又さん、……どうか体の調子でも悪いの？』

先程の征四郎の言葉を聞いて少し気になつていた涼子が心配そうに、猫又に訊ねた。

しかし猫又はまだ腹の虫が治まつていなか、ぶつ毛りぼつて言葉を返す。

『別に何でもねえよ、お前には関係ないだろうが！』

そんな冷たい言葉が涼子の心を傷付けたのか、いつものように勝気に反論してくると思いきや涼子は急に大人しくなつてしまんぼりと肩を落としていた。悲しそうな瞳で猫又を見つめる涼子、その目は心底猫又の身を案じている女性の眼差しであった。

涼子につらく当たつてしまつたかと思つた猫又は少しバツの悪い顔になると、涼子から視線を逸らして今度は少し柔らかい口調で言

葉をかけた。

『だから、お前に心配されるようなことじやねえつて言つてんだよ。その……アレだ、ただ単に風邪気味なだけだつて』

少し寂しげに肩を落とした猫又が涼子に心配をかけまいと、不器用に理由を言い繕つ。

そんな猫又の気持ちに触れたのか、涼子は心配そうな表情のままであつたが、それでもくすりと小さく笑つて猫又を抱つこした。

『それならウチの熱燗でも飲んで体を温めるといいわ、このまま猫田石に直行ね』

『ちよ、降らせつて！ こんな格好、他の奴等に見られでもしたら！』

『あら、別にいいじゃないわ。

猫又さんは病気なんだから、ウチがお店まで運んでもげる』

照れ臭そうに暴れまくる猫又を両手でぎゅっと抱き抱える涼子に、なおも暴れながら抵抗する猫又であつた。

『はーーなーーはーーーー！ こんな姿を君彦にでも見られたら死んじまつひつひつひつ..』

夕方、四十田の高台にある祠で君彦の祖父である征四郎と一緒に話を終えた後、その場に現れた涼子と共に物の怪御用達の居酒屋「猫目石」に直行していた。

数日もの間、行方をくらましていた猫又のことを心配して、多くの物の怪や幽霊、野良猫達が集まつてちょつとしたお祭り騒ぎになります。このまま朝までどんちゃん騒ぎをしてようと思巻いていた連中であつたが、主役である猫又の言葉によつてそのテンションは一気に静まり返つてしまつた。

『そんじや涼子、悪いけどオレは先に帰るぜ。
酒ありがとな』

そつけなく言つと猫又は特等席であるカウンターの席からジャンプして床に飛び降りると、そのまま出口へと向かう。カウンターから大忙しじつまみを作つていた涼子が慌てて声をかける。

『え、猫又さん！？ もう行っちゃうの！？』

涼子の声に猫又が帰らうとしていることに気付いた物の怪達は、はじそつて猫又の方に注目すると口々に引き止めた。

『そりやないよ猫又さん！
せつかく町の英雄さんが帰つて来たつてのに、もう行っちゃうんですかい！？』

坊主頭に子供用の着物を着た一つ田の少年が、涼子の作った団子

を口一杯に含みながら声をかける。

『みんな猫又さんが無事に戻つて来てくれて喜んでるんだ。
もう少しゆづくりしてたらどうだい！？』

同じよつに全身茶色い毛むくじやらな姿をした物の怪も、お酒の
入つたお猪口に向かつて舌を伸ばしてぴちゅぴちゅと飲みながら
応猫又を引き止める。

その場にいたおよそ半数は、猫又の帰還祝いを喜んで参加しているわけではなく、それicamente来る酒や食べ物につられてやって来た者が殆どだと最初からわかつてゐる猫又は、特にそんな態度を気にしていいせいか……彼等の相手をすることなく振り向き、とりあえず世話になつた涼子にだけ挨拶がてら理由を話した。

『君彦の奴が夕飯まで帰つて来いつてつむさいからよ。
いいで酒や食い物をたらふくもらひわけにはいかないのか、そう
こうひつた。』

とりあえずこの後はお前達で好き勝手に楽しんでな

何の未練もなくそう言つて放つた猫又はそのまま玄関の方に向き直つて、一又の尻尾だけ振り振りと左右に振つて合図を送る。
涼子は少し寂しそうな眼差しで見送る。

『そんじゃ猫又さん、また明日なー！』

猫又のお陰で今夜の酒にあり付けた物の怪達は、感謝を込めて猫又に手を振つた。

硝子戸が閉まつて猫又が出て行つた途端、涼子はキツと鋭い眼差しに早変わりして店内の客全員を睨みつける。

『本当にあんた達は！ 猫又さんがいないんじゃあんた達、単なるタダ飯食らいじゃないさつ！』

猫又がいなくなつた途端、店内の客に向かつて涼子の怒りが爆発するもこの店の常連客が何とか彼女を宥めたことによつて、何とか涼子の鋭い爪による引っかき傷を負う客が出ることはなかつた。

夜、何とか夕食の時間までに戻つて來た猫又は玄関の前で一旦立ち止まると、両の前足を口元に持つて行つてはあゝっと口臭を確認する。息を吐き出した後ぐんぐんと匂いを嗅いで、お酒臭くないことがわかると猫又は「よし」とすました顔になつて、家の中に入つて行つた。

裏口にある小さな硝子戸は猫又の為に常に開放してあり、そこから家中に入ると目の前にハンドタオルが置いてある。

猫又はそのハンドタオルで前足と後ろ足を搔くようにして適当に砂や汚れを拭き取つた。

これは猫又が好き勝手に外出する際に足の裏に付いた汚れを拭き取つてから家中に入るように、君彦から耳にタコが出来る位教えられた猫又家の作法だつた。

こまめに部屋の掃除をする君彦のこと、この作法を守らなかつた時の説教は征四郎の上を行く位、君彦はとても口うるさい。

最初の内は適当に誤魔化したりしてやり過ごそうとしていたが、段々飽きることなく長い説教を続けて来るのでさすがに猫又の方が折れて、今は君彦の言つ通りに足の裏を綺麗にする作法だけは毎日きちんと守つていたのだ。

猫又は前足の肉球を見つめて、とりあえず砂などが付いていないことを確認するとくんくんと鼻を動かす。

台所では君彦がエプロンを付けて夕食を作つていた。

飼い猫のように首に鈴を付けていないので、猫又が帰つて来たことに君彦はまだ気付いていない様子だ。

猫又は忍び足で畳の上を歩いて行くが体重のせいで、普通の猫のように音もなく歩くことが出来ず、みしみしとわずかに足音を鳴らして歩いて行つたのをすぐに帰つて来たことが君彦にバレてしまった。

君彦はちょうど味噌汁を作つていて、おたまに味噌汁を少しだけ入れて味見をしながら振り向く。

「あ、お帰り猫又。

ちょっと待つてろよ、これが終わつたら夕食だから」

猫又のことを自然に笑顔で出迎える君彦。

それから味噌汁を味見して顔に笑みがこぼれるとそのまま火を消してお茶碗にはご飯を、そしてお皿にはおかずをよそつてトレイに乗せると一間の部屋へと運んで行つた。

猫又は君彦が一間に来るまでにテレビを付けて、好きなお笑い番組がやつてないかチャンネルを順番に押していく。

「ほら、お前の分も入れるから」

夕食はいつも一緒に食べるので、君彦は自分の分をテーブルに並べたら今度は猫又の夕食を出す為に冷蔵庫を開ける。

猫又も毎日の繰り返しのように自分の夕食が出て来るのを待つた。すると君彦は冷蔵庫から缶詰めを取り出す時に妙な笑みを浮かべてこっちを見ているので、猫又は気持ち悪いものを見るような目で君彦を見る。

「ふつふつふつ、猫又。

今日はこのオレに感謝するといい！」

勝ち誇つたよつた君彦の言葉と笑みに、猫又は呆れた顔で聞き返した。

『はあ？ だから一体何なんだよ、氣色悪いな』

暴言を吐く猫又であつたが、今日の君彦はどうか機嫌がいいのか。そんな暴言には耳を傾けることもなく、にっこり微笑んだまま持つていた缶詰めを猫又に見せつけた。

『……ん？』

猫又は見せつけられた缶詰めを手にして、一瞬動きが止まる。それからゆきりと口を大きく開いて、今にもアゴが外れそうな位にあんぐりとさせて大きな瞳を更に大きく輝かせた。

『や……、や……、君彦おおおおおおおおおおお……』
『や……、これはああああ……』

驚きの余りそれ以上言葉に出来ないのが、あつあつと震えながら田の前に差し出された缶詰めに向かつて、まるで崇めるよつた大袈裟な態度で缶詰めと君彦を交互に見つめた。

異常な程に驚いている猫又の反応を見て満足したのか、君彦もまた両手を輝かせて口にする。

「やうだよ、お前がずっと前から食べたがつてた高級缶詰め……モンブティだ！」

色々な味があつたけどお前、ミヤオの中ではまぐろ味が一番好きだつたら？

だからといあえずまぐろ味にしてみたんだ、もうすこしこ高かつ

たんだからな！？

でもお前が帰つて來た『褒美だと思えば安いもんだよ。

ちょうどバイト代も入つたばかりだつたし！

毎日は無理だけども、バイト代が入つた時のお祝いとして毎月一回だけなら貰えるから。

有り難く思えよ、猫又！』

猫又と同じようにとても嬉しそうに話す君彦。

そんな君彦の優しさに触れた猫又は瞳をうるわせながら感動で全身を小刻みに震わせていた。

そしてあまりの嬉しさに本来の斜に構えていた性格を自分で忘れてしまつたせいか、感激の余り思わず君彦に向かつて甘えた声を出してしまつ。

『こ……こや~~~~んつつ……』

こつもふとくされたようにムスッとした顔ばかりしていた、あの猫又が……。

初めて君彦に向かつて見せた、猫又の両目を輝かせた可愛らしい顔と甘い鳴き声……。

甘えた姿を見せたことがなかつた猫又の今の姿を見て、君彦はほんの一瞬だけ戸惑つたがせつかく心を開いてくれた猫又に悪いとい、顔には出でず心の中にしまい込んだ。

今日は特別に缶詰めの中身全部をお皿に移して、スプーンでよくほぐしてやる。

今か今かと待つてゐる猫又のお座りしている姿を見つめながら、君彦はその姿が本当にただの猫みたいに見えて初めて憎たらしかった猫又のことが可愛く見えた。

(何だ……、こつでもこつまで素直な態度を見せぬ)ってあ

るんだな。

猫又に對してこんな風に思つのつて初めてだけど、いひして見た
ら（こつもなかなか可愛いじゃないか）

君彦は心の中でそんな風に思いながら、モンブティをぼぐし終え
ると猫又に向かつて微笑んだ。

「ほら、お前が先に食べてみる。

猫用缶詰めの中で一番高いやつなんだからな、しつかり味わって
食べへんよ」

言い終わる前に猫又は待ち切れないと言わんばかりに既にガツガ
ツとがつづいていた。

さつきまで可愛らしかった猫の姿から一変……今は三日間何も食
べてないハイエナのよう、ものすごい勢いで食べる猫又の姿に君
彦は嬉しいやら醜いやら複雑な気持ちになつた。

しかしそれもつかの間、食べ始めて五秒と経たない内に、突然猫
又はピタリと動きを止める。

がつづいたのはモンブティを五口程食べただけ。

それから徐々に何かを考え込むような感じでゆつくつとお皿から
距離を離して、もうごと口だけを動かしている。

そしてじくんと口の中できみまくつていた物を飲み込むと、うつ
むいたまま何も言わない。

不思議に思つた君彦は、モンブティの余りの美味しさによく味わ
つて有り難がつて食べているものと思い、感想を聞いた。

「どうだ？ やっぱ高級食材は味が違うか？」

期待に満ちた微笑みで猫又からの感謝の言葉を待つ君彦。
しかし返つて来た言葉はあまりに残酷で酷いものであった。

一瞬にして訪れる沈黙。

君彦は猫又が発した言葉を聞き間違えたのだと思い込み、もつ一度顔をひくひくさせながら訊ねる。

「……え？

よ、よく聞こえなかつたな。今何て？

これものすゞく高かつたんだぞ？ いつも買つてるミヤオの4倍の値段だぞ？

今氣のせいかマズイ……つて、まさか！
オレの聞き間違いだろ、そだら！？

何とか言えよ猫又～～～つーーー！」

今にも怒りで飛びかかりそうになりつつも必死で理性で抑え込みながら、君彦は口元を一文字に引き締めながら問いただすような眼差しでもう一度猫又の反応を窺う。

すると猫又はすっかり目の前に残つたモンブティに興味がなくなつたのか、呑気に前足をぺろぺろと舐めて目線を泳がせながら、あつけらかんと正直な感想を述べた。

『ま、所詮は人間が作った食材だつたつてことだな。

猫の気持ちを全然理解してねえ、ただ脂身乗せりやいいつてもんじやねえんだよな～。

これでもオレ様、コレステロールとか気にしてるからよ。
こういつたギトギトしたのは好みじゃねえの、これ以上食べたら胸やけしそうだ。

高いつつつてもこんなもんなら、今まで食つてたミヤオの方がまださつぱりしてて美味かつたな。

あ、君彦！ もつモンパーティ買わなくていいから。
オレが一番好きなまぐろ味でコレなら、他もたかが知れてるから
な』

それがトドメであった。

猫又が次々と素直な感想を述べる毎に、君彦の怒りのボルテージはどんどん上昇して行き、猫又が最後まで言い切った頃には完全に君彦の堪忍袋の尾は切れてしまっていた。

頭に血が上った君彦は怒り心頭の顔で、猫又に向かつて怒鳴り声を上げる。

「もお～～～お前には何も買つてやらないからなああああ～！」

『な……っ、何だよ！

オレはありのままを述べただけじゃねえか、何でそんなにブチギレてんだよッ！？』

「もう知らん知らん知らーーーんっ！

お前みたいにワガママな猫はもう知らーーーんっ！..」

不機嫌な朝

君彦の朝は早い。

それは学校のある平日だけではなく、学校が休みの日も君彦は毎朝六時には必ず起きていた。

本日学校は休みであり、君彦はいつもと変わりなく起きて朝食を食べ終え、朝の洗濯をしていた時。

何やら隣が騒がしいことに気付き、君彦はふと首を傾げた。

「おかしいな、確かに右隣の部屋は空室だつたはずだけれど。大家さんが掃除でもしてるのかな？」

君彦は特に気にすることもなく洗濯機を動かしている間、部屋の掃除を始める。

その時、やはり隣から何か大きな物音が聞こえてきたのでどうしても気になってしまふ君彦は、掃除する手を止めて隣の部屋の様子を見に行くことにした。

「随分大きな物音だし、もしかしたら大掃除とかしてるかもな。大家さん一人じゃ大変かもしれないし、何か手伝えることがあるかもしれないからちょっと行ってみよう」

君彦は部屋を出て行く前に猫又の様子を窺う、君彦と違い猫又の朝は遅い。

基本的に猫は夜行性であるが猫又の場合は更に妖怪ということもあり、君彦が学校を休む日の朝だけはとても弱かつたのだ。

一応起きてはいるがまだ寝惚け眼でテレビをぼんやりと眺めていり、猫又は目を覚ましてから一時間程是非常に機嫌が悪いので君彦は猫又の機嫌を損ねないように、声をかけないまま部屋を出て行つ

た。

玄関のドアを開けると田の前にはたくさんの荷物が置かれていて、ダンボール箱やら家財道具などがひしめき合っている。

「うわ、何だこれっ！？」

君彦が住んでいる所は一階建ての木造アパートで、一階に四部屋、建物の両サイドには鉄筋で組まれた階段があつて二階にも同じように部屋が並んでいる。

玄関前には幅狭のコンクリートの段差があり、段差を下りると地面のまで舗装されていない敷地となっていた。

堀に囲まれたアパートの敷地内、つまり地面むき出しの庭にたくさんの中物が置かれている状態で君彦はすぐに誰かが引っ越して来たんだと察する。

きょろきょろしながら困惑していると、右隣の空室だった部屋のドアが開いた。

恐らく右隣の部屋に新しく引っ越してきた住人なのだろう、君彦はとつさに挨拶しようと体を傾けるようにして出てくる人物を覗きこんだ。

「つて、ああああああああああああああああああ！」

隣から出て来た人物に向かつて君彦は大声を張り上げる。

驚きの余り思わずまつすぐに指をさしながら、君彦は誰が見ても明らかに嫌悪感を露わにした表情になっていた。

君彦の奇声で振り向いた人物、グレイのボーダーに黒のジャージをはいたラフな格好で首にはタオルをかけている。

そう……、隣に引っ越してきた人物は君彦がよく知っている

犬塚慶尚であった。

君彦はあうあうと言葉が出て来ない様子でいると、慶尚は無愛想

な表情のまま君彦を一瞥すると足元に置いてあつたダンボール箱を両手で抱えて君彦に渡す。

「……え？」

突然ナチュラルに箱を手渡された君彦は、つい素直に受け取ってしまい唖然としていた。

すると慶尚は開け放しの部屋の中を指さして、当たり前のよう

に君彦に向かつて指示する。

「その箱は、中に入つて右側に置いてあるワックの上な」

「 って、何いきなり荷物整理を手伝わせてんだお前はあああああっ！」

そうじゃなくて！ 何でお前がこんな所にいるのかつて方が先だろうがっ！

しかもこんな朝っぱらからドッタンバッタンとつむさういたらなによ、近所迷惑だろ！」

箱を持つたまま君彦が声を張り上げていて、一階に住んでいる住人が階段を下りて来て君彦と慶尚の方をじっと見つめていた。

その視線に気付いた君彦は「ほら見ろ」と言わんばかりに胸を張り、一階に住んでいる独身のサラリーマンが慶尚に文句を言うのを待つ。しかしサラリーマンは慶尚を見るなり急に視線を逸らしてそのまま逃げるようアパートの敷地を出て行ってしまった。

その後も次々とアパートの住民が部屋を出て来るが、誰もが慶尚を見るなり苦笑いを浮かべて声すら掛けて来ない。

君彦はちらりと慶尚を見て、なぜ誰もクレームを付けて来ないのかすぐに理解した。

「お前のその無愛想な顔のせいで、誰も文句を言えないんだな」

「…… ものすゞへ善良な市民なの?」

こればかりは君彦の方がなぜか勝つた気になつて「ふふん」と鼻を鳴らしていると、両手に抱えて持つていた箱の上に更にもう一つ追加されて、急激に重みが増したせいで君彦は短い悲鳴を上げながら慌てて両手に力を入れた。

「だーかーらーっ！」

何でオレがお前の荷物整理を手伝わないといけないんだつづーんだよ！」

変わらず声を張り上げる君彦に慶尚は両手で耳を押さえながらやり過ごしていると、それらの喧騒に遂に我慢出来なくなつた猫又が怒り心頭で怒鳴り込んで来た。

『だああああああああつつ！

さつきからやかましいぞ、君彦つ！

お前がぎやあぎやあ騒ぐから「今日のワンコ」のナレーション、
聞きそびれちまつたじやねえかつ！』

部屋の前で声を荒らげていた君彦に向かつて怒鳴り散らした猫又であつたが、すぐに君彦以外の存在に気付く猫又。

見るなり大きなガラス玉の瞳に嫌悪感が現れ、表情を歪めていると慶尚の背後から犬神までもが姿を現した。

『むつ、出たな猫又！

『会つたが百年目、この間のケリを今つけてやるー。』

現れるなり犬神は猫又に向かつて唸り声を上げて威嚇する、いつもなら犬神のことを適当にかわしているはずの猫又が朝の不機嫌モードのせいで怒りのスイッチが入つてしまつ。

『オメーもいちいち暑苦しいつづーんだよ！

こちとら寝起きで機嫌最悪なんだ、何なら骨を投げて遊んでやろうか犬つころ！

ちゃんと取つて帰つて来たら、オレ様の南斗水鳥拳をお見舞いしてやるぜつー！』

『全然メリットがないではないか、このメタボリックショートヘアがつ！』

君彦は両手に荷物を抱えながら慶尚を睨みつけ、猫又と犬神は喧嘩の売買が成立してしまい互いに威嚇し合つている。

そんな光景を他人事のように見つめながら、慶尚は小さく溜め息をついていた。

君彦と猫又が威嚇し続ける中、慶尚はざぶにかしてこの険悪な雰囲気を何とかしなければと思っていた時。

一番奥の部屋から大家さんが出て来て声をかけて来た。

「あらあらまあまあ、今日引っ越してきた犬塚君ね！？
朝早くから荷物の整理だなんて大変でしょう、業者さんにお願いしなかつたのかい？」

大家さんが何の警戒心もなく慶尚に話しかけ、君彦は敵意むき出しにしていた表情を伏せて平静を取り繕つ。

慶尚はこのアパートに来てから君彦以外の住人に話しかかれ、ペコリと頭を下げた。

「どうも、今日からお世話になります。
家の者にこれ以上迷惑はかけられないので、業者には荷物移動だけお願いしたんです。

朝早くから騒々しくしてすみません」

丁寧に挨拶する慶尚に君彦は少しだけむつとした顔になりながらも、一応礼儀はわきまるんだなと感心していた。

すると慶尚の隣でダンボール箱を抱えている君彦に気付いた大家さんが、今度は君彦に話しかける。

「君彦君、あんたも朝早くからダンボール箱持つて何してるんだい？
そっちの犬塚君と知り合いなの？」

そう問われ、君彦はわずかに嫌悪感の入り混じった表情をしながら

ら嫌そうに頷く。

「え……、まあ。

一応「」ひの無愛想なヤツとは、学校のクラスメイトでして……

素直に慶尚との関係を大家さんに話したのは失敗だった。

アパートに新しく引っ越してきた慶尚と、その隣に住んでいる君彦が学校のクラスメイトだと知った大家さんは満面の笑顔になつて、両手を叩いて何やら喜んでいる。

「あ～なるほど、それで君彦君はお友達の引っ越しを手伝ってくれてるってわけだね！？」

本当に君彦君は優しいんだねえ～、犬塚君も君彦君がお友達になつてくれて良かつたわねえ！」

思いがけない誤解に君彦は両手に持っていたダンボール箱を落としてしまう。上に乗っていた小ぶりな箱はそのまま地面に転がり落ちて、大きなダンボール箱は君彦の両足の上に落ちる。

「どあああっ！　いったあああっ！

てゆうか何でこの箱こんなに重たいんだ、何が入つてんだよ一体

！」

「お前……、何て事を……」

慶尚は君彦の足の心配より先に落とした箱を拾い上げ、中身が丈夫かどうか確認し始めた。

小ぶりな箱にはCDのアルバムケースがぎっしりと詰め込まれており、それらを何枚か取り出して割れてないかどうか確認している。それよりも君彦は両足の上に落とした箱の中身の方が気になつてい

た。

それなりに重いからには何か高価な物が入っていたりどうしようかと思っていたのだ、しかしそんな物を持たせる方が悪いと心の中で思いつつ、しゃがみ込んで荷物の心配をしている慶尚に向かって、きちんと謝るべきかどうか迷つてしまつ君彦。

「いや、それ以前に本当なら荷物より人間の心配の方が先じゃないのか!?」

「誰が荷物整理手伝つてやつてると思つてんだ!」

「まあまあ、やつぱり犬塚君の引っ越しの手伝いをしてくれてたんだね～、君彦君は！」

次々と巻き起こる展開に君彦は慶尚を怒るのが先か、大家さんの誤解を解くのが先かおろおろし始めた。

しかし時すでに遅し、大家さんはすっかり君彦と慶尚が仲の良い友達だと認識してしまうと、そのまま「近所迷惑にならないように」と注意だけして、いつものようにアパートの近くで開かれる井戸端会議に参加する為、大家さんは納得した様子でアパートの敷地内から出て行つてしまつた。

「ああああ～、大家さん～！
違つんですつてばあああああ～～～！」

君彦は慶尚と仲良しだと誤解されることに相当の苦痛を感じながらも、その声が大家さんに届くことはなかつた。

大きめのダンボール箱の中身を確認だけした慶尚は、いつも以上に不機嫌な顔で君彦に話しかける。

「そんなことより、早く外にある荷物を全部中に片していくぞ」

「何普通に指示してんだああつー?」

てゆうかやつぱり最初からオレを使って荷物を片付けるつもりでいたんだなお前はああつー!」

「つるさい、たつき大家さんが近所迷惑にならないようこうして言ってただろ。

お前はいつも騒がしいんだよ、鼓膜が破れる」

静かな口調のまま慶尚は足元にある箱を中へ運び出した。

その後も慶尚に関わってしまった者は結局全員引っ越し整理を手伝わされる羽目となる、役割分担としては君彦が重たい荷物を中心に運び入れ、手が使えない猫又と犬神は口で銜えられる物だけを運んで行つた。

慶尚は運び込まれた物をどこに置くか指示しつつ、箱から出せる物は出して、後で片付ける内容物だけは箱から出さず部屋の隅へと追いやつて行く。

電化製品、タンス、テーブル、ベッドなどは最初に置き場所を決めて先に部屋の中に配置させていた。

室内が箱だらけになりかけたので残りのダンボール箱は慶尚の部屋の前に固めて置き、アパートの住人の通行の邪魔にならないように配慮する。

それからは箱の中身を慶尚が確認しては、細かい置き場所などを君彦に指示して並べて行つた。

まだ完全に整理しきれていないが、ある程度箱から取り出せる物は取り出し、後は時間をかけてゆっくりと片付けて行くことにするようになんかが促す。

整理整頓にかけては君彦の指示の方が的確であった。

引っ越しの際に一番手間となるのがすぐに使用しない小物や衣服類、それらをいくら一人分だといつても一日で全て片付けるには時

間がかかり過ぎる。

ましてや慶尚の趣向もあるだろつ、君彦は今必要な物だけを箱から出して整理していくことを優先させた。

大家さんに釘を刺されたこともあり、君彦は湧き上がる怒りを我慢しながら怒声を発することなく慶尚の手伝いを黙々とこなしていき、我慢の甲斐あつて何とか昼の一時頃には全ての荷物を室内に押し込めることが出来た。

汗だくになりながら君彦が一安心していると、おもむろに慶尚は台所に置いてあつた箱の中から何かを取り出しそれを君彦に手渡す。一体何だらうと手渡された物を眺める君彦……。

「おい」

顔面をひくひくさせながら、徐々に我慢していた怒りが解放されていく。

「いいから早く作れ、腹減つた」

「お前はああつ！」

引っ越しの荷物運びやら整理整頓やら無理矢理手伝わせておきながら、最終的には引っ越し蒿麦作れつてかつ！

何様だお前はああああつ！？」

むきいっと顔を真っ赤にさせて怒り狂う君彦を余所に、引っ越しの手伝いをして疲れ切っている猫又までもが寝転びながら慶尚と同じように要求して来る。

『いいから早く作れよー、オレも腹減つて死にそうだ……』

『馳走になる、青年よ……』

まさかの三対一、君彦は爆発寸前だった怒りが萎んで行って肩を
がっくりと落とす。

小さく文句を言いながら慶尚の部屋から出て行くと、君彦は自分
の部屋で引っ越し蕎麦を作り始めた。

慶尚が自分の部屋の電化製品……主にテレビなどのAV機器の接続を行なっている際、君彦は自分の部屋で引っ越し薺麦を作つていた。ただの薺麦だと味気ないので少しだけ工夫してみた。

慶尚から提供された市販の薺麦を普通に茹でたら素早く冷水で洗いざるに上げておく、それから君彦の部屋の冷蔵庫にあつた長芋をすりおろしてとろろ風にすると小皿に移し置いた。

今度は君彦の弁当には欠かせない梅干しを冷蔵庫から出すと、全て種を取つて包丁で叩いて練り梅状にする。

ざるに上げておいた薺麦を器に入れて、めんつゆをかけ、そこに先程のとろろと練り梅、更に白コマやのりを散らして出来上がり。

一人分の薺麦を君彦の部屋の居間にあるテーブルに置き、コップ

には冷たい麦茶を入れて割り箸も添えておいた。

あとは猫又と犬神用の小皿に、先程の薺麦を入れる。

「てゆうか普通の猫や犬とは違つていつても、猫又達つて薺麦とかその他諸々を食べさせて平気なのかな？」

「一応冷やし薺麦だからお腹とか壊さないだろ?」

そんな疑問を抱きつつ、君彦は隣の慶尚の部屋に行つて配線の接続作業をしている慶尚と、ベッドの上で横になつている犬神、そして裏口の硝子戸を開け放し網戸から吹きこんでくる風で涼んでいる猫又へと声をかける。

「薺麦の準備出来たからオレの部屋に来いよ。

ここじゃ換気で窓を開け放してるつていつても、ちょっと環境が劣悪だろ?」

「…… 犬悪とは無礼だな、お前」

「 犬悪って言つたら犬悪なんだよ！
だつたらお前だけ、まだテレビも映らない埃っぽい部屋で一人寂しく蕎麦をすすり食うがいい！」

君彦の言葉に慶尚は負けを認めたのか、ベッドの上で横になつている犬神に田線で合図を送ると立ち上がりて君彦の部屋へと向かつた。猫又も待つてましたと言わんばかりに尻尾をぴんと立てて、我先にと駆け足で君彦の部屋へ走つて行く。

君彦の部屋に入るや否や、猫又はテーブルの上に用意されている二人分の蕎麦に田をやり、それから畳の上に置かれている二つの小皿へと視線を走らせた。

自分がいつも使つてゐるお皿と、普段あまり使つてない小皿に入つてゐる蕎麦の量を見比べてゐる様子だ。

明らかに不服そうな顔でひくひくしてゐる猫又に、君彦は半ば呆れた口調で声をかける。

「量が違つのは当然だろ。

どう見てもお前より犬神の方が体が大きいんだから……」

『…… それでもなんか納得いかねえ』

『ふん、猫というものは随分と意地汚い生き物らしいな』

後からやつて來た犬神にそう罵られ、猫又は鋭く睨みつけた。

『何をおおつ！？

言つとくが犬つころより猫の方が上品なんだぜ！？

犬なんざ目の前に出された食い物を、自分の限界考えずに食い続

「それはお前も似たようなものだろ……」

「それはお前も似たようなものだろ……」

せつかく犬神に向かつて犬と猫の違いを豪語している側から、君彦にダメ出しされて猫又は言葉を詰まらせた。

それぞれが席に着く中、慶尚は一間に入つた時に右側の部屋の隅に置かれている仏壇に目をやる。

大きな体で立ち尽くすものだからどうしても目立つてしまい、君彦は怪訝な顔で慶尚を見上げた。

すると慶尚は蕎麦が用意されているテーブルの方には座らずに真つ直ぐ仏壇の方に向かうと、正座して君彦の方へ声をかける。

「……手、合わせていいか？」

そう聞かれ、虚を突かれた君彦は思わず普通に返事をしていた。

「あ、ああ……。別にいいけど……」

すると慶尚は神社の息子さながらの仕草で焼香した。

テレビも何も付けていない室内で慶尚が手を合わせているのを待つ間、その時間はとても長く感じられる。

君彦は祖父母の遺影が飾られている仏壇に向かつて黙々と手を合わせている慶尚の背中を見つめながら、どこか心がふわふわするような感覚がした。

こんな風に君彦と同世代の者が自分の祖父母に向かつて手を合わせてくれた人間は、今までいなかつたからである。

祖父母への挨拶を終えた慶尚は軽く会釈すると、ようやく食事の席に着いた。

何も言わない慶尚に向かつて、君彦は少し躊躇いながら遠慮気味

に声をかける。

「えと……、犬塚……」

「……なんだ？」

無愛想な慶尚に向かつて言葉をかけるのはどこか腹の奥がぞわざわするような感じだったが、君彦はその奇妙な感覚を我慢しながらやつと口に出す。

「ありがとな、その……おじこちやんとおばあちゃんに手を合わせてくれて」

まともに慶尚の方を見るとは出来なかつたが、今の君彦に出来る精一杯のことはしたつもりだった。

そんな君彦の礼を述べる姿に慶尚はほんやりとした眼差しで見つめたまま、殆ど無視に近い仕草で割り箸を割つて器の中に浸つている蕎麦を箸で掴むと、ぶつきりぱうとした口調で返す。

「別に、……仏壇を見たら手を合わせたくなる性分でな」

「嘘つけえええつ！」

「そんな奇怪な趣味の奴がいるかああああつつー！」

慶尚の言葉に嘘臭さを感じた君彦がすかさずつっけむ。

そんな一人のやり取りを白い田で見つめながら、ちゅるちゅると蕎麦をすすりながら呆れ口調で呴く猫又と犬神。

『……この一人も素直じゃねえな』

『……全くだ』

それからというもの終始君彦は何かにつけて慶尚や、ついでに猫又に向かっていちゃもんをつけながらも、全員残すことなく綺麗に引っ越し蕎麦をたいらげた。

引っ越しの理由

引っ越し蕎麦を食べ終えると、君彦はすぐさま食べ終えた皿を台所に持つて行くと後片付けをし始めた。

猫又がテレビのチャンネルのボタンを爪の先で器用に押すと、テレビを付けて何かバラエティ番組が放送されていないかチャンネルを選當に押していく。

慶尚は何も言わずにチャンネル権を猫又に託したまま、黙つたままテレビを見めでいると台所から君彦の怒鳴り声が聞こえる。

「 つて！」

だから何でお前はオレンン家でくつろいでんだよ！

引っ越し蕎麦食べ終わつたんならもう用事はないだろ？が！

さつさと自分の部屋を片付ける続きでもして来いよっ！」

しかし顔を合わせる度に怒鳴り散らす君彦の相手をすることに疲れたのか、慶尚は面倒臭そうに両手で耳を押さえると、あからさまに聞こえないフリをした。

そんな慶尚の態度に苦虫を噛み潰したような表情になつた君彦は、朝からずっと荷物整理していく疲れてるんだから仕方ないと無理矢理納得することにして、ひとまず放置することに決めた。

慶尚が祖父母に対して手を合わせるという礼儀を見てから、君彦はどうしても祖父母が見てる前で彼を無下にすることが、ほんの少しだけ躊躇われたせいもある。

あからさまに大きな溜め息をつくと今の慶尚にあれこれ言うのを諦めた君彦は、がっかりした表情で肩を落としながら渋々後片付けを再開させた。

君彦が背中を向けて食器を洗い始めたので、慶尚はちらりと横で真剣にテレビに見入つている猫又へと視線を向ける。

するとすぐに視線を猫又と同じテレビの方へ向けると、今所に居る君彦に聞こえない程度の小声で話しかけた。

「猫又、オレがここに来た理由……お前ならわかつてると思つが」
低い声色で話しかけて来た慶尚に、猫又もまたちらりと君彦の方へ視線を走らせ様子を窺いながら答える。

『チツ……、やつぱ征四郎の仕業か。

あの野郎……、余計な真似ばっかしやがつて』

慶尚が何を言いたいのか瞬時に察した猫又は舌打ちすると、不服そうな顔で言葉を吐き捨てた。

「……一日前にオレの夢の中に出てきた、恐らく夢枕に立ったんだと思つが。

夢の中に出でてきた人物……、あれが猫又の祖父なんだろ?

あの遺影に映つている人物の面影がある、何よりあのアホにそつくりだ。

まあ征四郎という人の方がずっと聰明な雰囲気だったが

君彦にそつくりだと言つ慶尚の言葉に猫又は、彼の夢の中に現れた時の征四郎の姿が祠で出会つた時の若かりし姿で、夢枕に立つたんだと察した。

『征四郎から言われてここに引っ越して來たつてわけか？　お前も物好きだな。

あの野郎から何言われたのかは大体わかつてるぜ。どうせ征四郎の孫である君彦の身を守つてくれとか、そういうのだろうが。

だけどな…… 猫又家と犬塚家は因縁の間柄、征四郎の言葉に従う義理なんてお前にはねえだろ！？』

猫又の言葉に慶尚は少し間を置き、それから何食わぬ顔で問いかねた。

「それはじいさんの代までの話だ、オレはそういうしがらみに囚われるのが嫌いでな。

だからといって別に征四郎という人に頼まれたから、ここに引っこ詰して来たってわけじゃない。

まだ色々とお前達のことを知る必要があると思つたから、ついでに頼みを聞いてるだけのこと。

たまたま利害が一致したからだ、そこん所勘違いするんじゃない

普段と変わりないむすつとした表情で、にべもない言葉を口に出す慶尚に猫又は少し不満そうな顔になりながら、それ以上口答えすることはなかった。呆れたように目を細めながら苦笑すると、猫又は背後に居る君彦の食器洗いが終わったことに気付き、テレビを見つめたまま小声で慶尚に話しかける。

『まあ別にお前が君彦に危害を加えるわけじゃねえんなら、どうでもいいや。

とりあえずこないだみたいに争うのだけは勘弁だぜ？
オレはもう君彦を戦いに巻き込みたくねえからな』

猫又の本音を聞いた慶尚は少し怪訝な表情を浮かべると、最後に一番肝心なことを訊ねた。

『その割に危険な奴を側に置いているんだな？
あのまま放置してもいい存在とはとても思えないが、何を考えて

いの

ぎろりと猫又を睨みつけながら慶尚が問う。それが誰のことなのか瞬時に察した猫又は、あからさまに視線を泳がせると適当に答えた。

『黒依のことが、やっぱ氣付いてたか。

……あれはいいんだよ。

こやとなつたらオレが何とかする、黒依とは最初からそういう約束だからな』

それだけ言うと猫又は鋭い視線で刺すように慶尚を睨みつけると、それ以上口を挟むなと田で訴えた。

一瞬にして猫又の雰囲気が変わったので慶尚はそれ以上は何も言わずには、ぼんやりとテレビを見るフリをする。

そんな時、後方から呑気な声が響いて来る。

「お前等、今黒依ちゃんがどうとか言つてなかつたか！？」

黒依ちゃんが一体どうしたって言つんだよ、さては犬塚

つ！

お前まさか……つ！！

いくら黒依ちゃんが可愛いからって、惚れたりなんかしたらこのオレが許さんからなつ！』

エプロン姿の君彦が一人でぎやあぎやあ騒ぐ中、猫又を始め慶尚と犬神は呆れた顔で肩を竦めた。

『……アホか、お前は』

『だ……つ、誰がアホだつ！

お前にだけは言われたくないんだよ、このアホ！ バカ！ オタ
ンコナス！」

君彦のレベルの低い仕返しに猫又は急に恥ずかしくなつて来て、
嫌悪感たっぷりの顔で君彦を見据えた。

『これから毎日コレが続くのか、……めちやくちや憂鬱だなオイ』

つまらない物ですが……

ひとしきり君彦を放置した後、慶尚は「お粗末様でした」と告げ、そのまま犬神を連れて君彦の部屋から出て行こうとした。するとちよつど大家が君彦の部屋のインターホンを鳴らそうとしていた所で慶尚と目が合ひ。

「あらまあ、びっくりした！

さつき犬塚君の部屋に行つたんだけどいなかつたからねえ。
もしかして君彦君の部屋かと思つて来てみたけど、どうやら正解
だつたね！」

どうやら大家は慶尚の方に用事があつたようで、その慶尚が君彦の部屋にいたことを大家の頭の中にインプットされてしまつたかもしれないと思つて、顔面を蒼白にさせる君彦。

大家が慶尚にアパートのルールが書いてある手書きの紙切れを渡すと、突然慶尚は何かを思い出したのか……大家に待つてくれと言つてすぐさま自分の部屋へと入つて行つた。

君彦も大家と同じように首を傾げていると慶尚はすぐに戻つて来て、手には包装紙で包んである品物を持つている。

「遅れてすみません、これ引っ越しの挨拶代わりです」

「あらあらー、そんなに気を使わなくてもいいのに〜！
悪いわね〜、有り難くいだくわ」

慶尚から包みをもらひと大家は上機嫌で自分の部屋へと帰つてしまつた。

君彦が何ともなしに大家が部屋に戻る背中を見送つていると、慶

尚が君彦に向かつてにべもなく言い放つ。

「……欲しいのか」

まるで自分が物欲しげにしていたように見えたのかと思つた君彦は、慌ててそれを否定する。

しかしその慌てぶりがかえつて怪しく見えてしまつたのか、慶尚が白い皿で疑わしそうに見つめて来た。

「べ……、別に欲しかないわっ！」

そう反論する君彦に対し、慶尚がおもむろに何かを手渡した。

「実はお前の分もあつたとか」

無愛想のまま大家に渡した品物と同じ大きさの箱を君彦が受け取ると、少しだけ嬉しそうな表情になりながら「気を使つなよ」と言いかけたが、すぐさまその言葉を飲み込んだ。

手渡された物は包装紙に包んでるらしい裸の状態、しかも思い切り洗濯洗剤のフタが開いていた。

「…………つて、使いさしかああああっ！！

あ、でも今ちょうど洗濯洗剤切らしてたんだ。

いやいや！ オレはそこまで卑しくないぞ！

使用済みの洗剤もりつてまで近所付き合いしたくないわ、持つて帰れ！！

どうやら完全に敵に回したかもしないと何となく思いながら、慶尚は特に落ち込んだり怒つたりする様子もなくただ無言で君彦をじっと見据えた。それが逆にガンをたれているように見えた君彦は

無表情のままでも案外怒ったのかもしれないと思つて、慶尚のことを警戒しつつ後ずさりする。

「な、なんだよ！？」

「いや別に、じゃあな。

引っ越しの手伝い、助かつた」

やけに素直な慶尚の態度に若干拍子抜けした君彦は、目を丸くしながら「ああ」と小さく返事をした。

新しく一人暮らしすることになった部屋に入り、まだ片付け途中の小物類を片付けながら慶尚はふと……天井を見つめながら、君彦の部屋で見た遺影を思い出す。

遺影に映っていた二人の老夫婦、その中でも慶尚は君彦の祖父である征四郎の顔を思い返していた。

(……あれがあいつの祖父、
確かに面影はあつたな)
猫又征四郎か。

一日前に慶尚の夢の中に現れた人物。姿こそ二十代の若い青年の姿で現れていたが、遺影に映つていた老人の顔と照らし合わせればわかること。

慶尚はあれが間違いない、猫又征四郎本人であつたことを確信した。

そして慶尚は夢の中で告げられた征四郎の言葉を思い出そうとした。

何もない真っ白な空間で、甚平に草履といつ格好をした若い男……
征四郎が屈託のない表情で慶尚に向けた言葉……。

』

慶尚君、今度こそ君彦の友達になってくれるかな?』

その言葉を聞いた瞬間、慶尚の脳裏に昔の記憶が蘇る。
まだ自分が幼かった頃……、初めて猫又家の人に出会った日の
ことを。

つまらない物ですが……（後書き）

長い間更新が遅れて申し訳ありませんでした。
少々プライベートの方で嬉しいトラブルが発生しておりまして、執
筆する時間が全くなかったのです、深くお詫び申し上げます（^_^-
^_）

今後もちょっと不定期更新になってしまいます、一週間に一話位
は更新出来るように頑張りたいと思いますので見捨てないであげて
ください！

これからも「猫又と色情狂」をよろしくお願ひいたします。

夢の中で見た夢

慶尚は走り続けていた。

いつも自分の前を走つて行く姉の背中を追いかけるように、一度でも見失つたらもう二度と会えなくなるような気がして、必死に姉の後をずっと追いかけていたあの日……。

慶尚の祖父から口がすっぱくなるまで教えられたこと。

『猫又家の人に聞には関わるな』

そう言いつつも喧嘩の火種を振り撒いていたのが実は自分の祖父だつたということは、幼い慶尚にでもわかつていた。

慶尚は未だ猫又家の人に会つたことも見たこともない。

ただ……大好きだつた姉が自分を放置してまで、祖父に逆らつてまで会いに行つた人物にほんの少しだけ興味があつた。

慶尚は今、姉を追いかけて今まで通つたことのない道を通つていた。

すでに姉の姿はどこにもなかつたが、毎日少しづつ後をつけている内に姉が通つていた道を把握して來たのだ。

住宅街を駆け抜けて行くと、遠くの方に木々が姿を現す。

やがて辿り着いたのは慶尚の祖父が神主をしている犬塚神社に負けずとも劣らない、広い敷地を持つた大きな古家が建つていた。

敷地内にある古家の背後にはまるで神木のように雄々しくそびえる樟があり、周囲を取り囲むように木々がたくさん生い茂つている。鳥居などがあればその場所が何かの寺だと思われても申し分ない廣さと荘厳さが見て取れる。

姉は一体どこに行つたのだろう?

もうあの古家の中に入ってしまったのだろうか？

そんな風に思いながら幼い慶尚は遠くから家を見つめるだけで、それ以上歩を進めることが出来なかつた。

五分近くずっと立ち廻りしたままでいると、家の硝子戸が開いて誰かが出て来る。

慌てた慶尚は思わず周囲の木々の間に身を隠していた、姉の後を追いかけて……もしかしたら怒られるかもしれないと短絡的に考えた結果の行動であつたのだ。

しかし出て来たのは姉でもなく、姉が会いに行つた「猫又征四郎」という老人でもない。

慶尚と同じ位の歳、同じ位の背格好をした少年が暗い表情で家の中から出て來た。

黙つて見ているとその少年は慶尚の存在に当然気付くはずもなく、落ち込んだ様子のまま家の裏手へと歩いて行つてしまつた。

この家の子供だろうか、それしか考えられない。

そんな風に古家の背後にそびえたつ樟がある方向へ歩いて行つた少年の背中を見つめていると、突然背後から声をかけられて口から心臓が飛び出しそうになつて驚いた。

振り向くとそこには姉と、もう一人……甚平を着た老人が立つている。

慶尚はすぐさまその老人が姉を魅了した憎き「猫又征四郎」であると察した。

そんな私的感情のせいもあつてか、慶尚は自分でも無意識の内に征四郎を睨みつけていた。

敵意むき出しの眼差しをした慶尚に向かつて声を上げる一人の少女、鳥の濡れ羽色という表現が良く似合う美しく艶やかな黒髪、髪の色とは対照的に真っ白な肌、少女にしては少し大人びた挑発的な力強いキレ長の目。

腰まで伸ばした綺麗な黒髪を左右に振り乱しながら、氣の強い口

調で慶尚を諫める。

「慶尚、お前はここに来ちゃダメだって言つたでしょ？
お前までお祖父様に怒られてしまつじやないの？」

慶尚は姉の言葉を聞いてむつとした表情になる、反抗すら見せる
顔つきであったが決してそれを口に出さなかつた。

すると弟を叱りつける姉を見ていた征四郎　髪は全て白髪で、
皺だらけの顔であったが威厳ある風格や温厚で柔らかい雰囲気は何
も変わらない　が、口の端を緩ませながら優しい口調で慶尚に
話しかける。

「もしかして君が、犬塚慶尚君かな？
君のことは妃紗那きさなから聞いて知つてるよ、私は……」

「知つてます、犬塚家の敵でしょう」

慶尚の言葉に征四郎はほんの少しだけ面食らつた。
見た目は自分の孫である君彦と大して差のない年齢の少年だとい
うのに、少年とは思えない口調、征四郎に対して拒絶感を露わにす
る態度。そんな慶尚の子供らしくない姿に、征四郎はただ困つたよ
うに微笑むだけだった。

その時、慶尚の態度に対して怒りを見せた姉・妃紗那は口元をへ
の字に曲げて、慶尚に詰め寄る。

「慶尚！ 征四郎さんに向かつて失礼よ！
謝りなさい！」

しかしそんな妃紗那の肩を優しく掴んで制止する征四郎に、妃紗
那は「どうして？」という表情を浮かべながら慶尚の頬を叩こうと

した手を引っ込める。

それでもなお慶尚は征四郎に対して心を開く気が全くない表情で、ただ睨みつけるだけだった。

「君は今、何歳だい？」

突然の質問に慶尚はふてくされた表情のまま、威嚇したまま答える。

何より姉の視線が怖かつたからかもしれない。

「六歳」

「せうか、ちょうど君彦と同じ年齢だね」

慶尚の年齢を聞いた途端、征四郎の表情が慈愛に満ちたように見えたので慶尚は眉根を寄せた。

まるで田で訴えるように樟の方に視線を動かして、慶尚は後ろを振り向く。

何もなかつたのでもう一度征四郎の方に向き直ると、征四郎は全く慶尚の予測が付かない言葉を口にした。

「慶尚君、私には一人……君と同じ歳の孫がいるんだがね。良かつたら君彦の友達になってくれないかい？」

突然の申し出に慶尚は難しい顔を浮かべると、先程田にした少年を思い出した。

まるでこの世の終わりのような顔で家を出て行き、樟のある家の裏手へと向かつて行つた少年のことを。

「……オレは根暗な友達は欲しくない」

何より相手は憎い人間の孫、「冗談じゃないとでも言つよつこなつ
きりと拒否する慶尚であったが、それでも征四郎は慶尚の威嚇に怯
むことなく言葉を続けた。

「君彦はね、幼い頃に両親を亡くしてしまって……すっかり心を閉
ざしてしまった状態なんだよ。」

保育園でも結局、特別仲の良い友達が出来ないままでね。
君みたいな子が友達になつてくれたら、私としては安心出来るん
だが……」

征四郎からそう言われようとも全く心が動く気配のない慶尚は、
かたくなに首を左右に振つて断つた。

さすがにこれ以上無理強いしたくないと察したのか、征四郎は寂
しげな笑みを浮かべると仕方なく慶尚の気持ちを汲んでやる。

「そうか、それは残念だ。
だが……今はイヤでも、いつか……一人がもう少し大きくなつた
ら。」

その時は君彦の友達になつてやつて欲しいんだ

どうしても引き下がる気配を見せない征四郎の姿に、慶尚は思わ
ず自分から声をかけていた。

「なんで今までしてオレとあいつを友達にさせたいんですか。
オレは別に友達が欲しいわけじゃないのに、誰とも仲良くなりた
いって思つてないのに。」

「どうしてさつきのヤツとオレをー!？」

慶尚の疑問に、征四郎は柔らかく微笑むと慶尚の頭を優しく撫で

ながら答えた。

「それはね……、私は君に

」

バイト先

慶尚が君彦の隣の部屋に引っ越して来た夜。

君彦は夕方からのバイトへと出掛けた。平日は店が定休日になつている水曜日以外、夜の八時から十時までバイトに出ていた。

土日は一番の稼ぎ時なのでシフト制ではあるが、一日五時間は出勤している。

慶尚の引っ越しの手伝いをしたせいか、少しだけ体が痛かつたが気にすることなく君彦はいつものように猫又に注意を促した。

「いいか猫又、一応玄関の鍵はかけておくけど。

お前が出入りしている小窓の鍵が開いてるのが、外からバレないようにしなきゃダメだからな！？

いくら塀に囲まれたアパートだからって空き巣が入つて来ないとも限らないんだから」

（こんなすっからかんの質素な部屋を見た時点で、金田の物がないと判断すると思つけどなあ……）

念入りに空き巣に注意するよう促す君彦に対し、猫又は呆れた眼差しで室内を見渡しながらも本当のことは口にしなかった。

君彦は猫又のことを家の中に閉じ込めるようなことはしない。

朝でも昼でも夜でも、好きな時間に出入り出来るよういつも猫又専用の小窓の鍵は開放されたままなのだ。

しかしそれに関して猫又が感謝するのかと言えば全くそういうわけではない。

むしろ放浪している時間が長かつたせいか、好きな時間帯に好きな場所へ行くことがよく自然で当たり前のことだと認識していたの

で、そういった君彦の心配りに猫又が有り難く感じることはなかった。

部屋を出てドアの鍵を閉めた君彦は、ふと隣に引っ越して来た慶尚の部屋へと視線を移す。

玄関の真横が台所になつてているという室内の作りは君彦の部屋と全く同じなので、玄関の横にある台所の小窓を見ると室内が真っ暗だったので、慶尚がどこかに出掛けているんだと暗黙に理解した。外はまだ少し明るかつたが、それでも室内から漏れる明かり程度なら確認出来る。

君彦は特に気に止める様子もなく、そのままバイト先である小さな料亭へと足を運んだ。

君彦が高校生になつてからすぐに見つけたバイト先、料亭と言つたら聞こえは良いがようするに和食中心のお食事処といった感じである。内装も京都の料亭を思わせるような和風の造りになつており、一見値段が高そうな店に見られがちだが料理の値段は意外に手頃で一般家庭の家族連れがよく夕食に食べに来ることが多い。

元々料理を作るのが好きな君彦は、どうせなら料理に携わる仕事でもあればいいと思い、ちょうど調理補助や雑務のバイト募集を発見して面接してみたのである。

この料亭で店長以上の権力と存在感を誇っている強面の料理長に、君彦の料理の腕を認められあつさりと雇われたのだ。

それからというもの君彦は雑務を中心に仕事をするものだと思っていたが、次から次へと調理を任せられ大変な目に遭つていた。

調理をする度に頭のどこかで「調理師免許を持つていらない素人が作った料理を出してもいいのだろうか?」という疑問が離れなかつたが料理長から、ヤクザも真っ青な鋭い眼光で睨みつけられたら文

句も言えない。

そういった経緯から君彦は、今や雑務パートではなく殆ど調理の主戦力となってしまっていた。

出勤して来た君彦はお店の裏口から中に入り、そこでタイムカードを押すと割烹着に着替える為ロッカー室へと向かつ。

お店の中は整理整頓が完璧にされていて清潔そのものであった。客に料理を出す場所なので調理場だけではなく店全体を清潔にするのは当たり前だと言う料理長の意向もあつたが、君彦が来てから更にロッカー室や通路、調理場は一層清潔感を保つことが出来ている。

とにかく目に付いた所から率先して掃除をしたり整理したりするので、自然と周囲の者達にも意識付けされていったのだ。

今日は遅番だったので君彦は割烹着に着替えるなり、すぐさま調理場に行くといつもと少し様子が違うことに気付く。

何やら調理場では先輩の料理人達がそわそわと何かを話している様子だった。

普段は君彦が調理場に現れた頃には全員必死になつて、注文された料理名を叫んで伝えたり、怒声が飛び交つたり、次々と客から注文された料理を作つてはそういう慌ただしい光景が繰り広げられていたというのに。

今はひつそりとしており、どこか浮足立つたような感じで全員が落ち着かない様子でちらちらと調理場から客が料理を食べる店内の方へと視線を配つたりしている。

もしかして奇妙な客でも来ているのだろうか？

君彦は意味がわからないのでとりあえず先輩に声をかけてみた。

「あの……、何かあつたんですか？」

君彦が声をかけると全員がわずかに笑みをこぼしたままの表情で

振り向き、一人が嬉しそうに返事をした。

「おお猫又か、お前も見てみるよ！

実はな……すつごい美少女が店に来てんだ、ほら……あそこあそ
こー。」

そう言われ君彦は興味の素振りも見せないまま、カウンターから店内を覗き込む。

先輩が指さす方向に目をやると、そこには茶髪のロングヘアーガ
まざ目に入った。

それから君彦は顔をひくひくさせながら、更にもう一人の存在を
確認する。

艶やかな黒髪の美少女、そしてその隣には無愛想な憎たらしい顔
をした男の姿が……。

「んなつー！」

黒依ちゃんに志岐城さんに……つ。

そしてなんで犬塚までもがこんな所にいいいいつ

！？」「

一体誰が来ているのかはつきりと認識した君彦は、あまりのショ
ックに無意識で大声を張り上げていた。

来た理由

君彦がバイトとして働いている料亭に顔見知りが三人も来ていることに、何が起きているのか……見間違いではないだろつかと、君彦は何度も確認しつつ驚愕していた。

黒依には元々バイト先を教えていたので特に問題はない、響子に関しても別に一人がバイト先に来た所で君彦はむしろ歓迎ムード一色で出迎えていた所だ。

しかしその場に慶尚がいるとなれば話は大きく変わってしまう。それも単体で来るならまだしも、なぜ黒依や響子と二人一緒にここに訪れているのかその理由が全く理解出来なかつた。

君彦が顔を引きつらせたまま固まつていると、興奮氣味の先輩達がこぞつて君彦に声をかけて来る。

見た所、慶尚が側に居ても響子にまとわりつく色情靈は健在のようで、先輩達は全員その色情靈の色香に惑わされている様子だ。

「おい猫又、お前もあの美少女が気になるのか！？」

そりやそりやどうよなあ、あの綺麗な容姿、目にするだけで胸がドキドキしてくるし、目が合つたらもうそのまま手を出してしまいそうな衝動に駆られてしまう興奮！

オレがおかしいのかと思つてたけど、やつぱりこの奴全員が同じ思いだつたんだな。

天然なお前も同じつてことは、やつぱあれば男を虜にするオーラか何かがあるんだなあ！」

（いや、それは志岐城さんのオーラとかじやなくて色情靈の成せるものなんんですけど）

しかしそんなことを厨房に居る男性陣全員に話した所で、君彦の

方が頭がおかしいと思われるのには日に見えてるので、そこはあって口を閉ざしたままにしておいた。

先程の先輩の言葉にもあつた「天然なお前も同じ」という表現は、完全に間違いであることも黙つていた。

響子にまとわりつく色情靈が健在ならば、今ここにいる全員に何を言つても無駄だと察した君彦にとつて、彼等が響子を見て騒ぎ立てるに關してさほど気に留めることはない。

むしろ君彦に取つて最も重要な問題、女性陣の中にたつた一人だけ気に食わない男が混じつていることが肝要だつた。

ともかく厨房でいつまでも三人が席に座つてゐる状態を見ているだけじゃ何も始まらないと思つた君彦は、客に注文を聞きに行くフリをして厨房から出て行き、響子達に話しかけようとする。

率先して出向いた君彦のことを「抜け駆け」と勘違いした男性陣は一斉に手を伸ばし、君彦を食い止めようとしたが素早い動きで駆け抜けて行つたので誰一人として君彦を捉まえることが出来なかつた。

君彦は慶尚の姿が目に入るや否や顔が引きつり、意味もなく胸の奥から込み上げてくる不快な気持ちに負けないように歩を進める。すると最初に君彦の接近に気付いたのは……、慶尚であつた。

「……遅い」

「……くつー」

何が遅いのか、一瞬悔しそうに表情を歪めながら君彦は怒鳴りそうになる気持ちを必死で止める。

三人が店に来ていることに気付くのが遅かったのか、それとも店員として注文を聞きに来ることが遅かったのか。

主語も何もない慶尚の言葉に苛立ちを募らせながらも君彦はあくまで店の店員として振る舞おうと接する……が、どうしても黒依や

響子も目の前に居るのに慶尚といつたつた一人の存在のせいで笑顔を取り繕つことは敵わない様子であった。

「……お客様、ご注文はお決まりでしょうか

ぎこちないような、怒りを抑えたような口調で話しかける君彦に、ずっとメニューを見ていた黒依がようやく君彦の存在に気付き黄色い声を上げた。響子に関しては目の前に座っている慶尚の存在と厨房で騒ぎ立てる店員達の態度を不快に感じており、ずっとピリピリしていた為君彦がすぐ側まで来ていたことに気付かなかつたようだ。

「君彦クン、待つてたんだよ～～！」

黒依のノンキで明るい声が店内にこだましていたが、他の客は誰一人として入店していなかつたので特に気に留めることもなく、君彦はあえて慶尚を無視し黒依と響子だけに話しかけるようにする為、視界に規制をかけた。

「急にどうしたのかと思つたよ、まさか『二人』がこの店に来るなんて！」

あからさまに慶尚の存在を無視した発言をしてみるも、慶尚は全く氣にしていないこともあつてかその言葉に誰一人として引っ掛かることがなくスルーされた。

不機嫌そうな響子は自分にまとわりつく色情靈を鬱陶しそうに手で払おうとするが全く無駄で、結局払いのけようとするなどを諦めて溜め息をつくと、じろりと君彦の方へ視線を移し理由を話した。

「急も何も……、あたしは興味ないからイヤだつて言つただけど、この二人がね。

帰つて来た猫又のお祝いか何か知らないけど、それにプラスこいつの引っ越し祝いも兼ねてさ、ここでパーティーしようつてなつたのよ

全く気のない口調でそつ説明する響子に、慶尚が更なる言葉を添えた。

「志岐城の色情靈がいればメシ代が半額になると思つてな、あえて祓わずに放置してある。

……半額にするよな？」

「オレにそんな権限あるわけないだろ？」「てゆうかそんなくだらない理由で色情靈祓わないって、お前それでも退治屋かよっ！」

そう突っ込んでみたものの、数秒してから慶尚の言葉よりもっと重要な内容があつたことに時間差で気付く君彦はぴたりと動きを止めて思考をフル回転させた。

「……って、え？

猫又が帰つて來たお祝い？

それに何でこいつの引っ越し祝いまで……、なんで！？」

話の展開に全く付いていけない君彦がおろおろしていると、厨房から男性陣達がこぞつて君彦に何か訴えかけているのが聞こえてきた。後ろを振り向き厨房の方に視線を走らせると、そこには片手に紙切れを持つた先輩達が必死の形相でうごめいている。

彼等なりの配慮か、それとも恥ずかしいのか。

響子に聞こえないようにものすごい小声で、殆ど口パクにしか見えない台詞を君彦に向かつて訴えかけていた。

「猫又つ！」

是非ともオレの携帯番号を彼女に渡してくれ！

「いや、オレのを先に渡してくれ！」

「なんの！ オレなんか部屋の鍵を渡してやるー！」

「オレはー！」

「僕はー！」

下心しか見えない先輩達の姿に、君彦は呆れた眼差しでただただ黙つて哀れな狼たちを眺めるだけであった。

四角関係…！？

君彦がバイトとして働いている店の従業員全員が完全に響子の色情靈による色香に惑わされているようで、彼等の燃えたぎる熱い視線に更なる苛立ちを募らせる響子。

さすがにここまで来ると怒りに任せて帰り出すかも知れないと察した君彦が、慶尚を睨みつけるなり色情靈を一時的にも祓うように口添えしてみた。

「おい犬塚、志岐城さんを利用して飲食代をまけさせようとしても駄目だからな！」

志岐城さんはただでさえ色情靈のせいで辛い思いをしてるんだから…

「オレ達と一緒に居る時位は色情靈を祓つてやれよ…」

そうでもしないと料理の注文は受け付けないと言わんばかりの形相で君彦が言うと、慶尚は小さく溜め息をつくなり飲食代半額を諦めたのか…席を立つて響子の方に手を伸ばすと、肩をはたくようにして軽く叩いた。

すると響子の背後にまとわりついていた花魁風の色情靈は怪訝な表情を浮かべながら、響子から離れて行き店の外へと消えて行く。途端に響子は重苦しい感覺から解放され、安堵した表情になる。

慶尚が一時的に響子に取り憑いていた色情靈を祓つている際にも、黒依はメニューを開きながら君彦に料理をオーダーしようと張り切っていた。

「あ、ねえねえ君彦クン！」

この薄揚げの煮物と、長芋と大葉の油揚げロール巻きつですぐく美味しそうだね～！」

「あんたね……、最初にお祝いがビーツとか言つてなかつた？
思い切り食事しに来てんじやないのよ」

マイペースに自分が食べたいものを注文しようとしている黒依に、
すかさず響子が突つ込んでいた。

同じように君彦も黒依達の本来の目的がはつきりとわからないま
ま黒依の注文を走り書きしつつ、苦笑している。

ふと君彦は黒依達の周囲に視線を走らせ、もう一匹の存在を探し
出した。

「……えと、猫又が帰つて来たお祝いがビーツとか言つてたと思つけ
ど。

それじゃここに猫又が来て……、ないみたいだね？」

帰つて來たという表現から、主役は猫又の方だと察した君彦はて
つきり猫又もここに來ているものとばかり思つていたのだが、全く
姿が見当たらないので黒依達に訊ねてみた。

すると今度はちゃんと發案者であろう黒依から説明を受けた。

「うん、実はね。

犬塚クンが君彦クンの隣の部屋に引っ越したつて聞いたから、猫
又ちゃんを呼ぶのは犬塚クンにお願いしてあつたの。

一応このパーティーは君彦クンにはサプライズとして驚かせよう
と思ってたから、君彦クンがバイトに行つた直後に猫又ちゃんを連
れて来てもらおうと思つてたんだけど、部屋にはもう居なかつたん
だつて。

逆に君彦クンは猫又ちゃんがどこに行つたか知らないかな？」

説明の中にいくつか引っ掛かる内容があつたことに気付いた君彦

は、たじろぎながらゆっくりと更なる説明を求めた。

「えと……、黒依ちゃんってどうして犬塚がオレの隣の部屋に引っ越して来たこと知ってるのかな？」

オレは今朝初めて知った所なんだけど……」

君彦が憧れている黒依が、自分の知らない所で慶尚と親密な関係になつているのでは？

という無駄な不安を抱きつつ訊ねる。

しかし内心では真実を知りたいような知りたくないような……そんな複雑な思いも隠し切れていた。

その証拠に君彦は黒依に訊ねながら、全身に嫌な冷や汗を大量にかいている。

しかしそんな心配は皆無だったのか、黒依はあっけらかんとその謎を解いてやつた。

「あのね、あたしのお父さんって不動産を経営してるから。たまたま犬塚クンが一人暮らしする物件を探している所に、あたしが居合わせてただけなんだけど。
それがどうかした？」

「あああ～～～つ、なるほど…。そういうことだったのか～、あはははは～～つ！」

そうだよね、それだけだよねえ！

こんな無愛想男と黒依ちゃんがオレの知らない所で仲良くなつてるなんて、そんなこと有り得ないよねえっ！」

大袈裟に安心しまくる君彦を横田で見つめる響子は、片側の顔面を痙攣させながらひくついていた。

(……その台詞だけで十分だつづーの。

どんだけこの腹黒女の方が好きなわけ！？

全く理解出来ないわ、こいつ……外見だけ可愛い娘にあつさり騙されるタイプだわね）

色情靈が祓われたことで多少の正氣を取り戻していた従業員達の熱い視線から解放されたにも関わらず、響子の苛立ちは一向に治まる気配がなかつた。

それどころか君彦が黒依にデレデレとした表情で話しかける度に、胸の奥のもやもやがだんだん酷くなつて行って今にも何かを蹴り上げてその場を立ち去りたい衝動に駆られそうになつてゐる。

勿論そこまで理性を失うわけにはいかないということもあって、響子は寸での所で堪えてはいるが不機嫌な表情だけはどうしても隠し切れておらず、イラついている響子の様子はバツチリと慶尚に見られていた。

響子の機嫌がだんだん悪くなつてゐることに当然気付いている慶尚であつたが、元々そういう細かい人間関係に首を突っ込む気がないのか、慶尚はそれに關して一言も触れることなく気付かないフリを決め込んでいる様子だ。

ただ君彦、黒依、響子の様子を無言で見つめながら二人の態度や口調をまるで觀察でもするように、ただ黙つて様子を窺つことに専念していた。

八つ当たり

君彦が黒依達の接客（？）をしていると、ちゅうゞ夕食時のせいか次々と家族連れの客が入店して來たので、君彦は黒依達だけに構つている暇がなくなつてしまつた。

「あ、ごめん！

一応オレ、バイト中だから仕事に戻らないとー。」

謝罪する君彦に対し誰一人として反論する「」ともなく、全員適当に安い料理を注文すると君彦はそれを注文書に書き留めて仕事に戻つてしまつた。明らかに今の状況ではお祝いパーティーどころではないと察した響子が、当然さながらの口調で文句を言つだす。

「どうすんのよ、あいつ仕事中だからこのままお祝いがどうとか言つてらんないわよ？」

あたし達だつて番氣に食事する為、ここに集まつたわけでもないでしょ」「」

君彦が接客の為に黒依達のテーブルに來た時に出したお茶をすすぐりながら響子が不機嫌そうに言い放つが、黒依は響子の不機嫌さんてお構いなしにマイペースなままで答へる。

「そうね～、さすがに今の感じじゃパーティーなんて出来ないもんね～。

君彦クンはバイトで忙しそうだし、主役の猫又ちゃんもどこに行つたかわかんないし……。
どうしようか？」

全く危機感のない微笑みを慶尚に向ける黒依、まるでその微笑みには全ての責任を慶尚に押しつけようともしているような雰囲気を醸し出していた。しかし黒依に負けず劣らずマイペースな慶尚も、自分に全く非はない……とでも言つよつて口を開く。

「メシ代が半額にならないなら、ここに食事会にする意味もないな」

「あのね……、あんたは食事代半額が目的でここに来たわけ！？」

慶尚の関心のない態度にさすがの響子が苛立ちを見せて食い付いた、ぎろりと睨みつけて批判するも慶尚は視線を逸らすだけで全く聞く耳ない様子だ。そんな態度にも腹が立つ響子は全くやる気のない慶尚と、そんな慶尚の態度や今の状況に危機感をまるで持っていない黒依……そんな一人ののらりくらりとした態度に対し、遂に響子の堪忍袋の緒が切れてしまつ。

ぱんっとテーブルを両手で叩くと、響子は勢いに任せて怒鳴り声を上げた。

「もひいいわよ、あんた達！」

勝手にすればいいじゃない、ここまで来たあたしが馬鹿だつたわ

！」

突然怒り出した響子に黒依達だけではなく店内に居る他の客、そして厨房から響子の怒鳴り声が聞こえた君彦が驚いて注目していた。奇異な目で見られることに不本意ながらも慣れている響子は、他人の視線に構うことなく怒りを露わになるとそれ以上黒依達へ言葉を交わすことなく店から出て行こうとした。

「志岐城さんつ！？」

慌てて止めに入つたのは君彦だつた。

何があつたのか状況が全く理解出来ていなかつたが、響子が何の意味もなく怒り出すはずがない。

そう判断した君彦は響子がこのまま出て行くことを止めようと、仕事の手を止めて駆け出していた。

出入り口の硝子戸に手をかける寸前で響子の肩を掴む、すると当然反射的に響子が攻撃の体勢に入る。

振り向き様に右手で殴り付けようとする響子。

しかしそのパンチを今まで何度も受け続けて来た君彦は、肩を掴んだ瞬間に攻撃が来ると察していたので回避する準備はすでに出来ていた。素早い響子の右ストレートを紙一重でギリギリかわす君彦は、一発目が来ないようにして……そして響子が振り切つて逃げてしまわないように肩を掴んだ手はそのままで、反対側の手で攻撃して來た響子の腕を少し強く握つた。

君彦の意外な対処に響子は虚を突かれて動きが止まる。

今まで君彦がこれ程俊敏に動いて響子の攻撃を防いだことがないせいだ。

響子がなぜ怒っているのか、その理由がわからないながらも君彦は響子を宥めようと懸命に接する。

「一体どうしたの、志岐城さん！？」

犬塚がまた何かしたのならオレが文句言つてやるから、とりあえず落ち着こうよ……ね？」

まるで小さな子供に言い聞かせるような優しげな対応に、響子は急に恥ずかしさが増してきた。

自分が一人で勝手に怒り出し、周囲を困らせているように思えて仕方がなかつたからである。

途端に押し寄せる罪悪感。

君彦に気を使わせてばかりいる自分に対する自己嫌悪。

そんな思いが響子の心を支配して、余計にこの場に居ることが苦痛に感じられた。

更にその苦痛を増幅させるように、君彦の優しさが追い打ちをかけるように響子の心を苦しめる。

君彦に掴まれた腕を振り払つと響子は君彦を睨みつけ、言いたくもない言葉を言い放つてしまった。

「あんたに何がわかるって言うのよ、人の気も知らないでへラへラしてつ！」

誰にでも優しくすりやうつてもんじゃないでしょ、馬鹿にしないでよつ！」

響子が君彦に対して放った言葉は、ハツ当たり以外の何物でもなかつた。

しかし口から出た言葉を戻すこと出来ず、響子は激しい後悔に苛まれる。

一瞬垣間見た君彦の驚愕した表情が目に焼き付いて離れず、面と向かっているのが苦しくて堪らなかつた。

唇を噛み締める響子を見て、肩を掴む君彦の手が少し緩んだ瞬間に響子はそのまま店から飛び出してしまつ。

響子に言われた言葉に動搖していた君彦は、いつものように後を追いかけることが出来ずにいる。

ただ呆然と立ち尽くしたまま、響子に突き付けられた言葉で君彦は言葉を失つたままであった。

突然のお誘い

（あああああ、あたしのバカバカバカバカ！）

一体何を言つてんのよ、なんであたしキレイでんのよつ！
自分でもわけがわからんないわ！

とにかくもうはらわたが煮え繰り返る位、何もかもが「つ」と「し
い！」

腹立たしくつてしまふがいいわつ！

アイツの笑つた顔を見ると余計に胸の奥がむかむかして、文句を
言わざにはいられないつ！）

支離滅裂となつた響子は心中で血口嫌悪にも近い自問自答を繰
り返しながら、どこへともなく走つていた。

特にどこかへ向かつてゐるわけでもなく、かといって血口のマン
ションの方向へ走つてゐるわけでもない。

ただがむしゃらに、めちやくめちやに走り続けていたのだ。

すると前をしつかり見ずに走つてゐた響子は、短い悲鳴と共に突
然目の前に現れた女性に勢いよくぶつかつてしまつた。

相手の女性も響子と同じように虚を突かれたのか声を上げる間も
なく、手に持つていた荷物を地面に落としてしまう。

響子は相手が女性であることがわかるなり、急いで地面に落ちた
相手の荷物を拾い始めた。

「「J……Jめんなさい、ちゃんと前を見てなかつたから気付かなく
て……」

『ここのよ、気にしないで』

響子は慌てながら女性の荷物を拾い上げて行く。

女性の荷物は大きな風呂敷包みに包んであった重箱で、風呂敷でしつかり結んでいたが響子とぶつかった拍子に少し結び目がほどけてしまったようで、三段式の重箱のフタが少し開いて中に入っていた料理が地面に転がっていた。

さすがに地面に落ちた料理を再び重箱に戻すわけにはいかないと響子が躊躇つていると、相手の女性がはにかんで笑い声を上げながら響子のことを優しそうな眼差しで見つめる。

見ると響子がぶつかった女性はとても美しく、ガラス玉のような……まるで猫のような瞳はカラー・コンタクトでも入れているのか、緑がかつた色をしていて街灯の光で反射する度に緑色の瞳は時折金色を帯びたりしていた。

綺麗な和服を着ていたので、どこか夜の店の女性かと響子は思つ。

響子の親戚である蝶野蘭子（志岐城則雄）もゲイ中心の水商売を経営しているので、つい直感的に同業者だと認識してしまった。

そんな女性の美しい容姿、綺麗な衣装、そして……まるで京都の女性のようなどこかはんなりとした物腰に響子が見とれないと、女性はくすくす上品に笑いながら響子に話しかけてきた。

『ああ、別に気にする必要はないのよ？

どうせこれを吃るのは、てんで躊のなつてないお客様さん達ばかりだから。

地面上に落ちたお料理を中に戻しても、どうせ氣付かないでしょ』

相手の女性の台詞から、この重箱の料理は客に出すものだと理解出来た。

しかし響子は女性の穏やかでありながら、どこか軽薄な言葉にど

う返事をしたらいゝものか困っていた。

その時、はんなりとした女性の後方から聞き慣れた少女の声が聞こえてくる。

『涼子わ～と、猫又ちゃんをお店に連れて行ったよ～！

お店に着くなり猫又ちゃんが早くお酒とお料理持つて来いって…

…、あれ？

お姉ちゃん！ 一体どうしたの、そんな所でつー！？

声をかけて来たのは君彦と親しい幽霊の女子、カナであった。おかげにした黒髪に赤いスカート、どこか怪談話に出ていた「トイレの花子さん」のような外見をした少女は、響子を見るなり嬉しそうな表情をして響子の周囲をぐるぐると浮かびながら回っている。

さすがに幽霊を見ることも慣れてきた響子は、カナが害の無い幽霊だとわかつてるので何とか普通に接することが出来た。

「えっと、いつも変なタイミングで会つわね

それでも「幽霊と会話をする」という行動はさすがに慣れないせいか、響子は苦笑いを浮かべながらカナに話しかける。

するとカナは響子から離れて行くと先程響子とびぶつかったはんなり女性、涼子の側にそっと寄り添つた。

『うん、今から君彦お兄ちゃんを猫田石に呼びに行こうと思つて。猫又ちゃんが無事に戻つて来てくれたから、物の怪のみんなが宴会をしようつ言い出したの。

あ、良かつたらお姉ちゃんも猫田石に来てよー。

今は悪い色情靈さんもないみたいだし、猫又ちゃんや君彦お兄ちゃんもきっと喜ぶから！』

カナの言葉で大体の流れを察した。

ようするに黒依達が開こうとしていたパーティーは、タッチの差でカナ達を持って行かれたということになる。

パーティーに猫又を連れて行く為、慶尚が君彦のアパートへ行つても誰もいなかつたという説明がこれでついた。

しかしカナの誘いに響子はあからさまに抵抗の意を示す。自分でもわかる位あからさまに……。

「君彦お兄ちゃん」という言葉がカナの口から出て来た途端、響子は先程やらかしてしまった出来事を思い出し、笑顔が引きつっていたのだ。

カナの言葉に出てきた単語の半分も理解出来ないまま、響子はカナの誘いを断ろうと口を開き掛けた瞬間。

響子の断りの言葉を遮つて間に割つて入つたのは涼子だった。

『あらあら、あなたが猫又さんやカナがよく話してた女の子ね？ 確か猫又さんにまだがれたせいで、中途半端に靈媒能力を開花させられたとか……。

災難だったでしょう？ いきなり幽霊やら物の怪が見えるようになるなんて。

でも自分の身を守る為だと思えば、猫又さんがしたことほきっと正しいのかもね』

矢継ぎ早に言葉をかける涼子に、口をあんぐりとさせたまま相槌を打つことしか出来ない響子。

呆気に取られながら立ち尽くしながら涼子の言葉が切れた隙に、誘いを断つてすぐにこの場から立ち去ろうと頭の中で考えていると、そんな響子の考えを既に読んでいたのか……。

涼子は持っていた重箱をカナに持たせるなり、両手でがつしりと響子の手を掴んで放すまいと力を込める。

「逃さない」という雰囲気すら感じ取れる涼子の勢いに響子がどうぞおきしていると、優しげににっこりと微笑んだ涼子は響子に向かって回避不可能な言葉を浴びせた。

『猫田石つていうのはウチが経営してる居酒屋でね？
主に幽霊や物の怪達の溜まり場になってるのよ。

あ、安心してちょうどだいな。

口が悪いのも少なからずいるけれど、みんな根は良い物の怪達ばかりだから。

ウチの店ではお酒やおつまみが出て来る以外に、悩み相談も引き受けてるわ。

……って言つても、別に本格的な悩み相談じゃなくて。

そうねえ、……近所のお姉さんに相談する、みたいな感覚かしらね。

だから今お嬢ちゃんが抱えてる悩みもウチが聞いてあげてもいいのよ？

……どうやらあなた、自分の気持ちとかちゃんと向き合いついでが出来てないみたいだからね。

試しに少し話してごらんなさいな、内に溜めてるもの吐き出すだけでも結構すつきりするわよ？

もしかしたらあなたが抱えている色情靈について、何かわかるかもしれないし……。

どうかしら？ ウチの店と一緒に来ない？』

ついて来るかどうかの許可を得ようとしている言葉とは裏腹に、涼子の手は響子の手を握ったまま放す様子がなかった。

涼子の瞳の奥に優しさと、鋭く光る力強さのようなものを感じ取つた響子は彼女のキラキラとしたガラス玉のような瞳を見つめながら、吸いこまれそうな感覚で見入つていて響子。

催眠か暗示にでもかけられたように涼子の手を振り払い、抗うこ

とも出来ない様子でじっと涼子の瞳を見つめ続ける。響子の中には一つの心が渦巻いていた。

もしかしたら自分でもよくわからない、このもやもやとした気持ちの正体がわかるかもしれない。

今までずっと悩まされ続けてきた色情靈について、何か解決法がみつかるかもしれない。

そして何より、響子の頭の中に真っ先に思い浮かんだこと。

この女性は君彦のことを知っている、恐らく自分が知っている君彦よりもずっと以前の君彦のことを……。

響子は黒依以外に君彦のことについて話ができる相手が欲しかったのかもしれない。

気がつけば響子は自分でも無意識に涼子の手を取ったまま、猫目石がある商店街の方へと一緒に向かっていた。

「志岐城さんに一体何があつたのか説明しろよ、犬塚」

京都の料亭風の店内で店員が客に向かつて詰め寄つていた。

白い割烹着を着た店員、君彦は物凄い剣幕で客として来ている慶尚に事情説明を求めている。

他にも一般客が来てる中で客と揉めたりすれば問題になると思い、厨房にいた先輩が君彦を止めに入ろうとした。

しかし君彦は先輩相手に一歩も引かず、今自分が相手にしている人物が学校のクラスメイトだと簡単に説明すると、店内で口論したら他の客に迷惑がかかると促され、君彦達は一旦店の奥にある更衣室へ移動することになった。

店の奥に移動する際にも通路を歩いて行く時に、客席に座つてゐる家族連れの客やカップルなどが険悪な雰囲気の君彦達を横目で見てはひそひそと何やら話をしている。

店内で騒いでしまつたので他の一般客に不快な思いをさせてしまつたと、少しだけ我に返つた君彦は申し訳ない思いを抱きながら黒依と慶尚を連れて店の奥に案内した。

厨房を抜けた先にある鉄製のドアを開けて出て行くと、そこはいくつかのロッカーや業者から取り寄せた瓶ビールがプラスチックの箱に山積みされて置いてある。

先程開けたドアのすぐ横にはタイムカードの機械が置かれていて、機械の真上には従業員のタイムカードが入つた壁掛けが設置されていた。君彦がバイトしている飲食店の奥の個室に初めて入つた慶尚達は一通り周囲を見回して、時計やレンダーなどを見つけたりしたがそれ以外には特に珍しいものを発見することがなかつたので、こちらに向き直つて不満たっぷりの表情をしている君彦へと視線を

戻した。

両手を胸の前に組んで慶尚達の前に立っている君彦は、鼻息を荒くしながら再び同じ質問を慶尚に浴びせる。

「さつきの話の続きだ。

一体何があつたんだよ、志岐城さんがあんな風に怒るなんて……。
どうせ何か志岐城さんの気に障るようなことでもしたんだろ？」

睨みつけるように慶尚に食つてかかる君彦。

響子を不快にさせたのが自分だと決めつける君彦の態度が気に食わなかつたのか、普段から無愛想でむすつとした表情の慶尚であったが、今回ばかりは本当に不快に感じたのか眉間にしわを寄せて珍しく反論した。

「どうしてオレだと思ひ、何か根拠でもあるのか」

響子がなぜあそこまで怒り出したのか、正直慶尚自身にもはつきりと分かつてゐるわけではなかつたのだ。

自分と黒依が適当に受け流していると響子が突然怒り出した。慶尚の目にはその程度にしか映つていない。

二人の会話のどこに、何に響子は怒りを感じたのか……。

それは慶尚自身も興味があれば知りたいところだと思っていたのだが、残念ながら他人に対しても必要以上に興味を示そうとも思わない慶尚は、せめてこの誤解を解く程度の事情さえ説明することが出来ればそれだけで十分だとさえ思つていた。

多くを語らず、確信を突いた言葉を発するでもない。

そんな慶尚の態度に君彦をは痺れを切らして、慶尚に向かつた思い切り指を差した。

勝ち誇つた君彦の顔、まるで名探偵が真犯人に向かつて「犯人はあなたです」と言わんばかりの状態である。

「根拠ならある！」

それは犬塚……、お前が『男』だからだつ！」

そう言い放つた君彦の言葉は空しく個室に響くだけだつた。
それのどこが根拠になるのか……と言わんばかりに、慶尚はむつとした表情から呆れた表情へと変わる。

黒依も一人のそんなやり取りを、ピンポン球を追うように右へ左へと視線を移すだけで、特に会話に割つて入ろうとはしていなかつた。ただどこか笑いを堪えるよつな……、今にも噴き出しそうになつているのを必死で堪えているように口の端をむずむずとしている様子だけは、慶尚の目にも窺えた。

君彦の決めつけた態度から時折、その場に一緒にいた黒依が何か証言してくれるのかと多少なりとも期待していたといふこともあり、時々黒依の方に視線を投げかけていたのだ。

しかし黒依はその場の揉め事を楽しんでいるかのように、あえて慶尚の無実を証明しようとはせずに口論している一人を傍観者の如く眺めているだけだつた。

数度黒依の方に視線を走らせ、遂には全く当てにはならないことを察した慶尚は小さく溜め息をつくと、黒依を無視して自分でこの面倒臭い展開を回避しなければいけないと想い、ようやく想い口を開いた。

「だから……？」

「そんなものに一体何の関係が」

そう言いかけて思い出す、響子が何に悩まされていたのかを。

一瞬だけ視線を君彦から外し、響子に取り憑いていた色情靈の存在を思い出すと合点がいったように左手にぽんつと右手の拳を打ちつけて、納得した慶尚。

「ああ……、色情靈の影響で男を避けてるんだつたな、あいつは。でもだから何だって言つんだ。

それでオレがあいつを怒らせた理由にはならないだりつ」

悪びれた様子もなく事実を述べる慶尚。

君彦はなかなか自分の言いたいことが伝わらない慶尚に対し、更なる苛立ちを募らせる。

一体どんな言い方ならばこのマイペースな男に理解をせることが出来るんだろう、そんな風に胸の奥のムカムカした気持ちをじつに抑えながら、君彦が次の言葉を考えていた時……。

突然むすっとした顔で突っ立っていた慶尚の視線が君彦をすり抜け、遠くの方に目をやつしていることに気付いて思わず慶尚の視線の先を君彦は追つていた。

振り向くとそこには黒髪のおかつぱをした少女が……、半透明の姿をしたカナが宙に浮かんでいたので君彦は思わず呆気に取られてしまふ。カナが君彦の学校やアパートに遊びに来ることは今までに何度もあつたが、君彦がどこでバイトをしているのかカナに教えていなかつたので、これまでの間カナが君彦のバイト先に遊びに来ることはなかつたからだ。

一体どうやつて君彦のバイト先を知り得たのか、もしくはたまたま入つて来た店に君彦がいただけなのか。

理由は全くわからないが、響子に関して慶尚と話していた君彦であつたがカナが登場してきたことにより、一旦慶尚への詰問は中断されてしまった。

「カナちゃん！」

「一体どうしてここに？」

相手は浮幽靈といえども小さな女の子。

慶尚に向けていた棘のある口調から一変、君彦は子供をあやすような猫撫で声でカナに話しかける。

すると君彦に好意を抱いているカナは嬉しそうに笑顔になりながら、君彦の腕を取つて話しかけて来た。

『あのね、君彦お兄ちゃん！

今から涼子さんのお店で猫又ちゃんの為に宴会を開くことになったの。

君彦お兄ちゃんも主役だから連れて来いつて、猫又ちゃんに言われてこじまでも来たんだよ』

カナの言葉に君彦はついさつき同じ台詞を聞いた気がして、にっここと他人事のように笑みを浮かべている黒依と、特に表情を変えないこの慶尚の顔色を窺うように視線を送った。

どうしてこうみんなして、猫又の帰還祝いを開きたがるのだろうか。

確かに猫又が無事に戻ってきたことは実に嬉しいことだ、それは君彦が一番よくわかつている。

しかしそれは君彦にとって猫又が「家族」であるから。だからこそその喜びもとてつもなく大きなものになっていたと理解出来る、だが他の者達は？

それだけ猫又に人徳があつたところことなのであるつか。

(……猫の場合も「人徳」って言うのか？)

カナは今すぐにでも君彦を、猫娘である涼子が経営している居酒屋・猫目石へ連れて行く気満々の表情で、決して離すまいと君彦の腕を掴んでいるカナに対し、君彦は目の前にいる小さな女の子にどうやつて断ろうか頭を悩ませていた時だった。

今まで特に割つて入ろうとして来なかつた黒依が突然何かを思い

出したかのように声を上げたので、何があったのかと思つた君彦と慶尚はカナから黒依の方へと向き直る。

「君彦クン、『めんどり』あたし帰るね！」

「は？ 黒依ちゃん、いきなりどうしたのー？」

（てゆうか今田はオレのバイトが終わった後にパーティーを開くとかどうとか言つてなかつた！？）

（今更用事ー？）

突然の黒依の発言に君彦だけではなく慶尚までもが、怪訝な顔になつて黒依に注目していた。

黒依はそれでも笑顔を崩すことなく、つい数十分前まで言つていた言葉を覆すような言葉を並べて来る。

「猫又ちゃんがどこに行つちやつたのかわからんない以上、今日はもうパーティーなんて出来ないでしょ？」

それならパーティーはまた今度、君彦クンの家でしようかなつて思つて。

君彦クンと犬塚クンは家が隣同士だから、一人のアパートに行つた方が早いと思うのね。

それと志岐城さんのことなら心配ないと想つよ、多分ー！」

まるでこのまま締めくくるように放つ黒依の言葉に、君彦は自分の後ろに隠れるカナの頭を無意識に片手で撫でつけながら黒依に話しかける。

「いや、でも……っ！」

志岐城さんのあの様子、今まで少し違つみたいたつたから……

心配だし

「もう～、君彦くんは他人のことを心配し過ぎだよ～！

以前からも何度も志岐城さんがいきなり怒り出して、でもその後に仲直りしてつていうの何度もあつたじゃない。

どうせ学校に行けば絶対会えるんだから、君彦くんが気に病む必要なんて全然ないんだよ？

だから、あたし達はもう帰るから。

また月曜日に学校で会おうね、君彦くん！」

片手を振り、黒依は笑顔のまま個室を出て行こうとした。

その時慶尚は一度君彦の顔色を窺い、それから君彦の後ろに隠れるカナへと視線を移すと、そのまま黒依の後を追いかけるように個室を出ようとする。

君彦はどこか自分一人だけが置いてけぼりされたような気持ちに陥り、二人に声をかけた。

個室のドアを開けて出て行く寸前、黒依は振り向き……君彦に向かっていつもの柔らかい笑顔を向ける。

「大丈夫だつてば、君彦くん。

パーティーはいつでも開けるんだし、それに……その幽霊の女子について行けば君彦くんの心配も解消されるから。

それじゃ、またね」

それだけ言つと黒依は一度と振り向くことなく店内へと戻つて行つた。

黒依の背中を追つようになつて見つめていた慶尚は、開いたドアのノブを握り締めたまま後ろを振り向き、君彦に話しかける。

「ま、そんなわけだ。

あの女の事なら心配するな、オレがちゃんと家まで送るかい。
お前はその浮幽霊の女の子と一緒に猫又の所へ行けよ。

……今の猫又はお前の存在が必要なはずだからな

慶尚の意味深な言葉に君彦は首を傾げながらもう一度言葉の意味を聞き返そうと声をかけたが、当然慶尚がそれ以上詳しい説明を君彦にするわけもなく、そのままドアを開めて出て行ってしまった。個室に残された君彦は響子、黒依、慶尚の思惑が何もわからないまま……一人だけ取り残されたような気分になる。

こんなにも近いようで、心の距離がとてもなく遠いと、そんな気持ちになつて来る。

自分がどんなに距離を縮めようと話しかけても、触れようと/orも、誰もが自分をすり抜けて遠くへ行つてしまつみたいな感覚に陥つてしまつ。

そんな思いを抱きながらその場に立ち廻りしていると、君彦にしてみついていたカナが遠慮気味に声をかけて来た。

『君彦お兄ちゃん、もし今は忙しいなら用事が終わつた時にまた来るよ?』

でも……用事が終わつたらすぐにも猫目石に来てね?

色情靈のお姉ちゃんも猫目石で待つてから……』

カナがなんとなしにかけた言葉に、君彦は大きく反応した。

両目を見開き、反射的にカナの方に振り向くと少し声のボリュームを上げて問いただす。

「色情靈のお姉ちゃん……つて、もしかしてあれ……志岐城さんのこと……」

君彦の必死な姿に多少驚きながら、カナはこくんと小さく頷いた。

お店を出て一人歩いて行く黒依を追いかけるように、後ろからついて来る慶尚。

三十秒も経たずに黒依は足を止め、自分の後をついて来る慶尚の方に振り返ると声をかけた。

「あたしのことなら心配いらないってわかってるでしょ、犬塚クン？」

その言葉に対し慶尚は動じる」となく言葉を返した。

「それはどうちの意味で言つてる？」

女子高生の夜の一人歩きが危険なことを指してゐるのか……。

それともお前の正体を知る何者かが、お前に接触して来るかもしれないということを指してゐるのか……」

「冗談でもなく真剣な面持ちでそう聞いて来た慶尚に、黒依は鼻で笑うようにくすりとした。

すると脇間に見せていたような、今まで君彦達の目の前で見せていた柔らかい笑顔から一変。

どこか冷たさを感じさせるような不敵な笑みを浮かべながら、黒依は静かな口調で答える。

「どっちに取つてくれても構わないけど、でも残念。

両方ともあたしには何でもないから安心して？

だから一人で家に帰れるから、別に送つてくれなくてもいいのよ

他者を突き放そうとするよつと黒依は慶尚の付き添いを断りつとしていた。

しかし慶尚はズボンのポケットに両手を突っ込んだまま、それでも動じることなくその断りを断る。

「お前を家まで送るってアイツに約束してきたからな。こりなって言つてもついて行く、悪く思つなよ」

慶尚のその言葉に黒依の顔から笑みが消える。

どこか値踏みするような眼差しから、諦めたよつて肩を竦めると黒依は慶尚の付き添いを許可した。

「一人とも……、自分で言つたことは絶対曲げないんだね。男の子ってみんなこうなのかな、あたしにはわかんないわ。でも……、君彦クンと約束したなら仕方ないよね。

ありがと、犬塚クン」

ほんの少しだけ気を許したような安堵した表情を見せると、慶尚はそのタイミングを見逃すことなくすかさずもう一つ訊ねた。

「あの浮幽靈の女の子の話、お前も聞いてたんだろ。どうして一緒に行こうとしたしなかった?」

その台詞が仇となつた。

氣を緩めかけていた黒依の表情に再び警戒の色が現れると、冷徹な眼差しの奥に少しだけ寂しさを思わせる色が見え隠れする。

視線を逸らすよつと顔を背けると、黒依はそつけなくその疑問に答えた。

「あたしが行つたら、みんな楽しめないでしょ?」

怖がつて誰も歓迎なんてするわけないもの……、だから帰るつて行つたの。

君彦クンと猫又ちゃんの為に開かれる宴会みたいだし。

……それを台無しにしたら、悪いでしょ

黒依のその返事を最後に、慶尚がこれ以上何かを追及することはなかつた。

ただ……学校に関することも何気ない日常など、そんな話題をぽつりぽつりと切り出す程度で、それ以上二人が何か言葉を交わすようなことは何もなかつた。

おひ帰る（後書き）

いつもたくさんのおアクセス、ありがとうございます
とりあえずは毎週月曜日の朝9時に予約投稿しているわけで、それが一
ますが、今後も同じように定期的に更新出来るようご頑守していこ
うと思います。

最初の頃に比べると何やら黒依の方に「影」なる部分が見え隠れし
ております。
それに関しても後ほどメインとして描いて行くことになつてるので、
今はもやもやしていくくださいませ。
それでは今後も「猫又と色情狂」をよろしくお願ひいたします。

頼れるお姉さん

商店街から裏道へ入つて行くと、ぽつんとさびれた場所に一軒の酒場がある。

赤い提灯とのれんには「猫目石」と書かれ、店内から漏れる明かりが裏通りの道を明るく照らしていた。

中からは賑やかな声が聞こえて来ては物が壊れる音や、店内で暴れ回っているような騒音までもが聞こえてくる。

そして綺麗な声音をした女性の怒鳴り声がこだました。

『もう！　いい加減におし！

このお嬢さんが、あんた達みたいな粗野な連中のことを怖がつたらどうすんの！』

女性の喝で、店内は一気に静まり返った。

それまでの賑やかさが嘘のようにぴたりと止まり、突然静寂に包まれた中……他人事のように素つ氣無い口調で猫又が水を差す。

『つつても、こんな連中に後れをとるような気性じやねえけどな……こいつは』

猫又の厭味な台詞に、カウンター席で小さくなっていた響子がむつとして猫又のことを睨みつける。

しかしすぐにまた周囲の客達に向かつて視線を配ると、再び肩身が狭いような仕草になつて縮こまつた。

綺麗な着物姿の女主人、涼子が苦笑いを浮かべながら響子に気を使つて優しく話しかける。

『本当にこめんね、騒ぎ立てることしか知らないような連中ばかり

だから……。

怖がらせやつたかしら?

でもそんなに固くならなくていいんよ。

みんな根は良い物の怪達ばかりだから、お嬢さんのことを取つて食おうなんて考えたりはしないから』

もう涼子に言われながら、響子はふと奥のカウンターに座つている毛むくじやらの謎の物体や、入り口前の客席でお酒を酌み交わしている鋭い牙を剥き出しにしたイタチのような生物と、黒い塊にぎょろりとした目玉と子供のような細くて白い手を生やした何の生物なのかわからない物体を目にしながら、とてもじやないが涼子の台詞に素直に賛同する気持ちになれずについた。

(……てゆづか、ここつらに悪意がないとかどうとか以前の問題なんだけど。

妖怪自体を田の辺たりにして平氣で居られる神経なんて持ち合わせていないわよ、あたし……)

こには主に妖怪物の怪、魑魅魍魎達が集つ居酒屋。

あまりにさびれた一角に建てられてるので、普通の人間が立ち寄ることはまずないのだが、たまに迷い込んだ酔っ払いなども店を訪れたりもするが、その時は普通に接客するようになつていて。特に何かしらの結界といつものが張られているというわけではない。

ただ単に周囲から見れば「どこのか入りづらい」といって、ある種の警戒心を抱かせるような雰囲気を店の外観から醸し出されていく……そんな気にさせる店であった。

響子も長くこの地域に住んでいるが、今までこんな店があったこと自体知らなかつた位である。

そして入つてみれば店の作りなどは「一般的な、どこので

もある居酒屋であつたが訪れる客は異様そのものだった。

居酒屋「猫田石」に連れて来られた響子がこの店に入つた時にはすでに店内の客達は出来上がりしている状態で、中を覗いた瞬間目を疑うような光景にすぐさま固まってしまったのを響子は忘れない。

特撮か何か、そんな風に真っ先に考えたがどう見ても体の大きさや特殊メイクの凝り具合から察して、それらが「本物」であると響子が理解するのにさほど時間はかからなかつた。

響子は安心安全だと促されながらも自然と足は、他の客達と最低限接触しない距離感を保つ為に、あえて一番奥のカウンター席に向かつっていた。

響子が一人ぽつんと席に座ると、店の入り口手前で酒を飲んでいた猫又が響子の存在に気付き、響子の隣の席へと移動してちょこんと座る。その時は特に深く考えることのなかつた響子であったが、何人かが人間である響子の存在を訝しげに感じて声をかけようと近寄つて来た所を猫又が適当にあしらつて響子に近付けさせないようにしていた場面を目撲していた。

そこで初めて、猫又が他の物の怪達が人間である響子に害を与えないように、自分がその境界線として響子の隣に陣取つたのだと察した。だがそれを知つた所でどうしても素直に接することが出来ない響子は、猫又の気遣いに気付きつつも決して感謝の言葉を述べるようなことはなかつた。

店に入つて涼子が酒を勧めようとしたら、響子はまだ未成年であることを涼子に告げる。

すると涼子は酒以外の飲み物を冷蔵庫から取り出し、コップに冷えた麦茶を注いだ。

響子は麦茶の注がれたコップを口の中に持つて行き、とりあえず氣を落ち着かせる為に冷えた麦茶を口の中に含む。

これだけ妖怪だらけの店を経営する人物の事……、見た目は京都風の綺麗なお姉さんではあるが恐らく普通の人間であるはずがないと、響子は心の中でそう推測していた。

そもそも猫又によつて幽霊や物の怪を見ることが出来る能力を与えられるまでは、響子もそれまでそういう存在を目にすることなく実在することさえ知らなかつた位である。

それが妖怪達を専門とするよつな居酒屋を営む位だから、君彦と同等の靈媒能力を持つているか。

もしくは涼子と呼ばれる女性自身が、実は物の怪だといつ可能性も否定出来なかつた。

そう考えると余計に落ち着かなくなつてしまつので、響子は冷靜さを取り戻す為にどんどん麦茶を口に含んでさきよろきよろと落ち着きなく店内に視線を走らせていた。

そんな落ち着きのない響子を見て、猫又は一又の尻尾を左右に振りながら前足をカウンターの上に乗せて響子に話しかける。

『ところで、なんでこんな所まで来たんだよお前。

確かに黒依達と一緒にパーティーか何かするはずじゃなかつたのか？』

そう訊ねる猫又に、響子は眉根を寄せながら聞き返した。

「えつ、あんた……何でそれ知つてんのよー？」

驚く響子をちらりと横目で見て柔らかく微笑みながら、涼子はヒラメのえんがわを猫又に差し出す。

猫又はふふんと鼻を鳴らしながら、出されたえんがわの匂いを嗅ぎ、それからむしゃむしゃと美味しそうに食べ出した。

響子の質問に答えることなく食り食つ猫又の姿に、少しだけ怒りを覚えた時……涼子がくすくすと上品に笑いながら猫又の代わりに説明してくれた。

『猫又さんはね、あの犬神のお兄さんと犬神のことが苦手みたいで

ねえ。

誘われる前にウチの店に逃げて来たつてわけ

慶尚が猫又を誘つ為に君彦のアパートに行つたが、誰も部屋にいなかつたと言つていた理由がこれで分かつた。

どちらにしろいつかはパーティーをさせられそうな雰囲気であつたことから、今逃げた所でまたいつか誘われるに決まつているのだと思つた時、再び猫又が訊ねて来る。

『そんで？ なんでお前がこんな所まで来てんだよ。

君彦を誘いにバイトの店まで行つたんだろ、黒依達と。

それがなんで妖怪達が入り浸る居酒屋に来る羽目になつたのか、ちょっとばかし興味あるなあ。

ま、どうせお前が一人でいきなりキレ出して君彦と不毛な喧嘩でもしちまつたんだろ！？』

無責任な笑い声を上げながら大笑いしていると、そんな猫又の頭をぴしゃりと軽く小突いた涼子が唇を尖らせて非難する。

『猫又さん、そんな言い方失礼でしょ！

お嬢さんにはお嬢さんなりの理由があるんだからね。どうせそんなの、オスにわかりはしないだろ？けど

涼子のお叱りを受けた猫又は、ふてくされた表情になつて押し黙つた。

そんな奇妙な光景を田にしながら響子は、ここに来た理由を説明しようと思ったが猫又が側にいる以上どうしても話しが出されずに、恨めしそうな視線で猫又をちらちらと窺つ。

そんな響子の仕草を見た涼子が勘を働かせると、奥で騒がしく飲んでいる妖怪を呼び出すと猫又にどんどんお酒を勧めるように連れ

出せれた。

『「いやつ！ あんまり飲むと君彦に怒られるつー...』

『大丈夫よ、今力ナガ君彦さんもここに来るよつこつて頼みに行つてる所だから。

付き合いの為ならつて、きつと君彦さんも許してくれるわよ
これはウチの奢りだからお代は氣にしないで飲んでつてちょうだい。

……つて、猫又さんが飲む酒代だけだからね！？

あなた達はちゃんと払いな、わかつた！？』

威勢の良い声と共に猫又は一つ目小僧と毛むくじらの何かに体をがつしりと掴まれて、奥の客席まで拉致されていった。

「「いやあああ」という低くかすれた声が店内に響きながら、涼子は気を取り直して響子に話しかける。

『これで邪魔者はいなくなつたから、話しやすくなつたでしょ』

この台詞でようやく涼子が自分に氣を使つてくれたんだと察した響子は、呆気に取られながらもどこか安心した表情になつて涼子のことを見つめた。

美しく、強く、そして周囲への気配りを怠らない彼女の姿に、響子はどこか惹かれるものを感じる。

それはまるでこれから自分が目指したいよつな、そんな理想的な女性像を涼子に感じ取つたかもしけれない。

彼女なら信用出来るかも。

心の内を打ち明けても、きっと大丈夫かもしねりない。

響子は初めて、身内ですら明かすことの出来なかつた思いの丈を話せる相手を見つけたと確信し、話し始めた。

自分自身にも理解し難い、複雑な思いを。
君彦に対する、不可解な苦しみの全てを。

涼子が誘つた理由

奇妙な「人あらざる者」達が集う居酒屋にて、人間である響子は話を聞いてくれるという居酒屋の女主人である涼子に自分のことを話してみようと思つていた。

今まで身内でさえも本当の意味で心を開いたことがない響子が、なぜ涼子には話せそうな気がしたのか……それは本人にもわからぬ。しかし響子の悩みは今まで自分の周囲にいる者達には到底理解出来ないものなのだということを、響子自身無意識に察していたのかもしれなかつた。

それ程に響子の周囲には、響子の現状を理解出来る者がいないのだ。

色情靈。

その存在について相談出来る者がそこらにいるだらうか。そしてその存在を教えた人物に対して、更なる悩みが増えたことも誰に相談すればいいのだろうか。

靈の存在を理解し、なおかつその人物のことをよく知る者。そんな都合の良い人物がいるとは思えず、ずっと心の内に秘めることしか出来なかつた響子。

ようやく相談するに足る人物に響子は会えた。

だからこそ他の人間とは異なり、容易に心を許せたのかもしぬい。

いや、むしろこれが本来の響子の姿のかもしぬなかつた。

余りに不信になり過ぎて、それで他人に対してもなかなか素直になれなかつたのかもしぬない。

何より目の前にいる女性には響子が欲しい物を持っているように

見えた。

憧れの対象といつてもいい、そんな思いを響子は感じ取っていたのかもしない。

気さくに、裏表もなく響子に接してくれる涼子なら、きっと笑つたりせずに自分の話を聞いてくれるかもしないと踏んだのだ。何より響子はもう自分の心の中に問題を抱え込むことに限界を感じていた。

今までずっと異性に対したつた一人で苦しんで来て、それだけで十分重荷であつたにも関わらず更なる問題が響子の心をかき乱していたのだか無理もない。

色情靈に苦しめられるようになつてから今日まで、響子が異性に対し興味を抱くといつゝとは相当な苦痛であったのだから。

店の奥で猫又達が騒がしく酒を飲んでいる。

殆ど周囲の物の怪達に無理矢理酒を飲まされて、猫又はそれを制止しようと暴れ回つていると表現した方が妥当かもしれない。

そんな中、響子は店の端で何から話し始めたらいいか頭の中で整理しながら、ちらちらと涼子の顔色を窺う。

涼子はなかなか話し出そうとしない響子に対し、嫌な顔一つせずにこり微笑みながら待つていた。

本当に聞きたいことをすぐに口に出来ない響子は手始めに、自分に取り憑いている色情靈について訊ねてみると

「あの……、今はどこかに行ってしまったてるけど。

あなたはあたしに憑いてる色情靈に関して、何か知りませんか？具体的なことを知りたいってわけじゃないけれど、せめてあたしから引き離す方法がわかれればと思つて。

あそこにはいる猫又は何か知つてそなただけどあの性格だしだけど……。

それにどうせなら自分でどうとかしたいと思つて、聞いてみたんだけど……。

少し不快そうな面持ちで奥にいる猫又の方に視線をやると、響子はすぐまた涼子の方へと視線を戻した。

響子が言いたいことを察しているのか、涼子は猫又を見つめながら呆れたように微笑んでいる。

その笑顔は響子の話を笑っているわけではなく、猫又の性格のことと言われて笑っているようだった。

涼子が猫又の方へ視線を傾けた時、ちょうど猫又は一升瓶を両の前足で抱えながら周囲を威嚇している場面。

猫又が抱き抱えている酒は猫又が大好物としている「鬼殺し」、それを他の物の怪達に取られまいと奮戦している様子だった。

すると涼子は視線を響子へ戻し、少し困ったような微笑みを浮かべながら話し出す。

『色情靈か……、確かに以前猫又さんから聞いたことがあったわね。『ぐぐぐく一般的な悪靈だつたら、猫又さんの力で無理矢理引き離すことは簡単だつたんだけど。

でもお嬢さんに憑いてる色情靈はただの悪靈じやない、恨みの念が強過ぎるので。

だからそんな悪靈をお嬢さんから引き離すのはとてもリスクが高いって……。

もしかしたらお嬢さん自身にもその負担が压しかかって、最悪……お嬢さんの肉体に影響が出るかもしれないのよ。

だから猫又さんはお嬢さんから色情靈を無理矢理引き離すことをしなかつた。

ああ見えてね、猫又さんってとても心が優しいの。

口では悪態付いたり、乱暴者みたいな振る舞いをしてはいるけどね。

お嬢さんに憑いてる色情靈を祓わなかつたことも、あつとそいつた理由があるのよ。

正直、ウチにはこれ位しか言えないわ……あまり力になれなくて
ごめんなさいね。

でもお嬢さんに憑いてる色情靈に関しては、ウチの情報網で何とか調べてみるわ。

こう見えてこの町に滞在している物の怪達とのネットワークはそれなりに広いから。

だから色情靈に関する情報は少し時間を貰えないかしら?』

涼子からそう言われ、結局は早急な解決法がわからなかつたものの色情靈に関する話題が終わつてしまつたことに、響子は虚を突かれて急に落ち付きの無い態度へと変わる。

こんなに早く話が終わつてしまつたら、心の準備をするまでもなく君彦に関する話をすぐにでもしなくてはいけなくなる。もう少し話を長引かせて、響子の緊張がほぐれてから君彦について話を聞こうと思っていた計画が見事に総崩れとなつた。

そつやつて拳動不審に陥つて響子を余所に、涼子は笑顔の裏で本当のことを見ていることがバレないようにしていた。

(猫又さんが言つてた……。

彼女に取り憑いてる色情靈は恨みの念が強いだけじゃない、復讐の念も込められているって。

そんなことを今のお嬢さんに話した所で不安にさせるだけ……。

実際お嬢さんに取り憑いている色情靈の正体がはつきりとわかっていない以上、本当のことを話すわけにはいかないのよね。

色情靈の素性、恨みの理由、復讐の本当の対象が何なのか。

それがちゃんとわからないと彼女に取り憑いた色情靈を祓うことは出来ないわ……。

猫又さんから色情靈に関して調べて欲しいって言われて、あれから一ヶ月経つけれどまだ詳しく掘めてない。

もしかしたらこのお嬢さんに取り憑いている色情靈を祓うこととは、

永遠に不可能なのがも……（）

笑顔を取り繕いながら涼子は猫又に頼まれていたことを思い出していた。

最初にその依頼をされた時、詳しい事情を知らなかつた涼子はあまり乗り気ではなかつた。

強い念を持った悪霊に関わることは自分達に返るかもしれない、居酒屋を経営することで情報が飛び交いやすい涼子は情報屋紛いのことをしてはいるが、涼子が取り扱う情報はいくついくつ細なものばかりである。

単なる物の怪探しであつたり、帰る場所を忘れてしまつた浮幽霊の墓場探しであつたり。

しかし猫又から依頼されたものはそいつた類の依頼とは、全く異なつていた。

邪念に満ちた悪霊を祓う為、何の犠牲もなく力ずくで祓うにはその悪霊の素性や目的を知り尽くす必要がある。

その時涼子は少し疑問に思つていた。

いつもならば町全体に関わるような大きな問題でなければ手を下さうとしない猫又が、今まで一人の少女に取り憑いていただけの色情靈を祓う気になつたのか、それがどうも納得いかなかつたのだ。

いくら猫又の本来の気性が優しいものだつたとしても、基本的な性格は面倒臭がりで怠惰だつたはず。

にも関わらず猫又が少女に取り憑いた色情靈を祓う気になつたことを不思議に思つた涼子は、それを猫又自身に訊ねてみたが本当のことは何も明かしてくれなかつた。

そこで涼子は察したのだ。

猫又が言葉を濁す時、涼子にすら打ち明けないことがある時は決まって一人の人物が大きく関わっていた。

それは……猫又が守りたい存在、君彦を守る為に他ならないということに気付いたのだ。

他の物の怪達や浮幽靈のカナから聞いた話をまとめてみて、それがはつきりとわかつた。

猫又が守るべき存在である君彦が、色情靈に取り憑かれている響子を気に掛ける以上、君彦に色情靈による災いが降りかかるかもしない。

そう察した猫又は色情靈を放つておくわけにいかなくなつたのだ。だからこうして涼子に依頼してきたのだろうと理解した。

全ては君彦を守る為、色情靈から守る為に猫又は響子に降りかかる怨念の塊をどうにかしようと行動に移したというわけである。それで疑問が解消された涼子は、全面的に猫又に協力することにした。

今日こうして色情靈に取り憑かれた響子に出会つたのも何かの縁。色情靈に関する情報を少しでも多く手に入れる為に、涼子は人間である響子をこの猫目石に誘つたのだ。

そうとは知らず響子は、色情靈に関する話題が尽きてしまい、今度は本当の意味で一番聞きたかった君彦に関する話題に突入しなくてはいけなくなり、急に恥ずかしさが増して来ていた。

顔を真っ赤にしながら次の話題をなかなか口に出せず、もじもじする響子。

その時、居酒屋の硝子戸が開いて客が一人入つて來た。

「涼子さん、いつも猫又がお世話になつてます」

にこやかに入つて來たその人物は、店内を一通り見回して一番奥に座つている響子へ来た途端視線を止めた。

学ラン姿の客に響子は絶句する。

そういえば涼子やカナが何か言つていた気がした。

用事が済めばすぐにでもここに君彦がやつて來るのだと……。

気付き始めた矛盾

響子は固まっていた。

一番肝心な内容を相談する前に当人が店に現れてしまつたからだ。学ラン姿で居酒屋・猫目石にやつて来た君彦は、懐くように側から離れない力ナに優しく笑い掛けながら、すぐに視線は入り口手前で一升瓶を抱き抱えている猫又ではなく、店の奥で硬直している響子へと注がれていた。

カウンターから愛想の良い涼子の声が響く。

『君彦さんいらっしゃい、待つてたのよ！

さあさ、こっちに来て座つてちょうどいいな。

今お飲物を入れるから、今日はゆっくりしていってね』

いそいそと女主人の顔に戻つた涼子は棚からグラスを取り、氷を入れた。

その間、君彦はちらりと猫又の方へと視線を走らせ睨みつける。

君彦の眼差しは明らかに猫又の行動を諫めるように、叱り付けるような厳しい目つきをしていた。

猫又はその視線に気付くや否や、抱き抱えていた一升瓶をそつとガラスのテーブルに置くと大人しく真つ赤なソファにちょこんと座りこむ。周囲にいた物の怪達は店を訪れた君彦に敬意を払っているのか、片手を振つて挨拶すると急に行儀よくなりテーブルの上から下りたり猫又と同じようにソファに座つたりしていた。

君彦が店に来たことによつて暴れ倒していた物の怪達が急に大人しくなつた所を見ても、君彦は特に気にする様子もなく苦笑いを浮かべるだけでそれ以上は何も言わない。

氷の入つたグラスに番茶を注ぎながら、涼子は君彦が店にやって来てから店内の空氣が一気に変わつたことに当然気付いている。

店内にいる物の怪全員、君彦の祖父に対して敬意を表しているのだ。

しかしそのことを知らない君彦は、物の怪達が自分に対しても少し距離を置いている態度をしているのを見て、ただ単に人間と物の怪との違いがあるから……その程度にしか認識していなかつた。

きっと物の怪と人間との間には何かしら埋めようのない溝のようなものが存在するのだろう。

猫又と同居する以前から幽霊や物の怪の存在を知り、程々に接して来たことのある君彦は付かず離れずの距離感を保つた付き合いを今までしてきた。

力ナのように君彦を慕つて交流を求めて来る者ならまだしも、相手が君彦を警戒している分には必要以上に親しくしようとすることもなかつたが、猫又と同居するようになつてからは人外の者との交流がいつの間にか増えていつた為、こうして微妙な距離を保ちつつ彼等との親睦を深めることが出来たのだ。

猫目石の常連達とは特別親しくしていいるわけではないが、軽く挨拶をする程度にはなれたと君彦は思つていた。

それでも相手はあくまで妖怪の類、人間のことを完全に信用しているわけではなく必要以上に親睦を深めようとしている存在ではないことを君彦は猫又から教わつていた。

中には物語に描かれるように人間を餌として認識している妖怪だつて存在するのだ。

妖怪相手に無防備になつてはいけない、不用意に信じてはいけない。

それは幼い頃から君彦の祖父である征四郎からも言われていたことである。

君彦は祖父と猫又から教わつたことを胸に、決して心を許し過ぎない範囲で、招かれれば猫目石に足を運ぶことにしていた。

真つ直ぐに自分の元へやつて来る君彦を横目で窺いながら、響子

は急激に帰りたい気持ちに襲われた。

つい先程、ほんの数時間前の出来事。

響子は自分でも抑えられない激しい衝動に駆られて、君彦に対し
て溜まっていた怒りをぶつけてしまったことを思い出していた。

今でこそ頭も冷えて、冷静さを取り戻していた響子は自分のじで
かした過ちに後悔している。

出来ることなら時間を遡つてもう一度やり直したいと思つ程である。

しかしそんなことが不可能なことがわかつてゐる響子は、無意味
に笑みを作ることも睨みつけることも出来ない複雑な表情で居心地
悪そうにしていた。

きつと完全に嫌われた。

響子の脳裏に真つ先に浮かんだ言葉だつた。

仕返しされるわけでもなく、響子に対して文句を言つ君彦をイメ
ージするでもなく、ただ「嫌われた」と思つた。

出会つてから今日までそれ程付き合いが長いわけではない。

それでも響子には分かつていた。

君彦は何でも笑顔で取り繕うような人間だ。

きつと響子のことを心底嫌つていたとしても、笑顔で何事もなか
つたかのように振る舞うに決まつている。

腹の底では何を考えているか、恐らくヒステリックな響子のこと
を扱いにくい女だと思っているに違いない。

そう思つたら泣けて来そつた。

今まで誰に嫌われようと、ましてや男に何と思われようとビリビリで
も良かつたはずなのに。

君彦にだけは……同じ男のはずなのに、君彦にだけは嫌われたく
なかつたのだ。

それもおかしい話である、明らかに矛盾していると響子自身にも

わかっている。

男という存在は響子にとっては敵以外の何者でもないはずなのに、どうして君彦にだけは嫌われたくないんだろう？

特に端正な顔立ちというわけでもなく、男らしさを兼ね備えているようにも見えない。

どちらかといえば軟弱な印象で、実に頼りなさそうに見える。響子が君彦と距離を取ろうとしていたので、響子と君彦の間に何か好感を持つような共通点があるとは思えなかつた。

今で言えば「人外の存在を目視出来る」という共通点はあるが、それなら犬塚にも同じことが言えるはずである。

にも関わらず響子が最も嫌われたくない人物、とても気になる人物は君彦だけだつたのだ。

その意味がわからない。

なぜこんなにも君彦のことが気になるのか、なぜこんなにも君彦に嫌われたくないのか。

その答えを涼子に聞くつもりでいたのに計画が大きく狂つたことによつて、響子は自分目指して歩いて来る君彦から逃げ出しあたくて堪らなかつた。今にも席を立つてこのまま店の外へと走り出したくて堪らなかつた。

しかしそんなことをすれば、先程……君彦のバイト先でした過ちと何も変わりはしない。

ならばどうしたらいいのか。

長年他人との交流を避けてきた響子には、この後どうしたらいのか全く考えもつかなかつた。

いくら君彦がお人好しで気さくな人間だつたとしても、わけもわからず怒鳴られたんじゃ怒つても当然である。

そんな相手に何て声をかけたらいいのか、どんな顔をしたらいいのかわからず、君彦から視線を逸らした時……。

この間にか響子のすぐ隣に立っていた君彦が明るい声で話しかけてきた。

「良かつた、志岐城さんがまだここに居てくれて！
もしごれ違つたらビックリよつて、急いでこじまで来たんだよ」

屈託もなく、つい数時間の出来事が夢か幻だつたよし、まるで何もなかつたかのように、君彦はいつも通りの明るい雰囲気で響子に話しかけてきた。

あまりに自然な態度に、逆に不自然さを覚えた響子は呆気に取られて目をしばたく。

ぽかんとして言葉を失つている響子の隣で、君彦は手に持つていた包みをテーブルの上に置くと涼子に告げた。

「あ、涼子さん。
これ……店の残り物で作ったおつまみで申し訳ないんですけど、どうぞ良かつたら食べてください。
お店でも結構評判良かつたんで、少しだけ折り詰めにして持つて来たんです」

そう言つて包みを開けると紙で出来た折りたたみの弁当箱には、ちくわの磯辺焼きに、もやしとセロリをじまで炒めたもの、それからすりおろしたれんこんにネギと桜えびを混ぜ合させてハンバーグのよう焼いたものなど。

見るからにとても美味しそうなつまみが敷き詰められていた。

涼子は嬉しそうに声を上げて弁当箱に手を出そうとした時、奥に居たはずの物の怪達が君彦の手作り料理の存在に気付いて一斉に集まって来た。

『なんだなんだ、君彦兄さんの手作り料理じゃないか！』

『あなたの作った料理、実はおじさん大好きでねえ！』

『おいおい、どうせ酒のつまみにして食つまつだけだからお前さんに味なんてわかつちやいないだろ？』

君彦の回りに物の怪達が集まって物欲しそうな皿で見つめる光景に、響子は思わず席を立つて後ずさりしていた。

急に周囲が賑やかになつて君彦は全員につまみを取り分けようとい、涼子に小皿を出して欲しいと頼む。

『もうあんた達！ 君彦さんの『厚意に甘えるのはいいけれど、君彦さんは特別なお客様なのよ！？

何こき使おうとしてんのやー。

ああ君彦さん、いいのよ。 いれはウチがするから、君彦さんはお嬢さんを……』

物の怪達が集まつて来たことにより響子が君彦と距離を取つてしまつたことを気遣つて、涼子は田線で促した。

君彦はすぐさま涼子のアイコンタクトに気付き、小皿に取り分けようとしていた箸を置いて後のこと涼子に任せると、君彦も席を立つて響子の方へと移動する。

つまみ田端で集まつた物の怪達を順番に一又の尻尾でばしばしとしぶきながら、猫又は響子に話しかけよつとしてる君彦を横目で見てほくそ笑んでいた。

それからつまみを取り分けている涼子の方へと視線を移すと、涼子もまたにっこり微笑んで猫又が言いたいことを察した様子だ。

『へえ……、君彦のヤツもたまにはやるじゃねえか。

ま、あの一人じゃこれ以上の進展は確実に望めないだろ？けどな

そう呟きながら猫又は君彦が作つて来たつまみを一口先に食べて、涼子に頭を小突かれたのは言うまでもない。

謝罪の言葉

君彦の後方ではバイト先で作つて来たつまみを貪り食つ為に、猫又含む物の怪達がこぞつて皿の奪い合いをしていた。

その度に涼子の金切り声が聞こえてきたが、それはこの店に来ればいつものことなのか……君彦は背後で繰り広げられている騒動を特に気にすることなく、硬直している響子の方へと歩を進める。響子は気まずい気持ちになりながら顔を引きつらせ、君彦のことを見凝視していた。

すると君彦は苦笑いを浮かべながら響子を宥めるように、出来る限り穏やかな口調で話しかける。

「ん、めんね、志岐城さん。
猫又達って騒がしいだろ?
別に怖がらなくていいから、安心していいよ。
この店に来る物の怪達は別に悪い妖怪とかじゃないみたいだし。
あ、でも……ここだけの話。
猫又が言つには、人間が不用意に近付いていい存在つてわけでもないみたいだから、一応気を付けてね?」

君彦は片手で口元を隠すように小声で響子に忠告した。

恐らく彼等に聞こえはしないだろうが、君彦は念の為……背後に居る物の怪達が不快に思わないよう丁寧な声を出来る限り小さくして、注意を促す。

彼等が一口に安全だと言つても、どこまで安全なのか君彦自身にも保証は出来ない。

それなら君彦が猫又に注意を促されたように、響子にも注意するよつ言つべきだと判断したのだ。

しかし響子にとって今は物の怪達がどうであれが全く氣にして

いなかつた。

なぜなら響子が顔を引きつらせる程に緊張していた相手は、他の誰でもない。

君彦自身に対してだからだ。

しかし君彦は響子が極度に緊張しているのは、恐らく響子が初めて見るであろう猫又以外の物の怪達を目にしたからだと察した為である。それで君彦は響子がこれ以上怖がらない為に、彼等が一応安全であると告げる為、安心させる為に教えたのだ。

当然君彦の心遣いは全く意味がない。

緊張の元である君彦が響子に小声で話しかける為に距離を縮めたから、響子は男性不信による拒絶反応が現れていたのだ。

明らかにまでの警戒態勢……、胸の前で両手を構える響子。

当然君彦はそんな響子の警戒態勢に気付き、一定範囲内に近付かないよう距離を測っている様子だ。

本当なら、きっとこのタイミングなのだ。

響子は田の前に居る君彦に対し、どうしても言わなければならぬことがあった。

しかし本人を田の前にすると肝心の言葉が出て来ない。身内にならすぐに出でてくるというのに。

どうして一番言いたい人物には、言えないのだろう。

そんな自分が嫌で、腹立たしくて、大嫌いだった。

口を開きかけながら、また言葉を飲み込み……これを一、三度繰り返した時、二人の間の沈黙を破ったのはやはり君彦である。

「さつきは本当にごめんね」

「……え!?」

響子は呆気に取られた。

そして同時に思った、……先に言われてしまつたと。

しかしながら君彦が謝る必要があるのだろう。

そもそも何に対して謝つてているのか、響子には全く理解出来なかつた。

さすがの君彦もそれだけは察したのか響子が呆気に取られている表情を見るなり、片手で頭を軽く搔く仕草をしながら説明する。

「いやほひ、せつきの話だよ。

犬塚の奴がいい加減でやる気がないから、志岐城さんが怒つちやつて……。

そこに事情も何も知らないオレが余計な事しちやつたから、余計にむかついたんだよね？

あの時はちゃんと理由を聞いてあげられなくてごめんね。志岐城さんだって忙しい所を、わざわざ猫又の為に来てくれたつてのにや。

だからってわけじゃないけど……、犬塚やオレの事……勘弁してもらえないかな？」

響子は黙つて聞いていた。

胸の奥に沸き起つて不快な思いを抱きながら、もやもやする気持ちを抑えながら。

複雑そうな表情で、響子は黙したまま君彦の言葉を聞き続ける。

「志岐城さん、……言つたよね？

誰にでも優しくするものじゃないって……」

「……」

その言葉を聞いて、響子は絶句した。

言つてはいけない言葉、後悔してやまない言葉。

何も悪くない君彦に対し一方的に怒りをぶちまけ、傷付けてしまった。

傷付いてるのは言われた方なのに、口にした張本人である響子の方が胸が張り裂けそうになつていた。

君彦はその言葉を言わてきてきっと傷付いている。

いや、傷付かない方がどうかしてる。

それなのに君彦は自分の事より、響子の心配をしてる……明らかに。

あんな酷いことを言った自分に対して、なぜこんなにも響子のことを気遣うことが出来るんだろう。

そんな君彦の優しさが、今の響子を更に苦しめていた。

表情を歪ませ、自己嫌悪に陥る響子の様子を心配そうに窺いながらも君彦はゆっくりと言葉を続けた。

響子を刺激しないように、自分の気持ちがきちんと相手に伝わるようだ。

「もしかしたら志岐城さんはオレの事、こんな風に思つてるんじやないかな？」

君彦は少し自嘲気味に話しだした。

これは君彦が憧れてやまない黒依にすら言つたことがない内容だった。

「オレがいつも笑顔で居て、誰かれ構わず優しくしてるんだって……」

その言葉に響子の胸は跳ね上がつた。

君彦の口調はあくまで柔らかく、どこか自分を卑下しているよう

な二コアンスに聞こえる。

しかしその台詞だけを聞いていたらなぜか棘があるようにも聞き取れてしまった。

やはり響子が言つた言葉を君彦は気にしているんだと、それについて反論しようとしてるんだと察した。

次はどんな言葉が来るのか、響子はまるで死刑判決のように待つ。響子自身もこの考えがとても大袈裟に感じられたが、それ位怖くて仕方なかつたのだ。

いつも笑顔でいた君彦。

常に優しく接して来た君彦が、響子に対して怒つてゐるかもしれない。

酷い言葉を口にした響子を咎めに来たのかもしれない。

口では謝つても、そんなに容易く許せるものではないと響子は思った。

長らく他人との関わりを絶つて来た響子は気付かない。

君彦は決して響子を咎めに来たわけではないということを……。

出来る限り響子を傷付けないように、誤解させないように。

君彦は自分の本心を知つて欲しくて、こうして響子の後を追いかけて來たのだ。

響子が怯えながら君彦の言葉を待つてゐる。

表情を見ればすぐにわかつた。

全身が小刻みに震えて、何かを恐れてゐること位……見ればすぐ

にわかつた。

だからこそ君彦は話すべきだと思つた。

その相手が、他ならぬ響子だからこそ……。

「オレはね、志岐城さんが思つてゐる程……良い人じやないんだよ。欠陥だらけの人間、他人の気持ちを知つた氣で居るような……無

神経な人間なんだ」

響子は伏せていた顔を上げ、君彦を真っ直ぐ見据えた。

もしかしたらこんな風に真っ直ぐ異性の顔を見たのは数年ぶりではないだろうかという程、……響子は真っ直ぐに君彦のことを探えていた。そして同時に眉根を寄せる、聞き間違いではなかつたことを自分の頭の中で確認する。

君彦は確かにこう言った。

自分は決して良い人ではないんだと。

それは一体どういう意味なのか？

これ程、馬鹿が付く程のお人好しな人間が他に居るだろ？

そして君彦は続ける。

自分が他人と関わることに、どれだけ憶病になつてているのかを。生まれて初めて……。

君彦は他人である響子に、自身の心の内を話し始めた。

水と油

物の怪達が集う居酒屋、その奥では人間である君彦と響子が一人で話をしていた。

猫又はお猪口に入った日本酒をペロペロ舐めながら、時々様子を窺うように視線を向ける。

距離が離れていることと、周囲の物の怪達の喧騒で君彦達の会話は聞こえないが猫又にはわかつていた。

また君彦が他人の為にお節介を焼いているんだと。

そう察した猫又は可笑しそうにククッと笑いながら、また一口酒を舐めた。

これまで何度も見て来た真剣な面差しの君彦に、響子は胸がドキドキしていた。

しかしその胸の高鳴りはただ単に君彦を意識して鼓動していたわけではない、この高鳴りは君彦が今までにないことを響子に告白しようとしている……そう思ふと、緊張して心臓の鼓動が早くなつて行くのだ。

緊張気味の響子に気を使い、これ以上近付かないように氣を付けながら君彦は言葉を続けた。

「確かにオレは志岐城さんの言つ通り、誰にでも笑顔を振りまくし……相手が誰であろうと優しく接して行こうって思つてる。
でもそれはね、志岐城さんや他の人達が思つてゐるような善行から来るものってわけじゃないんだよ」

自嘲気味に微笑みながら、君彦は口の端を緩めつつもその笑みはどこか寂しさを漂わせていた。

そんな君彦の表情を見た響子は、これから告げることは君彦に関

するとしても重要な内容だと暗黙に察する。

単なる打ち明け話というわけじゃない。

それは恐らく誰にも……、もしかしたらあの黒依にすら明かしていない内容かもしれない、響子は感じた。

君彦の表情と言葉にはそれだけの重みが含まれていた。

いつも能天氣で天然の入り混じった君彦からは想像もつかない真剣な雰囲気に、響子は異性である君彦への警戒をほんの僅かだが無意識の中に緩めていたせいか、そのことに本人は全く気付いていない様子である。

「いつからかなのかオレはあまり覚えていないけれど、多分……身内を全て失くしてからだと思つ。前にも確か言ったよね？」

オレの実の両親は、オレがまだ小さい頃に事故で亡くなつて……

それから父方の祖父母に育てられたつて。

それから祖父母も亡くしたオレは、他に面倒を看てくれる親戚がないくて施設に入つたんだ。

勿論その施設には他にもオレと同じ境遇の子供はたくさんいたよ、別にオレだけが特別つてわけじゃない。

それでもオレは……自分だけが世界で一番不幸みたいに感じて、不公平に思えて……。

どうしたらしいかわからなくて、どんな風に笑っていたのかさえ思い出せなくなつて。

一時は本当に回りの人達をとても困らせてしまう位、すごく暗い子供だったと思うよ。

先生に話しかけられても返事すら出来ないし、ずっとうつむいたままで……誰の声も届かなくて。

今でも思うんだ、一人で勝手に閉じこもつていた頃の時間が、今では物凄く勿体なかつたなつて

黒髪を指でくねらせながら、君彦は他人事のような笑みを作った。まるで自分の知り合いの話を聞かせるみたいに、それが君彦自身の話だと思えない位に。

同時に響子も同じ感覚に陥っていた。

今の話からはまるで想像もつかない、お人好しで明るいだけが取り柄のような君彦の幼い頃、がとても暗い子供だったとは、今の君彦の姿からは全くの別人の話のようでは違和感さえあつた。

しかしそれが事実であると、本当の話だという実感だけはなぜかあつた。

それだけ君彦の言葉には真実味というものが存在していたからである。

「でもオレはただ単に自分の不幸が憎かつたわけじゃなかつたんだ。どうしてこうなつたのか、これからどうしたらいいのか……それがわからなかつただけ。

唯一頼りにしていたお祖父ちゃんまでも失くしてしまつて、道しるべを失つて道に迷つてただけなんだ。

行く道を示してくれる誰かが欲しかつた。

そんな風につしか思い始めると、今度は回りのことが見えて来たんだよ。

道を示してくれる誰かが欲しいなら……、こんな風にしてちや黙目なんだつて……ある日突然気付いた。

そしたらだんだんわかってきたんだ。

回りのクラスメイトや、先生や、色んな人達がどれだけオレのことを気にかけてくれてたのかつて。

今まで真つ暗な小部屋に一人きりでいたみたいに、何も見えないし何も聞こえない。

そんな小さな部屋に一人ぼっちでいたのかと思つてたけど、自分の足で立ち上がり、手探りでドアを探して。

暗闇の中でやつと見つけたドアを開けたら、その先には笑顔で自

分のことを迎えてくれる人達が立っていた。

……勿論これは例え話だよ！？

本当に真っ暗な小部屋に閉じこもったわけじゃなくて……つ！

とにかく、オレはその部屋を出ることでようやく気付けてたんだ。

自分は一人じゃないって。

自分から立つて歩いて、行動を起こせばきっと應えてくれる。

オレにとつてそれが何なのか、わかつたんだ。

それは……、他人に親切にすること。

亡くなる寸前に遺言として遺したお祖父ちゃんの言葉にもあった、それがオレの道だつたんだって。

最初はただ素直に、自分が信じるままにそれこそ色んな人に親切にしようって思つてたよ。

まずは身近な人から……、そこからだんだん範囲を広げて、それこそすれ違う人全員に接する勢いで！」

暗い時代の話から、よつやく心を開くことが出来た時代の話まで。その話をしている時の君彦の笑顔はまるで幼い子供そのままであつた。

面白いおもちゃを見つけた時の子供のように、満面の笑みで両手を広げたりジエスチャーを交えながら話す君彦。

その姿は響子が知る今の君彦そのものであった。

君彦が誰かれ構わず他人に親切するルーツはそこにあつたんだと、響子は少し理解した。

この世の不幸な出来事とはまるで縁がなさそうな君彦に見えたが、実は彼にも闇があり、暗い過去が存在していた。

その内容の全てを事細かに聞いたわけではないので、どれだけ辛かつたのか……その詳細までは今の話からはわからない。

お節介を焼き、誰にでも笑顔で接し、相手がどんな人物であろうと親切にしようという人道的な心。

その理由を話して聞かせた君彦。

響子に優しくしていた理由も、恐らく今の話に繋がるんだろうと思つた。

しかし突然君彦の顔から笑みが消えて、話し始めた時の憂いを帶びた表情が戻る。

気落ちしたように肩を竦めながら君彦は視線を床に落としたまま、続きを語つた。

「他人に親切にすること、そして他人を幸せにしたいって気持ち……。
それは今でも変わらない。

でも……、時が経つにつれてそれがだんだん違うものに変わつて
来たんだ。

もしかしたらオレが今まで親切心として行なつてきた善行は、ただの自己満足だったんじゃないかつて。

いや……、自分自身が自己満足に浸りたくて他人を利用してだけなんじやないかつて思い始めたんだ。

他人に笑顔で接すれば、よほどのことがない限り自分に好印象を与えることが出来るんじやないかつて。

人に優しくすれば、自分が良い人だって褒めてくれて、それで一人で勝手に満足してただけなんじやないかつて。

回りの人達を幸せにしてあげたいって気持ちと同時に、本当は……もしかしたら自分自身が幸せになりたくて、それで他人に親切にしてただけなんじやないか。

そう考えたら、オレが今まで振りまいて来た笑顔も本当は嘘っぱちで……。

親切にしてたのだつて、ただ見返りが欲しくしてただけなんじやないかつて。

そんな風に思い始めるとも……、何が嘘で何が本当なのかわからなくなつたんだ。

自分が今まで笑顔でいたのも本当は仮面だったのかつて思つと、どんな風に笑つたらいいのかわからなくなる。

今自分が親切にしてる行為は、ありがとうって言われたいからしてるだけなのかもしない。

考えれば考える程わからなくなつてきて、でも優しくしたいつて気持ちは変わらなくて。

はは……何言つてるのか、自分でもわからなくなつてきちゃつたよ」

誤魔化すように微笑む君彦であつたが、そこにはわずかな苦痛が滲み出していた。

響子は静かに話を聞きながらそれを見逃さなかつた。

過去の話をしながらも、心の内を明かしながらも君彦は響子に気を使つてゐる、響子はすぐに理解出来た。

そして氣落ちしている君彦に向かつて、優しさがただの自己満足かもしれないと言つ君彦に対して、口を開きかける。

親切にじょとする気持ちが、例え自己満足でも恥じることではない。

現に親切にされて、優しくされて感謝な気持ちを抱いている人間だつて確かにいること。

それが事実なんだと、君彦に言つてやりたかつた。

しかし響子はそんな言葉すらうまく口に出すことが出来ない。もどかしいと思いながらも、どうしても臆病になつてしまつ。自分のような人間が知つた風な言葉を言つていいのだろうか。こんなに歪んだ自分が、君彦のそんな優しさを素直に受け取ることが出来ず、かえつて迷惑がつてゐる態度を取つていて自分が口にしていい言葉なのだろうか。

君彦がこんな風に自分の親切心に疑問を抱くようになったのは、

少なくとも響子のような人間が過去にいたからではないだろうか？
そんな風に思えて仕方なく、励ましの言葉をかけることが出来ず
にいたのだ。

抱かなくてもいいプライドを抱き、田の前の親切な青年に声をかけることすら出来ない。

そんな自分がとても嫌いだった。

響子は唇を噛み、汗で滲んだ両手を握りしめながら、黙つて君彦の続きを言葉を……ただ待つ。

最後まで聞けば……、このくだらないプライドすら払拭せられるような言葉を聞けるかもしれない。

君彦が伝えようとしていること。

それが今の自分にとって、とても必要なことのよひに思えてきた。

この時の響子はきっと、とても素直に話を聞いていたに違いない。瞳を逸らすことなく毛嫌いする異性の言葉に耳を傾け、心に留めよつとしていた。

そんな響子の懸命な姿を見た君彦は、明るく、そして力強く告げる。

「とにかく！ オレはね……、志岐城さん。

回りのみんなが思つてるような人間じゃないことだよ。

この笑顔だつて、自分でも無意識にただ『振りまつてる』だけかもしけれない。

親切にしてるのだけ、下心があつてしてるだけかもしれない。
でもね、結果がどうあれ……どれも今のオレが『したい』って思つてることなんだ。

志岐城さんには笑顔で接したい、そして親切に……優しくしてあげたい。

それは紛れもないオレの本心だし、本当の気持ちからしてみると

なんだ！

だからさ、オレにとつて志岐城さんは……不特定多数なんかじゃないよ。

今はハツキリ言えるんだ。
オレがこんな風に志岐城さんと仲良くなしたいって思つてるのは、
きっと志岐城さんは……」

君彦の言葉に響子は田を丸くし、黙つて聞き入つた。
熱く語つた後に来る言葉。

響子の呼吸が荒くなる。
そして「ぐん」と生睡を飲み込み、言葉の続きを待つた。

「物凄くオレと似てるからだと思つんだ！」

一瞬訪れた沈黙……。

君彦は「どうだ！」という顔で、響子を見つめている。
しかし響子は全身の力が一気に抜けたみたいに、啞然として瞳を
細めた。

「……は？」

今の言葉のせいで、ついわざわざ長々と語つていた君彦の熱弁が薄
っぺらく感じてしまつ。

笑顔を引きつらせながら聞き返す響子に、君彦はまたしても得意
満面といった表情で続けた。

「うん、だから…

志岐城さんは少し前のオレと似てるんだよー。
色情靈のせいで他人のことが……じゃなくて、志岐城さんは男性
限定だったね。

えつと、男性のことが信じられなくてどう接したらいいのかわからない。

だから放つておけなかつたんだよ、志岐城さんのことToOne.

志岐城さんは今、暗い小部屋の中に入り込んだ。

だからオレは志岐城さんに明るい場所へ出してあげたいんだよ。そうすれば本来志岐城さんが持つてゐる優しい心も素直に出せるようになって、そしたら友達だってたくさん出来るー！

オレはその手助けがしたいんだよ！

……さつきも言つたように、それはオレの自己満足でしかないのかもしだれないけどや。

それで志岐城さんの手助けが出来るなら、それでも構わないって思つんだ。

だつてオレは志岐城さんの笑顔をもつと見たいからね。たくさん笑つて、他人を信じることが出来るようになればきっと

「

「うつとうじいわああああああつつーー！」

響子は声を振り絞つて、そして力の限り君彦を殴つた。

見事に響子の拳は君彦の左頬を捉え、そのまま背中から倒れてしまう。

幸いにも店内にある椅子やコップなどが巻き添えを喰つことなく、被虐は君彦だけで止めることが出来ていた。

「あたしの笑顔とか…………つ、優しい心とか…………つ！

鳥肌立ちそなこと平氣で言つてんぢやないわよ、気持ち悪いわねつ！

そういう青春じこは余所でやつてよ、正直言つて耐えられないわー！」

(ええ～～～～つ！？)

激痛の走る左頬を片手でさすりながら、まだ衝撃が抜けきれない君彦は床に尻もちをついたまま響子を見上げる。
顔を真っ赤にして、わずかに瞳を潤ませながら響子は口元を一文字に引き締めてわなわなと震えていた。

(馬鹿みたい！ 本当に馬鹿みたい！

一体何を期待してたのよ、あたしつてば！

この天然ボケがあたしのこと特別扱いするはずがないじゃないのよ、バツカみたい！

真面目に聞いて損した！

こいつが珍しく真剣に話し出すから何かと思つていれば、何て事ないわ！

ただの怖気が走るような青春日記じゃない！

今時そんな話をされて感動するような純真無垢な高校生がいるかつてえのー！

息を切らしながら心の中で吐き捨てるように文句を垂れると、少しでも期待した自分に後悔する。

先程の言葉の中になぜ響子が怒りを感じたのか全くわからない君彦は、まだ心外そうな眼差しで見上げていた。

一筋の光

「あの……志岐城さん！？」

オレ、何か気に障る事でも言つたかな？」

全くわかつていなない君彦のことを不快に感じながら、響子はまたしても怒りを露わにした口調で返す。

「気に障るも何もないわよ、あたしはそういう綺麗事を聞かされる
と鳥肌が立つの！」

ええいいわよ、どうせあたしの性格は歪んでるわよー。

だから今更何だつて言つわけ、ずっとこの性格で生きて來たんだ
から仕方ないじゃない！

結局あんたとあたじゅう住む世界も環境も何もかも、相性最悪だ
つたつてわけよ！

あんたもこれ以上あたしに関わって痛い目を見たくなかつたら、
もうあたしに話しかけないでよ！

これ以上関わらないで、迷惑だからつー！
もうイヤなのよ……つー！」

これ以上君彦を殴るのは。

その言葉だけは飲み込んでしまつた。

最後の最後まで素直に気持ちを現すことが出来ない響子は、自分
を見上げる君彦の眼差しから逃れるように不自然に視線を逸らせる
と、そのまま踵を返して去りつとした。

「のまま絶縁してしまえば、いつもの日々が戻つて来るだけ。
またいつものように一人だけの毎日が訪れるだけ。

そう思つと、足が竦んだ。

踵を返したまま、それ以上歩を進めることが出来ず、響子は立ち止まっていた。

あと一步が思つ通りに踏み出せない。

ぱたり、ぱたり……。

響子の頬を熱い零が濡らしていく。

このまま、唯一自分のことを親身に気にかけてくれた人物に背を向けたまま、去ろうとする自分を何かが止める。

店内の誰にも見られたくないと察した響子はうつむき、床を見つめた。

すると床に数滴の零が零れ落ちていった。

肩を震わせ、嗚咽を堪える。

声に出してしまつたら、もう取り返しがつかない。

今までずっと虚勢を張つて来た響子の努力が、全て無駄に終わってしまう。

しかし響子の足元を濡らす涙に、当然君彦は気付いていた。

(謝らないでよ、あたしが惨めになるだけじゃない…)

「んあんね、本当にこめん」

「オレ、本当に女の子の扱い方が下手くそで……優しくしたいのに、怒らせてばかりで……」

(あんたが謝ることじやないでしょ！？　あたしが勝手に怒つてるだけなんだから、放つておいてよっー。)

「でも志岐城さんには分かつてほしいんだ。

オレが本当に志岐城さんのこと、助けたいって気持ちは本当の…
…本心からなんだって）

（……）

「確かにオレには猫又みたいな力も、犬塚みたいに悪霊を祓う力も、何もない。

口では物の怪や悪霊に困ってる人達を助けたいって言つても、結局の所……出来ることは限られてる。
自分に出来る範囲で助けたいって、自分で緩いルールを作つて…
…甘えてただけかもしない」

（……猫又）

「でもオレ、わかったことがあるんだ。

志岐城さんを苦しめてるのは確かに色情靈の存在と、その力のせいかもしねりない。

だからオレは今まで色情靈をどうにかして助けようと思つてた。
でも違うって思った。

確かに志岐城さんは色情靈によつて寒害を受けたかもしねりない
けれど、違うんだ。

オレ……、わかつたんだよ

「何……、を？」

響子は君彦に背を向けたまま、思わず声に出して聞き返していた。
その声は震え、少し上ずつていたが今の響子にはそんなことを気にする余裕はない。

今は君彦の言葉が気になつて仕方がない様子であった。

「志岐城さんは、志岐城さん自身の気持ちと向き合わなくちゃダメなんだよ」

君彦のその言葉で、響子は無意識に振り返り尻もちをついたままの君彦を見つめていた。

眼鏡の奥から覗く透き通った瞳が、真っ直ぐに響子を捉える。その瞳には先程まで宿していた寂しげな雰囲気が消え、響子に対する優しさと憂いに満ちていた。

君彦が心から響子のことを見配し、考え、そして言葉をかけてくれている。

今、彼の姿を見れば、その瞳を見れば異性に嫌悪感を抱いている響子にだってわかる。

この人物は響子が思っていた以上に、響子のことを思ってくれているのだ。

今の言葉で君彦の気持ちが十分響子に伝わっているのだが、どうしても君彦の言葉の本当の深い意味までを的確に理解することが出来ずにはいる。

響子にとって今の歪んだ自分を形成した一番の原因是他の誰でもない、全て色情靈のせいだった。

君彦や猫又に出会い、色情靈の存在を認知するまでは決してそんな風に思いはしなかつただろう。

意味もわからず異性を嫌悪し、自分がどうしたらいいのかその答えを見つけることは永遠に不可能だつたろう。

しかし君彦は響子が抱えている問題は、色情靈が全てではないと言っている。

響子自身の気持ちに問題があると、そう指摘しているのだ。

響子が君彦の言葉を聞いて、そして理解に苦しんでいる表情を見

て、その理由を話す。

尻もちをついていた体勢からゆっくりと体を起こし、両手でズボンをはたくと少しだけ埃が舞つて苦笑した。

殴られた衝撃で少し眼鏡の位置がずれていたので右手で位置を直すと、再び響子と向き合い笑みをこぼす。

しかしその笑みは満面のものではなく、遠慮して……まだ警戒しているのではないかと思っているのか、響子を不快にさせない程度に遠慮気味に、わずかに口の端を持ち上げていた。

「確かに全ては色情靈がきっかけかもしれない、原因はそれにありますかも。

でもね、それだけじゃないとと思うんだよ。

志岐城さんは色情靈のことがなくとも、本当はとても心の優しい人だから。

だから心を開こうと思えば開けるはずなんだ、例え色情靈を完全に祓うことが出来なくても」

響子は黙つて聞いていた。

いつものように癪癩を起こすことなく、感情に任せて暴力を振るふたりはしなかつた。

真つ直ぐに自分だけを見てくれる君彦の瞳を見つめ返し、その言葉の真の意味を理解したいと心から願い、聞いていたのだ。

「一番厄介なのは色情靈のせいであまされた志岐城さんの心だよ。でもそれは志岐城さん自身が直そうと思えばいくらでも直せるものだと思うんだ。

確かにそれは難しいかもしれないけれど、ゆっくつ……少しづつでもいいからさ。

ほんの少しだけでもいいから、他人のことを
信じてみよ
うよ」

「他人を、信じる？」

響子はオウム返しのようになにか口にした。
素直に反応してくれたことがとても嬉しかったのか、君彦は満面
の笑みを浮かべると大きく縦に頷く。

「そう、志岐城さんに足りないのは色情靈を無理矢理祓うことでも、
無理して素直になることでもない。

他人を信じる心なんだよ。

そりや誰かれ構わず信じるのは危険かもしだれないと、でも…
…誰かを信じることが出来なきや一人ぼっちのままだ。
志岐城さんには一人ぼっちになつて欲しくない、昔のオレみたい
になつて欲しくないんだよ。

だからオレはその手伝いをしたいって思つたんだ。

色情靈を祓う力はないかもしだれと、志岐城さんが他人を
信じられるように…友達のことを信じて心を開けるようになれば
きっと、今みたいに志岐城さんが一人で苦しむこともなくなるはず
なんだ。

少なくとも、今のオレの答えはこうだ。

そして他人を信じられるようになるには、まず志岐城さん自身が
自分のことを信じられるようにならなくちゃダメだと思う。
綺麗事とかそういうのは好きじゃないかもしだれと、だか
らつて醜いものばかりに目を向ける必要もない。

もしほんの少しでもオレの言つことに賛同してくれるなら……、
オレのことを持ちよつとでも信じてくれるなら。
改めて言つのも変な話だけどさ、志岐城さん。

「オレの、本当の友達になつて欲しいんだ」

そう言つて君彦は右手を差し出した、男性恐怖症である響子に対

し握手を求めたのだ。

それがどんなに危険な行為か今まで何度も殴られた経験のある君彦は、十分に理解している。

だからこそ君彦は右手を差し出したのだ。
響子のことを、信じているからじゃ。

涙でわずかに視界が歪んで見える中、差し出された右手を見つめ、怯える。

他の男達に比べ危険性が低いが男であることに変わりはない。

響子が今まで男達にどれだけ嫌な思いをしてきたか、それらが走馬灯のように蘇る。

瞳を閉じれば今にも吐き気を催してしまって、そんな悪夢のような経験が鮮明に思い出された。

表情を歪め、そして再び瞳を開けて手を差し出したままの君彦を見つめる。

信じて、いいのだろうか？

自分に足りないものは、信じる心だと君彦は言った。

それは間違いないく、真実だった。

響子は男そのものに嫌悪感を抱き、不信感を抱き、そして敵と見なしている。

君彦に出会つてからもそれは変わることの無い真実だった。

しかし君彦は言った。

響子が信じていよいのは「男、異性」だと断定していない。

君彦は「他人」と言ったのだ。

つまりそれは異性に限らず、他人そのものを避けていると指摘されたことになる。

言われて気付いたが確かにそうだと響子は思った。

今まで自分に言い寄つて来た男のことが信じられず避けていたが、

いつしか自分を妬み避けるよつになつた同性ですら信じられなくなつて、いたことに気付く。

回りの誰も信じられなくなり、自分は一人なんだと割り切ることで強く生きていると思っていた。

本当はとても寂しかつたくせに、とても辛かつたくせに、そんなことを口にしてしまえば、弱みを見せてしまえば自分自身を保てなくなると思つた響子は、虚勢を張ることで自分を保つていたに過ぎない。

その虚勢が更に他人を遠ざける結果にならうとも、響子はさうするしかないと半ば諦めていたのだ。

誰も自分を理解してくれる者などいない。

そう思い込むことせずつと他人に心を開かして來たのだ。

しかし今、響子に一条の光が差し込んだ。

その光はずっと闇の中に身を潜めていた響子にひとつはとても眩し過ぎて、目が眩みそうな程であった。彼は自分にないものを持っている。

そして、それを自分に惜しみなく『えてくれようとしていた。

彼を感じても、いいのだろうか？

少し前の響子なら拒絶していた所だ。差し出された手を払いのけ、罵倒を浴びせ、その場を去つていた所だ。

しかし彼は今までずっと諦めることなく真つ直ぐ響子を見て、根気良く話しかけ、心を開こうとしてくれた。

そんな君彦の健気な気持ちが、かたくなだった響子の心を揺り動かすことが出来たのだ。

パーソナルスペース

君彦はもう夜も遅いから危ないところに、響子のマンションまで送ることにした。

当然響子は断ろうともしたが、この口ばかりは君彦に逆らうこと出来ずに入りしく従つ。

猫田石を出る際に君彦は猫又に釘をさしていた。

食べ過ぎなこと、飲み過ぎなこと、そして他の物の怪達に迷惑をかけない」と。

それだけ言つと君彦は「それじゃ」と涼子に礼を言つて出て行った。

君彦と響子を見送った猫又と涼子は、まるで我が子を見守るような温かい眼差しをしていた。

最も猫又にとつての温かい眼差しといつものは、皮肉の混じつたものもあるが。

『良かつたわね、あの二人。

最初はどうなることかと思つたけれど、何とか上手くやつていけそうじゃないの』

安心したような口調の涼子に、猫又は鼻を鳴らしながらケチをつけた。

『へつ、どうだかな。

君彦のヤツはまだまだ甘ちやんな所があるし、色情女に至つては根からの捻くれモノと見たぜ。

これから先も思い知らされること請け合ひだと思つがなあ

そんな憎まれ口を叩く猫又の小さな頭を、涼子は軽く小突いて叱

り付けた。

猫目石を出て響子のマンションまで歩いていく中、響子は何を喋つたらしいのかわからず黙っていたが君彦は何度となく話題を提供してはすつと響子に話しかけ続けていた。

何が一般的なのが普通なのかわからないが、響子の中の一般的なことと言えば「男よりの方がお喋り」だということ。

にも関わらず女である響子は話題が何も思い浮かばず、まだ多少なり抵抗がある異性に対して距離を取りたくなる衝動を抑えることに必死で、自分から話しかけるということが出来ていなかつた。

それを察してかどうか響子にはわからなかつたが、男性不信である響子に気遣つて次々話題を振つて来る君彦に対し、変に気を使わせてしまつてゐるのではないかと、とても心苦しくなつてしまつ。君彦に気を使わせ、話題を提供させ、きっと自分のことを「疲れる女」だと思つてゐるかもしれない。

そんな考えが響子の脳裏をかすめた時、まるでそれに気付いたかのように君彦が唐突に否定した。

「そんなに気にすることないよ、志岐城さん。

オレつて男のくせに喋るのとかすごく大好きだから。

別に志岐城さんに気を使って喋つてるとかじゃなくて、自分が好きで喋つてるだけだし。

だからそんな風に逆に気使つことないよ

そう笑顔で君彦が言つた。

響子は自分で気付かなかつたが、君彦の目から見た響子は凄く申し訳なさそうな顔で話を聞いていたらしく。

笑顔は少し引きつり、相槌もたゞたゞしく、どこか遠慮氣味に見

えた響子の態度を見て逆に君彦の方が自分に気を使わせているかもしれないと思ったのだ。

響子はもう一度、君彦の言葉を思い出す。

自己満足かもしれないけれど、他人に笑顔で接したいのは本当の気持ち……。

それこそ目に映る者全てに対しても優しく接したい気持ちはあるが、その中でも響子は別格だと。

他人に対して素直に心を開けないとこひは、かつての君彦と似て通じるものがあったからこそ、助けになりたい。

響子と本当の意味での友達になりたいと、君彦ははつきり響子に告白したのだ。

義務感じやなく、誰でもいいというわけでもない。

それは響子にとって、自分が特別なんだと言われたように感じた。勿論君彦の口から直接、響子が特別なんだと言われたわけではないが、響子はそう捉えることが出来たのである。

それはとても凄いことで、今までの響子から考へると有り得ないと言つても過言ではない進歩だったのだ。

君彦のことを他の男同様に不信のままであつたなら、きっとこんな都合の良い前向きな考え方はしなかつただろう。

必ずそこには裏があり、下心があるものとして、全く相手にしなかつたはずだった。

そんな響子が君彦の言葉に対して前向きに解釈出来たといつことには、それだけ君彦の言葉が響子の心に伝え届けることが出来たといふことになる。

色情靈によつて世界中の男は全員敵だと認知せざるを得なかつた響子には、それこそ人類が初めて月に降り立つた時のような凄まじい進歩だと言えるのだ。

そんな君彦の真つ直ぐな気持ちが、時間はかかつたけれどようや

く響子に通じることが出来た。

だからといってすぐに響子がありのままに心を開けるわけがない。それだけ色情靈に苦しめられた日々は響子の心中に重く深い傷を負っていたのだ。

しかし今までと明らかに違つ。

響子の隣を歩く君彦。

響子にとってのパーソナルスペースは、他の女性とは全く異なつていた。

男に対してのみ、そのスペースの広さは尋常ではない。

それでも君彦は響子の隣を歩くことが出来た。

これがどれだけの成長か、初めて出会いからこれまでのことを振り返るとよくわかる。

今まで異性の誰一人として、自分のすぐ側を認めた者はいなかつた響子。

無意識に響子のボーダーラインを越えて、何度も手痛い目に遭つた君彦。

そんな経験をしてきた二人だからこそ、この距離感は少しくすぐつたいようで……とても喜ばしいことだつた。

響子はすぐに素直になれずとも君彦に自分の隣を許している。以前のような極度の緊張はなく、まだ反射的な衝動は多少残つてしまふがそれでもなぜか落ち着けた。

色情靈によつて苦しめられ続けた響子にとってこれは初めての感覚であり、とても嬉しい成長だった。

何気ない会話（と言つても殆ど君彦が一方的に話し続けていたのだが）をしていると、響子のマンションに到着するのは驚く程に早かつた。響子はマンションの近くまで来ると、そこが自分の住んでいるアパートであることを告げて、そして送るのはここまででいい

と口にする。

これ以上はマンションに住んでる知り合いに見られるかもしれない。

それはつまり、響子が男と並んで歩いている姿をマンションに住んでいる誰かに見られ、伯父である則雄（通称、蝶野蘭子）に報告されるかもしないからだ。

もし則雄に知られでもしたら大変になるかもしれない。今はまだ男性不信をほんの少しだけ克服出来たことを、則雄に知られるわけにはいかないのだ。

響子がマンションを背に君彦に向かうと、今日一番のコラックスした笑顔を向ける。

足りないかもしぬないけれど、心ばかりのお礼と感謝の気持ち。数時間前ならば、そんな自分に反吐を吐いていた所だったり。

「その……、今日はありがと……。

ほんのちょびっとだけど、あんたのことが知れて……良かった

言葉は少なくとも、君彦は嬉しさで溢っていた。

同じように満面の笑みを浮かべると、君彦もまた礼を言つ。

「ううん、ううん！

志岐城さんと友達になれて嬉しかったよ、ありがとね」

君彦が放つたその言葉がとてもなく嬉しかった。

その嬉しさから思わず目頭が熱くなり、再び両手に涙が溢れて来るようになる。

だがこんな所で涙を流してしまっては君彦はきっと誤解するだろう。

何か気に障ったのかと慌てふためき、また自分との間の距離を詰

う。

めて来るかもしぬなかつた。

そんなことをされたらもう衝動を抑えられなくなつてしまふかも
しれない。

感情のままに大量の嬉し涙を流し、異性である君彦に弱さを見せて抱きついてしまふかもしぬなかつた。

それだけは避けたかった響子は必死で涙を堪えると、片手を振つて別れを促す。

ここまでの一連の流れだけでも、まるで別人のようだと響子は自分で皮肉つた。

君彦も同じように片手を振つて、自分のアパートへ帰りつと踵を返した時。

思わず響子は君彦を呼び止めていた。

声を上げるように君彦の名字を叫んだので、まだ何か言いそびれたことでもあつたのかと振り向く。

君彦の笑顔の表情を見るとどうしても疎んでしまつ。

胸がドキドキして、頭の中が真っ白になつてしまつ中……それで

も響子はどうしても伝えなければいけないことがあつた。

これだけは伝えないとけない。

生睡をじくりと音を立てて飲み込み、緊張をほぐさうとする。

響子からの言葉を待ち続ける君彦。

それからゆつくりと、響子は笑みの無い必死の面差しで口を開いた。

「あなたのそれは……、自己満足なんかじゃないからー。」

勇気を振り絞つてやつと出た言葉。

それでも響子にとっては崖からダイブする程の勇気と同じものだつた。

頭の中で思つてゐることの半分も言葉にすることができず、必死の

眼差しで訴えかけるように君彦を見据える。

そんな響子の心中は、当然君彦に届いていた。

響子が何を言いたかったのか。

君彦に何を伝えたいのか。

まるで今の一には過剰な言葉など全く必要としないように、不思議と心の中で思っていることが手に取るように分かる。
そんな感覚だった。

君彦は嬉しそうに微笑む。

その笑顔を見て、響子も嬉しくなった。

君彦はたった一言、「ありがとう」と響子に告げて、それから背を向け歩き出す。

そんな君彦の背中をいつまでも手を振つて見送り続ける響子。綺麗に整備されたタイル状の歩道を歩き、角を曲がつて君彦の姿が見えなくなるまで響子はマンション前で見送り続けた。

完全に君彦の姿を捉えられなくなると響子は静かに息を吐き、リラックスタした状態でようやく自分の部屋へと帰る。

そんな中 、二人の様子を窺う人物が闇の中から姿を現す。わなわなと肩を震わせながら、真っ白い上質な生地で出来たフリルのハンカチを口に咥えて悔しがる人物。

歯を食いしばってマンションの中へと消えて行く響子を見つめ、鼻息荒く憤慨した。

「響子……つ、何なの！？ 一体誰なの、さつきの男は！？ たつた一人の身内であるあたしに何の断りもなく、男と何をそんなにイチャイチャしてるわけっ！？」

有り得ない、信じられないわ！

信じられるはずがないわよつ、あたしの可愛い子猫ちゃんに限つて有り得るはずがないじゃないつ！

男性不信の男性恐怖症であるあたしの愛しい姪っ子ちゃんが、男と仲良く歩くなんてそんな馬鹿なことつ！

珍しく店が早く終わつて帰宅途中だった、響子の実の伯父である

志岐城則雄。

彼（彼女？）は途中からとはいえ、マンション前で繰り広げられていた一人のやり取りをずっと街灯の明かりが届かない路地裏から、恨めしそうに眺めていたのである。

凄まじいアゴの力で遂にはハンカチを食いちぎり、そのまま歯ぎしりするようにハンカチの切れ端も一緒に噛み続ける則雄。

「許せない……つ！」

あたしの大切な姪っ子ちゃんに近付く男なんて、このあたしが絶対に許さんんだからねつ！？

猫又の災難

『アーティストのためのアートセミナー』

町中にこだまする醜い悲鳴。

その絶叫を聞きつけ木々にとまっていたスズメ達が飛び立ち、声の届く範囲にいる飼い犬達は一斉に吠え出した。

走り回っている。

先頭を走って行く足音の持ち主を追い掛けた。と大勢のメス猫達が黄色い声を上げて走っていた。

口に銚子の付いた首輪を付けた真っ白い猫から漬けられた野良猫まで、殆ど町中に住んでいるであろう猫達が一斉に追いかけ回しているもの……それは。

『だああああああつ、しつこいわお前等ああああつ！』

スレをそこからスヌードと一緒ににして、わたしはまた、

つ
つ
！

息を切らし、脂肪で伸び切った腹を左右に揺らしながら走り抜け
るアメリカンショートヘアの毛並みをした肉肉しい猫、猫又は自分
を追いかけて来るメス猫達を振り切ろうと必死になつていた。

まるで獵奇殺人鬼に狙われたヒロインのように必死になって逃げ回っている猫又であつたが、当然追いかけて来るのは猫又の命を狙つてゐるわけではない。

メス猫達が狙つて いるのは

『待つてえーん、猫又ちゃん！』

『いやんイカスわ、貴方のその逞しい体つき～！』

『だからお願ひよーん』

『貴方の子供を産ませてちょうだ～～～い～！』

そう、今はメス猫達の発情期。

妖怪化した化け猫といえども、猫又はれつきとしたオス猫。

この町に住まうどの猫よりも長く生き、逞しい生き様、そしてその強さと支配力。

どれを取つても他の猫達に引けを取らない猫又の子孫を残そぐと、町中のメス猫達はこぞつて猫又を追い掛け、交尾に持ちかけようと必死なのである。

当然妖怪化した猫又にも子孫を残す本能は残つてゐるが、それ以上に理性も備わつてゐる為、メス猫の求愛に応じて交尾に至らうと、いう気持ちなど、今の猫又にはさらさらなかつた。

そもそも猫又は以前からどのメス猫とも子孫を残そうとはせず、自分だけの自由を満喫して來た自由そのものの猫。

今更子供を残そうという考え方や、メス猫をはべらせようという欲求さえも殆ど興味がないに等しかつたのだ。

だが猫又自身がそういういた考えであつたとしても、発情期を迎えたメス猫には関係ないこと。

こうして毎年毎年猫の発情期が訪れる度に猫又は町中のメス猫達に追いかかれ、交尾を迫られて來たのだ。

いつもなら発情期の間だけでも君彦と一緒に住んでいるアパートに引きこもつて、時が過ぎるのをひたすら待ち続けていたものだが今回だけは例外であつた。

犬塚慶尚との戦いにより神通力を大量消費した猫又は、本来の強い力を失つてしまいとても脆弱な状態にまで落ち込んでいたのだ。

それでも靈力のない一般人に見えない程度には神通力を維持出来ているし、低級な悪靈を退ける力もまだ残っている。

しかし少しでも賢しい悪靈相手となると力がわずかに及ばず、本来の力を出せない所か動きも少々鈍ってしまった。

消費した神通力を早く取り戻すには君彦の側に控えることと教えたのは、君彦の実の祖父である猫又征四郎。

彼の助言により猫又は、君彦の側にずっと控えていたのだ。

君彦もまた文句を言いつつも邪見にすることはなく、猫又が学校について来てまるで空氣のように自然に振る舞っていた。

そして今、君彦と一緒に登校している途中。

発情期の季節になつていてことをすつかり忘れていた猫又は、うつかり野良であるメス猫に見つかるや否や他のメス猫達にも追いかけられる羽目になつたというわけである。

その際に君彦もメス猫を避けようと奮闘していたが、多勢に無勢……猫の波に対抗する術もなく引っ搔かれ、蹴り飛ばされ、踏みつけられる様となつてしまつた。

黒い学ランが猫の足跡だらけになつて地面に這いつくばつた状態となつた君彦を救あうにも、メス猫達の狙いはあくまで猫又。振り返り戻りでもすれば捕まつて貞操を奪われてしまうのは目に見えていた。

猫又は大きなダミ声で君彦に謝罪すると、そのまま君彦を見捨てて住宅街の塀を駆け上がり、そのまま屋根伝いに駆け抜けることとなつたのだ。

だがこのまま走り��けても太った猫又の方が体力が尽きて、いずれメス猫達に取り囲まれてしまう。

そう悟つた猫又は進行方向をとある場所へと向けて走り出した。向かう先は商店街、……の外れにひっそりと佇む一軒の居酒屋。裏道を駆け抜ける猫又を追い掛けながら、メス猫達は途中の障害

物で足を取られたり他のメス猫と衝突して大惨事を招いたりと、狭い路地裏での障害物競走が功を奏し、何匹か巻くことに成功した。

しかしそれでも猫又を追い掛けで来るメス猫の勢いは後を絶たず、次から次へどこから湧いて出てくるのか疑いたくなる位に鳴き声を上げて追い掛け回して来た。

その度に猫又は舌打ちし、鬱陶しい顔つきになりながらも急いで目的地へと向かう。

恐らく猫又に逃げ込めば、猫娘である涼子の力で何とかなるだろ？と思つてる猫又であったが、それでもこれだけ大量のメス猫を引き連れて店に逃げ込むわけにはいかないと考える。

せめて半分だけでも数を減らさなければ、涼子から謂れの無い嫌味が飛んで来そうでそれもまた億劫であつたからだ。

猫又は息も絶え絶えになりながら走っていると、どこからか突然粒子のようなものが降ってきた。

茶色い物質が宙を舞い、咄嗟に猫又は両方の前足で頭を抱えるようにしてそれらの粒子が目に入らないようにガードする。

猫又を追い掛けていたメス猫達はそのまま降つてきた粒子をかぶつてしまい、短い悲鳴を上げながら足を止めた。

中には粉が目に入った猫もいたらしく、激痛に転げ回る者が何匹かいた。

何事かと猫又は前足を解いて後ろを振り返つて様子を窺つた。するとそれまで興奮状態で猫又を追い掛けで来たメス猫達に異常

が見られる。

降つて来た粒子を浴びた猫達の殆どは、急に地面に横たわり無防備な状態になり始めていた。

ごろごろと喉を鳴らし、電信柱や引っ繰り返つたゴミ箱に顔をこすりつける行動を始めたりと……、まるで泥酔状態になつて発情期による興奮が冷め切つた様子を見た猫又は、先ほど降り注がれた粒子が「マタタビ」であつたと理解した。

しかし問題は一体誰がメス猫達めがけてマタタビを放つたかであ

つたが、その謎はすぐに解消される。

『ほり、猫又さん！

早くウチの店に来て頂戴、全部のメス猫がマタタビで酔つたわけじゃないんだから！』

いつの間にか猫又が向かおうとしていた進行方向に涼子が立つており、片手にはマタタビが大量に入った袋を持っていた。慌ててきたのか、涼子は少し髪を乱し、いつもきつちりと着こなしている着物が少しほだけている。

『涼子！』

猫又はなぜ涼子がここにいるのか、なぜ猫目石に向かおうとしているのがわかつたのか、色々聞きたいことはたくさんあつたが、その言葉の全てを飲み込んで、とにかく涼子の言つ通り急いで店に避難することにした。

最後尾にいた辺りのメス猫達にはマタタビ効果がなかつたらしく、黄色い声を上げながら地面で恍惚状態に陥っているメス猫達を器用に避けながら追い掛けて来るので、猫又は慌てて先導する涼子の後に付いていく。

神通力が最高潮に高まっている時は猫又の威嚇により、追い掛け来るメス猫達を金縛り状態にすることも可能であったが、今はそれが出来ないだけにもどかしく、情けないと想いながら涼子の背中を追い掛け、そして店内へと逃げ込んだ。

猫又と涼子は硝子戸をぴしゃりと閉めると、そのまま安堵と疲労が一気に押し寄せたのか、腰が抜けたようにその場に座り込んでしまつ。居酒屋・猫目石には微量な結界が張られている為、猫又の気配そのものを認識することが出来なくなり、完全に見失った状態のメス猫達は猫又を探すようにその場から去つて行つた。

やがてメス猫達の発情期特有の鳴き声が遠くの方から聞こえるようになり、そして完全に聞こえなくなるまで猫又は本当の意味で完全に安心することが出来ず、だらしなく座り込みながら未だぜえぜえと息を切らしたままであった。

マタタビと猫娘

ひとまず発情期のせいで追い掛けで来るメス猫達を退けた猫又は、涼子の店でしばらく身を隠すこととした。

カウンターの席に飛び乗り、前足をテーブルに乗せてくつろぐ猫の姿は何とも奇妙な光景である。

涼子は乱れた髪や着物を直しつつ猫又に何かを勧めようとしたが、他所で間食をしたら君彦に怒られると理解している猫又は涼子の厚意を断つた。

普段猫又はあまり猫田石に顔を出すことはない。

それこそ気が向いた時にふと店の様子を見に来るだけであった。しかしここ最近猫又がよく店に来るようになつてから、涼子の機嫌は割と上向きになつている。

朝方から猫田石にあまり足を運ぶことのなかつた猫又は何だか妙に落ち着かず、店内をきょろきょろ見回していた。

そわそわしてくる猫又の様子が気になり、涼子は苦笑しながら声をかける。

『あら、一体どうしたの猫又さん？
そんなにそわそわしちゃつてさ、二つもの図々しことに猫又さんいらっしゃないじゃない』

からかいつよいづらつ涼子に、猫又はむすっとした表情になつて言葉を返した。

『図々しことは余計だ。

いや……、何かやつぱまだ営業前だけあつて店内中がやけに静かだなつて思つてな。

考えてみればいつもオレ様がここに来るのはもっぱら夜だったし、

そりや 静かで当たり前か。

そういう力ナの奴はどうした?

また君彦のストーキングでもしてんのか?』

『あらやだ猫又さんつたら、ストーキングだなんて酷い言い方ね!
君彦さんの様子を猫又さんの代わりに見てもうつよつに頼んだのは、どこの誰だと思つてゐるの!?』

猫又の言い方に力ナと来た涼子はすかさず言い返した。
しかし猫又はそんな涼子の反感には耳を貸さず、皮肉たっぷりの
笑みを浮かべながらカウンターの上で頬杖をついた。

『力ナがいたらひとつ飛び君彦ん所に行つて、オレが今猫目石にい
るつて伝えてもらおうと思つたんだがな。
いねえもんは仕方ねえか』

それだけ言い残すと猫又はカウンターの席からぴょんっと飛び降
りて、玄関先へ向かおつとした。

明らかに店を出て行こうとする猫又に、涼子は思わず声を上げて
呼び止める。

『あ……つ、猫又さん……!
もう行っちゃうの!?』

普段は温厚ではんなりとして、猫又を叱りつける時は鬼の如き威
勢ある口調になる涼子が、珍しく悲しそうな声を出したので猫又は
思わず足を止めて振り返った。

何か用事があるなら聞いてやる、といつ頼りがいのある田で涼子
を見つめる猫又。

そんな勇ましさを感じさせる猫又の大きな瞳に、涼子は頬を赤く

染めてつい俯いてしまう。

着物の袖口を弄りながら、涼子は視線をわずかに反らせて遠慮気味に口を開く。

『あ……えっと、その……ね？

せっかくお店に来たんだし、そんなすぐに帰らなくともいいんじやないかなって……。

さつきも言つたように君彦さんにはカナが付いてるから、心配いらないんじゃないかしら？

何かあつたらすぐウチに知らせに来るよつとしてるし……、少しの間なら問題ないと思うの』

どこか落ち着きの無い涼子の態度に猫又は少々訝しげに感じたが、涼子の気持ちを察すると猫又は玄関口へ向かっていた足を止めてそのまま踵を返すとカウンター席へと戻った。

涼子の言葉に素直に従つた猫又を見るなり表情を明るくさせ満面の笑みを見せた涼子は、嬉しさの余り気分が高揚したのか、いつもの落ち着きある仕草から打つて変わつて、急にそそくそと忙しない動きに変わる。

『まだお店の時間じゃないけれど、何か食べる？

あ、それとも君彦さんから外での食事は禁じられてるのかしら。でもちよつとつまむ位なら君彦さんも許してくれるわよね』

舞い上がつたように涼子が冷蔵庫の中身を物色したり、棚の中に何か軽いつまみがないか探し出したので、猫又はそんな涼子の珍しい姿を見て苦笑しながら少し落ち着くよつて言葉をかけた。

『おいおい、そんなに氣い使つことねえつて。

用事が済んだらすぐ君彦の所へ戻るんだからな、だから別に何も

何より今の猫又は出来る限り君彦の側にいないといけない。

この先何が待ち受けているかわからない以上、猫又は一刻も早く神通力を最大値へと戻す必要があった。

力の最大値がどれ程なのか猫又自身にも定かではないが、少なくとも力を思う通りに操れるようになり、そして肉体的な疲労感や倦怠感が完全に抜けるまでは本調子ではないことだけはわかつていた。今の不調な状態で君彦の側にいたところで、何かあつた時に守ることが出来なくなってしまう。

君彦を守ること、かつて愛した飼い主と唯一無二の好敵手であった征四郎とのそれが約束であつたから。

だが猫又は一時的にではあるが猫目石に留まることを良しとした。それはいつもと様子が違う涼子の様子が気にかかったからである。涼子は心に抱える不安や悩み、問題などを一人で抱え込む癖があつた。

可能な限り自分一人で解決させようと躍起になり、そして結果的には潰されてしまい、それで何度も手を貸したことだろう。

小さな問題に対し、誰の助けも求めず、それが迷惑になると捉えて抱え込んだ挙げ句に小さかつた問題は次第に膨れ上がって行き、涼子一人で抱えられなくなる所まで大きくなつた所で、結局の所猫又が力を貸して問題を収束させることを何度も経験してきた。

だからこそ普段と様子が異なる涼子の態度を見た瞬間、また何かの問題を一人で抱え込んでいるのかと察した猫又は、それを涼子から聞き出す為に猫目石に残つたのであった。

しかし单刀直入に訊ねた所で涼子は素直に何でも話す性格ではない。

猫又の力を軽視しているわけではなく、猫又が口で文句を言いながらも最終的には全面的に協力してくれることを他の誰よりもわか

つていた涼子だからこそ、軽々しく問題を口にして猫又に迷惑をかけるわけにいかないと、そう配慮する為だった。

そんな性格だと理解している猫又は、どのよつこして涼子の胸の内に秘めている想いを吐き出させようか試行錯誤してゐる時だ。

猫又が自分の言葉に従つて居残つてくれたことに相当嬉しかったのか、普段へマをしない涼子は珍しくドジを踏んでしまつた。

先程発情したメス猫達を酔わせる為に使用したマタタビがたつぱり入つた袋をしまおうと手にした時、足元を滑らせてそのまま袋に入つたマタタビを頭からかぶつてしまつたのだつた。

中身はそれ程残つてなかつたので大量にかぶることはなかつたのだが、それでも涼子はマタタビを吸い込み、そしていくらか口に含んでしまい、ふらついて床に尻もちをついてしまう。

大きな音を上げて倒れてしまつた涼子を見て、猫又は驚きカウンターから勢いよく飛び出して涼子の元へ駆け寄る。

『おい涼子、お前何やつてんだよ！？』

呆れたような、しかし心から心配しているような声を出す猫又。涼子は咳き込みながら何度も両手で顔に付いたマタタビを払おうとする。

払つた粉末がマタタビだと察した猫又は自分も吸い込むまいと少し後ずさりして、前足で鼻と口を覆つた。

『大丈夫、大丈夫よ猫又さん。

マタタビはそんなに残つてなかつたから、ほんの少し入つただけで……』

そう口にした途端、涼子は眩でもしたように一瞬ふらつき、それからマタタビを払つていた手を見るなり、一口そつと舐めた。手に付いたマタタビをペロペロと舐め出した涼子を見て猫又は慌

てて声をかける。

『おいおい、何どさくさに紛れて食つてんだよ！？
いくらマタタビが大好物だからって朝っぱらから酔っぱらつても
りか、お前は！？』

しかしそんな猫又の制止する声が耳に入つて来ないのか、涼子は無心に手を舐めた後、放心状態になつたかのようにぼうつとしてだ一点を見つめていた。

それから涼子を心配して側に寄り添つた猫又の方へ視線を移すと、涼子の両手はとろんとしている。

涼子の様子を見るなり猫又は嫌な予感でもしたのか、涼子がマタタビで酔つ払つていると断定すると涼子から距離を離す為にじりじりと後ろへ下がろうとした。

しかしそんな猫又の行動を涼子の片手が制止する。
むんずと猫又の脂肪で伸び切つた首根っこを引っ掴むと、涼子はわずかに表情を緩めながらゅつたりとした口調で話しかける。

『猫又さん……、ウチ……何だか体が熱くなつてきちゃつた。

それにどうしてかしら、猫又さんを見てると体が疼いて仕方ない
の。

ねえ……、お願いがあるの。

『猫又さんのこと、抱っこにしてもいいかしら？』

うつとりとした眼差し、そして緩やかな口調。

だがしかし猫又を放すまいと掴んだ涼子の手は、容赦ない力で自分の方へと引き寄せようとしていた。

猫又は恐怖におののいたように全身の毛を逆立てて、何とか引き寄せられる力に反発しようとしたが無駄だった。

爪を全開に立てて抵抗するも、床に引っ搔き傷が残る程の勢いで

引きずられ、猫又は呻き声を上げる。

そして察した。

涼子の今の様子が、彼女達と酷似していたことを。
定期的に訪れる恐怖の季節、本能には決して逃げないことが出来ない。

それは『普通』の猫にしか訪れない衝動だと思っていた。
少なくとも今までの間、涼子が理性を失い本能のままに行動する
ようなことが一度たりともなかったから。

しかしマタタビの効力によってその理性を強制的に喪失させてしまつた今の涼子に、これまで持つていた冷静な判断が成立するはずもなかつた。

そう、今の涼子はとても危険だ。

彼女の様子は明らかに、外で猫又を追い掛け回してたメス猫達の
それであつた。

発情してる！

殺氣にも近い様子を感じ取つた猫又は自身の貞操に危険が迫つて
いることを瞬時に察し、本能的に涼子を恐れていたのだ。

このままでは非常にマズイ。

猫又は首根っこを掴まれたまま、そして如何にしてこの状況から
逃れるか。

奇声に近い断末魔を上げながら必死でその方法を詮索した。

涼子の気持ち

主に物の怪達の溜まり場となつている居酒屋・猫目石の女主人である涼子は、うつかりマタタビを浴びてしまつたことで気分が高揚し、すっかり泥酔状態となつて猫又に甘えていた。

普段は姫御肌で気丈な女性として振る舞つていたが、季節のせいもあつてか理性を失つた彼女は猫の本能のままに猫又の温もりをひたすらに求めて来ている。勿論涼子の現状は全てマタタビのせいであると理解している猫又は、うつとりとした眼差しで自分を欲している涼子のことを無下にすることも、そのまま放つておくことも出来なかつた。

いつも冷静な涼子が泥酔したことにより我を忘れ、このまま外へ出て行つたらどうなるか。

想像しただけでも恐ろしかつた。

今は妖怪化、つまり人型をしている為に外見上は人間とさほど変わりはないが、元々彼女は猫である。

そんな涼子が発情したまま外出し、その欲求を晴らそうと本能剥き出しへなつた場合には、目標となる対象は当然オス猫相手になつてしまつ。ただ単に両手で抱き抱え、愛でるだけならば愛猫家の人間でもよく見かける光景となるが、涼子の場合はそうではない。

確実にオス猫を襲つてゐることだろう。

人の姿をした涼子がそこらの猫を犯す姿……。

猫又は涼子に首根っこを強く掴まれたままそんな光景を想像しつつ、首を大きく横に振つて事態の收拾に全力を尽くそうと決意する。しかし神通力の違いで言えば明らかに猫又の方が上であるにも関わらず、相手は猫又と違つて人間の姿をしている。

思つた以上に涼子の握力などが強く、掴まれた猫又はそれを振り解くことが出来ずについた。

涼子をどうにかする前に自分がどうにかされそうな状況で、猫又

はほんの少しだけ泣けてきそうになる。

しかしこんな所で打ちひしがれている場合ではない、というよりそんなことを考えている間に自分が犯されそうな状況なので四五の言つてられないのだ。

するすると引きずられるように猫又を引っ張る涼子は、いつになく女の表情になっていた。

涼子がこんな顔をするのは猫又が気まぐれで猫目石を訪れた時……涼子と猫又が一人きりでお酒を酌み交わす時に時折見せる顔だつた。穏やかに、嬉しそうに、どこか安心するような微笑みで注いでもらった酒はまた格別であつたことを猫又は思い出す。

この表情は違う。

ふと猫又はそう察した。

涼子がこんな表情をする時は、彼女が心から安心している時だけだろう。

決して欲情している時の表情ではない、多少の強引さは見受けられるが決して猫又を手籠めにしようとしているわけではなくさうだと猫又は涼子の嬉しそうな顔を見て思つた。

その瞬間涼子に引っ張られないよう踏ん張つていた足の力を抜くと、そのままひょいと体が宙に浮く。

両脇を抱えられながら猫又の脂肪たっぷりの体はだらりとぶら下がつた状態になり、そしてすっぽりと涼子の胸に納まった。

ほんのりと白梅香の香りが猫又の鼻をくすぐる、その香りに一瞬頭の中が麻痺したような感覚に陥る。

しかしここで自分までが冷静さを失うわけにいかないと、猫又は必死になつて甘つたるい状況に耐え忍んだ。

『り……涼子、苦しいから放せつて!』

猫又は涼子に刺激を与えない程度にやんわりとした口調で注意した。

だが猫又を抱き締める力は緩まることなく、それどころか更に力を加えたように抱き締めるものだから猫又は圧迫感で息苦しくなってきた。身悶えたような表情で口を大きく開けながら何とか呼吸しようと必死になつていると、猫又の耳元で涼子が囁いてきた。

『猫又さん……、羽九尾^{はくび}なんかにならないで……』

『……つー』

猫又は一瞬聞き間違えたのかと思った。
しかし確かに聞こえた、「羽九尾」と 涼子は確かにそう口にした。

そしてようやく気付く。

猫又を強く抱き締めながら、涼子は微かに肩を震わせ……小さな嗚咽が聞こえてくる。

泣いている。

猫又を抱き締めているので涼子の顔を確認することは出来なかつたが、涼子は確實に泣いていた。

なぜ彼女が静かに涙しているのか、その理由がわからないまま猫又はどうしたらよいのかわからずただ大人しく抱かれていた。

すると小さく、ぽつりぽつりと涼子が話し出す。

猫又は何も言わず、ただ黙つて彼女の言葉に耳を傾けた。

『力ナから聞いたわ。』

猫又さん……ついこの間、猫神化したんですってね。

猫又さんが猫神化する為に必死になつてるのは、ウチにだつてちゃんとわかってるつもりよ？

でも……、あの時の猫又さんはまるで別の……全く異質な存在だつたつて、力ナが言つてた。

まるで自分が知つてゐる猫又さんじゃないみたいだつて。

ウチも……、この町に住んでる物の怪達だつてそうよ。
みんな猫又さんに居てもらいたいのに……、どうして今まで通り
じや駄目なの?』

声を震わせながら懇願する涼子に、猫又は何も言えなかつた。

そもそも猫又は精神的ショックによつて一時的に猫神化したといふ事情もあり、その時の記憶が一切残つていないので。

猫神化した時の記憶がすっぽりと抜け落ちていて、氣付いた時は君彦のアパートで寝ていた。

我を失つていたのか、それとも全く別物に変化してしまつたのか、その詳細はわからない。

だからこそ猫又が猫神として神格化した時、その後どうなつてしまふのかなんて猫又自身まるで考えていなかつたのである。

ただ猫又の目標はあくまで神格化することであつた。

そうなつたらこの町が一体どうなるのか、物の怪達は、涼子は。今こゝにして改めて涼子から聞かされ、猫又は考えもしなかつたことを告げられ、途端に迷いが生じたのだ。

その迷いが猫又の言葉を詰まらせた。

あくまで猫又の最終目標は変わらない、それは何があつても決して揺らぐことはない。

だがしかし自分の周囲の事まで視野に入れていなかつたという事実を突き付けられ、改めて考えさせられた。

ここまで関わってしまったからには、とてもなかつたことになんて出来そうにない。

回りは全て自分と深い関わりなんて持つ必要の無いものばかりだと思つて接して來たつもりであった、しかしこの迷いに気付いた今となつてはこれら全てが「必要の無いもの」だなんて到底思えない。その事実に猫又の胸は突然、締め付けられたような痛みを感じた。

この痛みは「あの時」の痛みに似ている。

この世で最も大切な者を失つた時の痛みに……。

『……涼子』

猫又は自分でも無意識に涼子の名を呼んだ。自分を抱き締めながら静かに泣き続ける涼子、決してマタタビによって本能を剥き出しにし発情していたわけではない。

マタタビによって今まで堰き止めていた思いが一気に爆発し、思い悩んでいたことをこうして猫又にぶつけてきたのだ。どれだけ辛かつたろう。

涼子はこの町の物の怪達に頼りにされる存在、そんな涼子が弱みを見せられるはずもない。

だからこそ誰にも悩みを打ち明けることが出来ず、一人でずっと抱えて来たのだ。

そんな涼子の不安に気付いてやれず、今まで何も……深く考えることなく今日まで来た猫又は途端に申し訳ない気持ちで一杯になってきた。涼子の悩みに気付いてやれなかつたことだけではない、どんなに懇願されようと猫又は自身が羽九尾猫又になることをやめるわけにはいかないということ、元々申し訳なさを感じていたのだ。

こればかりは誰に言われようと、それが例え君彦だったとしても猫又の願いを妨げることは出来ないだろう。

猫又は自分を抱き締める力を決して緩めようとしない涼子の頭を、優しく前足で撫でると消え入るような声で囁いた。

『……悪いな、涼子』

たつた一言、そこには涼子の願いを聞き入れることが出来ない理由も、どうしても羽九尾猫又にならなくてはならない理由も、何も説明することなく、たつた一言だけ謝罪の言葉を述べるだけにどぎめていた。

それが猫又の答え。

どんなに自分が他人に慕われようとも、必要とされていよつとも、
猫又はそれら全てを捨てても成し遂げなくてはならない目的があ
つた。猫又のことを慕う涼子の頼みであるうと、猫又はそんな彼女
の制止を振り切つてでも進まなくてはならない。

たつた一言の中に、それら全ての思いを詰め込んだつもりだった。
それ以上の言葉は必要ない。

多くを語りず、猫又は泣き続ける涼子に抱かれたままの状態で、
彼女の頭を優しく撫でていた。

と、その時。

猫目石の硝子戸が勢いよく開けられると、そこには学ランにたく
さんの猫の足跡を付けた君彦がぼろぼろの状態で現れた。

「猫又ー！ やつぱつこーん つ！」

一瞬の沈黙、少し眼鏡の位置がずれた状態で目の前に居る猫又に
釘付けになる君彦。

猫又もまた涼子に抱き締められたまま、まずい場面を見られた
と言わんばかりの表情になり全身の毛が逆立つ。

すると君彦は一瞬にして全てを察したのか気まずそうな笑みを浮
かべながら、猫又に向かつてまるで他人行儀のように軽く会釈する
と、そのまま硝子戸を閉めて出て行こうとした。

そんな君彦の態度が明らかに何かを勘違いしているようだったの
で、猫又は咄嗟に声を張り上げ訂正する。

『ちょっと待てーい、君彦ー！』

そんなんじやないからな！？ これはそんなんじやないからなー
つ！？

おいら、聞いてんのか君彦！ 戻つて来いつつてんだ、この
ボケーーー！』

だがしかし猫又の必死の呼びかけも空しく、君彦が猫田石に戻つて来ることはなかつた。

同時に君彦が訪れたことにより正氣を取り戻し、涙を払拭させた涼子は先程まで強く抱き締めていた猫又を無残にも床に放り出し、すつと立ち上ると何事もなかつたかのようなしれつとした態度で接して來た。

『さ、君彦さんも心配してることだし早く行つてあげたら?』

その顔にはわずかに涙の跡が残つていた、それでも氣丈に笑顔を取り繕つた涼子の表情は気持ちを吐露する前とは打つて変わって清々しいものへと変わつていて、猫又は気付いていた。

心ひしてわかつてくれないの？

猫の足跡の付いた学ランを手で払いながら君彦は足早に学校へと向かっていた。そんな君彦の後を追いかけるように猫又はコンクリートの壙の上を小走りに駆けながら必死になつて君彦に弁解している。

『だから聞けって言つてんだろ、君彦！

あれはお前の勘違いなんだって！ このオレ様が涼子みたいな娘っ子に手え出すと思つてんのか！？

涼子のヤツが頭からマタタビがぶつて、酔っ払っちゃつたから介抱してただけだつて！

おい、ちゃんと聞いてんのかよ君彦！』

しかし君彦は少々迷惑そうに猫又を一瞥すると、足早だつた速度を更に早めて殆ど駆け足状態になつていた。

それはまるで自分を追い掛け来る猫又から距離を離すような、このまま出来ることなら撒いてしまおうといつ考えがはつきりと見て取れたので、猫又もまたムツとした表情になるとだらしなく垂れ下がつたお腹を左右に揺らしながら追いかける。

一向に自分から離れようとしない猫又に対し、君彦は堪らずその場で足を止めると壙の上にいる猫又を睨みつけるように見上げながら、声を荒らげた。

「お前何でオレについで来るんだよ！？」

発情したメス猫達を追つ払つことが出来たんだから、もういいだろ！

いつもなら猫の発情期が来たら家で大人しくしてゐるクセに、どうして今日に限つて一緒に学校に行こうとするんだよ？

普段より早く家を出たのに、お前を狙つて追い掛けてきたメス猫にもみくちゃにされて、この通りだ。

お陰で遅刻しないように走つても学校に行かなくちゃいけないわ、お前を追い掛け来てるメス猫達に怯えなくちゃいけないわでこつちは迷惑してんだぞ！？ お前こそそれわかつてんのかよ！？ わかつてんならさつき涼子さんにかくまつてもらつたように、猫目石に隠れているか家で大人しくしてろつて…

君彦の言つことはもつともであった、確かに今まで通りで行くならばメス猫達に追い掛け回されないようく君彦のアパートに立て籠もつて大人しくしていたか、涼子の居酒屋で時間を潰したりしていた所であった。

しかし今回に限つてはそっぽいかない猫又なりの事情がある。

猫又も全く予想だにしなかつた自身の猫神化、咄嗟のこととはいえそれで猫又が今まで蓄積していた神通力を殆ど使い果たしてしまつたことが原因で、猫又の力はかなり弱つていたのだ。

それを教えたのは君彦の実の祖父である猫又征四郎、そして少しでも早く神通力を通常の段階まで戻すには君彦の側に居続けることが必要だと教えたのもまた征四郎であった。

猫又はその言葉に従い、じうして出来る限り君彦の側に付き添つていようとしていたのだ。

しかし普段から自由奔放、自由気儘、我儘放題で過ごしていた猫又が、今になつて君彦の行く場所行く場所びつたりとついて来ることに君彦は違和感を感じていたのである。

だが慶尚との一件があつてから、猫又のことを邪険にしているわけではない。

それ所か普段気に留めることのなかつた猫又のことを、あの一件以来気に掛けるようになった君彦はむしろ猫又がどこで何をしているのか、自分の田の届く所で確認する「」ことが出来るから逆に有り難く思つていた。

しかしこれまで互いに一定の距離感を保つて過ごしてきたせいもあつてか、いきなりべつたりとした生活にすぐ慣れるはずもなく、君彦は猫又のだらしない行動の数々、そして日に余る怠惰な生活態度に少々苛立ちを感じ始めていたのである。

手のかかる子供を叱りつけるような日々、しかしそれで素直に言うことを聞いてくれるならまだしも相手はあるの猫又だ。

口の達者な猫又は君彦が注意する度にのらりくらりとした返答をしたり、屁理屈で返したり、とにかくその度に今まで以上に喧嘩が絶えなかつたのである。

そんな日々が毎日繰けば、さすがに君彦にも限界が来る。

しかしそんな君彦の苦労など露知らず、猫又は反省するでもなく鼻歌を歌つて上機嫌だったり、偉そうに命令してきたり、全くもつて普段の猫又の態度とそつ変わらなかつたことに、君彦のストレスは更に溜まつていつたのだ。

当然今も君彦は猫又に対して多少なりとも苛立ちを感じている、せつから余裕を持つて行動しているのにそれを崩すのが決まって猫又の不可解な行動であつたり、はた迷惑なトラブルに君彦を巻き込んだりするせいだった。

今もこゝして理由をつけて自分から遠ざけようと、猫又の自由にさせようと口出ししているのに猫又は言つ事を聞いてくれない。

どうして自分にまとわりついてくるのか、どうして自分の苛立ちをわかつてくれないのである。

そんな思いが何度も君彦の脳裏を巡つては消え巡つては消え、延々と繰り返しているのである。

なぜか自分に対してもういちどこのだらつ。自分は自分のペースで生活しているだけだ、それを君彦に指図されるいわれはない。ましてや自分は他の猫とは違う異質の存在、猫又だ。人間の言つ事苛立ちを隠せなかつた。

どうして君彦はこんなにも口づるところだらつ。自分は自分のペースで生活しているだけだ、それを君彦に指図されるいわれはない。ましてや自分は他の猫とは違う異質の存在、猫又だ。人間の言つ事

をはいはい聞く妖怪がいるわけがない。

(……ま、中にはト僕みてえにへーこりしてのワンコロもこるけど
な)

ふと猫又は隣の部屋に越してきた犬神のことを思い出すが、自分に対しても無利益な敵対心をむき出しにする犬神の顔を思い出すと胸が悪くなってきたのですぐに犬神の存在をまるごと削除しようと務める。

君彦の言つ事もわからないではないが、何も事情を知らないくせに偉そうに言つなど言いたい自分の身にもなれと猫又は思つてはいるが、それを決して口に出すことはなかつた。

自分の力が弱まつてると聞いたら、君彦は一体どうするだらうか？そもそもあの猫又征四郎の孫とは言つても、靈媒の類には一切と言つていい程に関わりを持たなかつた。

……否、猫又征四郎が君彦を悪霊と閨わらせようとしたしなかつたのだ。

そのせいもあつて君彦は靈に関する知識はあるか、除霊や淨霊といつた行為も一切経験したことなかつたのである。

だからこそ猫又の力が弱まつてると聞いた君彦が一体どうするのか、知識がないだけに過剰な心配をさせてしまうだらうか。

それとも全く関係ないのに自分のせいだと罪悪感を抱いてしまつのか。

お人好しな君彦の思考を完全に把握することが出来ない猫又は、そんな面倒臭いことになる位なら君彦は何も知らない状態の方が幾分マシだとそう判断したので、未だに真実を打ち明けていなかつたのである。

ましてや説明の中でボロを出して猫又征四郎の靈魂の存在を君彦に知られでもしたら大変になる、それだけは絶対に避けなければならぬといつてもあったので、猫又はそれらを一括して

面倒臭い」と判断したのだ。

憎まれ口を叩くように猫又について来るなど、そう訴えてくる君彦に猫又は氣怠そうな表情をわざと作って言葉を返した。

『オレがどこで何しようと前に関係ねえだろー。

大体君彦、お前つてばちょっと自意識過剰じゃねえか？

オレは別にお前の後を追いかけるわけじゃねえ、二つちの方向に行きたいだけなんだよ！

なーんでこのオレ様がお前にベタベタしなくちゃなんねえんだ、うえへーキモ！ 気持ち悪つ！』

そう言つて猫又は君彦の田の前でわざとらしく吐き気をもよおす仕草をする、それが演技だということは見てすぐにわかつたからこそ猫又の憎たらしい言動の数々が余計君彦の神経を逆撫でしたようだ。

「はつ！ お前、それでこのオレを騙し通せると思つてんのか！？ 今の言葉が取つてつけたような嘘だなんて、とっくにわかつてゐんだぞ！」

指をさし、堀の上の猫又を睨みつけながら不敵な笑みを作る君彦。先程の猫又の言葉が白々しい嘘であることを見抜いた君彦は相当自信があるのか、それ以上怒鳴りつけるようなことはせずあくまで自分が上なんだと示すように、威厳ある態度で仁王立ちしていた。

そんな君彦の自信たっぷりな態度が気に食わなかつたのか、猫又もまたムッとした表情に逆戻りすると威嚇するように両前足の爪を剥き出しにして、見上げる君彦に見せつけるような状態で鉤爪をちらつかせた。

君彦は猫又の鋭い爪に怯えることなく、低い笑い声をあげると猫又の言葉が嘘である理由を説明する。

「ふつふつふ……、どうやらお前自身は全く気付いていないようだな。

お前があからさまな嘘を付く時、
お前の二又の尻尾はくねくねと互いを螺旋状に絡ませる癖があるんだよ！」

そう、先程君彦が指さしていたのは猫又の二又の尻尾めがけてであつた。

君彦に指摘され、猫又が自分の尻尾を確認すると猫又自身も無意識だったのか……。

言われたように二又の尻尾は螺旋状に巻き付いた状態で左右に揺れていたのだ、そつとは知らず猫又は君彦の指摘にそのまま動搖し、背中の毛が全て逆立つ程に驚いている様子であつた。

正直なところ、君彦にそう指摘されたからと黙つてそのまましらばっくれることも出来たはずだ。君彦がそう勘違いしているだけで、二又の尾を絡ませるのは自分のいつも癖なんだと言い換えることも可能だつたはず。

しかし普段からぼうっとしていいる君彦に指摘された驚きでしらを切ることを天然で忘れてしまつた猫又の態度に、もはや修正はできかなかつた。あまりの驚きように君彦の指摘が正確なものであると裏付けされてしまつた為、君彦は勝利を確信した笑みを浮かべて猫又を睨めつける。そんな君彦の勝ち誇つた顔を見て、猫又のはらわたは更に煮えくり返る思いであつた。

完全に言い換える機会を失つた猫又は悔しそうにあつあつと言葉に詰まつた状態になつてゐる、普段君彦よりも饒舌であった猫又にしてはとても珍しい光景だつた。それ程今の自分の失敗は相当に恥ずかしかつたことなのだろう。

しかしそんな猫又に追い打ちをかけることなく、君彦は勝ち誇つ

た笑みから苦笑氣味な笑みへと変わると肩を竦め、静かな口調で猫又に告げた。

「もういいよ、お前が行きたい所に行けばいいことなんだ。
それがたまたま学校方面だつたとしても、お前の自由だもんな。
だつたらこのまま一緒に行こう、さつきのメス猫達が戻つて来ない内にさ」

それだけ言つと君彦は猫又の返事を聞かずにそのまま学校がある方向へと駆け足になつた、そんな君彦を見て猫又は「あつ」と短く声を上げると憎まれ口を叩く暇すらなく、塀の上をとてとてと走つて行つた。

君彦の暴言

君彦と猫又が駆け足で学校の校門前まで向かっていくと、ちょうど校門に入ろうとしていた響子と出会した。相変わらず響子にはべつたりとまとわり付くように、花魁風の色情靈が取り憑いている。ちょうどその時、色情靈の力によつて惑わされた男子生徒がラブレターを渡そつと、響子に近付いた瞬間に殴り飛ばされる場面を垣撃してしまつ。

しかしそれでも響子に猛アタックを仕掛けてくる男子生徒は後を絶たない様子で、他に四～五人程が響子に向かつっていたので君彦は慌てて響子の側に駆け寄ると、挨拶を交わしながら響子の肩に手を触れた。

「おはよー、志岐城さん！」

君彦が響子に触れた瞬間に、取り憑いていた色情靈が表情を歪めながら君彦を睨み付けるとそのまま空高く舞い上がるようになんとか離れて行つた。響子には未だに鏡などの媒体を通さなければ色情靈の姿をその目に映すことが出来なかつたが、君彦に肩を叩かれた瞬間に全身の重だるさが消え失せたので色情靈が自分から離れて行つたことを暗黙に悟つたようだ。

浮遊靈である力ナの姿が見えるのに色情靈の姿だけが見えないと、いふことに、君彦は少しばかり疑問に思つていた。何の違いがあるかよくわかっているわけではなかつたので、いつか猫又に聞こうとしてそのままずつと忘れていたことを思い出しが、しかしそのよつなことを今ここで……しかも急がなければ遅刻するかもしれない状況で猫又に聞いたりする暇がないと察して、また機会がある時にでも聞こつと君彦はこの場で疑問を口にすることをやめた。

君彦が色情靈を一時的に追い払つたことによつて、魅了されてい

た男子生徒達は正気に戻ったようである。まるで催眠術にでもかかつて、今さつき術が解けたような惚けた表情で周囲を見渡すと、それぞれ首を傾げながら校舎へと歩いて行つた。ようやく鬱陶しい男達から解放された響子は、挨拶してきた君彦の方を振り返り、はにかんだ。

「お、おはよー……」

少しきじちなく、だけれど素直に。大声を張り上げるでもなく、振り返り様に殴り飛ばすわけでもなく、響子は君彦に向かって手を上げずに挨拶を返してきたのだ。響子に出会つてから恐らくこれが初めてであろう、攻撃を受けることなく普通に挨拶を交わせたことに心から感動した君彦は、少し目を潤ませながら嬉しそうに微笑んだ。

そんな君彦の態度がとても大袈裟に映つた響子は顔を真つ赤にさせると、突然いつもの素直になれない響子へと戻つてしまつ。

「あのね！ 勘違いしないでよね、これはあんたが『友達』だから普通に挨拶しただけなんだから！ どうしようもない肩の『男』からほんのちょびつとだけ格上げしてやつただけなんだからね、ほんのちょびーっとだけよ！？」

そう言つて響子は親指と人差し指がくつつくかくつつかない位、ほんの一ミリ程度の隙間を空けて君彦にわかりやすくジェスチャーで説明しているつもりだった。あまりに小さな隙間しかない為、君彦は苦笑いを浮かべてよくわからない納得をする。

「そ……そつか、あんまり大差ないんだね……今までと。あ、でも一応友達として接してくれてるんだから、そこは感謝しなくちゃね。これでオレも志岐城さんの正式な友達になれたってことだし」

屈託の無い笑顔ではつきりそつ告げると、更に響子は恥ずかしさの余り真っ直ぐに君彦を見ることが出来ず、視線を下に背けた先に猫又がいたので急に不機嫌な顔つきに早変わりした。

「なんだ、今日は一緒にいるのね……そいつと

『誰がそいつだ！ お前に有り難い力を授けてやつた大恩人に向かつて失礼だろうが！』

一本足で立ち上がり、前足をぶんぶん振り回しながら反論する猫又に響子は胸の奥がむかついた。瞬時に猫又の首根っこを掴まるごぶよぶよにたるんだ皮が伸び切つて、猫又は皮のツッパリ感とわずかな痛みで全身金縛りに遭つたかのように硬直した。首根っこはつい先程も涼子に鷺掴みにされて、まだジンジンしていた所である。猫又の恩着せがましい言葉と態度に響子もまた激昂して言い返す。

「誰が大恩人よ！ あたしがいつあんたにこんな力が欲しいって頼んだつてのよ！ お陰で鏡を見る度に不気味な女が背後に写つて恐ろしいつたらないわよ、色情靈だけじゃないわ！？ 他の幽靈だつてたまに見えるようになつてんだからどうしてくれるのよ！」

放つておいたら取つ組み合いの喧嘩にまで発展するのではないかと不安になつた君彦が、猫又と響子の仲裁に入る。人間対猫の仲裁に入るという経験、一体どれだけの人間がするんだろう。

「まあまあ猫又も志岐城さんも落ち着いて！ その話はまた後でゆっくりしたらいいじゃないか、それより早く教室に行かないと遅刻になっちゃうよ…」

君彦の言葉に猫又は不服だったのか、シャーツと威嚇して口喧嘩の続きをしようと万全であつたが響子の方は割と素直に君彦の言う事を聞いて、猫又を掴んでいた手を放した。あまりに素直過ぎるので猫又は背筋が凍るような思いがして、まるで汚らしい物体でも見るように目付きで響子を睨めつけた。

当然猫又が気味悪がっている様子に気付いていた響子であったが再戦はまた今度ということで無視しておく。一行が校舎へ向かう途中、君彦はいつものように響子を昼休みに屋上で弁当を食べようと約束を取り付けた。

君彦が教室に入ると近くの席である黒依が可愛らしい声で挨拶の言葉をかけてきたので、君彦は相変わらずのにやけ顔で話しかけた。そんな君彦のいつも通りの反応に半ば呆れ返っている猫又は、もう一つ空いてる席に視線を送る。そこは犬塚慶尚の席であり、教室中見渡しても姿が見えないのでまだ来てないか、別の場所にいるか、はたまた休みなのかはわからない。どのみち慶尚に付き従うように犬神も学校へ来るだろうから、このまま慶尚が休みであつた方がいくらか気分が楽になると猫又は考えていた。

そもそも慶尚は常日頃から犬神を連れ回しているわけではなく、必要でない時は屋外で自由にさせてるか姿そのものを消して、慶尚の呼び声と共に現れるようになつてている。しかし猫又にとつては犬神の姿が見える見えないの問題ではなく、慶尚自身に犬神の『臭い』が染み付いていて気分を害するから極力近寄りたくないなかつたのである。

そうは言つても猫又自身の神通力が極端に弱まつてゐる今では、君彦の身の安全を確保する為に慶尚と犬神を利用しなくてはならない。君彦の祖父である征四郎からも、何かあつた時の為に常に君彦と慶尚は共に過ごすようにしろと言われていた。

だがしかしこの言葉に猫又は鼻で笑いそうになつた、猫又が犬神のことを毛嫌いしているだけじゃない。君彦もまた慶尚に対しても性の悪さを遺憾なく發揮してゐるのだ。傍から見ていればすぐにわかる、誰に対しても温厚に振舞う君彦が慶尚に対してのみあからさまな拒絶反応を示していたのだ。あれは明らかに慶尚との相性の悪さを表しているといつても過言ではない。

だからこそいぐら猫又が遠回しに慶尚と密接な隣人関係を築かせてやろうとしても、きっと君彦の方から拒絶するだらうことは目に見えていた。しかし面倒臭いがするしかない、今の猫又に凶惡な物の怪を退ける力はないのだ。

猫又がしばらくの間慶尚の席を見つめていたことに気付いた君彦が、それまで黒依と楽しそうに喋つて満面に浮かべていた笑みが一瞬にして消え失せ、言葉を喪失させる。じつと慶尚の席を見つめていると黒依もまたそれに気付き、話しかけてきた。

「犬塚クンならまだ來てないよ、そいいえば君彦クンって犬塚クンと家が隣同士なのに一緒に登校して来なかつたの？」

悪氣もなく黒依が笑顔でそう訊ねると君彦は驚愕と共に嫌悪感すら浮かべた表情で振り返ると、両手を振つてその事実だけは絶対に実現することはないということを、力一杯に説明した。

「しないしない！ 何でオレがあんな奴と仲良く登校しなくちゃいけないんだよ、『冗談じゃない！ あんな無愛想な奴と肩を並べて歩いていたら、こつちまで無愛想なのが伝染つちゃうつて！』

〔圧倒的な否定に黒依は首を傾げながら、事も無げに言い放つ。〕

「確かにあまり感情の起伏とかがないけど……、結構面白い人だよね犬塚クンつて」

慶尚に対する黒依の意外な好評価に君彦は、まるで死刑宣告を受けたかのようにとても衝撃的な顔付きになると、慌てて黒依に理由を聞いた。一体あの無愛想で無礼な男の、どこをどう取つたら「面白い人」になるのか君彦には非常に理解不能だつた様子である。

あまりの慌てぶりに足元に居た猫又はまたいつもの病気が始まつたと言わんばかりの呆れた表情になりながら、大きな欠伸をかけていた。君彦があんまり必死に理由を聞きたがるので、黒依は人差し指を口元に押し当てながら焦らすようになかなか話そうとしない。そんな黒依の勿体ぶつた態度ですら、君彦は全く気にならない様子である。

「君彦クンも変なことが気になるんだね、どこからどう見ても面白い人なのに」

「だから、一体アレのどこが面白い人になつてしまふのかその縁を知りたいといつかなんといつかね？」

ねだるように続きを促す君彦の背後から、低く一本調子な声が聞こえてきた。

「(J)のオレの面白さを理解出来ない様な面白味のない奴には、説明したつて一生理解することは出来ないぞ狐崎」

その声と台詞を聞いただけで神経を逆撫でされたような不快感が君彦を襲う。明らかに顔を引き攣らせながらゆつくり後ろを振り向くとそこには君彦を見下すような目をした慶尚が、ウドの大木よろしく立っていた。

慶尚の姿を確認した瞬間に君彦は殆ど本能的と言つてもいいだろう、それ位の素早さで慶尚から距離を離すと当然のように、いきなり

り邪険に扱う。

「誰が面白味のない奴だ！ それはお前のことだろ？ この無愛想の陶片木が！ それから黙つたままいきなりオレの背後に立つなよ、ただでさえお前の側にいたら全身鳥肌が立つて気分悪いんだからなあ！」

「ちょっと君彦くん、一体どうしたの…？ 今のはちょっと言い過ぎなんじゃないかな」

君彦のあまりの暴言にさすがの黒依が珍しく仲裁に入った。その言葉に君彦はハツと我に返ると、慶尚に向けていた人差し指を見て怪訝そうな表情になる。まるでその人差し指が自分の指ではないかのようだ、そんな不思議な感覚に陥っていた。慌てて指を引っ込め、平然と立ち尽くしている慶尚に対して君彦は視線を不自然に逸らしながら小さな声で謝罪する。

「あ、その 悪かつた、ちょっと……言い過ぎたかも」

「別に気にしてない」

奇妙な沈黙が流れた。明らかに言い過ぎた君彦は勿論の事、黒依も慶尚もそのまま誰一人として何も言わないまま時間が過ぎていくと、まるで救いと言わんばかりにチャイムが鳴る。まるで金縛りにでもなつていたかのように沈黙していた三人がようやく口を開く。

「もうすぐ先生来るね、席に戻った方が良いよ君彦くん、犬塚くん」

「あ……ああ、うん。そうだね黒依ちゃん」

「……」

黒依の一聲に一人は賛同してそれぞれの席へと戻つて行つた。かくいう猫又はといふと特に驚くわけでも呆れるでもなく、ただじつと席に着く君彦を見据えていた。まるで先程の君彦の言動に強く反応したように、どこか含みのある表情で、ただじつと君彦と慶尚を交互に見つめていた。

今朝方、君彦が慶尚に発した言葉によって三人の間には小さな亀裂のようなものが生じていた。しかしそれは三人を仲違いさせる程のものではなく、あくまで少しばかり態度がぎこちなくなる程度であつた。

自分で口にした以上、最も気にしてるのは君彦である。元々小さな出来事にも敏感に反応する性質である君彦は、いくら毛嫌いしている相手であっても自分がここまで他人を悪く言うことなんてそうそうなかつたはずだ。それがなぜか慶尚相手となるとそういうた蔑む言葉を平氣で口にしてしまつ自分に、君彦自身が驚いている位であつた。

授業中も時折斜め前に座つてゐる慶尚の背中を目で追つては、不快そうに眉をひそめる。なぜ慶尚の姿を目にするとだけでこんなにも不快に感じてしまうのか君彦にもわからない。

ただ腹の奥底がもやもやと熱を持つたように不快な気分になるとだけは確かであった、原因こそわからないが君彦はどうしても慶尚という存在に嫌悪感に近いものを感じて仕方がない。

授業の合間にある休み時間、慶尚はクラスの女子に囲まれて面倒臭そうに応対するなどして時間を過ごしていたが、君彦はそんな無愛想な慶尚を再び目で追つては不快さを露にしていた。そんな君彦に声をかけ、まるで慶尚のことを頭から追い出そうとするように色々話題を降つてくる黒依。

君彦は黒依に話しかけられる度、瞬時に慶尚のことを忘れ、話に夢中になれた。それでも心のどこかでは自分が慶尚を嫌う理由を、気が進まないなりに探していることに君彦は気付いている。明らかに今朝の言動から態度がおかしくなつた君彦を案じて、猫又は二人の様子を教室の端から眺めていた。

慶尚がこの学校に転校してきてからは、慶尚からちょっかいをか

けて来ない限り君彦が慶尚の存在に構うようなことはなかつたし、今日のように度々目で追つたりはしていなかつたはずだ。それが自分自身の異変に気付いた君彦が、意識的に慶尚の存在に気をかけるようになつてゐる。それが悪いことだとは言わない。むしろ猫又にとつては望ましいことだつたのかも知れなかつたのだから。

休み時間が終わり、次の授業の先生が教室に入つてくるとクラス中がバタバタと自分達の席に戻つて行く。猫又は教室の後方にあるロッカーの上に陣取つて、再び君彦と慶尚の様子を窺つていた。やはり二人が近付いて会話などをしない限り、これといった変化は見られなかつた。

猫又は大きなあくびをひとつすると、口をもじもじさせながら眠気に襲われていると突然声をかけられ、あからさまに嫌そうな目付きで下を向いた。そこには慶尚に呼ばれても居ない犬神が姿を現しと言つても君彦や慶尚、そして黒依以外にはその姿は見えないままだが 猫又を睨めつけるように見上げている。

『猫又よ、お前の主は少々慶尚に失礼ではないか！？』

唐突な言葉に猫又はよく聞き取れなかつたフリをしてわざとらしく聞き返す。依然ロッカーの上から降りる氣はなさそうだ。

『あ？ 何の話だよ、犬つこひ』

猫又の言葉使いに苛立ちを隠せない犬神であつたが、慶尚の命令無しに出てきたことに負い目があるせいか、ちらりと慶尚を一瞥してから再び静かな声で猫又に話しかける。もつとも犬神がどんなに慶尚の視線を気にしようとも、その気配によつて犬神が勝手に姿を現していることは慶尚に既にバレていることは明らかであつたが。

『我が姿を現しておらずとも、慶尚の身の回りで起きたことは我も

見聞きしている。今朝方お前の主が慶尚に発した言葉のことだ。そもそもあの男……猫又君彦とつたか。あいつは慶尚に對して無礼が過ぎるぞ。敬えとは言わぬがせめてもう少し対等な口の聞き方をするべきだと我は思うが……』

『言いかけ、犬神は猫又から視線を逸らしてわざと憎まれ口を挟んだ。

『まあお前の主ならば、口が悪いのは仕方ないことか』

しかし犬神の憎まれ口など猫又にとっては蚊に刺された程度のものなのか、しれっとした態度でわざとらしく後ろ足で首の辺りを搔きながら適当に言葉を返した。

『へつ、犬つころが人間にお説教かよ。大体だな、オレ様は別にあいつの下僕でも何でもねえんだよ、勘違いすんな。君彦が誰と何をやらかそうがオレの知ったこっちゃないね。気になるならお前が直接君彦に言つてやんな。お前の『ご主人様の許可が下りればの話だけどな！』

犬神が猫又に攻撃出来ないことをわかつていてわざと馬鹿にするような態度と口調で猫又が言い放つと、犬神はぴくぴくと怒りを堪えながらも牙を剥き出しにして静かに威嚇する。しかしそれ以上は自重しなければいけない犬神は、これ以上猫又と言葉を交わしても苛立つだけだと察し、ふんつと鼻を鳴らしてそのまま姿を消してしまった。

負け犬め、と猫又がやりとした時、ちょうど後ろを振り向いていた慶尚と目が合つたので、猫又は二又の尻尾をぱたぱたと振りながら何事もないようにシラを切つた。だが慶尚は特に何かを言つたげに表情に表すわけでも、言葉を発するでもなく、猫又と同じよう

に何もなかつたように再び前を向いた。

君彦の意見に尻尾を振つて賛同するわけではないが、やはり猫又も慶尚のことが苦手であった。何を考えているのかわからない表情、態度、そして猫又以上にしれつとした言動。どれをとっても慶尚が自分達の味方なのか、はたまた昔のような敵なのか、それはよくわからぬ。慶尚が君彦に危害を加えない限り、猫又も人間である慶尚に害を及ぼすわけにはいかなかつた。

もしかしたら慶尚は何かを知つてゐるかもしれない、君彦が必要以上に慶尚を毛嫌いする理由を。ふと猫又は慶尚の背中を見つめながらそんな憶測をしてみた。いや、もしかしたらそれは慶尚以上に征四郎が知つてゐるかもしぬれない、とさえ思つてしまふ。

(面白くねえな、オレの知らねえところで何かが起きてるなんぞ。とにかく君彦に出来ることと言えば、せいぜい悪口雑言を犬塚の野郎に吐き捨てる程度だから、特に大したことにはならねえだろうな。当面の問題は黒依と……色情靈に取り憑かれたままの色情女か)

ロツカーの上から授業風景を見つめながら猫又がぼんやり考えていると終業のチャイムが鳴り、遂に午前中の授業は全て終えることが出来た。君彦と黒依は早速いつものように毎の弁当を食べる為に移動を始めた、そこで弁当を持った君彦と慶尚の目が合つ。

「おっ」と猫又は興味津々な眼差しで一人の様子を窺つた。依然ロツカーから降りようという様子はない。

君彦は少しバツの悪そうな顔になりながら、ぷいっと慶尚から視線を逸らすと手に持つてゐる包みを慶尚に向ける。

「お前の弁当だよ。どうせ今日もパンとパックの飲み物しか持つて来ないんだろ? 今日はちょっとたくさん作り過ぎたから余つた分を別の弁当箱に詰めてきたんだよ」

照れくさそうに君彦が一気に台詞を言い切った。何も今朝の詫びのつもりで差し出しているわけではなかつた。君彦が今朝、弁当を作つた時からじっくり考え、用意してきた理由。慶尚が無理矢理グループに入つた時から嫌々ながら一緒に弁当を食べていた時、いつもコンビニで買って来た弁当であつたりパンであつたり、どうにもそれが気になつていた君彦はついお節介だとわかつていながらも、慶尚の分の弁当もついでに作つて来てやるうと考えていて、今朝遂にそれを実行したのであつた。

慶尚は手渡された弁当包みを見て、眉ひとつ動かさずに見入つてゐる。何も言わないし、笑みをこぼすこともない。そんな慶尚の態度に急激に恥ずかしさを感じた君彦は、顔を真つ赤にしながら声を張り上げた。

「べ、別にお前の為に作つて来たわけじゃないんだからなー!? いらないなら別にいいぞ、オレと黒依ちゃんと志岐城さんとでたいらげるだけだからなあー!」

「別にいらないとは言つてないだろ?」が

しかし慶尚はむすつとした表情のままはあるが、どこか今までは雰囲気の違う態度に変わつていて君彦は田をぱちくりさせながら、今までどど?が違うのか探すように慶尚を瞪つていると君彦の視線に不快感を覚えた慶尚が表情をあからさまに歪ませた。

「なんだ……、オレにそんな趣味はないぞ」

「オ、オレだってそんな趣味はないわ!」

結局殆ど君彦による一方的な罵り合いが始まつた結果となり、様子を見守つていた猫又が下らなさそうに再び大きなあぐびをすると、

呆れた声で独り言を言った。

『なんか……、色情女とのやり取りと大して変わんねえなコレ』

ぎやあぎやあと文句を言い続ける君彦を無視する慶尚、そんな二人のやり取りを他人事のように笑顔で見守る黒依。その三人が教室から出て行き、隣の教室の響子を迎えて行つたので猫又はようやつとロッカーの上から飛び降りて後について行つた。

変わらず君彦が一人で怒りをぶちまけ文句を言い続けていると、響子の教室から大きな物音がしたので三人は途端に静かになり、開け放しになつていた教室のドアから中を覗いた。すると教室内にはまだ生徒が大勢残っているにも関わらず全員が呆気に取られたようになつてあり、教室内は静寂に包まれていた。そこからは異様で不穏な空気が流れており、何が起きたのかわからない君彦達にでさえ異常な事態が起きていることが手に取るようにわかつた。ゆっくり歩を進めて中を覗こうとドアに近付くと、先程聞こえた物音は教室内に整然と並べられていた机が倒れる音であつた。列から外れるように斜めに向いている机や、倒れている机。そのすぐ横には男子生徒が倒れており、生徒の一人が手を貸している姿がまず目にに入った。

それから更に中を覗いて行くと、そこには険しい表情をした響子が立ち尽くしている。響子右手は少し赤みが差していたので、恐らく机の間に倒れている男子生徒を響子が殴った後なんだろうと君彦は瞬時に推察した。響子の背後に目をやると、今朝君彦が一時的に祓つたはずの色情靈が戻っていて、薄気味悪い笑みを浮かべている。

「色情靈の色香に惑わされた生徒を殴った後みたいだな……、志岐

城のやつ

瞬時に事の経緯を推理した慶尚が口に出す、それを聞いた君彦もすぐ理解したがそれでもいつもと様子が違っていたことに違和感があつた。確かに今まで何度も色情靈に惑わされた男達をこの目にしたことがある。その男達から身を守る為に暴力によつて自己防衛してきた響子の苦労も知つてゐる。しかし「それ」が今までと、今と……明らかに「何か」が違つていた。

静まり返つた室内、中に居る誰もが響子と……殴り倒されてしまつた男子生徒を見つめている。彼等の眼差しを見て、君彦は急に鳥肌が立つた。色情靈とは何の関係もない、生きた人間達の姿を見て背筋が凍つたのだ。

侮蔑の眼差し、恐怖が込められた眼差し、そして嫌悪感を露わにした眼差し。

そんな悪意に満ちた視線が響子に集中している。その光景に君彦の胸に激しい痛みが走つた。響子の表情だ。

響子は男子生徒を殴り倒し、当然それは故意の暴力ではなく自分の身を守る為のものであると君彦は信じてゐるが、それでも響子は自分が相手に暴力を振るつたことに少なからず罪悪感を抱いているのか、苦しそうな表情をしていた。

今にも泣きそうな、この世に自分の味方なんて誰もいないのででも言つような、そんな孤独に満ちた表情だつた。しかしそれは相手に暴力を働いたからそつたのではないんだと、君彦は少し時間がかかつてから察する。

響子は周囲の冷たい視線に晒され、辛い思いをしてゐるのだ。

彼女から笑顔が失われてしまつ。

せつかく心を開きかけていたのに

！

君彦は事の顛末を全て把握することなく、頭で考えるより先に体の方が響子の元へと向かっていた。

10分前の出来事

登校途中で君彦と会い、ついでに色情靈を一時的にだが祓つてもらつた響子は心中で感謝していた。思いのひとつひとつを言葉で述べることは響子にとってつもなく困難なことであったが、それでも少しづつ響子は変わりつつある。

異性である君彦と教室前まで一緒に登校していくことが何よりの証拠であった。

もうすぐ始業ベルが鳴りそうだったからか、廊下には生徒の姿がまばらに見える程度で少々急がなければならぬと、二人は言葉を交わさなくとも十分理解していた。

「それじゃ志岐城さん、今日も昼休みになつたら迎えに行くから」

「う……ん、わかった……」

まだぎこちなさは取れなかつたが、響子なりにとても素直に返事をしたつもりであつた。

君彦もまた慣れるのは少しづつでいいんだと、暗黙に促しているのか怪訝な表情になつたりはしない。むしろ響子が異性に慣れる為の自分が練習台にでもなつたかのように、常に笑顔で接してくれていた。

今では本当に素直に、そんな君彦の心遣いが嬉しく思えた響子。

そのまま響子に背を向けて君彦が自分の教室へ入つていいく様子を、教室のドアの前でじつと見つめる。

君彦や響子以外、靈を見ることが出来る人間以外には田にすることが出来ない猫又と口喧嘩したり、怒りの余り拳を振りかざす仕草をする君彦の姿は、靈が見えない一般人の目から見れば「奇妙」と

言わざるをえない。

猫又の姿が見えなければ、君彦という青年のひととなりを知らなければ、恐らく響子も他の者達と同様に怪訝な眼差しで君彦のことを見入扱いしていたことだらう。

現にまだ廊下に残つてゐる生徒の何人かは、君彦に目を配りながらこそこそと何か小声で話したり、指をさして笑つたり、異様な者でも見るかのような眼差しで君彦を嘲笑していた。

そんな視線に晒されても、君彦は何も気にしていないのか、それとも気にしないようしているのか、それは本人に聞いたわけではないからわからないが、君彦は何事もないように普段と変わりなく、足元に猫又という猫が「居る」前提で会話し、戯れていた。

その様子は開けつ放しだった君彦達の教室のドアごしからも、よく見て取れる。

教室内では君彦が猫又との会話を止め、朝の挨拶の為に話しかけてきた黒依にまず声をかけ、それから何人かのクラスメイトと挨拶を交わしている姿が目に入つた。

いつまでも隣の教室の様子を見ている場合ではない。

ハツと我に返つたように響子は気を取り直して自分も教室へと入つていく。するといつものぴりぴりとした空気がまず響子を襲つた、それまで教室内で他の生徒とお喋りしたり、生徒同士で遊んだり、喧騒に満ちていた教室内が一気に静寂に包まれたのだ。響子が教室内に現れてから……。

それまで君彦と一緒に登校していた時は照れながらも笑顔を保つていた響子であつたが、一気に表情が曇る。

まるでこちらの顔の方が本来のものであるかのように、愛想良く笑顔を振りまくことなどせずに、どこか不貞腐れたような表情で自分の席へと真っ直ぐ歩いて行く響子。

しんとした教室内で席へ着く為に椅子を引く音が妙に大きく聞こえる、まるで教室内に響き渡るような感覚だ。

誰とも視線を合わせようとしていないが、教室中から響子へと集

中的に見られているのがわかる。まるで針のむしろだ、ピリピリとした妙な空気が響子の息を詰まらせる。

そんな時、何の前触れもなく一人の女子生徒の声が聞こえてきた。

「この男好きが」

響子の表情が凍りつく。

指名されていなくともわかる、誰のことなのか、誰に向けて何のことを言っているのか、十分過ぎる程に理解出来る。

例えそれが響子が意図していたことでなくともこれまでの状況や出来事を見れば、そんな風に言われても仕方ないとさえ響子は思っていた。ただ「そうなる」ことが少し遅かつただけなのだ。いつかはこうなると、響子自身が一番分かりきっていた。中学時代がそうであったように。

そしてこの一言が教室内に居た生徒の心に火を点けてしまった。

「そうよねー、志岐城さんってすげくもてるものねー」

「なのに自分は興味ないって感じですましてさ、なんかそういうの

つて見ててすっごく腹立つんだけど」

「でも本当は男に媚びてんじゃないの？ でないと男子達があんなにちやほやしないでしょ」

「そうね、きっとそうだわ。ああやだ、私はあんな風になりたくないわねー！」

笑い声と共に聞こえてくる冷たい言葉、今まで心の中で思つていたことを一度口にすると、もうその勢いは止まらなかつた。

響子の抱えている問題を何も知らない彼女達は、響子が男にもてているという光景を目にしてずっと妬んでいたのである。男に言い寄られることを快く思つていらないにも関わらず、響子のそんな気持ちを理解する者などこの室内には誰一人としていなかつた。

ただただ悪意に満ちた眼差しで、一方的な思い込みで、至んだ解釈で、彼女達は響子を批判する。

しかし響子は反論しなかつた。

言つても無駄だから、それが主な理由であつたが何より響子はこれ以上誰とも揉めたくなかったのだ。ただでさえ響子には敵が多い、色情靈に取り憑かれている以上その色香によつて惑わされる男から逃れる術は護身術だけである。

しかし傍から見ればそれは響子による一方的な暴力として他人から捉えられてしまう、それがわかつても響子は自分の身を守る行為は暴力でしかないと信じ、男だけでなく同性からも距離を遠ざけられてしまつことを覚悟の上で防衛を続けていた。

そして今、それが多くの敵を作つてしまつてゐる。

彼女達の言つこともわからないわけじやない、誤解であるのだが響子にとつてはどつしうつもないのだ。

『全て色情靈といつ悪靈のせい』などと説明出来るはずもない。實際色情靈に取り憑かれている響子でさえ、君彦と初めて出会い、説明されてもすぐに信じることなど出来なかつたのだから。特に親しい付き合いをしてきたわけじやない他人ならばなおさらだ、事情どころか弁明にすら聞く耳を持つてくれないだろう。

悪意に満ちた罵りは、なおも続いた。

朝のホームルームが始まるとたつた数分だつたはずなのに、響子には数時間のように感じられる。

早く、早く始業ベルが鳴つてくれればいいのに。

心の中で切実に願う。何度も何度も叫び続けた。声には出せず、心中で呪文のよつに何度も何度も響子は繰り返した。

そしてようやく始業ベルが鳴り、しばらくすると担任が教室へとやって來た。

生徒達は何事もなかつたかのようにそれぞれが席に着いて、いつ

も通りの光景へと戻る。

しかし一部の女子の視線は未だに冷たかった。

刺すような眼差しで響子を一瞥し、それから近くの席に座つてい る女子は小声で「死ね」「クソ女」などと言つ悪口雑言を繰り返し、やがてそれは授業中ずっと絶えなかつた。

休憩時間になる度に響子は教室内に留まることがいたたまれなくなり、短い間ではあるが教室から出て行き一人で過ごそうとする。しかしそうにまた始業ベルが鳴つて教室に戻らないといけない為、ほんの数分しか響子に安らぐ時間は与えられなかつた。

しかし本当の意味で響子に安らぎの場所などありはしない。

教室から出て行つても、クラスメイト達の視線と言葉が頭から離れず、廊下にいる他の生徒の視線でさえまるで自分を蔑むような眼差しで見つめているように感じられた。彼等にとつては響子とは全く関係の無い日常会話だとしても、すっかり心が傷付いてしまつている響子にとつては自分を侮辱する言葉に聞こえていた。

どこへ行つても一人きりになれる場所はない。どこへ行つても生徒や教師がいる。孤独になれる場所なんて限られていた。しかしすぐにまた教室へ戻らなければいけないので、あまり遠くへ行くことも許されない。

それならばこのまま体調不良を訴えて早退すれば良いのではない かと、ふとそんな考えが響子の脳裏をかすめたが、どうしてもそれは出来ない。もし早く帰宅するようになれば伯母（伯父？）の蝶野蘭子（志岐城則雄）に心配をかけてしまう、それだけはどうしても避けたかった。

よつて早退することも出来ず、悪口雑言を浴びせる他の生徒から完全に離れることも出来ず、再び響子の耳に始業ベルの音が響いた。どんなに早く歩いても教室から遠く離れることは出来ない、歩いても歩いてもまたすぐベルによつて同じ場所へと戻されてしまう。苦痛でしかない場所だとわかつても、学校にいる限り響子が戻る

場所は地獄のようなあの教室でしかないのだ。

休憩が終わり教室へ戻ると、冷やかな視線が響子に集中する。そんな視線に耐えながら響子は自分の席へと向かう。

あからさまに響子の持ち物が無くなったり、机に落書きをされるというような苛めはなかつたが、視線と言葉だけで十分ダメージは大きかつた。孤独の中に入る響子にとつて、唯一心を晴れやかにする存在のことを思い出す。

しかし今は会いたいとは思えなかつた、少なくとも今は。きっと今の自分は酷い顔をしているだらう、きっと彼を心の底から心配せらるような酷い表情をしていることだらう。

彼とは笑顔で向き合いたい。

君彦とはお互い笑顔で会いたかった。

静かな地獄であつた午前は終わり、遂に昼休みとなつてしまつた。昼休みになればきっと君彦達がいつものように自分を誘いに来るだらう、どうやって誤魔化そうか、どうやって会わないようにすればいいだらうか。そんなことを考えながら自身の手作り弁当をカバンから取り出し、そそくさと教室から出て行く為に席を立とうとした時、またしても心ない女子からの痛烈な攻撃が始まつた。

「また男と逢引き？ もてる女は忙しいわよね」

聞こえないフリをする、響子は口元を一文字に引き締めながら浴びせられる言葉に必死に耐えた。出来ることなら女子に対して暴力を振るいたくない。自分は防衛にのみこの力を振るうだけなのだと、心の中で言い聞かせる。

しかしそれでも何もしてこない響子に対しても慢心したのか、他の女子達もこぞつて響子を批判してきた。

「毎日毎日教室出てつて余所で昼飯食べるなんて、まるで私達が追いかけてるみたいで感じ悪いわよね」

「私達のことを避けてるのはそっちなの」と

「どうせ私達女子と一緒に居ても楽しくないってんでしょ、だつて男の方が好きみたいだし？」

「男の前でだけ媚びる女ってホント感じ悪い！ それならいつそ男子校にでも行けば？」

「あはははっ、女子は入学出来ないしょそれ！」

「ほら、マンガとかでよくあるじゃない！ 男のフリして女子が男子校に入るっていうやつ！」

「シャレになんないわよ～、それじゃ志岐城さん男子校の生徒みんなとヤツてんじゃない!?」

「うつわ～、何それ不潔！ でも有り得ない話じやないわよねー、今だつて疑わしい位だし」

罵りは続く。少数のグループが何組かに分かれ、その誰もがたつた一人をターゲットにクラス全員に聞こえるようわざと響子のことを笑い者にした。

早くこの教室から出て行けばいいのに、足が思うように動いてくれない。

いつの間にか響子の両足は小刻みに震えて、歩こうとしたら足がもつれて転びそうになる。同時に全身も微かに震えていた。この震えは自分が笑い者にされているという怒りから来ているのか、クラス全員から除け者にされ世間で言つところの「苛め」を受けているという辛さから来ているのか、響子にはどしどとも言えなかつた。

ただひとつわかることは、このクラスには誰一人として響子のことをかばうような人間がないということだけだ。

全身の重だるさが取れていないので、鏡なしでその姿を確認することはないが、恐らくまだ響子の背には色情靈が取り憑いてい

るはずである。にも関わらず教室内に残っている男子生徒は誰も響子にすり寄つて来たりはない。

ただ男子生徒の全員が、女子生徒全員から非難を浴びている響子のことをじつと遠めに見つめて来るだけだった。

悪口雑言を浴びせる女子生徒に注意することも、響子を助けに入ることも、この現状を担任に報告しに行くことも何もせず、ただ黙つて事の顛末を見守るようになつた。じつとその場から動かない男子達。

響子は彼等の助けを待つてゐるわけじゃなかつた。

ただなぜ彼等が色情靈による奇行に走らないのか、それが少し気にはかつただけである。

しかしすぐにまたそんな気がかりは消えてなくなつた。

静まり返つた教室内に女子の声だけが響いて来て、その場から逃げ出すことも立ち向かうことも出来ず、ただ自分の席で立ち尽くすだけの自分が情けなくて、悲しくて、どうしようもない状態で一人耐えていた時。

『助けが必要ならくれてやるわよ?』

全身に鳥肌が立つ程の囁き声が響子の頭の中で響いて、一瞬どきりとした。

それは耳で聞き取つたものではない。直接頭の中で声をかけられたような異様な感覚で、その声の持ち主が教室内の生徒達のものではなく、自分に取り憑いている色情靈のものであると、響子は誰に確認するでもなく瞬時に察した。

しかし後ろを振り向いたところで響子の目に映るはずもない、今まで一度も鏡ごし以外で色情靈を目視出来たことがないからだ。

嫌な予感がして、響子は思わず身構えた。

先程の言葉の意味が一体どういうものなのかわからないが、悪靈の一種でもある色情靈が自分を守る為に何かをしてくれるはずがない

い。あるとすれば悪意ある行為だけだと、それだけはよくわかつていた。

突然、まるで鋭い針で刺されたような視線と気配を感じた響子は周囲に立ち廻っている男子生徒に、次々と視線を走らせた。それまで色情靈の色香に惑わされることなく正常を保っていた男子生徒達の視線が、明らかに変わっている。

しかしこまでのようには色情靈に取り憑かれている響子に対し、性的な何かを持った目ではなかった。性的なことが目的で惑わされているのなら、既に回りの視線などお構いなしで響子めがけて行動を起こしているはずである。

それがないということがかえつておかしい。

今までと全く反応が異なる為に響子は未知の恐怖に晒されているような感じがした。

何が起きるかわからないこの状況で響子は警戒しつつ、すぐにでも教室を出て行く段取りにかかりた。色情靈の一言で体の震えは止まつた。まるで金縛りのように体の自由がきかなかつたのが嘘のように、今はどんな攻撃が待ち受けているとそれに対処する準備は出来ている。変わらず女子達は響子のことを罵り続けているが関係ない、そんな悪口雜言なんていつものことだ。

これまで直接なかつたのが不思議な位なのだ、中学の頃を思い出せば納得がいく。

あの苦境の日々を耐えてきた、吠えるだけの苛めなんて可愛い位だ。

問題は響子に対して直接いかがわしい」とを迫つて来る「男」なのだ。

響子の敵は口だけ達者で陰湿な苛め方を好む「女」ではない、一步間違えば力で圧倒的に負けてしまう「男」の方だ。

冷徹な言葉をこそつて浴びせて来る女子生徒のことはお構いなしに、響子はただひたすら男子生徒の視線や動きに注意を払いながらその場から離脱しようとしたその時だった。

一人の男子生徒が響子に向かつて歩を進めて来る。それを見逃さなかつた響子は近付いて来る男子生徒から距離を離すような形で歩みを早めた。

その瞬間、きらりと何かが光つたような気がした。

それは刃物のように映った。

瞬時に「刺される」と判断した響子は反射的に、殆ど本能的に攻撃を避ける為向かつて来た男子生徒の方へと身を翻し、そのまま得意の右ストレートをお見舞いしてやる。

響子が素早く回避したことで男子生徒の軌道は逸れ、まともに響子の攻撃を受けると整然と並んでいた机にぶつかり、床の上に突つ伏した。机にぶつかった時の大きな物音で、男子生徒が落としたカッターナイフが音を立てて床の上に落ちても、誰一人として気付いていない様子である。

倒れた机の中から教材やノートがばさばさと床に上に放り出された時、男子生徒の手から落ちたカッターナイフはそれらに紛れて、完全に他の生徒の目から逃れる形となってしまう。

周囲から一斉に悲鳴のような絶叫がこだまする。

誰一人として男子生徒が響子を襲つたとは考えていない。

響子に近寄つた男子生徒を、響子が突然殴つたように認識している様子だった。

教室内にいる生徒全員の目を見ればそれは明らかである。

今まで何度も自分に危害を加えようとする男を殴り飛ばして身を守り続けてきた響子であつたが、こんな風に大勢の人間が自分

に非難の目を浴びせたことはない。

怪訝そうな視線で、侮蔑を込めた眼差しで、恐怖を交えたようの一瞥されたことはあっても、一方的に敵視されたのは初めてかもしねなかつた。それもクラスメイト全員から、同時に、一斉に。

男子生徒が机にぶつかつて倒れた時の衝撃音を最後に、教室内は水を打つたような静けさに包まれ、空気が張り詰めて行くのがわかる。悪口雑言の嵐から突然沈黙に閉ざされたからなのか、それとも今までにない状況に響子の心が動搖しているからなのか、きいんといふ耳鳴りと、どくんどくんと心臓が激しく鼓動する音だけが響子の耳に響いて来る。

そんな中、くすくすと軽薄に笑う女の声が聞こえてきた気がした。

頭の中が真っ白になつて、自分がどこを見ているのか焦点が定まらずに硬直していると、静寂に満ちた室内で若い男の叫び声が響き渡つた。

「志岐城さん……！」

響子がその声に気付き視線を上げた時、目の前には自分をかばうよつな形で立ち塞がる君彦の大きな背があつた。

10分前の出来事（後書き）

いつも拙作を読んでくださってありがとうございます

第一話からここまで読んでくれた方の中には既に気付かれてる人がいるかもしれません、最近「書き方」に迷いがあるせいか：序盤の頃と比べて若干文章が固くなつてゐるような気がしてなりません（
^_^-;）

どうにか私の脳内にある情景を読者様にも伝えられるよう、日々勉強となつてるのでまだまだ書き方にブレや迷いが出るかもしれません、少しでも文章能力が上達するように頑張つていきます。
なのでこれからも「猫又と色情狂」を楽しんで読んでもらえたなら嬉しく思います。

どうぞよろしくお願いいたしますです（*、＊、＊）ノシ

気付く

響子は一瞬、既に今昼休みに入つてること自体忘れかけていた。だからかもしない。今自分の目の前に他のクラスであるはずの君彦がこの場に居るのがとても不思議に思えた。

頭の芯がぼんやりとして思考が思うように働いてくれない。周囲から浴びせられていた冷たい視線はいつの間にか響子から、響子のことをかばつている君彦へと注がれていた。

響子が何も言えないまま君彦の背を見つめ続けると、突然君彦は振り向き話しかけて来る。

「志岐城さん、大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「あ……あたしは別に、平氣……」

なぜそんな風に聞かれたのか一瞬わからなかつた。これも思考が鈍くなつていてるせいかもしれない。それ以前に他人から自分の心配をされることなんて滅多になかつたからなのかもしれない。

咄嗟に言葉を返したが、君彦の気遣いがとても不自然で違和感のような思いを感じずにはいられなかつた。なぜなら響子は目の前に倒れ伏している男子生徒を思い切り殴り飛ばしたからである。男子生徒がカツターナイフで響子のことを襲つたなんて、教室内の誰一人として気付いていないし、恐らく見てもいないだろう。

クラスメイト全員が響子一人を悪者扱いするような眼差しで、侮蔑していたのだから。

周囲からすれば響子は一方的に暴力を振るうような乱暴者であり、クラス共通の「敵」であるのだ。

色情靈に惑わされていない男子生徒もその中に含まれる。色香に惑わされていなければ彼等は正気を保つたままで、響子の振る舞い

を田の当たりにするのだから、その暴力的な行動で一線引くのは分かりきっていた。

今まで身内である蝶野蘭子（志岐城則雄）以外、響子に手を差し伸べてくれる人物などただの一人もいない。

ただここに来て初めて、響子に対しても優しく手を差し伸べてくれる人物に出会えたのだ。

その相手が今　　男子生徒に暴力を振るつた響子のことをかばつてくれている。

響子にはそれがとても嬉しくて堪らないはずなのに、急激な不安に襲われた。

なぜかはわからないが、とても嫌な予感がしたのだ。
そしてそういう予感だけはなぜか当たつてしまつ。

「なんでそんな女をかばつたりするのよ、普通逆じやない！？」

今まで散々響子のことを罵つていた女子生徒が騒ぎ出す。それまで男子生徒を殴つたという驚きによつて言葉を失つていた彼女達であつたが、余所の生徒である君彦の乱入によつて敵意を蘇らせたのだ。

その言葉を皮切りに女子生徒がいざつて君彦のことを見難し出した。

「あんたでしょ、志岐城さんと仲が良いつていう男は。

今こつちは取り込み中なんだから余所者は引つ込んでてくれない！？」

「あんた達もしかしてテキてんの！？　やつだキモーイ！」

「てゆうかさあ、こいつってほら……あの有名な猫又つて生徒じゃない？」

「ああ知ってる！　こら辺じや頭のおかしい奴つて有名よ」

「頭のおかしい男と暴力女か、最低のカッフルね！」

猫又をターゲットに悪口雑言を浴びせ笑い者にする女子生徒達、下品な笑い声を上げて指をさす。その光景を、言葉を見聞きした時……響子の中で何かが弾けた。

体中の血液が逆流するように全身が熱くなきつてきて、腹の奥がふつふつと煮えたぎるような感覚だった。

気付いた時には響子のことをかばっている君彦を押しのけるような形で、響子が前に出て怒声を浴びせていた。

「あんた達、いい加減にしなさいよー。」

怒りに任せた怒声は教室中に響き渡り、一瞬にして静まり返った。今まで散々沈黙や無抵抗を貫いて来た響子がここで遂に怒りを露わにする。

この高校に入学して、このクラスに入つて、自分に対しても卑猥な行為を仕掛けて来る男子生徒に鉄拳を浴びせたことはあっても、それ以外の生徒に向かつてこのように声を荒らげたのは初めてだった。

「今こいつのこととは関係ないでしょ、あんた達が貶めたい相手はこのあたしでしょ！？」

だつたらこいつの悪口なんて言わないで！

こいつのことを悪く言つていよいのはあたしだけなんだから、誰一人としてこいつのこと悪く言つのはあたしが許さないわよー。」

照れ隠しでもなくそう言い放ったのは響子の本心であった。

性格の歪んだ自分が善良な君彦のことを悪く言うのは仕方がない、それは響子自身の性格が歪んでしまっているから悪いようにしてしまうのは不可抗力なのだ。ただし君彦が響子以外の他の誰から悪く言われるような、そんな悪い人間ではないことは分かりきつている。だからこそ響子は自分以外の人間から、君彦が悪く言われるの

は堪らなく嫌でしょうがないのだ。

君彦が周囲から悪意ある言葉を投げかけられるような、悪い人間でないことは響子が一番わかっている。

響子のことをかばつて味方してくれている良い人が、酷い扱いを受ける必要はどこにもないのだ。

こいつはとても軟弱で、お人好しで、いつもへらへら笑っていて、どこか頼りない男だ。

だから自分がかばつてもう必要なんてどこにもない。

むしろ自分が守つてあげなくちゃ、危なっかしくて仕方がない。

本当は「守られたい」って思つても、守られるだけじゃ駄目なんだ。

今まで響子に集中していた冷たい視線が、一斉に君彦の方へと移つて行く。響子をかばつたことで響子一人に定まっていた敵意が君彦にも定められたと瞬時にわかる。君彦は関係ない、ましてや別の人間、巻き込むわけにはいかなかつた。

響子は自分を守ろうとしている君彦の腕を掴んでこちらへ無理矢理向かせる。

その時、響子は初めて見た気がした。

真剣に自分を守ろうとする逞しい君彦の真剣な面差しを。

しかしそんなことで心が揺れている場合ではなかつた。今はとにかくこの状況から君彦を追い出さなければならない。

「あんたもよ。

あたしのことは放つておいてちょうどだい。一人でも全然平氣なんだから！

大体あんたには関係ないことなんだし、いちいち首を突つ込んで来ないでよ。

前から言つてゐるでしょ、余計なことに自分から巻き込まれようとしているでつて！」

そう告げる響子に、君彦はいつものような能天気な笑みを浮かべることなく、どこか不機嫌を思わせるような厳しい表情で響子を見つめ返して來た。こんな風に君彦が笑みの無い顔を見せたことはない。怒つている風にさえ見えた。

君彦は自分の腕を掴んでいる響子の手を、逆に握り返す。ぎゅっと力強く握つて来る君彦の手に響子は心が折れそうになつた。

「放つておけるわけないじゃないか。それこそ今まで何度も言つてることだ。

友達が困つてゐるのに見て見ぬふりなんて出来ないよ。

それに志岐城さんが泣いてる姿なんて、オレはこれ以上見ていくないから」

そう言われて初めて氣付いた。

響子の頬に温かい涙が流れている。頬を濡らす涙に片手で触れ、それを目にしてようやく氣付いた。

周囲の人間に罵られ、罵倒され、敵意を向けられたことなんて今までに何度もあった。

その度に辛かつたけれど決して人前で涙など流さなかつた。

それが今こうして次々と涙が零れ落ちて、止めようと思つても止まらなくて、次第に視界が歪んでしまつ程に涙が溢れて行く。

意外そうに涙を拭い続ける響子に、君彦は胸が痛くなつた。

こんなになつてまで虚勢を張つて來た響子、強くあらうとした健気な響子を見て、今まで響子が「何か」と一人で戦つてきたことに今初めて氣付いた。

そういえば、初めて会つてからこれまで……響子が友達と一緒にいる所を見たことがあつただろうか？

一緒に弁当を食べることになった時、響子に躊躇いがなかつたことになぜ自分は疑問を抱かなかつたのだろうか？

クラスに友達がいたのなら、何かしらそういう素振りがあつたはずだ。

今日はクラスの友達と弁当を一緒に食べるから行けない、とか。一緒に食べる曜日を決めるとか。

そういうこともなく、自分が頼めば響子は何でも了解してくれるなど、どうしてそんな風に安直に思えたんだろう。

響子が抱えている問題は色情靈だつたはず。それがなぜこうやってクラスの殆ど全員から邪見にされなければならないのか、それを何とかしなければ響子が本当に心からの笑顔を見せてくれるはずがない。

そう察した君彦がクラスメイト全員に向かつて言葉を投げかけようとした時、先に行動したのは慶尚だった。

慶尚は勇んで言葉を投げかけようとした君彦の肩を掴んで止める
と、相変わらずの表情でねめつける。

彼もこの者達と同類なのかと一瞬考えてしまつたが、どうやら違つたようだ。

慶尚は君彦を片手で制したまま、響子のクラスメイト全員に向かつて低い声で脅しをかける。

「何がどうなつてるかよくわからないが、これ以上何かするような
らこの変人が黙つていなさいぞ。

こいつの影の噂を知つてゐる人間ならある程度わかつてゐるはずだからな。

妙なことになりたくないれば、もう志岐城にちよつかい出すのは
止める……いいな」

言葉の半分以上が脅迫であつたことは間違いない上に、でたらめな部分も含まれているのは承知出来ることであつたがクラスメイトの全員が慶尚の外見と口調ですっかり萎縮してしまい、反論する者は誰一人としていなかつた。

しん、と静まり返つた教室内であつたが黒依の黄色い声によつてよつやく時が動き出したよつて、全員の視線が黒依に集中した。

「とにかく、これまでのことは一旦全部なかつたことにして。早くお弁当食べに行こうよ。

嫌つてる人間に向かつていつまでも醜い言い争いをしたつて時間の無駄だし、それこそ馬鹿馬鹿しいものね。

相手にするだけ自分が愚かしいって思えばいいじゃない。

だから早く行こうよ、君彦くん、志岐城さん」

その言葉に同意するよつて慶尚は掴んでいた手を君彦の肩から放すと、無言のまま教室から出て行つた。まだ刺すよつてな視線がいくつかあるが、その視線から逃れるように教室を去るのはどこか釈然としないがこのままここに残つた所で自分に何が出来るのか、具体的なことがわからない以上、響子の状態を見て一旦この場から去つた方が得策かもしれないと思つた君彦は、響子の肩を片手で支えながら一緒に行こうと促す。

響子はまだ涙を抑えきれていなかつたが、黙つて君彦に従い、手には弁当の入つたきんちゃく袋を掴んだまま一緒に教室から出て行つた。昼休みが終われば響子は一人でこの教室に戻らなければいけない。それまでに何とか響子を宥め、対策を考えなければいけない。きっとこの昼休みはその話題ばかりになりそだと思いつながら、君彦達は教室の戸をぱたりと閉めた。

慶尚の問いかけ

険悪な雰囲気を残したまま教室を後にした君彦達は、いつも弁当を食べている屋上へとやって来た。

慶尚も黒依も、涙が止まらない響子を気遣っているのか。小さく嗚咽を漏らす響子の手を君彦は強く強く握り締める。とにかく落ち着く場所へ辿り着かない限り響子をゆっくり宥めることは出来ないと思ったのか、時折声をかける程度でそれ以上は君彦ですら慰めの言葉を持たなかつた。

しかしそんな微妙な接し方が逆に響子にとつては有り難かつたかもしれない。今まで決して人前で涙はあるか弱みを見せたことのなかつた響子が、今こうして三人もの人間に弱つた所を見せてしまつてゐる。これは響子にとって屈辱とも恥ずかしい行為とも言えた。

何より相性が悪いと響子が思つてゐる黒依や慶尚にまで、こんな情けない姿を見られてしまつてゐるのだ。今後どんな顔をして彼等と顔を合わせたらいいのだろう。涙が止まらない中、そんなことが頭の中を微かによぎるが、だからどうするのだといふ答えを考える余裕までは今の響子にはなかつた。

一度折れてしまつた心はそう簡単に修復してくれず、零れてしまつた涙を引っ込める術もない。ただ今は少しでも長く、それが例えとても格好悪いことだとしても、君彦に手を握り続けて欲しかつた。そうしてくれると涙を止められそうだと思えたからだ。折れた心の修復も早くなりそうだと思つたからだ。

屋上に着くまでの間、君彦達は殆ど無言で歩き続けていた。
ようやく到着するなり先頭切つて歩いていた猫又が声を上げる。

『あ～あ、割と一色即発だつたなあ！』

能天氣かつ無頓着な台詞を吐いた猫又に、カツとなつた君彦が空

いている方の手で一又の尾を引っ掴むと軽く力を込めた。

短く醜い悲鳴を上げた猫又は掴んだ手をぱっと放された瞬間に駆け足となり、屋上の真ん中辺りまで逃げていった。

すると先程の猫又の悲鳴を聞いた響子は泣きながらもくすりと軽く笑い、これまで胸につかえていたものが少し軽くなつたように気分でも随分とラクになつて、自分から繋いでいた手を放した。

それに気付いた君彦がすぐに響子の方へと振り向くと、そこにはいつものぎこちない笑みが現れていた。

「もう、平氣。本当にもう大丈夫だから……」

そう口にする響子のことがまだ心配だった君彦は、これもまた強がつて言つているだけなんじやないだろうかと思うようになつた。今まで響子が自分達に弱みを見せたことがない所から、今も君彦達に心配をかけまいと平氣なふりをしているだけなのかもしれない。しかしそんな風に勘織つた物言いをして彼女の気分を害してしまつとも限らないと思つた君彦は、何て言つたらいいのか言葉に詰まつてしまつっていた。

そんな時、またしても黒依が明るい声で弁当を食べながらでも話が出来るだらうと全員に告げる。その言葉には慶尚も賛成したようで、早速屋上の真ん中に陣取ると君彦から受け取つた弁当を広げて食事にありついた。

何事もなかつたように、先程の出来事などお構いなしのように見えたが、それは逆だと君彦はすぐに悟る。変に響子に対し気を使つて、腫れものを触るようにはねうとかえつて響子に気を使わせることになるんだろうと、黒依と慶尚が取つた行動はそうした配慮からであつたのだ。

今の君彦のよう、何かにつけて励まそつと宥めようと気遣つても、それは勝気な性格である響子にとっては逆の効果をもたらしてしまう。それならいつそ、これまでのことは一旦白紙に戻したよう

な態度を取つて、互いに氣を使うのはナシということにしておけば、きっと響子も普段の響子に戻つてくれるだろうと黒依は考へたのだ。少なくとも君彦はそうであると信じていた。

四人それぞれ弁当を開けると、互いのおかずを見つけて意見を言つたりして、少しずつではあるがわだかまりがなくなつていき、いつもの会話になりつつあつた。響子も彼等の配慮を察して、心のどこかで情けないと思いつつも有り難いと感謝して、とても素直に食事をしていた。今だけは苦手であつた黒依や慶尚相手でも、笑みをこぼすことが出来るような気がした。

そんな時ふと、重くのしかかつっていたものがなくなつてゐることに今頃気付く。

重だるい感じがする時は決まって響子の背後に色情靈がべつたりとまとわりついている時である。しかし今はまるで全身が羽のように軽くなつて空高く舞い上がりそな程に、体が楽になつていた。

険悪な雰囲氣だつた教室からこの屋上に来るまでの間、色情靈に取り憑かれていた感覚を気にする余裕が全くなかった響子は、いつどんなタイミングで自分から色情靈が離れたのか、それはわからな

い。

君彦の登場で色情靈が離れたのか、慶尚が一時的に祓つたのか、はたまた猫又が気まぐれに祓つたのか。

ともかくあの邪惡な色情靈の存在がないことに響子は心にずっと付けられていた重い枷が外されたように、氣分までが晴れやかさを取り戻しつつあつた。

弁当を食べている間は、響子に何があつたのか……その話題には誰も触れようとはしなかつた。

空氣を読もうとしない黒依や慶尚ならば何かしらそういう話題を口にするかと思いきや、今日の一人は随分と空氣を讀んでいるのか、場を壊すような真似はしない。そんな二人の様子が少しばかり気にかかるはいたが、たまにそんな日もあるんだろうと樂觀視する響子。何より食事時にだけは、響子の普段の生活について触れて

欲しくなかつたから有り難いことだと思つた。

ここまで一緒に行動するようになるのだから、いつかは話す時が……明かす時が来るかもしないという予測はしていた響子。それがいつなのか明確でなかつたが、君彦という存在のおかげでそんな日は思つていた以上に早く訪れるのである。最近になつてよく思つようになつていた。

今まで他人に対しても全く信用することの出来なかつた響子がそんな風に思うようになったのは、殆ど奇跡に近かつた。色情靈のせいで男性不信に陥り、男を誘惑しているんだと周囲から誤解され、同性から嫌悪されてきた響子にとって、伯父（伯母？）である蝶野蘭子（志岐城則雄）以外の他人は信用することが出来なかつたのが本音だ。

それが今、響子自ら彼等を受け入れようとしている。

響子もそれを自覚し、自ら彼等に歩み寄ろうと努力するようになつていたのだ。

ほんの少しだけでもいい。今だけは虚勢を張るのではなく、そのままの自分で接したかった。

まだ心からの笑顔を上手く作ることは出来なかつたが、懸命に微笑もうとする響子の気持ちを察したのか、君彦を始め黒依も慶尚もぎこちなく微笑む響子に対してからかうことなく、自然体のままの態度で接する。

ぱつりぱつりと何気ない会話をしながらも初めて自分の為に手作り弁当を作つてもらつた慶尚が、君彦に向かつてダメ出しをしては君彦は怒り狂つていた。そんな一人の漫才のような喧嘩を笑いながら眺める黒依と響子。いつの間にか響子から固い微笑みがなくなり、自然な笑顔がこぼれていた。君彦達がようやく弁当を食べ終える頃には先程までの張り詰めた空氣のようなものがなくなり、いつも通りの穏やかな雰囲気に戻つている。

随分とリラックス出来るようになったところで、猫又が綺麗なガラス玉の大きな瞳で響子を一瞥すると、今度は君彦へと目線を定め

て話しかけた。昼休みも長くはない。この場で和んでも意味はないのだ。昼休みが終われば響子は一人で自分の教室へ、響子のことを良く思っていない連中がいる巣窟へと戻らねばならなかつた。

『おい、君彦。飯が終わつたら話し合いつかするんじやなかつたのか？

だけど今回の件に関しては、オレ達の出る幕ナシだと思つけどな

それまで和やかな雰囲気になつていたが猫又のこの言葉によつて、再び響子の教室での出来事が蘇つた。しかし今はそれ程重苦しく感じることはなく、どこか仲間内で作戦を練る……といった雰囲氣で話題に入ることが出来ている。これも恐らく君彦のこれまでの努力と、それに応えるように響子が心を少しづつ開けようとした結果なのかもしけなかつた。

今回ばかりは黒依も余計な茶々を入れることなく大人しくしているが、慶尚は何とも表情の読めない仏頂面で何を考えているのかわからない様子である。

いつも適当でいい加減な態度ばかりの猫又がいつになく真剣に語った言葉に、君彦は首を傾げるような仕草をしながらオウム返しのように聞き返した。

「出る幕はないって……、それは一体どういうことだよ？
とりあえず志岐城さんがこれ以上不利な状況にならないよう、色情靈を何とかしないと駄目だつて話のことだろ。

ここにいる四人で何とか意見を出し合つてだなあ

』

「だから今回の問題は色情靈が全ての原因じゃないかも知れないとことだろうが

君彦が最後まで話をし終える前に慶尚が横から口出しをした。猫

又の言葉の意味をきちんと理解していなによつに感じられた慶尚が、少し苛立つたような口調で短く説明すると君彦はまたしても腑に落ちない表情で眉根を寄せている。

そんな君彦の鈍い反応に腹の奥が煮えたぎる思いがしたが、慶尚は心の内を表に出すことはなく、いつもの不機嫌そうな表情で君彦をねめつけた。普段から無愛想な顔でいた為に、今この瞬間慶尚が不快に感じていても誰もそうだと気付かない。それはまるで計算されたように、慶尚の本音を悟る者は誰一人として……慶尚の守り神である犬神以外に理解する者はいなかつた。

いつもと何も変わらないように見えた君彦はまたしても慶尚が自分のことを馬鹿にしていると思い、憤慨したように言い返す。

「だから……志岐城さんのクラスメイト達は色情靈の邪氣みたいなやつにあてられて、変な風になつたんだろ！？」

そうでなければ同じクラスの生徒に向かつてあんな酷いこと出来るわけないじやないか」

しかしその言葉はそのまま猫又によつて否定されてしまつた、実にあつさりと。

『君彦、あれが人間の本性つてやつなんだよ。

今回こいつに取り憑いてた色情靈は、教室の奴等全員を操つてたわけじゃねえ。恐らく色情女に殴り飛ばされた野郎だけだらうな。事の顛末を全て見てたわけじゃねえからオレ様には何とも言えないが……。

だが他の生徒達は別に色情靈の邪氣でああなつてたわけじやねえみたいだぜ。

世間一般で言つ所のいわゆるイジメつてやつだ。人間の中じやどこにでもある現象なんだろ、そういうの』

イジメといふ言葉に響子はびくっと反応する。自分がいじめられていたという事実を知られることは、とても惨めで居心地の悪いものであったからだ。いつでも強く在り続けようとしていた響子が、実はクラスメイトから苛められていたなんて恥ずかしくて顔を上げていられなかつた。自分自身がとても情けなくて、惨めで、恥ずかしい人間のように思えてくる。

しかしこの場の誰一人として響子のことを慘めないじめられっ子という田つきで見ようとも、扱おうともしなかつた。そんなことよりも他に解決しなければならない問題がある。何が最も重要であるかわかつてゐるような彼等の態度に、響子は安心半分不安半分でその場にいた。少なくとも黒依も慶尚も、響子のことを蔑む素振りを見せてはいられない。

むしろ猫又や慶尚と君彦の間にある状況分析の相違に注目してい るようであつた。

猫又の言葉に「そんなことはない」と言い返してやりたかつたが、その自信も今や君彦の中では揺らぎを見せ始めている。靈に関して特に詳しい知識を持つていいわけではないので、響子に取り憑いている色情靈にどこまでのことが出来るのか君彦は何も知らない。

ただ「色情靈」と聞けば一体何をする靈なのか大体の想像がつくものの、それが人間の惡意を増大させるようなことまでも可能かどうかと問われれば君彦はその答えを持たない。

自分は余りにも無知で、余りにも非力であった。

それが浮き彫りにされたことで猫又への反論が躊躇われたのである。

そんな時、慶尚がふと、言葉に詰まつてゐる状態の君彦に対して疑問を投げかけてきた。

「お前、本当は一体何がしたいんだ」

唐突な質問に君彦は怪訝な表情を浮かべ、またすぐに慶尚の質問

の意味がわからず、眉根を寄せて聞き返す。すると慶尚は無表情の中にも真剣さを帯びたような顔つきで再度繰り返した。

「お前は一体どうしたいんだって聞いてるんだよ。

志岐城に取り憑いてる色情靈を何とかしたいのか、それとも志岐城の回りの連中をどうにかしたいのか。

お前達とはそれ程長い付き合いをしているわけでもないし、どういったきさつがあるのかもオレにはわからない。だからオレが見た限りのことしか言えないがな。猫又　お前が一体何をしたいのかオレにはさっぱりわからないんだよ。最初はお前の立場を考慮して状況を窺つていたら、色情靈を祓うことを目的として志岐城のことを助けてやりたいのかと思つてた。だが黙つて様子を見ていればいる程わけがわからなくなつてくるんだよ。お前は仕切りにこう言つてはいるよな。

『志岐城の力になりたい』、『志岐城を守つてやりたい』って。だがそれはどういう意味で助けようとしているんだ？　そもそもお前には色情靈を祓う程の力がないとオレは思つてはいる。未だに祓いつれてないからきっとそんなんだろ。だが色情靈にまつわること以外にでもお前は首を突っ込んでは『何かしてやりたい』と躍起になる。そんなお前の行動を見ていたら苛立つてしまふがいいんだよ。色情靈を祓うだけの力があるってんならオレは別に何も言わないし、余計な手出しをしたりもしない。好きにしたらいい。だがそんな力もいくせにお前は綺麗事ばかりを並べ立て、実現出来ないくせに妙に前向きで楽観的に振る舞う。

そういうのを見ていたら腹立たしくてムカつくんだよ。結局何がしたいのか具体的なことは何も示さないし、悪靈を祓う力を身につける為の努力もしない。知識を深めようとしている様子もない。

だったらお前は何から志岐城を守るつもりで、何を頑張っているつもりなんだ

今まで慶尚が腹の中で抱えていた疑問や疑念、君彦にずっと抱いていた不快な感情や思い。それら全てを吐き出した慶尚はほんの少しだけ胸のつかえがとれたような気分になった。しかしそれは慶尚がずっと密かに思っていた言葉を口にしただけで、君彦からその答えを得たわけではない。しかしようやく伝えることが出来たという開放感はとても大きかった。

今この状況であえて口にしたのは、これらをはつきりさせることも現状の解決への糸口に繋がるかもしないと直感的に感じたからである。勿論その確証はどこにもない。もしかしたら話がただ脱線しただけで、現状打破にまでは至らないかも知れなかつた。

それでも慶尚はこれらの一連の問いかけをすることで、君彦に何らかの答えを求めることが出来るかもしないと思い、こうして疑問を投げかけたのである。それらの疑問に君彦がどう答えるのか。それによつてはまた新たな道しるべが慶尚の前に現れるかもしれない。

何から響子を守るつもりなのか。
どうやって救うつもりなのか。

きつかけは何の関連性もないかもしれないが、これを機に君彦の中で何かが変わると　慶尚はそう信じたかつた。

今はまだ見つからない答え

慶尚からの思いがけない質問に君彦は戸惑い躊躇つた。

なぜ今この話なんだろう、というのが質問に対する最初の印象である。今は響子に起こった状況を何とかしなければならない時のはずだ。なのになぜ今この時に自分が「何から響子を救うつもりなのか」と問われなければならないのだろう。

どう答えたらいいかわらない君彦が考えあぐねていると、君彦と同じように戸惑つた響子が口を挟んでかばおうとした。

「ちょっとあんた、今はそんなこと聞いてる場合じゃないでしょ！？ そりやそんなことあたしが言えたことじやないかも知れないけど、とにかくその質問は今の状況から見て論点がズレてるんじゃないからいらー！」

響子の言葉に対してもう隣から聞こえるか聞こえないかという程度の小さな声で「確かに言えた義理じやないわね」と黒依が呟いたのが微かに耳に届いた気がしたが、とりえず今は黒依の言葉に対して突っ込みを入れている場合ではないと判断したので響子は無視して慶尚だけを睨み続けていた。横から割つて入るように響子が絡んで來たので多少鬱陶しそうな態度をあからさまに出した状態で大きく溜め息をつくと、慶尚は両腕を組みながら君彦や響子にもわりやすく伝える努力をしてみた。

「関係大アリだ。仮にさつきの状態が全て色情靈の仕業だとしたら、犬神なり猫又なりをお前の側につけて一時的にでも色情靈を排除しさえすれば今後何も問題ないだろう。だが今回の出来事は色情靈が強く関係しているようには思えなかつた。少なくともオレの目にはそう映つたってだけだがな。悪霊関連とは全く関係のない問題

だとしたら、オレ達みたいな靈能者に何が出来ると思つ?

オレも犬神達も悪霊や物の怪を淨靈、あるいは除霊することが専門分野だ。

生身の人間同士の「ざ」なんて全くの専門外になるんだよ。それなら解決方法が全く異なるのは分かりきつてことだらうが。だからオレはこいつに聞いたんだ。どういう形で志岐城のことを助けるつもりなんだとな。

色情靈を何とかしたいのか、それとも志岐城の人間関係を何とかしたいのか。話し合うべき論点はそこだらう。

だがこいつの言つことは要領を得ない。だから話し合つ内容を簡潔にさせる為に、今この質問をぶつけたんだ

あつぱりと言ひ放つ慶尚に響子は言葉を失つた。これ以上反論のしようもなかつたのだ。確かに慶尚の言つことは的を射ている。間違つてゐるとは思えない。何よりその問題の中心人物である響子自身がこれ以上何かを口出しすること自体、どこか躊躇わるものがあつたのでそのまま身を引くしか他に方法はなかつた。

響子が引っ込んだことにより話は再び君彦の方へと自然に戻る。慶尚の視線が君彦を捉えた。君彦は今言われた言葉を思い返すように何度も頭の中で反芻させ、誰もが納得いくような理由を探した。感覚だけで答えるものじゃない。今まで感覚で言つてた部分が少なからずあつたのもしれないという思いがあつたからだ。曲がつたことは許せない。困っている人がいたら助けてあげたい。みんなを笑顔にしたい。そんな思いが強いくせに、具体的に何をどうする今までの答えは用意していなかつた。いつもその場しのぎで解決させていた部分が大きかつた。その時その時の判断でうまくいつていたに過ぎない。だからそれはあくまで「感覚」という形で行動していたに過ぎないと、君彦は判断していた。

しかし今回ばかりは事が大きいだけに感覚だけで答えを出すわけにはいかなかつたことも自覺している。いや、慶尚の言葉によつて

自覚させられたのかもしれない。これまで自分がしてきたことはとにかく答えがはつきりしていた。単純明快だった。

ほんの少し手を貸すだけで解決出来るような問題ばかりだったので、これからもそれでいけば自分が何も困るようなことはないと間違った判断を下していたのだ。

しかし慶尚の言葉で君彦は目が醒めた気がした。自分がどれだけ甘かったか。深く物事を捉えていなかつたか。そして悪霊関係に関して、自分にさほど力があるような人間ではなくただ幽霊が見えるだけの存在でしかなかつたことに、今更ながら痛感した。

自分は祖父とは違う。明らかに違う過ぎる。祖父である征四郎はとても偉大で聰明で、頼りになる男だった。しかし自分はどうだろう。悪霊を祓う力がなければ知識も何もない。慶尚の言う通り自らそういう知識を得る努力をすることも、力を身につけることもしなかつた自分が、悪霊関連で困っている人間を救おうなんて無謀過ぎたのではないだろうか。

自分は祖父とは決定的に違う、全く異なる人間なのだ。祖父のようにはなれない。少なくとも今のままの自分では。

だが君彦は思う。今こうして自覚した所で一体何になるんだろう。響子は今この瞬間困っているのだ。助けてやりたい。しかし今回の問題は色情靈という悪霊が全般的に悪いせいではない。むしろ生身の人間同士の対立なのだ。幽霊が見えようと、知識を得ようと、力を身につけようと、それらは今抱えているこの問題に対して何の役にも立たないではないか。

今更ながらあまりにも的確過ぎる問題を指摘され、君彦は完全に返す言葉を失つていた。

どうすればいいのか、君彦自身わからなくなってしまった。これが仮に悪霊関係が全ての原因だったとしたらそれなりにいくつか解決策が思いつく。

君彦自ら悪靈に対して言葉をかけ、説得し、改心させるよう試みるか。それが不可能であれば少々強引ではあるが猫又の力を借りて、力づくで悪事を食い止めるか。後者に限っては明らかに他の者の力を借りているが、悪靈を力づくでどうにか出来ない無力な君彦には猫又の力を借りること以外に思いつかない。悔しいがそれだけはどうにもならないと半ば諦めている節もあった。

しかし今回は猫又の力を借りた所でどうにもならない。相手は生きた人間なのだ。生きた人間に对することが出来るのは同じように生きた人間である君彦が何とかするしかない。しかし一人一人相手ならまだしも、見た限りクラスメイトのほぼ全員に对して働きかけなくてはいけないと把握した時点で、そんな多人数相手に自分一人の言葉が届くんだろうかという疑問がどうしても拭えない。

友達である響子を救いたいと思つていて君彦が弱気になっていた。自分は決して凄い人間ではない。超人でもなければ饒舌な人間といつわけでもない。どこにでもいる普通の、ただの高校生だ。あれ程たくさんの悪意ある視線に晒されて、臆さない人間などいるだろうか。

どうにか自分を奮い立たせようとする。守ると口にした人間の心が真っ先に折れてどうするのだ。慶尚に指摘され目が覚めてから、君彦は今までに感じたことのない焦燥感に襲われ、そしてそれを懸命に払拭させようとしていた。ここにいる者達に自分が臆病で情けない男だと思われたくなかつたから。何があつたとしても、自分はいつでも明るく元氣で前向きな男なんだとそう思われたかった。

頼り甲斐のある男だと、そう捉えて欲しかつた。だからこそ今こうして何の策もないのに必死になつて響子を救う手立てを見つけよう、どうしても気持ちが焦つてしまつてゐるのだ。

慶尚の指摘により黙り込んでしまつた君彦のことを、黒依も響子も心配していた。問題の中心である響子は先程と同様に何も言うこ

とが出来ず、手をこまねいて見てはいるしかなかつた。いつもならここで虚勢を張つて自分一人で何とか出来ると口から出まかせを言って、その場を乗り切つていったところであつたが、響子が置かれている状況や立場を一番見られたくない人物に見られたことによつて、気持ちが急激に萎んでしまつていたのだ。気の利いたことが言えないと。言える立場じゃないかもしない。そんな思いがある為に、無理してでも君彦をかばおうとする言葉が出て来なかつたのだ。

黒依に関しては状況を見守つているという感じであつた。心配そうに君彦と慶尚を交互に見つめているが、そこで響子のように割つて入るような真似はせず、静かに事の顛末を窺つてゐる様子だ。しかしその瞳の奥ではここぞという展開になつた時、容赦なく君彦の応援に入ろうとする意思が込められていた。例え慶尚が全てにおいて正しい言葉を述べていたとしても、黒依は君彦側に付く氣でいる。そして自分はその手助けをしようとしている。

黒依の心は最初から既に決まつてゐるものなので、どのような展開に陥るうとも慌てることなくただ黙つて静かに見守ることを貫いているのだ。

『別にそんなもん放つときやいいじゃねえか』

沈黙の中、猫又がどうでもいいというような口調で言い放つた。その一言に全員の緊張の糸が切れたのか、君彦に至つては真剣に思ひ悩んでいたこともあってその衝撃は他の者ではない。必死になつて答えを探している自分のことを馬鹿にされたような気持ちになつて、今にも猫又に向かつて怒声を上げそうになつた。

しかし君彦が一人で勝手に怒り狂う姿を見慣れている猫又はそんなこと露知らずといった風に無視すると、全員を見据えながら更に言葉を重ねて行く。

『こいつが浅はかなのは今に始まつたことじゃねえし、それ位わか

つてこつちは放置してんだ。今更どういつ話つて足搔くよつなネタでもないだろうが。もし君彦にそんな思慮深さがあつたんならこちとら最初から苦労はしてねえんだよ。それにいじめやらなんやらつてこつ問題に關してはテレビでもよくやつてる内容だろ？外部の人間が何か訴えかけたつて、いじめてる側に届くとは限らねえ。むしろ届かないまま、表面的には和解したつもりでも、腹ん中ではこつちのことを馬鹿にしてるつてのがオチだ。今この場でソッコー解決出来るような問題じやねえんじやねえかつてことなんだよ、こついつのはな』

「でもそれじやこれから先、志岐城さんはどうしたらいいって言うんだよ！？ 今何とかしないとこれからまたお昼休みが終わつたら教室に戻らないといけないんだ。あんな険惡な場所に一人で戻らなくちゃいけないんだ！ その辛さ、お前にわかるのかよ！？」

『お前だつて全部わかつてゐわけじやねえだろつが』

「 うう」

すかさず返され、怯む君彦。猫又は構わずに続けた。

『何でもかんでも今すぐ解決しようと思つなつて言つてんだよ。どうせお前の力なんてたかが知れてんだ、犬塚の言葉でそれはもうわかつたことだろうが。だつたら今は我慢するつきやねえだろ』

完全に言い負かされている君彦であつたがどうにも猫又の言葉の全てに納得がいかないのか、悔しそうに唇を噛みながらどうにか解決策が思い付かないか躍起になつていると、溜まりかねた響子が声を上げた。

その聲音はどこか無理にでも明るく振る舞おつとしているよう

も聞こえる。

「もういいわよ猫又……、もういいってば。考えてみればこいつの言つ通りよ、あたしが我慢すればいいだけの話。でもこれはあんた達のことを信用してないから一人で耐えるつて意味じやないから勘違いしないでよね？ 色情靈以前の問題だとしたら、この件はあたしに原因があるつてことにもなるんだし。だからどうしたらいいのか、あたし一人で悩むんじゃなくて猫又……。あんたにもこれから一緒に考えてもらうことにするから、だから今はそんな風にあたしのことで思い詰めたりしないでよ。何だかあたしが悪いみたいじゃない！ わかつた？ とりあえずはこのまま我慢してやるつて言ってんの！ だからあんたもそんな顔してないで、何かいい案思いつきなさいよね！」

力強く人差し指を君彦に突き付け、宣言する。口では強がつているものの、その言葉の意味は君彦に向かつて助けを、救いを求めていた。もう一人で戦つたりしないと、響子はそう言つていた。

その言葉に君彦の方が救われた気がした。勿論響子が一人で我慢するということに対して納得したわけじやないが、響子の口から自分を頼つていてるという言葉を聞けたことに、君彦は喜びを感じずにはいられなかつたのだ。

まるで喝を入れられたかのように君彦の顔に少しだけ笑顔が戻ろうとした時。

「さつすが～、それでこそ志岐城さんだね！ ほら、志岐城さんもこつ言つてるんだからあんまり君彦くんが深く考え込む必要なんていよ、なるようにしかならないんだから元気出して行こう？ 犬塚クンの言葉もこれからゆつくり考えていけばいいと思うし」

「ま、別にこいつがどんな答えを出せうがオレはどいつもいいんだ

けどな。ただあまり矛盾したことを軽いノリで言わないで欲しいだけだ。オレがイラつくから

「結局はそつちが本音つてわけね、あなたの場合……」

慶尚もまた答えを保留することにひとまず合意したのか、軽口を叩くことでその意を表した。響子がすかさずその言葉に突っ込みを入れたのは、すつきりした所を君彦に見せる為だ。

半ば強引にも見て取れたが普段の風景に戻りつつある三人のやり取りを見ながら、君彦は改めて自分に大きな課題が与えられたことを実感する。

慶尚が言ったことは、悔しいけれど正しい。

いざなはそれと正面から向き合い、自分に何が出来るのか、何をすべきなのか、その答えを見出さなくてはならない日がきっと来るだろう。それまでは彼等と共に、いつもの日常を送りながら見つけて行こうと思う。

確かに答えが出たわけではなかつたが、君彦は口元を緩め、静かに微笑んだ。

その笑顔を見た猫又もまた、手のかかる子供をあやすような様子で誰にも悟られないことなく柔らかい笑みを浮かべた。

未解決

昼休みが終わってしまった。結局話しかけは慶尚による詰問で時間を取り、この後響子が教室に戻った後どうするべきかの問題解決にまでは至らなかつた。君彦にとって今後の身の振り方を改める重要な問題だつただけに、時間を割く原因となつた慶尚に対して文句を言つことはなかつた様子だ。

それは問題となつた君彦自身が一番わかつてゐるからなのか、いつもならば慶尚に向かつて文句のひとつも言つてゐるはずであつたが、さすがにそれを口にすることはなかつた。しかしかつていながらも視線だけは慶尚のことを恨めしそうに見つめる君彦。

ひとまず広げてあつた弁当などを全て片付け、始業ベルが鳴る前に教室へ戻る一行。この後どうしたらいいのか何ひとつとしてアドバイスすることが出来なかつた君彦は、響子のことが心配で仕方ない様子で申し訳なさそうに平謝りする。

「ごめんね志岐城さん。結局志岐城さん一人に我慢させることになつちゃつて……。オレにもつと何か出来ることがあれば何でもしてあげられたんだけど、こんなに自分が無力だつて思い知らされたことはなかつたよ、本当に甘かつた。これじゃ犬塚の奴に言い返す言葉もない。クラスも別だし、志岐城さんを常にかばうことが出来なくて、本当にごめん」

そうやつてまるで自分のせいだと言わんばかりの態度に響子の胸の方が痛み出す。こんな風に謝られても嬉しくない。むしろ彼には自分を支える意味も含めて、笑顔で背中を押してもらいたかつた。響子はそんな思いをうまく言葉にすることが出来ず、いつもの憎まれ口で君彦を励ます」としか出来ない自分をもじかしく思つ。

「「「、「めん」「めんうつさいのよ！ そんな風に謝られたらまるであたしが悪いみたいじゃない！ あたしは今までと何も変わりなく我慢すりやいいだけなんだからあんたが気に病むようなことじやないわよ。だから……そうやって自分のせいにばかりしないでよね。これからどうしたらいいか一緒に考えてつてくれるんでしょ？ だったらそれでいいじやない。あたしはそれで何も文句はないわよ」

顔を真っ赤にさせながら、君彦のことを真っ直ぐに見つめることができずそっぽを向いたまま言い放つ。不器用な中に素直な一面を見せている響子の優しい言葉と心がちゃんと君彦にも伝わったのか、君彦は安心したように柔らかく微笑むと響子の言葉に頷いた。

確かに響子の周囲に対する何が変化したわけではない。好転したわけでも改善されたわけでもない。それでも確かに響子の心に変化が見られた。響子に対して関わろうと近付き、親切にしようと人間に対して一方的に拒絶することがなくなつた。それだけでも確かな進歩に変わりない。口では相変わらず憎まれ口に近い言葉を発しているが、その中に優しさを見つけることが出来るようになつた君彦自身にも進歩が見られている。そんな風に感じることが出来て、君彦は心から嬉しくて堪らないのだ。

「まるで」ではなく、本当の友達となれたことを喜ばずにはいられなかつた。

気持ちとは裏腹な言葉を口に出していたとしても、気持ちはずか通じ合っているような気がする。君彦と響子はそんな不思議な感覚に、少しだけ胸が熱くなるような、むずむずするような、そんなくすぐつたい感じを喜んでいるかのよつだつた。

そんな中、一人の距離が目に見えて近く感じられる様子をずっと隣で見ていた黒依からは、時折作り物の笑顔が消失していた。口角を上げて笑みを作つてはいるものの、心から微笑むことが出来ず、複雑な気持ちで一人を見つめる黒依。

胸の奥はもやもやとし、君彦へ向ける響子の笑みを目にするとお

腹の辺りが高熱を持ったように熱くなつて来る。しかしそんな不快な感情を表に出すまいと黒依は懸命に笑みを作り続けた。

響子のことが心配で、響子のことで頭の中が一杯になっている君彦が、黒依の変化に気付くことはない。

ただ一人、不機嫌そうな黒依の態度に気付いていたのはこの場では慶尚一人だけであった。

君彦達が屋上から校舎内の廊下へと出て来た時、すでに殆どの生徒は教室へと戻つており廊下にはほんの数人の生徒しか残つていなかつた。そろそろ始業ベルが鳴つて昼休みが終わつてしまつといふこともあり、廊下で喋つている生徒はいつでも自分の教室にすぐさま戻れる準備だけは出来ている様子だ。

君彦達の足取りは決して軽くはなかつたが、だからといって教室に戻らないわけにもいかない。君彦達にこれ以上心配かけまいと務めて普段通りに振る舞おうとする響子の態度がより一層君彦を不安にさせた。何も思いつかないまま遂に教室の前に辿り着くと、響子は君彦達の方へと向き直つて礼をした。

「今日は……その、色々ありがと。なんだかんだ言つてさ、結局毎日のように一緒に屋上で弁当を食べてるから今更つて感じがするけど……一応ちゃんと言つとくね。あんた達と一緒に弁当食べるの、悪くないわよ。結構楽しい。だからさ、明日も明後日もこれから先も……一緒に弁当を食べても、いいかな?」

「当たり前だよ! 明日もけやんと誘つからね、志岐城さん!」

「うん、全然OKだよ!」「確かに今更だな」

遠慮氣味に、恥ずかしげに問つ響子に対しその場の誰もが拒絶しなかつた。むしろ当然だと語つよう全員が声を揃えて受け入れる。

響子にとつてそれは何より心強い言葉だった。

君彦達は教室のドアの前で一旦足を止めて、響子の背中を見送る
ように見つめ続けていた。その視線に気付いた響子が振り向き、片
手を振つて大丈夫だと合図する。満面の笑みとまではいかなかつた
が、気丈に振る舞う響子の姿に君彦は足元にいる猫又に頼み事をし
ようと思つた。猫又の姿は靈感の強い者にしか見えない。猫又が響
子を守ろうとするかどうか自信はなかつたが、少なくとも響子の様
子を見守る程度の情はこの猫にもあるはずだ。助けるに至らなけれ
ば隣の教室に居る自分に伝達するといつ役割をさせる事も可能だ
と思つたが、やはり猫又に頼むにはあまりにも心許ない。

氣乗りしないことには一切関わらうとしない猫又が、響子の身を
案じて行動してくれるはずがない。少なくとも君彦はそんな風に猫
又の気性を認識していた。せめて犬塚が従えている犬神と同じ位、
生真面目で忠実であれば任せることも出来たはずだが。自由気まま
をモットーにしている猫又にそんなものは望めない。

むしろ君彦自身が響子を守る為に教室までついて行きたいと思つ
ていた位なのだから、君彦の過保護ぶりも相当なものである。それ
を把握して響子は君彦に対して気丈に振る舞つて見せていたのかも
しれない。そう考えると響子より自分がよっぽど回りに心配を
かけているようで、情けない気持ちになつて来た。

とにかく事情がどうであれ全く異なる教室の生徒が、響子の教室
までついて行けるはずがない。ここは涙を飲んで堪えるしか道はな
かつた。君彦の心の葛藤に気付いていたのか、それとも単に後がつ
かえていたからなのか。

ドアの前で立ち止まつている君彦の背中をぐいぐいと慶尚が押し
て、まだ開いてもいない教室のドアに君彦を押し付けてきた。

「うぐっ！ この……っ、痛いだろうが犬塚っ！」
「さつさと入れ。もうベルが鳴つてるだろ」

慶尚にそう諭され意識を響子から外して周囲へと向けると、確かに始業ベルが鳴っていたので君彦は最後に響子の姿を見るにともなく急いで自分の教室へと入つて行つた。

始業ベルを聞いていたのは響子も同じで、君彦達が教室に入つて姿が見えなくなると深く深く、深呼吸をする。昼休み直後の光景が思い出される。教室中から注がれる悪意ある視線、侮蔑の眼差し、明らかな敵意。今までずっと友人を作ることが出来ず、一人でいることが多かつた響子であったが、あれ程の敵意を向けられたことは今までに一度としてなかつたのかもしれない。

一時的に仲間外れにされたことはあっても、ここまでクラス全員から徹底的に排除されそうになつたのは初めてである。そのまま教室に入つて本当に大丈夫だろうか？

もう君彦はいない。猫又も犬塚もいながら色情靈が戻つて来ても、祓うことが出来なくてまた先程と同じように誰かを操つて響子を襲わせるかもしれない。そう考えると怖くて仕方がなかつた。今度同じようなことが起こればもう一度とこの教室に戻ることは出来なくなつてしまつだらう。ここで問題を起こしてしまつたら唯一の身内である蝶野蘭子（志岐城則雄）に心配を、迷惑をかけてしまう。何より自分が学校で仲間外れにされていることが知られてしまう。弱い自分は見せたくないなかつた。そんな情けない人間だと思われくなつた。そんな思いが強いからこそ、今まで強気に振る舞つて来た心がいともあつさりと折れてしまい、教室のドアを前にしただけで恐怖で足が竦んでしまつてゐる。

本当ならこのまま逃げ出してしまいたい。そうすればこんな怖い思いをしなくて済むではないか。しかしそんなことをして一体何になると呟うんだろう？

逃げ出した後にどうなつてしまつのか、容易に想像出来る。午後の授業が始まつても教室に戻つてこない響子に対し、訝しんだ教師はそのまま家族に連絡をしてしまうだらう。そうしたら何があつた

のか、教師はともかく伯母（伯父？）は黙つていはないだろう。

事情説明を求められ、遅かれ早かれ事態を知られてしまつ。それは最も避けたいパターンだ。だからこそ響子は逃げる選択肢すら選ぶことが出来ない。最悪の事態を考えれば、このまま険惡な雰囲気を残したままかもしれない教室に戻つて、周囲の視線に晒され耐える方が万倍もマシに決まつているではないか。

そう結論付けた響子は思い切り吸つた空氣を口からゅっくり吐き出して、それから口元を一文字に引き締めた。

完全に恐怖心を払拭出来たわけではないが、このままここで立ち竦んでるわけにもいかない。最悪のパターンを頭の中で何度も反芻させることで、自分の背中を無理矢理押したのだ。教室のドアを横にスライドさせ、響子が教室内を見渡したと同時にそれまで雑談していた声が一斉に静まり返り、沈黙が訪れる。その沈黙がやけに響子の心臓の音を大きくさせたような気がした。怖くて心臓の音がどんどん大きく高鳴つて行き、まるでこの沈黙の中にいるクラスメイト全員に聞こえてしまうのではないだろうかという程、響子の心臓は早鐘を打つていた。じわりと嫌な汗が背中を伝うような感じがする。

ドアを開けたほんの一瞬、それぞれのグループ内で楽しそうな笑顔で喋つていた女子や男子がこちらを見た途端に、まるで異物が出現したような顔つきへと早変わりした。一瞬にして笑顔がなくなり、会話も途絶え、冷やかな態度だけが残る。

それでも響子はまだマシな方だと思った。このまま酷い暴言を叩きつけられるよりよっぽどマシだと考えるようになつた。てっきりそうなると思っていたのだ。しかし響子の予想とは裏腹にクラスメイト達は冷ややかな態度のまま、悪口雜言を浴びせることも乱暴な扱いをすることもなく、ただ黙つて響子を見つめているだけである。

それを救いだと思うようにして、響子は自分の席へと移動した。もうひとつ想定していたことがある。響子が昼休みに屋上で弁当を食べている間、もしかしたら自分の机や荷物がクラスメイト達にどう

うにかされていかないかどうかひやひやしていた。

響子の机がそのまま教室の端か、はたまた教室から出された状態にされていないだろうか。机の上に暴言が書かれていないだろうか。はたまた教室に置いて来た私物が壊されたりなくなったりしていな

いだろうか。

しかしそれはただの杞憂で終わって響子はほっとした。自分の席に着いて次の授業に必要な教科書やノートを机の中から取り出すフリをして、他の教材や私物が無事かどうかこつそり確認してみる。するとペンケースも教材もカバンも無事で、どこか変わった様子もない。何もされてはいなかつた。響子は安心したせいで小さく安堵の溜め息を吐く。

午前中、そして昼休みに入つた直後にあれ程響子一人に対しても悪口雑言を浴びせて来たクラスメイトであつたが、いじめの定番とも言える行動を起こすまでには至らない様子だったので、これならまだなんとかやつていけると響子は思えた。陰口など以外で私物に手を出したりあからさまで陰湿な行動を起こされたら、さすがに響子も我慢出来る自身がなかつたのだ。

だがそれがない以上、ただの悪口を叩かれる程度のことならばすっかり慣れてしまつている響子、一人の寂しさにすっかり慣れてしまつている響子にとって、このレベルで済んだのは不幸中の幸いであつた。

色情靈が関わつていようと、この問題は響子の問題。

クラスメイトと打ち解け合う必要はないとしても、学校生活を普通に過ごすにあたつて今の状態では少し窮屈なのは確かである。何より今後何度も聞かれることがある。本人に悪気はなかつたとしても、これからクラスメイトとの雰囲気や関係はどうなつたか、響子は丈夫なのかと色々心配してくる君彦がいる限り、このまま完全な孤独であり続けるには限界があつた。

一年生に進級する際にクラス替えがある。それまで平穀無事に過ごせいなれば。ほんの少しでいいからもう一度とあのような険

悪な雰囲気陷入しないように、響子はどうにかしてクラスメイトとの距離を縮める必要があった。

せめて、窮屈に感じない程度に。君彦に色々と心配をかけない程度に、学校生活を送る必要が響子に課せられた。

桜の皿の記憶（一）～サブタイズ訪問～（前書き）

ちょっと表現が違つかもしれませんが、新章突入です
今までのサブタイと少し趣向を変えてみました。

このサブタイを見ただけで誰がメインの話になるのかすぐにわかつた方、しっかり読んでくださいあります（）、
＊）

雨。

季節は梅雨の時期を迎え、じめじめと肌にまとわりつくような湿気が毎日のように降りしきる雨と共に憂鬱な気分にさせる。空はこの数日ずっと曇天であり、分厚い雨雲で覆われたせいで降り注ぐ日の光も久しく浴びていない。朝から晩までだらだらと降り続ける雨の中、遠くから蛙の鳴き声が合唱のように聞こえて来て、より一層雨が止む日は遠いのだと思い知らされるような気持ちになった。

湿気のせいで全身がぴったりと何かが張り付くような感覚を鬱陶しく思いながら、それでもガラス窓の向こうに見える中庭の紫陽花に雨水がかかって水滴を零す光景は、どこか涼しげで鬱陶しい気持ちがほんのわずかに和らぐのを君彦は感じていた。

今は猫又がガラス窓の側で丸くなつて寝ている為、テレビの音が邪魔にならないように朝からずっと消したままにしてある。何よりせつかく猫又が大人しく寝ているのだ。テレビの音で起こしてしまい、メシを作れだの、遊び相手になれだと五月蠅く言われる位なら、外から聞こえる雨音を聞きながら静かに宿題をしている方がずっと良いと君彦は思つた。

雨が降っているからといって、猫又が家中でただ大人しくしているというわけでもない。猫は水に濡れることを嫌う。現に猫又も少し獣臭くなつたら君彦がお風呂へ入れようとするのだが、まるで猛獸の檻の中にでも押し込まれそうになつてると言わんばかりに猫又は力の限り暴れ回る。奇声を上げ、無遠慮に爪を立てて抱き抱える君彦の腕に思い切り鉤爪を食い込ませ抵抗しようとする。

それ位水に濡れることを極端に嫌がる癖に、なぜか雨だけは違つていた。同じ「水」なのに雨が降る日は妙に大人しく、好んで外出しようとするのを君彦が止めた。水に濡れるのが嫌な癖に、雨の場

合は態度を一変させる。猫又は雨に濡れることだけはあまり気にしないようで、それを知らなかつた頃の君彦は知らぬ間に猫又が雨の中の散歩から帰つて来た時には悲鳴を上げたものだ。

全身ずぶ濡れの泥だらけ。ぼたぼたと水滴を畳の上に落としながら意気揚々と部屋に戻つて来た時、もつ絶対雨の日に外出なんてさせまいと誓つたものである。

そして今は運よくぐっすり眠つている様子だ。これなら物音を立てて起こしさえしなければ平穀無事に一日をやり過ごすことが出来る。そう捉えた君彦は丸くなつて眠つている猫又の大きな背中に時折視線を向けながら、静かに微笑んだ。今日はバイトも休みで、一日中好きに過ごせる。起こしさえしなければ猫又の邪魔は入らないから、宿題が終わつたら次は何をしようか。掃除は大きな物音を立てる恐れがあるから今日は止めておこう。そんな風に穏やかな一日を過ごしそうと思っていた矢先、君彦の部屋のインターホンが鳴つた。その音で猫又が目覚めるのかと少しひやりとしたが、猫又は背中をわずかにぴくぴくとさせただけで、特に起きる気配はない。ほとと一息ついた君彦は音を立てないようにゆっくり立つと、忍び足で玄関へ向かう。

「はーい、どちら様ですか？」

微妙な声の加減。後方に居る猫又を起こさない程度の、ただし玄関のドア一枚向こう側に居る人物に聞こえる程度の声のボリュームで君彦は訪問者へ声をかけた。君彦の部屋のインターホンは玄関の外側に取り付けてあるボタンを押すだけで、音声を伝える機能は備わつていなかつた。よつて訪問者がインター ホンを鳴らした時には、わざわざ玄関の前まで行つてドア越しに声をかけるか、鍵を開けてドアを開けるかしなければいけない。

玄関のドアには大体覗き穴が付いているものだ。魚眼レンズのような覗き穴から外を窺うことが出来、大抵はそこから外の様子を窺

つて訪問者の姿を確認するようになつてゐる。しかし君彦はドアにある覗き穴を故意に使わないようにしていた。

以前は誰か来た時そこから誰が来たのか覗いたものだが、そんな時は決まって君彦が見たくないもの 頭から水をかぶったようすぶ濡れになつた黒く長い髪はまるでわざと隠すように顔を覆つており、その髪の隙間からは充血した瞳を大きく見開き、覗き穴から君彦が覗くことがわかつてゐるようにじつとこちらを睨みつけて来る女の靈。または全身火傷で肌が爛れ、歯ぐきも目も剥き出しになつて、がちゃがちゃと君彦のドアを無理矢理にでもこじ開けようと、始終ドアノブを回し続ける男の靈。

そんな訪問者を覗き穴で確認したくなかった君彦は、それ以来覗き穴を使うことはやめてしまつたのだ。ではどうやって生きた人間と幽靈を分別するのか？ ドア越しに声をかけた所で、それが生きてる人間とは限らない。

君彦は覗き穴を使わない代わりに、誰が来たのか声をかけるようにした。生きた人間の場合、すぐさま自分がどこの誰で、何者で、どんな用事で来たのか答えてくれる。勿論答えない人間もいるが、そんな時は生きた人間であると幽靈であると、ドアは開けない。ひとまずそこで自分が知つてゐる者であつた場合、用件によつて君彦は生きた人間、知り合いでと判断しドアを開ける。

姑息な靈の中には知り合いのフリをして声真似してくる輩がたまにいた。そしてそんな輩と、質問に答えない者は共通点が必ずあつた。それは君彦だからこそわかるものである。悪意ある靈ならば、必ず君彦は「察知」出来るのだ。

悪意ある靈には悪寒を感じる。仮にその靈が君彦の知り合いのフリをして訪問してきた場合、君彦が誤つてドアを開けようとする瞬間には、決まって必ず悪寒が走るのだ。射竦むような感覚、殺氣、嫌な予感、尋常じゃない気配。それは鋭い者なら靈感のない人間でも本能的に備わっているものである。

そんな状態に陥つた時、意を決して 心の準備をしてから覗き

穴を使用するのだ。前もって気を取り直しておけば、覗き穴の向こうにどんな姿の者が映し出されようとも恐ろしさは半減される。それでも恐怖は感じるが……。君彦の場合はそつやつて訪問者を分別しなければならない面倒な部分があった。

君彦が声をかけた時、ドアの向こうでは何人かの声が聞こえてくる。それは聞き覚えのある声ばかりで、君彦は傍と止まつた。

今日は何か会う約束とかしてたつけ？

そう思いながら君彦は躊躇なくドアノブに手をかけ、ゆっくりとドアを開けた。その瞬間に君彦は覚悟した。静かで穏やかな一日はこれで幕を閉じた。騒がしくなることで静寂さは失われ、それによつて猫又を起こしてしまつだらう。そうしてまた慌ただしくも賑やかな時間を過ごすことになるのだろうと思いながら、反面そんな状態も割と楽しいから構わないなどいう両方の思いが込み上げていた。

「黒依ちゃん、志岐城さん！……そんで犬塚か。えつと、今日は一体どうしたの」

見ると田の前には黒い髪をポニーテールに結つた黒依と、右側に髪をひとまとめにしてある響子。一人ともシンプルではあるがとても涼しげな格好をしていた。水玉のワンピースを着た黒依は梅雨の季節に合つた雰囲気でとても愛らしく映つていたし、響子は無地のインナーに青いパークー、ネイビー色のカーポパンツといつスタイルは、田鼻立ちの整つた響子にしてはとてもボーグッシュに感じられる。ファッショントレンド興味がないのか、慶尚は普段着と言つても過言ではないただのスウェット姿であった。

三人とも手には何やら教材のような冊子が何冊か入つたバッグを手にしており、このまま図書館へ行つて勉強でもしに行こうというような格好である。しかしそんなこと君彦は何も聞いていない。そもそも三人が君彦の家を訪ねるというようなことは何一つ聞いてい

ないのだ。まるで一人だけ置いてけぼりにされたような状況で、目をぱちくりさせている君彦の表情を見るなり響子が慶尚に向かっていきなり文句を言い出した。

「猫又のこの顔……、犬塚……あんたまさか。ここに何も置いてないんじゃないでしょうね？」

「ああ、そういうえば家が隣だからこでもいいかと思つて、そのままで忘れてた」

何となく状況は飲み込めた。つまり君彦がいない所でまたしても三人で何かの計画を立てて、それを君彦に伝える役割を担つた慶尚が伝言し忘れたと、そういうわけらしい。君彦への伝言係が隣近所である慶尚だつたことはまだ良しとしよう。そして慶尚が例の如くその伝言を君彦に伝え忘れたことも、とりあえず目を瞑つておく。しかし君彦にとつてどうしても理解し難いことがあった。

(何でいつもいつもオレのいない所で何かの計画が立てられるんだ?
え、何? もしかしてオレ、さり気なく除け者にされてるのか?
いやいや、それなら最初から一緒に遊ぶような感じで三人が訪ねて来るなんてことないだろうし。それなら何でいつもサプライズなわけ?
どうしていつもいきなりな訪問なわけ?)

どうにも腑に落ちないという感じが拭い切れない君彦に構うことなく、響子は犬塚の手抜きに延々文句を言つていた。話が見えてこない君彦が玄関先で固まつていると、よつやく事態を把握していな君彦に黒依が声をかけた。

「『めんね~君彦クン。別に君彦クンに内緒で遊ぶ約束してるわけじゃないんだよ~? ただ君彦クンって平日でも夜間のバイトがあ

るから、いつも早く帰っちゃうでしょ？ 一人暮らしだから家のことも全部自分でしないといけないみたいだから、とっても忙しそうだしなかなか一緒に居る機会もないし。学校でいつも一緒に楽しく居ても、やっぱりどこか違うじゃない。だから君彦くんのバイトがない時にみんなと一緒に遊べないか相談してたの。君彦くんは忙しいみたいだから話し合いをする時はどうしても帰り道だとになつちゃつて、本当は君彦くんも交えて相談したかったけど。一緒に居る時つて他の話題になることが多いでしょ？ だからってわけじゃないけど、一応決まったことは全部犬塚くんに伝えてもらうことにしてれば、君彦くんとの連携にも繋がるかなって思ったんだけど。なんか使えないみたいだし、ごめんね」

最後の最後で毒の混じった台詞が聞き取れたが、君彦はその部分には激しく同意するものが含まれていたのであって突つ込むような真似はしなかつた。響子から散々お叱りを受けている慶尚にはどうやら先程の黒依の言葉は聞こえていないようである。

つまりはこうしたことだ。学校の休み時間や弁当を食べる時間に一緒に居ることがあっても、その時は決まって響子の色情靈に関する話題になることが多かつた。響子自身もそれが悩みの種であることに変わりはないし、君彦もどうにか救いたい気持ちがあるということもあって、飽きることなく解決策を論じることに時間を費やしていたのだ。

しかしそれではせっかくの高校生活を楽しく過ごせないのでないのか？ 韶子の状況も大切だが、それ以上に楽しい出来事を自分達で作らなければ勿体ないのではないか。だからこそこうした休日、それも君彦のバイトが出来るだけない日にみんなで集まつて高校生らしいことをする、といつ計画を練つていたのだ。

天気の良い日ならばどこかへ出掛けたりレジヤーを楽しむ為に遠出したりすることも出来なくはないが、梅雨の時期と高校生の所持金では限度があった。何より雨の日は出掛けるのが億劫になるとい

う傾向に陥りやすいので、屋内で楽しむ他ない。ならば誰かの家に遊びに行って宿題を一緒にしたり、ただ何でもないことを話題にして盛り上がったりするしか遊ぶ内容が思い付かなかつたのが現状だつた。そして今回決まつた内容は、君彦の部屋で宿題をする、とうものらしい。

それで三人は手に宿題や教材の入つたカバンを持つてていたのである。他に用事があるわけでもないし、一人でいるよりみんなと樂しく過ごした方がきっと良い一日になると思った君彦は、とりあえず今回立てられた計画に反対することなく、彼等の訪問に快く応じた。ただ気になることは、この会話の中でも部屋の奥で眠つている猫又の存在であつた。

今は大人しく寝ているが起きたらきっと騒がしい事この上ない。いつもならどこかへ行けと言う所だが、外は終始雨が降つてゐる為、猫又を追い出し帰つて来た際には「お風呂に入れる」という面倒臭い儀式が待ち受けていることは目に見えていた。

よつて猫又を追い出すことは出来ず、かといって猫又が眠りから覚めて君彦達の宿題が終わるのを大人しく待つてゐるのかと問われれば、君彦ははつきりノーと答える自信がある。

ひとまず君彦の部屋に集まつて宿題をするという話を聞いていかつたとはいゝ、このまま雨降る中を家に帰すわけにもいかないで君彦は伝言をきちんと伝えなかつた犬塚のことは無視して二人を中へと招待した。君彦がわざと無視しようとも犬塚は自ら一緒に部屋に入つて來ることは承知の上だつたので、あえてそれ以上何も言つつもりはない。そもそも君彦が怒鳴り声を上げたことでせつかくすやすやと眠りに落ちてゐる猫又をわざわざ起こしてやることもないだらうと、少なからずの配慮からしたものであつた。

どうせしばらくすれば起こしてしまつとわかつていても、ほんの数分、數十分だけでも静かなひと時を君彦は保ちたかつたらしい。雨の中歩いて來たせいか、隣から移動してきた慶尚は別として黒依

と響子は靴を脱ぐなり少し濡つた靴下のことが気になつてゐる様子だ。君彦自身はそんなことを気にするようなタイプではないが、そこはやはり女の子だから氣になつてしまつただつと心の中で呟いた。

「うわ、靴もびしょびしょだつたから仕方ないけど……。そのまま上がるのはちよつと……」

見ると響子が履いて来たスニーカーはしづぶ濡れになつていた。明らかに黒依の靴とは違い、響子の靴から徐々に水が染み出してセメントで出来た玄関口を濡らしていく。

「そういえば志岐城さん、来る途中で大きな水たまり踏んじやつたもんね。そのせいかも」

それならこれだけ濡れてもおかしくないと思つた君彦はすぐさま簞笥からタオルを取り出し、それを響子に手渡す。

「志岐城さん、はいタオル。とりあえず濡れた靴下を脱いで乾かしておいた方がいいよ。帰りもどうせ濡れるだろつけど、そのまま放つておくよつマシだと思つ」

君彦にそう促され、響子は情けない思いでタオルを受け取ると黙つて靴下を脱ぎ始めた。白い靴下を脱ぐと君彦が手を差し出す。響子は慌てて脱いだ靴下を君彦から隠すように後ろ手に回すと、君彦に向かつてこれだけは譲れないと断言した。

「じ……自分で干すから触らないで！ で、ビリヒこれ干したらいいの？」

脱ぎたての濡れた靴下に触れられたくなかつた響子は咄嗟にそう

叫ぶ。響子の声で一瞬猫又が起きてしまったのかと思つたが、それを気にする素振りを響子に気付かれないようにしつつ、君彦は玄関口のすぐ側にある風呂場を指さして答えた。

「えっと、一応風呂場で干そつと思つてるんだけど……」

「わかつたわ、ごめん……」

そう言つて響子は君彦から手渡されたタオルで一通り濡れた部分を拭き取ると、案内される程の広い室内ではなかつたが風呂場へ君彦と一緒に向かう。一人が風呂場で靴下を干してゐる間、黒依と慶尚は無遠慮に「お邪魔します」と一声かけて部屋に上がつた。君彦が住んでるアパートはワンルームなので、玄関から入るとすぐに生活感溢れる一室が丸見えであつた。その部屋は非常に質素で、男の一人暮らしに必要な物だけが置かれている。祖父母の仏壇、テレビ、箪笥、テーブル。洒落た物は何一つない實に簡素な部屋であつた。

君彦自身に物欲がないのだろうと思わせる室内に娯楽道具はテレビのみ。部屋の片隅に古めかしいラジオが申し訳なさそうにぽつりと置いてあつたが、もう長年使用していないのである。埃こそ被つていらないものの、電源プラグの付いたコードはコンセントに挿し込まれることなく、しつかり丸められた状態で納められていた。

箪笥もそれ程大きな物ではなく、五段抽斗^{ひきだし}がひとつきり。元々衣服を多く取り揃えていないのか、それとも季節ごとに衣替えをするので他の季節の衣服は押し入れにしまわれているのか。それは黒依達にはわからない。一般的な高校生男子の荷物がこれだけとは思えない。少なくとも慶尚は洒落た衣服に興味があるわけではないが、今の季節に必要な衣服は恐らく君彦の箪笥の中に全てを納めることは出来ないだろうと思つた。慶尚の感覚では高校生男子にしては物が圧倒的に「少ない」と感じた様子である。

慶尚が君彦の隣の部屋に引っ越してからそれ程日は経っていない

が、以前君彦の部屋に入った時も自分より明らかに物が少ないように感じていた。無趣味なのか、自分と違つて物に興味がないのか。同じ間取りでありながら君彦の部屋と慶尚の部屋とでは明らかに空間スペースに差があった。慶尚の部屋には所狭しとAV機器で埋め尽くされており、自由なスペースは殆どベッドの上だけと言つても過言ではない位、慶尚の部屋は物で溢れ返っていた。それに比べると君彦の部屋はどう頗る目に見ても必要最低限の物、無駄のない物しか取り揃えていないのだと慶尚はほんの少しだけ感心していた。感心するだけで羨ましいとも尊敬するとも言い難い。むしろ自分にはこんな生活は絶対に無理だ、という程度にしか頭にないようだ。

そう手間取ることもなく直に君彦達は戻るだらうと思いながら、黒依と響子は何度も足を運んだように適当に席を陣取つた。荷物を置いてテーブルの側に座る前に、黒依がアパートの裏手となる硝子戸の方へと目を向けると、丸くなつてゐる物体に気が付く。二又の尻尾をぱたぱたさせながら寝入つてゐる姿を見るなり、猫又だとすぐ理解した。

黒依は猫又に声を掛けなかつた。そもそも黒依は猫又の姿が「見えないこと」になつてゐる。少なくとも慶尚以外の人間の前では。黒依が寝たまま起きる気配のない猫又をじつと見つめている様子に慶尚が気付くと、風呂場の様子に耳を傾けながら小さく問い合わせようとした。しかし黒依がそれを遮るように先に口を出す。

「何もしないつてば。今日はみんなで宿題をしに来たんだから、大人しくしてゐるわよ犬塚クン」

黒依の言葉を聞いた慶尚はそれ以上何も言つことなく、まるで何事もなかつたかのように適當な場所に座つた。黒依はテーブルを挟んだ向かいに座り、君彦達が戻つて来るのを待つてゐる。テレビは消したままの状態。一瞬勝手にテレビを付けてやろうかと慶尚は考

えたが、そもそもモコンが見つからなかつたのですぐに諦めた。それからちらりと猫又の方へ視線を向けると、これだけの人数が部屋に入り込んでいるのに全く起きる気配のない猫又の様子を見て、少しからかうように口をついた。

「眠つたように死んでるな……」

「嫌だなあ犬塚クンつてば。それを言つなら、死んだように眠つてる……でしょ？」

とりあえず観客はいないがボケとツッコミが成立したところで、早く一人が戻つてこないものかと手持無沙汰な状態になりながらも、二人はテーブルの上に次々と宿題をする準備を進めた。

猫又は深い眠りに落ちていた。

周囲が多少騒がしくなるとも、それに気付かない位に深く。

喧騒の中、それより猫又の耳に届くは　雨の音。
懐かしい水音、深く耳に刻まれた雨の打ち付ける音だけが、猫又を更なる深い眠りへと誘つて行く。

猫の日記憶（一）～サプライズ訪問～（後編）

お分かりいただけたでしょうか？（笑）
ハイ、私がこの「猫又と色情狂」を思いついた時に、絶対書きたい
とず～つと思っていた話、猫又ちゃんが主役のお話です！
「雨の日の記憶」が全何話になるか今はまだ未定ですが、とても大
切な部分の話になるのですが、長くなってしまうと思いません。
ですがそれだけ深い話として書き上げてこいつもりなので、どうぞ
よろしくお願ひいたします m（— —）m

わむい……。

おなかもすいたし、すいへむことよ……。

何が起きたのかわからなー。ここがどこなのか、自分に何が起きたのか。何もわからない。

ただわかっているのは、とてもお腹が空いてることと、ものすくく寒いということだけ。

「彼」の田はまだよく見えていない。足を動かして移動しようとお腹が減り過ぎて、もはや立つことすら出来ない。なので鼻を動かし周囲のにおいを嗅いでみた。何かの湿った臭い。それが何の臭いなのか、幼過ぎる「彼」にはまだ理解することが出来なかつた。

「彼」がいる場所は小さな箱の中。無情に降り続ける雨によつて古びたダンボール箱はこれでもかといつ程水分を吸収し、湿った臭いを放っていた。ダンボール箱の隙間から水が漏れているので、箱の中に水が溜まつて「彼」が溺れるということだけは幸いにも免れただようだ。箱の中にいるのは「彼」だけではなかつた。「彼」よりも少し体が大きい三毛猫と、右目を怪我した黒猫が一匹ずつ。

三毛猫も黒猫も生後三ヶ月は経つていたのだろう、「彼」とは違ひ心身ともに発達していたせいか、自分達の置かれている状況をきちんと把握、理解している様子だつた。

自らの運命を憐れんでか、溜め息交じりに三毛猫がぼやく。

『あ～あ、これでオレ達も終わりか。考えてみれば短い命だつたな

……』

悲観的に呟く三毛猫に対し、黒猫が黄金色の凛々しい瞳を向けて叱咤する。

『まだ終わりつて決まつたわけじゃない。自由を手に入れたつて思えぱいくらか気が楽だろつ』

『そつは言つても、オレ達これでも飼い猫だつたんだよ？ 基本的な餌の捕り方なら、まあ何とかなるかもしないけどさ。ここは人間社会なんだよ？ 最近じや野良猫や野良犬を捕まえる人間までいるつて言つじやないか。捕まつたら一度と助からないつて。オレやだよ、そんな危ない生き方するの。……怖いよ』

『な……ん』

今にも泣きそうな声で弱音を吐く三毛猫に、「彼」は小さく鳴いた。二匹の猫が何の話をしているのか「彼」にはよくわかつていな。だけど一匹は明らかに怖がっている。「彼」と同じように不安で仕方ないのだ。「彼」が鳴いたところで何の慰めにもならないかもしれないが、同じように不安に思つている自分がいるんだと鳴いて知らせることで、少しでも励ましになるんじやないだろうか？もしかしたらそれを求めていたのは「彼」自身かもしれなかつたが、そこまで自分の心情がわかる程「彼」の心は成長していない。

少しでも自分と同じ者が欲しくて、「彼」自身が擦り寄りたかったのかもしぬなかつた。

「彼」の弱々しい声を聞いた二匹は、小さく震える珍しい毛色をした子猫を見下ろした。彼等も猫の毛並みの種類の全てを把握しているわけではない。多くを知つてゐるわけではなかつたが、それでも灰色をしたキジトラ猫を見るのは珍しかつた。

まだ目も開き切つていない、生後間もない子猫が雨に打たれ、寒

さと空腹に苦しんでいる。きっと自分がどんな状況に置かれているのか何もわかつていらないんだろう。そう思うと自分達よりこの子猫の方がどれだけ不憫か、とても哀れに思えた。

すると黒猫が雨でずぶ濡れになつた「彼」の顔を優しく舐めると、顔を摺り寄せ、「大丈夫だ」と安心させようとする。

『見ろ、こんな小さな子もいるんだ。オレ達がしつかりしなくてどうする? この子はまだ自分の足で立つことすら出来ない子猫なんだぞ。餌の捕り方だって、自分の状況だって何ひとつ理解しない哀れな子猫だ。オレ達で守つてやらなくてどうするんだ』

せめて子猫がこれ以上雨に打たれないよつと、黒猫は自らを雨避けにするように子猫の上に覆いかぶさつた。その姿はまるで母猫が子猫を抱き締めるかのようだ。黒猫の言うことは一理ある。猫としての先輩だ。何より置かれた状況を子猫よりは理解している。この先どうすればいいのか全く見当がつかないが、ここで弱音を吐いていても雨は止んでくれないし、餌だって与えてもらえない。

『じゃあさ、どうする? ここから離れる? もしかしたらオレ達の『ご主人様の心が変わつて、またオレ達を連れ戻しに来るかもしけないって思つてさ、あれからもう随分時間が経つたよ! ? 朝が二回も来た。それでもご主人様は来てくれない。代わりにオレ達のことを汚いゴミを見るように通り過ぎる人間ばかりが来るだけだったじゃないか。大体ここからどこへ行つたらいいんだよ』

三毛猫の言いたいことはわかる。確かに黒猫がここを離れようとしなかつたのは、三毛猫が言ったように飼い主が戻つて来てくれるかもしれないという、淡い期待を捨てられなかつたからだ。しかしその期待は裏切られた。自分達は飼い主の手によつて捨てられたのだ。もはやここでいつまで待つっていても飼い主が来てくれるることは

ないだろ？。

『それにそいつ、お腹が空き過ぎて自分の足で立てないならさ……。オレ達で連れて行くしかないじゃない。きっとさ、凄く大変だよ？自分達のことだけで精一杯なのにさ。一体どうすんのさ？』

それも確かにその通りだ。今から当てもなくどこか安住の地を探し回る為にこの箱から出たとして、子猫を咥えながら移動するのは大変過ぎる。途中で何者かに襲われないとも限らない。かと言つて子猫を箱に残したまま移動するのも危険だ。子猫の面倒を見る為にどちらか一匹が残つた所で効率も悪いだろ？。それじゃいつまで経つても安住の地を発見出来ないどころか、自分達の分の餌にだつて在り付けるかどうか……。

『一回この周辺のパトロールしてみたじやない？　どこも他の猫の縄張りになつてたよ。あいつら、オレ達が捨てられたばかりの猫だからせめてもの情けで襲わずに放置してやるつて言つてたけど、こうも言つてたじやない。放置してやるのは箱の中でだけだつて。箱から出て縄張りをうろつけば、子猫だつて容赦しないつて』

捨てられた當日、夜間に一帯を縄張りにしているボス猫に襲撃されたことがあった。その時に右目を鋭い爪で引っ搔かれ、黒猫は右目を失つた。今も傷は完治しておらず膿んだ状態である。雨で傷口がズキズキと痛むが、その傷と自分達の置かれた立場のおかげで何とか殺されずに済んだのもまた事実である。

捨て猫の末路は悲惨なものだ。捨てられた直後に心優しい人間に拾われるならまだマシだろう。しかしうまくは野犬に襲われるか、戦う力がなければカラスの餌にされてしまうか、人間の子供によつて面白半分に虐待されるか、はたまた人間の大人によつて命を弄ばれるか。最近よく聞く噂では「保健所」というものが率先して野良猫

を回収することが増えたという話。そのどれにも屬さなかつた場合、自分の力が及ばなかつた際に待つてているのは、凄惨な死　つまり餓死である。

それだけは御免だ。せつかく小さな箱庭のような場所から出るこどが出来、自由を得たというのに。確かに飼い主に飼われている頃には餌に困ることなどなかつた。自分専用の寝る場所だつて与えられた。ただし自由と引き換えに。外を出歩くことさえ許されず、生活出来る場所は小さなケージの中。好奇心でケージから出て行こうと脱出したら鞭で打たれた。よく見れば他のケージに入っている猫達は皆、どこかに傷を負つっていた。ご主人様に逆らえば体罰が待つてゐる。皆、外への憧れを捨ててしまつた。ただ生きるに不自由しない環境さえあれば、それでいいのか？　違う。そんなのは猫の生き方じやない。猫は自由であつてこそ、猫なのだ。

『猫は自由であるべきなんだ……』

『え？』

黒猫は箱から出た。それを慌てて止めようとする三毛猫。

『ち……ちょっと待つて！　どこ行くの？　オレも行つた方がいいの？　でもこいつどうするの？　それにここから出で行つたらボス猫が黙つてないよ！』

半ばパニック状態に陥つている三毛猫は足元にいた子猫に気付かず、後ろ足で軽く蹴り飛ばしてしまつていた。しかし空腹でもう声を出すことすらまもなくなくなつてゐる子猫は、「痛い」と言つたくても言えない状態である。

箱の中の状況にまで目が行き届かないせいで黒猫もそれに気付かない。ただ三毛猫の方へと振り向き、伝えた。

『オレはとにかく何か食べる物を探して来る。何か腹に入れなきやどこにも行けないからな。この辺を縄張りにしてる連中の目を盗んで行動するなら、一匹で行動した方がやり過ごしやすいかもしない。だからお前はここに残つて子猫を守つてくれ』

『ええっ！？ オ、オレが！？』

突然大きな役割を任せ驚愕する三毛猫。子猫を守れと言われ足元を見た時、箱の端で子猫がぐつたりしている姿を目にした。守れと言われた矢先に死なれたら困ると思った三毛猫は慌てて子猫の体を舐めた。するとぴくりと反応があつたようで一安心する。しかしほつとしている場合でもなかつた。三毛猫は今度こそ子猫をぞんざいに扱わないように、子猫の首根っこを咥えて自分の懷に寄せてから再び黒猫の方へ視線を戻す。

黒猫は言った。まだ傷を負つた右目の激痛が治まっていないはずなのに、三毛猫と子猫を気遣うように黒猫は言い放つた。

『その箱から動かなければ安全だと、そう言ったのは奴等だ。だからお前達が奴等に襲われることはない、安心しろ。ただしカラスや人間共に限つてはその理屈は通用しない。そうなつたらその子を咥えてひたすら逃げろ、いいな。オレも早く戻るようにする』

三毛猫が声をかける暇もなく、黒猫は走り去つてしまつた。雨の中、全身ずぶ濡れになつたまま箱の中に取り残された三毛猫と、寒さで小刻みに震える子猫。餌が手に入らなくともこの際構わない。だからどうか無事に戻つて来て欲しい。自分と子猫だけがここに残されるなんて寂し過ぎる。いや、もしかしたら体力のない子猫はもう持たないかも知れなかつた。もし子猫が死んでしまつたら自分一匹だけになつてしまふ。そんのは嫌だ。だから早く戻つて来て！

三毛猫は必死に心の中でそう祈つた。

黒猫がダンボール箱から出て行つてどれ位経つただろうか。餌がなかなか見つからないのか、それともよっぽど遠くまで探しに行つたのか。最悪繩張りを荒らしたと、こいら一帯を取り仕切る猫に因縁をつけられ、襲われているのだろうか？

上を見上げると子猫の毛色と同じ色をした雲が空を覆つて、そこから細かい水がずぶ濡れになつた自分達を更に打ち付ける。何度体を振つて乾かそうとしても、次々と上から雨が降つて来るのだ。乾かそうとする行為 자체が無意味に思えたが、かといってずぶ濡れのままでいても全身を濡らす水に体温を奪われ寒くなる一方である。

猫の毛は水を弾かない。雨を凌ぐ場所もなく雨に打たれ続ける現状はまさに死と隣り合わせの最悪な環境にあつた。体力のない子猫ならなおさらである。すぐに体温を奪われ、寒さと空腹で死んでしまつかもしれなかつた。

黒猫が戻つた時に子猫が死んでいたら合わせる顔がないと思つた三毛猫は、黒猫がしていたように子猫を抱き抱えて少しでも雨から身を守れるようにしてやつた。体温を奪われないよう自分の中では子猫の全身を舐めてやり、自らの体温もさほど高くなかったがそれでも互いに寄り添つことで温め合えないかと思い、黒猫が戻つて来るまで互いに抱き締め続けた。

それから更に一晩が経ち、夜が明けるが雨は変わらず降り続ける。いつそこのダンボール箱から出て行つて雨風を凌げる場所を子猫と共に探し歩こうかと考えてみたりしたが、自分達がこの場所を離れたらどうなるかわからない程、三毛猫は愚かではない。

今自分達が居る場所を繩張りとしている凶暴なボス猫を敵に回してまで、ボス猫に対して唯一の安全圏と成り得るこのダンボール箱から出て行く勇気を、三毛猫は持ち合わせていなかつた。

かといつてこのまま雨に打たれ続け、所在も生死も不明となつた黒猫を待ち続ける行為も利口だとは思えない。もし黒猫が無事だつたとして、自分達がこの場所を黙つて離れてしまつたら。帰りを待つていると信じている黒猫が戻つた時、自分達の姿が見えなかつたら黒猫はどう思うだろうか。

自ら危険を冒してまで自分達の為に餌を探しに行つた黒猫を裏切るという行為は、三毛猫にとってそれはとても大きな罪のように思えた。その罪は黒猫を待たずして、子猫と共にダンボール箱を抜け出して他の場所へと移る行為よりも、ずっと重いもののよつて三毛猫は捉えていた。

例え血は繋がつていなくても、同じ母猫の腹から生まれて来なくとも、自分達は自由の無い箱庭のような世界から放り出された、唯一無二の同志であった。それは何よりも強い絆のよつて三毛猫は感じていた。

だからこそ三毛猫は無慈悲に体を打ち付ける雨にも負けず、もう一匹の同志である子猫を抱き抱えたまま、いつ戻るかわからない黒猫の帰りを待ち続けることが出来た。

辺りが薄暗くなり、再び夜がやつて来る。

それでも雨は全く止む気配を見せずに降り続け、着実に三毛猫と子猫の体温を奪つていった。ダンボール箱から出て行くことも敵わず、三毛猫は出来るだけ体を温めようと全身をまん丸にして、腹の部分に子猫を押し込むように抱いて縮こまつっていた。

空腹で互いの腹の虫が鳴り、打ち付ける雨によつてもう殆ど体が温まることなく寒さで震えが止まらない。がたがたと全身を小刻みに震わせながら、今か今かと黒猫を待ち続ける。

最後に食事をしたのは、もういつのことだろ？

ふとそんな些細なことが三毛猫の脳裏に浮かぶ。寒さと空腹で殆ど意識は朦朧とし、まるで激しい睡魔に襲われているかのように薄

目を開けてぼんやりと考え方だ。

最後に食べた餌は確かに固いドライフードだったような気がする。外気に晒され少ししけつたそれを、三毛猫は何も感じることなく食べていただような記憶が思い浮かんだ。檻の中で生活をしていた時は、飼い主が定期的に餌をくれた。毎日毎日同じ時間に、同じ餌を他の猫達同様に与えられた。それに何の疑問も不満もなく、当たり前のように受け止めていたあの時。

食べても食べなくても決まった時間が過ぎれば飼い主はドライフードの入った受け皿を、再び檻から回収して行く。それは一種の作業であり、そこに何の愛情も感じられなかつた。だから三毛猫も、恐らく他の猫達も皆、それに何の違和感を抱くこともなく受け身の生活を続けていた。

それが毎日の日課であり、当たり前の光景であり、疑う余地もない自然な出来事だつた。だから最後の食事の時、あまりお腹が空いていなかつた三毛猫はドライフードを全てたいらげるのことなく、半分位残して食べるのをやめてしまつた。

今食べなくてもどうせまた決まった時間に餌が与えられる。それは毎日毎日繰り返されてきた日常の中で確定されたことだから。だから心配なんてしなくとも餌に不自由することなんてないのだ。それが今はどうだらう。あの時残したドライフードのたつたひとかけらだけでもいい。そのたつたひとかけらを自分と、腹に抱き抱えている子猫と、黒猫が餌を回収出来ずに戻つてきたら当然黒猫にも、小さく碎いてみんなで分け合つことが出来ただらう。

どうしてあの時自分は餌を残してしまつたんだろう？
どうして自分は「それ」が当たり前のものだと信じてしまつたんだろう？

そう信じ込んでいた自分が今となつては愚かで堪らない。悔しくて堪らなかつた。今ではたつたひとかけらのドライフードですら、一度と目にすることが出来ないような、とても貴重で大切で豪華な「駆走のように思えてならなかつた。

最後の食事を残した自分を恨みながらうつすらと、虚ろに開いている三毛猫の目から雨とは違う雫が零れ落ちて行く。ゆっくりとまばたきをし、降り続ける雨と田から零れ落ちる涙とが混じり合ひ、三毛猫の顔を更に濡らして行つた。

守らなきや。

薄れゆく意識の中、三毛猫のお腹の辺りで微かに動く命の息吹を感じながら、自分が今何をすべきかを改めて実感する。それまでずっと受け身で生きて来た自分。言われるがままこの場に留まり、言われるがまま子猫を死なせないように嫌々頑張つて来た。

自分の命の灯火があと少しで消えるかもしれない。

激しい空腹と、凍えるような寒さと、ダンボール箱の中に取り残された絶望と、かつての自分の愚かさに気付いた三毛猫は、ここに来てようやく自分が今一番何をするべきなのか悟つたのだ。

ここに残れと言われたから残つてゐわけじゃない。子猫を守れと言わされたから守つてゐわけじゃない。この子には今自分が必要なのだ。今まで何も出来なかつた自分は、今こゝにして子猫を生き長らえさせることができてゐる。本当ならもうとっくに寒さと空腹で死んでいたかもしない小さな猫を、ここまで生き延びさせることができたのは自分の努力あつてなのかもしれない。傲慢かもしれないがそう信じることで消えかけていた命の炎が再び灯されるような、そんな不思議な活力が戻るような気がしていた。

せめて黒猫が戻つて来るまで。いや、もし戻つてこなかつたら？それでも親切な誰かに拾つてもらえるまで、この子が生き延びられるようにしなくちゃいけない。生まれたばかりで、まだろくに話すことも出来なくて、か弱い不幸な子猫。

この哀れな子猫に生を感じさせてやりたい。自分は幸せだったのか不幸だったのかよくわからない日々を過ごしてきたけれど、せてこの子だけは幸せに生きる権利があるはずだ。

何もわからず、何の為に生まれてきたのかもわからないまま死ぬなんてあまりに不憫過ぎる。自分が無為な時間を過ごして来た代わりに、この子には有意義な毎日を送って欲しい。そんな風に自分以外の者のことを真剣に思つたことなど、これまでただの一度もなかった三毛猫が今初めて自分以外の誰かの幸福を心から願つていた。

お前ならきっと、幸せになれるからな。

子猫の幸せを願つた時、三毛猫は今まで感じたことのない程の充足感を得られた。こんなどうしようもない自分でも、こうやって命を張れることが出来るんだ。それがわかつただけでも、自分はきっと幸せになれたに違いない。

三毛猫の両耳は、そのままそっと閉じられた。

ざあざあと降り続ける雨の中、三毛猫は子猫を抱えたまま動かない。それまで呼吸をする際の腹の動きで子猫は安心することが出来たが、今はもうぴくりとも動かない。

息を引き取つて抜け殻となつた体でも、雨を遮る壁の役割なら出来る。

三毛猫は死してもなお子猫を守る壁となつて、子猫の側に居続けた。

西の田の隠れ（3）～遙かに咲く梅～（後書き）

更新が遅くなつて申し訳あつませんでした。――(――) これから先も定期的に毎曜更新出来ないかも知れませんが、どうぞ見捨てないでやつしてくださいまし。

きちんと完結田描して頑張るのでよろしくお願ひします。そしてこれまで読んで下さつて本当にありがとうございます。

雨の日の記憶（4）～名もなき英雄～

ざあざあと音を立て降り続ける雨。道端に置かれたダンボール箱の周辺をカラス達が仕切りに騒いでいる。耳障りな鳴き声を上げながら飛んだりダンボール箱の中にあるものを突いたりを繰り返していた。

そんな時数匹の猫を引き連れた貴禄ある風体の野良猫がカラス目がけて飛びかかる。ダンボール箱の中身に夢中になっていたカラスは突然の襲撃に更なる声を上げながら、襲いかかって来た猫達に狙いを変えた。

しかしそこに現れた猫はこの一帯をナワバリとして牛耳っているボス猫だと悟ると、カラス達は捨て台詞さながらに鳴き声を上げ空高く飛んで行つた。カラス達は民家の屋根の上でボス猫達が去るのを、距離を置いて様子を窺うという選択肢を取つたようだ。

ボス猫はカラス達に傷一つ付けられる所か激戦を繰り広げることなく勝利すると、すぐさま視線はカラスからダンボール箱へと移る。従属するように従つていた一匹の猫が、カラスの反応に目をくれることなくダンボール箱へと近付き中を覗いた。

するとそこには先程のカラス達に突かれ、体のあちこちの肉を食いちぎられた三毛猫の死骸が横たわっている。カラスに襲われ死んだのか、それともそれ以前から既に死んでいたのか。どちらかそれはわからないが、少なくとも最近自分達のナワバリの中に捨てられた捨て猫の内、「もう一匹」が今日の前で死んでいることを確認する。

『ボス、こいつはもう駄目だ。オレ達の忠告を無視しないで、そのままこの中でくたばつたみたいですね』

同情する含みもなく、吐き捨てるように手下の猫がそう言つとボ

ス猫は何の情を示すことなく淡々と返した。

『ふん、そいつはただのクズ猫だつたってわけか。少なくともオレ達の忠告を無視して餌を探し回っていたあの黒猫の方がまだ骨があつたつてわけだな。大人しくオレの言つことに従つておけば、生かしてやつたものを……』

ボス猫は数日前の黒猫の奮闘を思い返す。空腹と体力を削られた状態で食い扶持を探し回っていた黒猫。最初は威嚇のつもりで黒猫の右目を奪つてやつたが、忠告をした後は容赦することはなかつた。ボス猫は黒猫を試すかのように条件を出した。一緒に捨てられた猫を殺してその死体を持ってくれば、黒猫だけなら無条件でボス猫の手下にしてやってもいいと。

しかし黒猫はあつさりその条件を蹴り、こともあろうかボス猫に戦いを挑んだのだ。

当然勝敗は見えていた。弱つた黒猫がこの辺一帯を支配するボス猫に敵うはずもない。黒猫は無残にも返り討ちに遭い、そのまま帰らぬ者となつた。雌雄を決した場所は河原、黒猫は殺された後に川に投げ捨てられたのだ。

ダンボール箱に捨てられた猫を発見してから数日、黒猫が戻らないことを訝しんで何か行動でも起こしているかも知れないと思つたボス猫は、残された捨て猫の様子を見に来たという次第であつた。

しかし結果はあまりにあつけなく、制裁を下すまでもなかつたと悟つたボス猫は今頃になつて黒猫を殺したのは少々勿体なかつたかもしれない、ほんの少しだけ後悔の色を示した時。

ダンボール箱を覗き込んでいた手下の一匹が何やら叫んだ。

『待つてください、中こまだもつ一匹いますぜー。』

その声にボス猫はあまり気乗りしない様子でのしのしとダンボール箱に歩み寄つて、中を覗いた。するとカラスに肉を突かれ血だらけになつてゐる三毛猫の死骸の下から、もう一匹 毛色の異なる子猫の存在を確認する。

ぴくりとも動かなかつたのでその子猫も死んでいるのかと思いきや、雨の音で聞き逃しかけたが確かにか弱い鳴き声がしたので、死骸の下にいた子猫はまだ生きているのだと発覚した。

ボス猫達の存在に気付いたのかそうでないのか、彼等にはわからないが子猫は自分以外の存在。竦むような鳴き声を上げる恐ろしいカラスとは違う別の存在を感じ取つて、それまで動きのなかつた前足が微かに動き、辺りを探るよう弱々しく湿つたダンボール箱を搔いていた。

その様子を見た手下の一匹が囁くような小さな声でぽつりと呟く。

『この三毛猫、もしかしてこの子猫をかばつて死んだんじゃ……？』

そんな何でもない一言にボス猫の興味は、一心に子猫へとそそがれた。ボス猫は必死に、しかし弱々しくもがく子猫の「生きよう」とする姿に感化されたのか。このままダンボール箱の中に残された三毛猫の死骸などは放置し、カラス共にくれてやるつもりでいたボス猫が、突然手下達に思いも寄らない指示を出した。

『その三毛猫の死骸を河原まで運んでやれ』

ボス猫の言葉に手下達は一瞬耳を疑つた。元々制裁を下すつもりでここまで様子を見に来たはずなのに、ましてや自分達のナワバリの中には捨てられた猫如きに情をかける筋合いもない。手下達は一匹残らず全員が、捨て猫をこのまま放置するものだと思つていたのだ。自分達が想像もしなかつた命令を下され、行動が遅れてしまつた手下達にボス猫が先程より少しばかり苛立ちを始めた物言い再度

告げた。

『どうせならこいつの兄弟猫ともいえる黒猫の、奴を葬った河原まで運んでやるんだ。聞こえなかつたのか！？』

ドスのきいた声でそう命令すると手下達は慌てて三毛猫の死骸を数匹がくわえて、ダンボール箱の中から連れ出した。ずるずると引きずるように河原へ向かつて運ぶ中、残りの手下がボス猫の指示を仰ぐ。

『ボス、こいつはどうします？』

ダンボール箱の中でうつ伏せになつている灰色の子猫。雨を凌ぐ役割をしていた三毛猫が運び出された為に、子猫は遮るもの不失つて直接雨に打たれる形となつていた。ボス猫は上から見下ろすように弱つてゐる子猫を眇める。

『オレ達に子猫を養う程の余裕はねえ。このまま一思いに殺してやつた方がこいつの為になるかもしけねえが、それじゃあこいつを命かけて守ろうと戦つたあいつらの恨みを買つちまつ』

ボス猫の言つてる事を理解してゐるのかしてないのか、手下達はただただボス猫の指示を待つだけで、ダンボール箱の中にいる子猫とそれを見つめるボス猫を交互に眺めるだけだった。

『あいつらが命張つて守ろうとしたこいつの運に賭けてみようじやねえか。それこそ酷な選択かもしけねえが、元々オレ達の助けを求めるわけでもなく、自分達で生きようとあがいてきた連中の形見だ。ここで死んじまえばそれまでのこと。だがな……』

ボス猫はそれ以上の言葉を口にすることなく、言いかけた言葉をそのまま飲み込んだ。

今は亡き黒猫や三毛猫の生き様を、結局は想像でしかないかも知れないがボス猫は脳裏に思い描いてみた。どんな運命でこんな場所へ捨てられたか知れないが、それでも彼等は彼等なりに必死に生にしがみつこうと生きて来た。

ナワバリから退けようと威嚇しても決して怯まず応戦し、負傷してもなお三毛猫や子猫の為に自ら危険を顧みず、ボス猫の忠告を無視してまで餌を探しにダンボール箱の外へ出て行つた黒猫。案の定ボス猫による制裁で死に追いやつてしまつたが、それでも黒猫は自らの信念を曲げることなく最後まで戦い、そして散つて行つた。

三毛猫に対しても今では黒猫同様にその生き様を見届けたことで、三毛猫なりの信念を見た気がした。子猫よりはまだ体力があつた為にその気になれば子猫を見捨て、自分だけ安全な場所へと逃げることも可能だつたろう。もしかしたらボス猫の忠告に怯え、ダンボール箱から出て行く勇氣すらない臆病者だつたかもしれない。

しかし三毛猫のなれの果てを見た限り、ただの臆病者には見えなかつた。そこにはか弱い小さな命を自分の体を使って必死に守ろうとした姿が鮮明に映し出されているように、ボス猫の目にはそう映つたのだ。

そうまでして一匹が守ろうとした命にボス猫は興味が沸いた。この子猫には何かがあるかもしない。それは単なる思い過ごしかもしれないが、自分の勘を信じてみたくなつた。

『名もなき英雄へ、せめてもの手向けだ。こいつに手を出すことはこのオレが許さねえ、いいな』

それだけ言い残すとボス猫はそれ以上取り残された子猫に一瞥も

くれることなく、背を向ける場を後にした。やつと下された命令に手下達は呆気に取られながらもボス猫に黙つてついて行く。何度もダンボール箱へ視線を送りながら、後ろ髪引かれるようにボス猫同様この場を去る手下達。

たつた一匹残された子猫は雨の中、必死で生きよつとあがいていた。

もはや体力は殆ど残つておらず呼吸するだけで精一杯、前足を動かすことすら今はもうままならなくなつてゐる。それでも子猫は微かに瞳を開け、鳴いた。

名前も知らない。

本当はどこに誰なのかもわからない。

だけど彼等から確かな絆を子猫は感じていた。

必死に生きよつとする姿を子猫に示した黒猫と三毛猫。

彼等の姿をほんやりとしか確認出来なかつたが、それでも彼等の思いは十分子猫に伝わつていた。

子猫ながらに彼等の生き様をその身に感じて、それをきちんと受け止めたよつと思つた。

いきなくちや。

だけじだつしたらしいのか、子猫にはわからない。

ほんのちょっとだけでもいい。

少しでも長く、彼等が望んだ通りに生き続けなくちやいけない。

子猫はただただ眠気に負けないように、必死になつて両目を開ける努力をした。

少しでも寒さを凌げるよう本的に体を丸めて、体温が外に逃げないように工夫してみた。

寒さと、空腹と、襲つて来る睡魔と戦いながら子猫は彼等の思いに応えようと必死になつて生き続けた。

いつまで続くかわからぬ雨に打たれながら、……ずっと。

西の田の記憶（4）～名もなき英雄～（後書き）

更新が遅くなつて申し訳ありませんでした。

そしてここまで読んでくださつてありがとうございます。

今後も更新は遅れるかと思いますが、完結田描して執筆活動は続けますのでどうぞ見捨てないでやってください。ありがとうございました

します～！――

一体どれ位経ったのか。

子猫にとっては数日の感覚であつても、実際には数時間のものであつた。

がたがたと震えながら必死に生き続けようと子猫がダンボール箱の中で体を丸めて縮こまっていると、突然雨が止んだ。それまで延々自分の体を打ち続けた雨粒が、子猫の体を打たなくなつたのだ。ようやく濡れずに済んだ。

そう思つた子猫であつたがとても不思議な感覚に囚われる。

雨が止んだ？

いや、違う。そうじゃない。「雨はまだ降り続けている」のだ。なぜなら子猫がいるダンボール箱の外は未だに雨を打つ音が聞こえてくるからだ。雨音は今も子猫の耳に届いている。しかし、子猫の周囲だけなぜか雨は止んでいたのだ。

訝しげに子猫がそつと顔を上げて周囲の様子を窺おうとした時、すぐ側で声が聞こえてきた。

「まあ、こんな所にいると風邪を引いてしまうわ。

良かつたら私の所へ来る？ ねえ、可愛い子猫ちゃん」

少し声音の高い声、しかし愛らしくさえ感じる幼い口調。からつじて開いていた両目を、子猫は声をかけて来た何者かに向かって一心に注いだ。

田の前に現れたのは淡い桃色の平服に身を包んだ黒髪の少女。髪の上半分を結い上げかるうじて見える大きな赤いリボンを付けている。片手には黒い柄の先に弧を描くような形で開かれ、骨組みの間の部分には紙が張られていた。それを子猫の真上にかざしてい

た為に子猫は雨を凌ぐ事が出来ていたのだとようやく理解する。

その代わり雨を凌ぐ道具 傘を子猫の真上にかざしていた為に、それを持っていた少女は雨に濡れていた。

子猫は田の前に現れた優しい眼差しをした見知らぬ少女をじっと見つめ、それから精一杯力の限り声を出した。今にも死にかけていた子猫にとつて、一鳴きすることがどれだけ困難だろう。

それでも子猫は必死の思いで田の前の少女に救いを求めた。

すると子猫の願いが叶ったのか、少女はにっこり微笑むと傘の柄の部分を上手い具合にダンボール箱の角の部分に引っ掛け、少女が柄を持たなくとも子猫が濡れないように工夫して置いた。

傘が倒れないよう慎重に、ゆっくり手を放すと今度はその手を子猫へと伸ばしていく。すっかりずぶ濡れになっていた子猫の体を優しく撫でてやる。

それからふと思いついたかのように右手の肘に下げていたきんちやく袋から、一枚のハンカチを取り出すとそれを広げて子猫の体を覆うように、まるで壊れやすい陶器でも扱うかのような丁寧な手つきで子猫の体を撫でるように拭き取った。

全身を柔らかいハンカチで拭かれながら、子猫は少女が自分の体から水気を取ってくれているのだと察する。

なぜそんなことをしてくれるのか子猫にはわからなかつたが、少女の微笑む姿を見ているとそれまで寒さで震えていたのが嘘のようになり、心がぽかぽかと温かくなつていくのを感じた。

それまでずっと寒さに震え、辛く、苦しい思いをして来た子猫。自分を守ってくれた黒猫と三毛猫の気持ちに応えようと今まで必死になつて生に執着してきたが、そのあまりの苦しさに本当は何度も何度も心が折れそうになつていた。

生まれて間もない子猫にとつて、「生きる」とことじが。

それがどれだけ苦痛に満ちたものであつたか。

過酷な環境に打ち捨てられ、食べる物も何もない箱の中でたつた一匹で生き続けることが、どれだけ辛いものだつたろう。

そんな時に突然舞い降りた幸運。

何の前触れもなく、突然子猫の目の前に現れた人間。手を差し伸べられ、温もりを与えてくれたこの少女が清浄なものに思えて心が震えた。

きらきらと輝くような微笑。

その笑顔を目にするとだけでこんなにも心が安らかになれる。子猫にとってこんな気持ちは生まれて初めてであった。

自分の命を掬い上げてくれた可憐な少女に、子猫は自分が生きてることをもう一度告げたくなった。

嬉しさの余り、子猫は自分の体が衰弱しきっているにも関わらず少女に向かつて自分の存在を訴えた。

震えるようなか弱い声でまた一鳴き、子猫は精一杯の思いで少女に向かつて今の喜びを表現してみた。

それが少女にきちんと伝わっているのかどうかわからないが、それでも何かお礼をせずにいられなかつたのだ。

懸命に生きてる事を少女に伝えることで、子猫は約束を果たせそうな気がした。

自分の側からいなくなってしまった黒猫や三毛猫への恩返しにな

るような思いで、子猫は自分が生きる事で彼等への思いに応えようとしたのだ。

少女は子猫を抱き抱えながら傘を拾い上げると、優しく声をかけ続けて歩き出す。少女の温かい胸の中で子猫はすっかり安心したのか、全てを少女に委ねるようにそっと両目を閉じて、少女の鼓動に耳を傾けた。

トクン、トクンと少女の心臓の音が、命の音が子猫の耳へ、全身へと伝わる。

その音がまた子猫にとって心地良く、記憶としてはっきりとは残っていないが、まるで母親の腹の中で感じていた胎動を彷彿とさせるような感覚であった。

少女の温もり、生を感じながら子猫はどこへ連れて行かれるのか全くわからないまま、それでも少女にその身を任せていつの間にか子猫は極度の疲労と空腹で、よつやく我慢していた眠りへとついた。

共に捨てられた黒猫と三毛猫のおかげで、子猫はこの世に生き続けることが出来た。

彼等のお陰で子猫は少女といつじて出来たのだ。

もし彼等が身を呈して子猫を守ってくれなければ、きっと生後間もない体力のない子猫はすぐに死んでしまっていただろ。ひりだら。

彼等の命が、子猫の命を救つたのだ。

そして命の灯火が消えかけていた時に、再び子猫は命を取り留めることができた。

この少女の救いによって子猫の運命は大きく変わろうとしている。

子猫の心を揺さぶった愛らしい少女、ハル。

いの出来事が子猫にとっての本当の始まりとなつた。

猫の田の隠（5）～運命の出逢い～（後書き）

相変わらず更新が滞ってしまい、申し訳ありません。
不定期更新になつてしまつして読んでくださる読者様がいるけれども、
私にとってとても有り難くてとても幸せなことです。
猫又ちゃんの過去編、もう少しだけお付き合いで願います。

雨の日の記憶（6）～君の存在はあたしにとっての喜びだから～

ダンボール箱から救ってくれた少女ハルの腕の中で子猫は安堵しつつの間にかすやすやと眠りに落ちていた。

それから心地良い眠りから覚めた時、子猫は回りの様子がピリピリしていることに気付く。

うつすらと両目を開けるとまず自分の置かれている状況に目を瞠つた。温かい両腕に抱かれた状態、これはダンボール箱から救い出された時と同じように、少女の腕の中に包まれている状態であった。それから上を見ると、初めて出会った時に子猫に向けていたハルの柔らかい微笑は消え失せ、まるで無理矢理笑みを作っているような引きつった表情をしているハルの顔が目に入る。

何かに怯えているような、必死になつていているような、そんな張り詰めた表情。

子猫に救いをもたらした少女が一体何に怯えているのか？

子猫はわけもわからないままで、どこか腹の奥が熱くなるような感覚に襲われた。

それは、怒り。

自分の命の恩人である少女の笑顔を奪う輩は一体誰なのか、何者なのか？

子猫は不安と怒りに押し潰されそうになりながら、ようやくハルの顔から周囲へと視線を移した。

ハルが立っている場所は広く大きな旧家の前。

木造の一階建てで見渡せる限り見渡してみると、旧家をぐるりと囲う木製の塀が子猫の目からほどこまでも続いているように見えて、

それ位広く旧家の周囲を囲つてゐる様子から、ここがとても広大な敷地であることが容易に想像出来る。

旧家の脇の方には草花が丁寧に手入れされており、綺麗な紫色をした花々　たくさんの紫陽花が雨に打たれていた。

ハルを取り巻く環境、場所は子猫が居たダンボール箱とは比べ物にならない位に過ごしやすそうに見えた。

最も生まれたばかりの子猫にそれを判別する知識などはまだ十分に備わっていないのだが、ダンボール箱という比べるには分かりやすい過酷な環境を知つていただけに、ほんやりとだが子猫にはそう感じ取れたようだ。

それでは自分の救い主を怯えさせる存在はいかなる者なのか？
子猫はよつやつとハルの目の前に立ち塞がる存在へと視線を走らせた。

旧家の大きな玄関先、左右に開閉させる硝子戸が開いており、その先の玄関内には一人の女性が厳しい表情で立つている。

上質な素材で出来た着物を着こなした黒髪の女性。

滑らかな黒髪はぴつちりと頭の上部で結い上げられている。白く、どこか蒼白にも見える顔色にキレ長の瞳。口元は一文字に結ばれているせいか、上品で美しい容姿とは裏腹にどこか威圧的な雰囲気を醸し出している様子がこの女性の象徴としてよく現れていた。

ハルに向かつて見下すような、侮蔑を込めたような眼差しで一心にハルの抱き締めている「もの」を睨みつけている。

「ハルさん、『それ』は一体何なんですか？」

威圧的な女性の口から、まるで汚らわしいものに対する口調で詰問した。

ハルは反射的に、本能的に両手で抱き抱えている子猫を守るように力を込めて、わずかに女性から距離を離すような形でぐいと横へ逸らす。どうにかして少しでも女性の田から子猫が見えないようこ足搔いてるようでもあった。

そんなハルの態度が気に食わないのか、それとも一度した質問に答えなかつたことに苛立つているのか。

女性は再度訊ねた。

その口調は先程よりも更に刺々しく、苛立ちを隠す様子は微塵もない。

「ハルさん！？ その手に抱えている物体は何なのかと聞いているのです！」

明らかなる敵意。

それに怯えるハル。

子猫は瞬時に察した。

「これ」が少女を怯えさせる原因なのだと。

その「敵」に向かつて少女を守る為に威嚇したかったが、情けないことに弱つた体ではそれすらも敵わなかつた。

ただひたすらに、ハルの代わりに睨みつけるだけが精一杯であった。

ハルは女性の顔色を窺うようにもじもじしながら、そして子猫を隠し通すことが無理だと悟ると、諦めたように白状する。そつと両手の力を緩めて、ほんの少しだけ子猫が女性に見えるようになるとハルは質問に答えた。

「子猫……、さつきそこで拾つたの」

「汚らしい、さつきと捨ててきなさいな」

即座に返された辛辣な言葉にハルの心臓の音が加速した。

「でも……っ！ 可哀想……」

愛おしそうに子猫を抱き締めながらハルが必死に女性へ懇願する。しかしその女性にとつて子猫という存在は汚らわしい獣以外の何物でもないらしく、子猫を可哀想に思つてはいるハルの言葉に耳を傾けるような気配は微塵も感じられなかつた。

むしろ女性の怒りは子猫だけに向けられてるわけではないらしく、そもそもその怒りの矛先はハル個人に突き付けられてるよう見える。それをハルは最初からわかつていたのか、本能的に女性を避けるような体勢で今もびくびくと怯えている様子であつた。

憎しみと怒りに満ちた冷たい瞳をハルに向けて、それから両腕に抱き抱えている子猫を奪い取ろうと手を伸ばした瞬間、子猫は渾身の力を込めて前足を振りかざした。

子猫の爪が女性の手を引っ搔く寸前、あわやという所で誰かの手が伸びて来て女性の手を掴み、子猫の攻撃は空振りする。

しかし子猫が自分を攻撃したことを見つかり見ていた女性は、口元を歪めて更に憎悪を増したようにねめつけた。

だが女性の怒りを鎮めようとすると、先程手を掴んで子猫の攻撃が当たらないようにした人物が、女性とハルの間に仲裁に入るよう立ち塞がる。

「まあまあ母さん、それ位にしどきなつて！」

学生帽を田深に被り、ハルより身長の高い青年が笑みを浮かべながら軽い口調で諭そぐとする。

真っ白なカツターシャツに黒いズボン、この時代の学生服を身に纏つた十五歳の青年と、いつの間にかハルの隣に立つていざとなつ

たら自分がハルを守る盾となるように寄り添つてゐる十二歳の少年。彼はハルのように着物を普段着とした格好で、頭は殆ど坊主頭といつても良い位に短かい。

二人は実の兄弟で、ハルの前に立ち塞がる女性の実の息子である。元々この家の主はハルの実の父親であり、目の前にいる女性はハルの実の母親ではなく、ハルの父親の再婚相手であった。二人の息子を連れて父親と再婚した為、ハルをかばうように現れた一人の兄弟はハルにとつては血の繋がりのない義兄弟だ。

しかし二人の兄弟は母親の再婚によつて義理の妹となつたハルを非常に可愛がつており、まるで実の兄妹のように仲良く暮らしていだ。しかし父親と二人の兄弟の愛情を一心に受けるハルのことを毛嫌いするように、継母となつた女性だけは兄弟がハルの味方をすることを快く思つていなかつたようだ。

その度にハルは二人の兄弟の目の届かない場所で執拗に折檻せつかんされようになつてゐた。

わけもわからず憎まれ、体罰を受けるハルは女性の事を継母だと認識しつつも本能的に彼女に怯え、避けるようになつてゐる。何も知らない父親の代わりに、この二人の兄弟が継母からハルを守るという役目を自然と請け負つようになつてゐた。

一人の兄弟の登場により、継母はそれ以上文句を言つのを諦めてしまつ。なぜだか継母は実の息子達に逆らうことが出来ずにいた。それはこの家で唯一本当に自分の味方と成り得る人物は、自分と同じ血が流れたこの二人の兄弟しかいないことを理解してゐたからである。ゆくゆくはこの旧家を自分の長男が継ぐと信じて疑つていなかつたので、その長男の機嫌を損ねるということは自分が一生この家で安泰に暮らすという約束が出来なくなるかも知れないということを重々承知していた。

自らの安寧を優先する余り、継母は自然と長男に表立つて逆らうこととは出来なくなつてゐたのだ。

タイミング悪く一人の兄弟が現れ、これ以上は自分の思い通りにすることが出来ないと悟った継母は鼻を鳴らしながら何も言わず家中へと引っ込んで行つた。

継母が去る背中を見送つて、ハルはようやく安堵の息を漏らした。それから自分を助けてくれた一人の兄に礼を言ひ。

「ありがとう、お兄さん。でも……お義母さんのあの様子だと、この猫ちゃんは……」

言いかけたハルに長男が平然と言い放つた。

「母さんの言つことなんて気にするなよー。」の家のことは義父さんが決めるんだ。だから母さんじゃなく義父さんに頼んでみな。義父さんはハルの言つことなら何だつて聞いてくれるつて！ こんなに可愛い猫なんだもん。きっと飼つのを許してくれるぞー。」

「そうだよ、それにこいつ凄く珍しい品種かもしねないし。回りの奴等に自慢出来るかも！」

次男も続けてハルを慰め、それから三人で仲良く炊事場へ足を運ぶと、子猫が食べられそうな物が何かないかこの家の炊事係に聞いてみることにした。

ハルは子猫を抱き締めながらほつと溜め息をつく。一人の兄弟の手助けにより、ハルは子猫に食事を与えることが出来、それから父親が仕事から帰つて来るまでの間、家政婦の助言により念の為子猫を獣医師に診せに三人で雨の中、動物病院まで子猫を連れて出掛け、子猫を診察してもらつた。

幸運にもこの獣医師とハルの父親は旧知の仲であり、診察代などは後で父親に話を通すということで、ハル達はこの場で子猫の診察

代を払わずに、そのまま帰宅して獣医師に教えてもらつた通りに子猫の世話をすることが出来た。

子猫はかなり衰弱していたようだが、体力は既に回復傾向に向かっており、このままミルクを与え続け、体温調節もしつかりして安静にしておけばすぐに元気になると獣医師に言われ、ハルは心の底から喜んだ。

その間も継母はハル達のやり取りを遠目に眺めながら面白くなさそうにツンとし、見て見ぬ振りを決め込んでいた。

家政婦の手助けもあり、ハル達は父親が帰つて来るまでしつかり子猫の面倒を見ていたが、すっかり疲れていたのか子猫はそのまま気持ち良さそうに目を閉じて、ぬくぬくと心地良い眠りにつこうとしていた。

そんな時、遠くの方でハル達の声が耳に入りながら子猫はじっと、無意識に耳を傾ける。ハルの声はとても心が安らぐ。まるで子守唄のように自然と耳に入つて来て、子猫の気持ちを和らげてくれる。ハルの声にはそんな不思議な力があった。

「お父さん、猫ちゃんを飼つてもいい？」

懇願するようにハルが父親に頼み込んでいた。それに倣うように二人の兄弟も一緒に頭を下げて許しを得ようとした。

父親はちらりとそっぽを向いている継母を、それから奥にあるハルの部屋で寝ている子猫とを交互に見つめ、それからハルの泣きそよな顔を見て判断した。

「仕方ないな、お前がそこまで必死なら飼つてもよろしい。だが子猫の面倒はちゃんとお前達が見るんだぞ?」

父親の了承に喜び叫ぶ三人の子供達を余所に、継母は夫の言葉に

驚愕し表情を歪めて悔しそうにしていた。

嬌声を上げていたハル達はハッと子猫に気付き慌てて口元に両手を当てて、すぐに沈黙する。それからハルは愛しそうに子猫の側に寄り添うと、優しく子猫を撫でつけ囁いた。

「良かったね、今日からお前はあたしの家の子になつたんだよ？
そうだ、お前に名前を付けてあげなくちゃね」

まどろみの中、子猫は薄眼を開けてハルを見つめる。天使の微笑みとはまさにここのことを言つんだろう。ハルの笑顔、大切そうに触ってくれる小さな手、その全てが子猫を幸せで満たしていた。

「お前との出会いはあたしにとつてすっごく大きな喜びになつたから……、そうね。これからもあたしが喜ぶのを助けてくれる？ お前の存在があたしにとっての喜びだから、きっとお前はあたしにとってとても大切な存在になれるわね。だからお前の名前は……、喜助。そう、今からお前は喜助だよ！」

喜助。

それが自分の名前。

これから先、ずっとハルの側に居て、ハルの笑顔を守る為に、そしてハルが喜んでくれる為に。

自分はずつとずつと、永遠にハルと一緒にいるんだ。

猫の皿の記憶（6）～君の存在はあたしてひとの喜びだから～（後書き）

いつもいつも更新が遅くて申し訳ありませんでした（――）
そしてそれでも拙作を読んでくださいて誠にありがとうございます。
今回みづやくハルの家族の一員となつて、なおかつ「名前」をもう
つた猫又。

猫又にとつて「嘉助」という名前がどれだけ大切なものだったか、
ずっと前に「名前」について猫又がマジギレしたのを、果たして
何人の読者様が覚えてらっしゃるでしょうか（笑）
一応序盤から色々伏線みたいなものを散りばめてきてるので、色々
上手い具合に回収出来たらいいなと思つてます。

それでは今後も「猫又と色情狂」をよろしくお願ひいたします。

廻の田の記憶（二）～宿命の好敵手との出会い～

『ねえハル、これはなに？』

全身に灰色の縞模様があるキジトラ猫、喜助は興味深そうに兩で濡れた地面の中へ潜りて行ひとする//ズにて鼻先を近付けて一鳴きする。

びくびくしたように前足でちょんちょんと//ズを突くよし、元より前足の先が少し触れたら瞬時に引っこむこと仕草を繰り返す喜助の行動を見たハルは、くすぐると楽しそうに笑っている。

「あんまつ//ズせんを苛めては駄目よ、喜助」

『みみず？　こいつ、みみずってこのかハル！』

勿論ハルには喜助の言葉など理解出来ていない。それでも彼等はまるで意思の疎通が出来ているように一緒に中庭を駆け回っていた。まるでこの世に存在する数多の物事をハルに教わるようになり、喜助は色々な物に興味を示してはそれが何かをハルに訊ねた。

『これはなに？』

『ねえ、これは？』

『なんだこれ、へんなの！』

『ねえハル！　おしえて、おしえて！』

自分が知りたい事をハルは笑顔で教えてくれる。喜助は最初、ハ

ルには自分の言葉が通じているのかと錯覚していた。しかし細かな内容がハルに伝わっていないことから、ハルは自分の所作を見て勘を働くせ察してくれているのだと理解する。

はっきりと言葉が通じているわけではなかったが、喜助にはそれで十分であった。

あの地獄のようなダンボール箱の中での時間が嘘のように、あれがまるで質の悪いただの悪夢だったかのように、今では何もかもに喜助は満たされていた。

温かい寝床、毎日ちゃんと食事を与えてもらえ、大好きなハルと一緒に過ごすことが出来る。

喜助は今、心底満たされていた。

しかし問題が何一つなかつたというわけではない。

ハルを毛嫌いする存在、継母のことが喜助は大嫌いであった。

何かにつけてハルに文句を言つては叱り、酷い時には体罰も辞さなかつた。その度に喜助は小さな体で必死に継母を威嚇したが、それは全くの逆効果となつて更にハルを窮地に追いやる助けとなつてしまつたのである。

自分にもつと相手を恐れさせるだけの力があれば、あの継母からハルを守つてやれるのに。それが喜助にとつて唯一の悩みの種であつた。それでもハルには味方がたくさんいたことに変わりはない。どういった経緯があるのか喜助にはわからなかつたが、継母の実の息子である兄弟は自分達の母親よりむしろハルに味方することが多かつたのだ。喜助の手に余る事態に陥つても、この兄弟特に長男を連れて来さえすればハルが守られる事を喜助は知つていた。

『くそ……、ぼくだつてハルをまもつてやれるのに。ただちょっとちからがたりないだけなんだ……』

そうぼやいたところで小さな猫が大の大人に立ち向かつたとして

も全く歯が立たないことは、喜助にも十分理解出来ていた。でも喜助が人間の言葉を話せたら、それで継母に文句を言ってやることが出来たなら自分にだつてハルを守る力になれるのだと、喜助はそう信じていたのだ。

ハルの父親に関してはあまり戦力として喜助は考えていなかつた。確かに父親はどちらかといえばハルの味方になることが多かつたが、それでも継母がハルを毛嫌いしていることを認知していながらも、そのことに關して少し注意をするだけで殆ど放置しているに過ぎなかつたからだ。

ハルが苛められているのを知つていて、それで継母に罰を与えない父親の事が喜助は好きになれなかつた。

人間社会のことはまだよくわからない。

この家の主はハルの父親だ。それに逆らつている継母を糾弾して繩張りから追い出さない辺り、人間というものは犬とも猫とも全く異なる価値觀を持つてているのだと喜助は勝手に理解した。

月日は流れ、喜助もハルも成長した。

継母による確執があつたものの、喜助もハルも幼い頃と全く変わらぬ愛情を分かち合い、そして互いになくてはならない存在へと関係を育んで行つた。

そんな時だつた。喜助の前に「敵」が現れたのは。

『ハル……、こいつ誰?』

喜助とハルが出会つたのは、ハルがまだ五歳かそこらの頃。

今や十五歳という年齢を迎えたハルはこの地区で最も優秀な学院の女学生へとなるまでに成長していた。

そんなハルが、ある日一人の男を家に招いたのだ。

黒髪の短髪、ほんの少し日に焼けた肌をしており、瞳は聰い雰囲

氣を醸し出している。体つきは軍人として数年前に家を出た頃の長男とさほど変わらず、割としつかりしていた。

だが男の顔には無愛想といつてもよい仏頂面の面が張り付けられており、その顔つきが更に喜助を不快な気分にさせた。

そもそもハルが見知らぬ男を家に招くことは非常に珍しいことである。ハルがまだ十かそこらに通っていた学校の同級生で、喜助がハルと出会う前から幼馴染みであつた犬塚呂尚以外に、この家に他の人の男が出入りすることは滅多になかったのだ。

玄関前で喜助は座り込んで、喜助が居ることでなかなか家に上がりえないままの男と睨み合いのようなことが続く。

喜助の機嫌が悪くなっている様子に真っ先に気付いたハルは仕方ないわねと言つたような笑みを浮かべると、これまで何不自由ない生活を送り過ぎたせいでたつぱりと体中に脂肪を蓄えてしまつた喜助を両腕で抱き抱えた。

抱き抱えた時、ハルの腕には喜助の柔らかい肉が乗つており、それを横目でちらりと見た男はわずかに表情を緩ませる。

それを嘲笑と捉えた喜助は完全に頭に来て、男に向かつて牙をむいた。

「ほらほら、そんなに怒らないで喜助」

自分を噛つた男になぜそんな寛容でいられるのか理解に苦しんだ喜助は、全身の毛を逆立てたままハルを仰ぐ。

『なんでつ？ どうしてこんな男をかばうよつな言い方するのさー… こいつオレを見て噛つたんだぞ？』

ハルの腕の中で暴れる喜助を見て、男は少し驚いた風に口を開いた。

「ハルさん、この猫……まるで俺達の言葉がわかつてているような様子ですね」

『わかつてゐるよつな、ぢやない！ わかつてゐるんだよー。』

会話が出来ないことは喜助も十分にわかつていて。しかし初対面の他人にこんなことを言われたのは初めての経験であった。これまでも何度かハルと一緒に居る時に他人に会つたことはあつたが、誰も猫が人間の言葉を理解しているようだと口にした者は一人もいなかつたのだ。しかも今回は遭遇してまだ間もない。たつたこれだけの様子を見ただけでそんなことを言い出したのはこの男が初めてであつた。

まるで自分とハルのことを何もかも知り尽くしているよつな、喜助のことを悟つてゐるよつな、そんな不快な気分がより一層強くなつて行く。腹の奥に何か別種の生き物がもぞもぞとうごめいでいるよつな奇妙な感覚、すつきりとしない不安のよつなものが喜助の中に広がつて行つた。

この男の真つ直ぐではあるがどこか見透かすよつな瞳に、喜助は自分の存在を脅かされてゐるよつな感覚に襲われた。

男の目を見ているとまるで自分よりずっと強大な化け物と対峙しているよつな威圧感に氣圧され、本能的に萎縮してしまつ自分にまた腹が立つ。だが本能には勝てない喜助は、そのまま勢いが萎んでしまつて大人しくなつてしまつ。

ようやく喜助が落ち着いたのだと勘違いを起こしたハルは、喜助の機嫌を取るように優しく頭から尻尾の付け根までを何度も撫でつけながら、田の前の男の紹介をした。

「このはね、学院で仲良くさせてもらつてゐる猫又征四郎さんつていうの。猫又だなんて、変わつてゐるでしょ？ 私には喜助がいるか

らなぜだか妙に親近感がわいてしまって。それで今日は家で一緒にお茶を飲みませんかってお誘いしたのよ。だから喜助も仲良くしてあげてね、お願ひ

そういうハルに喜助はただならぬ雰囲気を感じ取っていた。

ただ仲良くしているだけの男友達ならば餓鬼臭い犬塚呂尚である程度どういったものか理解はしている。ハルにとつてはそれ以上でもそれ以下でもない、ただの「友達」だ。

そんな感情の中に「喜助以上の感情」をハルは持ち合わせていなかつた。だからこそ犬塚呂尚がどんなにハルに対して下心を持つて近付こうとしても、ハル自身にそんな感情は一切なかつた為にこれといった不安も心配も呂尚に対して持つていなかつたのだ。

しかしハルの猫又征四郎に対する態度、 表情。

それを目にした瞬間、いや……正しくはハルから醸し出される柔らかい雰囲気から。

喜助の中に芽生えた不快な感情が、まず何が原因で発生したもののかを今更ながらに理解した。

猫又征四郎を紹介する時のハルの聲音が一気に変わつた。それはハルの父親に対するものとも、兄弟に対するものとも明らかに異なる。聲音は非常に柔らかく、優しげで、これまでずっと喜助にのみ与えられるものだと思っていた「愛情」そのものだった。

愛情を込めた口調に喜助は不安にならずにいられなかつた。

他の男と接する態度と明らかに違う。そこには乙女特有の恥じらいと嬉しさ、喜び、照れ。そのどれもが入り混じつており、そのどれもが猫又征四郎に対する愛しさの表れであるように見て取れた。ますますもつて喜助は戸惑う。これまでになかったことだ。そんな日が来るとも思つていなかつた。

喜助はハルと猫又征四郎という名の男の顔を交互に見つめ、だんだん頭の中の整理がつかなくなつていく。

『え？ え？ ハル？ まさかそんな……っ…』

それからようやく理解する。

二人の目と目が見つめ合ひ、互いに目で会話するようになり、楽しそうに微笑み合う姿を。喜助には到底入り込む余地のない一人と自分との大きな溝を見つけてしまった。

ハルの腕の中で、ハルの鼓動が聞こえる。とくんとくんと聞こえる音は徐々に早くなつて行く。

喜助は焦つた。このままではこの男に大切な飼い主を取られるかもしれない。そんな危機感を抱いたのだ。

そして決断する。

ハルと楽しそうに接するこの男、猫又征四郎を力の限り、精一杯の憎しみを込めて。それは世間で言うところの「嫉妬」であつたが、今の喜助にそんな括りは必要なかつた。

男を「敵」と認識する理由が例え嫉妬から来るものであつても、そんなことは関係ない。

事実さえあればそれでよかつたのだ。
とにかくこの男は、喜助にとつて最大最悪の敵となることを今ここで認識した。

『こいつは敵だ！ オレからハルを奪おうとする奪略者なんだ！』

嫉妬に燃える喜助と、それが猫又征四郎との出会いであった。

廻の田の記憶（一）～宿命の奸敵手との出合～（後書き）

皆様、おはいとひばんはで「おれこます。

わはや一ヶ月更新になつてるのでまへとこひ疑いを拭い去れない今までの頃。

本当に申し訳ないです、執筆しようと全く筆が進まないところ」とを世間では「スランプ」と呼ぶのでしょうか。

話の大体の構成は出来上がつてこゐるのですが、細かな部分にまで思考が行き届かず全く執筆に集中出来てしません。

しかし作品をこれ以上劣化をせむわけにもいかないので、とりあえす調子の良い時に書を上げ、また休む……とこひとを繰り返せりともりつてます。

ただの自己満足な趣味で始めた執筆活動に、ようやく「他人に読ませる」とこひとを意識して書くとこひ努力を心掛けようになつてからとこひもの。

脳内の物語を形にするところだがこれ程大変なことは思ひませんでした。苦労しながらもそれをやつてのけた他の作家さん達は心から尊敬に値します。

まだまだ文章や表現方法、描写、何から何まで未熟ですが「猫又と色情狂」という物語の世界を少しでも楽しんでいただけたらと思っております。

そして熱中症には注意を

ここまで読んでくださつありがとうございました。

猫の田の記憶（8）～忠告～

猫又征四郎との出会いから喜助にとつて災難の日々が続いた。

災難といつても彼から直接何かをされたわけではない。あくまで喜助がそう思い込んでいるに過ぎなかつた。その中でも最たる内容といえばやはり、ハルとの関係が一番問題となる点だつた。

喜助の感覚からいつてもやはりハルと遊ぶ時間が極端に減つたのだ。ハルが勉学に励む為に毎日学校へ通わなければいけないので、当然喜助と一日中一緒にいるわけにはいかず自然と共にいる時間がなくなつてしまつのは当然であつたし、それはハルが学校へ通うようになつた日からずつと変わらず続いていたことであつた。

しかしそれでもハルは学校から帰つたら必ず喜助を構つてやつたし、学校で起きた出来事などを喜助に話して聞かせたりもしていた。ハルと離れている時間が増えてしまつた喜助にとつて、ハルと一緒にいる時間がより一層貴重で大切なものに変わつていつたのも無理はなかつたし、そんな時間が喜助にとつて最も待ち遠しい時間になつていたのも当然といえば当然であつた。

喜助にとつて最も大切な飼い主と共に過ごせる時間、最も幸せな時間。

それはハルが喜助に、猫又征四郎を紹介した後にも忘れず続けてくれたのは確かであつたが、明らかに以前とは異なつていた。喜助にとって一番幸福に感じられる時間に、あの男の話題ばかり提供させられることさえなければ……。

「ねえ喜助。征四郎さんつてね、とても面白い方なのよ。今までこんな男の人には会つたことがないわ」

『それだけの変態？ ハル、特殊な男つてのはただの変態つて言つんだぜ』

勿論喜助の言葉などハルに理解出来るはずもない。

喜助の厭味たらしい悪口などハルに届くわけもなく、ハルは笑顔のままなおも征四郎について語り続けた。

「征四郎さんのお家つて代々陰陽師の家系なんですって。喜助、陰陽師って知ってる？ 私はよく知らないんだけど、占いとか妖怪退治をしたりする人なんだって。征四郎さんにもその力があるみたいなの。私は幽霊とかお化けなんて見たことがないから、そんな存在を見たり話をしたり出来る征四郎さんがなんだか羨ましいって思う気持ちと、征四郎さん自身は怖くないのかなって不思議に思う気持ちが入り混じつて……だからかもしれないわね。征四郎さんのお話を聞いていると私の知らない世界を知ることが出来るみたいで、とても興味深いの」

ハルはまるで自分にないものを征四郎が持っていることに強く惹かれているように語っていた。ハルには靈を見るどころか気配を感じることすら出来ない、そういうた靈感が全くないごく普通の少女だった。だからこそ自分には到底触れることが出来ない世界に直接触れることが出来る征四郎に興味を抱き、好意を抱いたのかもしれないと喜助に話して聞かせる。

ハルは靈界自体に興味を抱いたわけではなかつたが、今の喜助に不安を抱かせるには十分な内容だつた。

ある日、ハルが学校から遅く帰宅した際に夜道は危険だと征四郎がハルの家まで送つて來た。ハルの帰りが遅いことを心配していた喜助は、ハルが通う学校から家までの直線の道を何度も何度も往復してはハルを探していた時、一人一緒に夜道を歩いている場面を目

撃してしまった。ハルが何者かに襲われたりしないよう、安全の為に征四郎が付き添つていたわけだが喜助にとつては征四郎自身も危険人物に変わりない。それでもハルは征四郎に完全に気を許し、呑気に会話ををして歩いている姿に喜助の胸はざわめいた。

『ハル……、オレがどんなに心配してたか……お前にはわからないのかよ。いつもなら真っ直ぐに家に帰つて来るはずなのに。もしかしてこんな遅くまでそいつと一緒にいたんじゃないだろうな?』

喜助の嫉妬は止まらなかつた。相手はハルと同じ人間であり、自分はただの猫……飼い猫に過ぎない。だが喜助にとつてハルは自分と同等の存在であると同時に、かけがえのない飼い主に他ならなかつた。いつしかそれが独占欲に繋がっていることに気付いていない喜助は、人間である征四郎に対する憎しみを抑えることが出来ずになつたのだ。

やがてその思いはハルへも向けられていることすら、喜助は気付いていなかつた。

喜助は他人の家の屋根伝いから一人を瞪りつつ後をついて行く。二人は楽しそうに会話をしながら真っ直ぐにハルの家に向かつてゐる様子だ。時折聞こえてくるハルの笑い声が更に喜助の心を揺さぶる。

その微笑みは自分だけのもののはずだつたのに。

自分以外とこんな風に楽しそうにするなんて、許せない。

そんな思いが喜助の心を支配していた時、ふと征四郎が喜助のいる方へと振り向いた。その刹那、喜助は思わず身を隠してしまう。こんな夜遅くに、猫が屋根の上を歩いていたところで何を不思議がある必要があるのだろうか。しかもこんなに暗い夜道、わずかな月明かりで猫の目が反射して征四郎に存在を知られることがあるだろうが、それが喜助だと断定出来るとも思えない。

確かに喜助の毛色は珍しかつたが、光の乏しい闇夜の中で果たし

て喜助の毛色をはっきりと見分けられるだろうか。そう、征四郎が振り返ったところで一人を見張り、後をついて行く猫がハルの飼い猫だと彼がはつきりと断定させることは殆どないはずだつた。それならば彼が喜助の姿を見つけたところで、相手はただの猫だ。人間である征四郎がそんな「ただの猫」を諂ひんやりする必要があるだろうか？

そう、そんな必要はないはずだ。

なのに喜助は反射的に征四郎の視線から逃れようとした。それも咄嗟に、どこか怯える程の勢いで。

征四郎はじつと上を見上げ、何者かの姿を探した。その時ハルがどうしたのかと声をかけ、ようやく屋根の上から視線を外すと再び二人は帰路を急いだ。

喜助の心臓は今にも胸を突き破るような勢いで高鳴り、動悸がかなり激しくなつていた。一人がやつと歩きだしたことを見ると、喜助は今度は更に慎重に一人との距離を大きく取りながら、それでも見失うことのないようにゆっくりと後をつける。

喜助は初めて征四郎に恐怖していた。

圧倒的な力で威圧されるような、そんな恐怖感が治まらない。

征四郎という男は明らかに他の人間とはどこか異色だつた。それは見た目とか態度とか、そういう表面的なものではなく、喜助自身にもうまく表現出来ないが、それは目に見えない力のようなもので自分の存在すら圧倒するような、そんな圧力を感じたのだ。

言ひなればこの世で最も最悪な天敵に出会つたような、対峙するような、そんな感覚に近かつた。

やがて喜助は理解することになる。喜助にとつてとても最悪な運命が、この後待ち受けていることに。

ハルが家に戻った時、喜助は自分が家にいないといけない。

喜助は一人が家まで近付くと先回りして家に辿り着き、何食わぬ

態度で玄関先に待機した。ハルが学校から帰宅する際、喜助は玄関先でハルを出迎えるのが通例となっていたのだ。

喜助にとつてそれが飼い主であるハルへの礼儀でもあつたし、それが自分自身のハルへの愛情表現のひとつであつた。

やはり現れたのはハルの姿だけではなかつた。そこには猫又征四郎の姿もある。喜助は先程の恐怖心を払いのけるように心を強く持つて、精一杯平常を装つた。

ハルが喜助の姿を見つけ、ただいまと声をかけるとそのまま抱き抱える。喜助は嬉しそうに甘えた声を出しながら「ごろごろ」と喉を鳴らした。その光景を目にながら、ふと征四郎がハルにあることを訊ねた。

「ハルさん、そういうえばこの猫……喜助は今年で何歳になるんですか？」

征四郎の突然の質問にハルは一瞬目を丸くした。喜助もまた自分に興味を持たれたことに怖気を感じる。

しかしそのすぐ後にハルは征四郎が喜助に興味を持つてくれたのだと思うと、快く答えた。

「喜助は拾い猫だから正確な誕生日はわからないんだけど、私が見つけた時は生後数日つて感じだったわ。だから今年で大体十歳は迎えてると思うの。猫にしてはとても長生きでしょう？　このまま喜助にはもっともっと元気でいてほしいけど」

ハルは笑顔でそう言つと、心から喜助の健康と長寿を願い、喜助に頬ずりする。頬ずりするとハルの頬に喜助の毛が付いて來たが、それに慣れているせいかハルは喜助を抱っこしながらも何とか片手で顔についた毛を振り落としていた。

ハルが喜助を愛しく撫でている光景を気にすることなく征四郎は

しばし考え込んだ後、奇妙なことをハルに告げる。

「……ハルさん。喜助はよく外を歩き回りますか？ 時間帯など関係なく」

「え？ ええ……、基本的に喜助は放し飼いにしてるから。猫は縛られるのがよくないみたいで、自由に家を出入りさせてるけど」

それからまた征四郎は少し考え込むと、重い口を開くように話し続けた。

「そう……ですか。ハルさん、喜助はもう放し飼いにしない方がいいかもしないです。奇妙な事を言つてるかと思うでしょうが、その。喜助は猫の年齢でいつたら高齢の部類に入りますからね。どんなに元気そうに見えても、十年を超えた猫は老齢なんです。外にはどんな危険があるかわからないですから、室内で飼うようにした方がいいですよ。喜助は不満に思うでしょうが、不慮の事故が起きるよりずっとマシだと思いますし」

忠告するような口調で征四郎が告げる。ハルはそれを聞いて少し怪訝に思った。しかし征四郎の言葉にも一理あったのは確かである。ここ最近では自動車というものが流通していて、自動車が道を走ることが珍しくなくなつていた。それによつて道を歩く際には十分注意するように周囲からよく言われていたのだ。

それは人間だけでなく自動車という存在を理解出来ない犬や猫の類の方がもつと注意しなければいけないことだろう。征四郎はそれを懸念し、忠告してくれているものだとハルは察した。

少し唐突のように聞こえたのも確かにあつたが、それに逆らう理由もハルにはなかつた。

まだ完全に鵜呑みにしたわけでもないがハルは征四郎の言葉に礼

を言い、今後喜助を一匹で歩き回らせないようにすると誓つ。

その時、家の中から次男坊がハルを心配し玄関まで急いで出てきた。

外出してる際の連絡手段が少ない為、帰宅が遅くなることを告げられなかつたことは仕方ないが、それにしては遅すぎると次男坊から説教をされている時、ハルから解放されていた喜助の側に近寄る存在があつた。

玄関先で説教されているハルの背中を見つめている喜助に、征四郎が声をかける。猫に向かつて話しかけるという光景は実に奇妙なものだつた。ましてや喜助と征四郎は全くの他人、何の関係も関連もない者同士だ。

「喜助、お前に俺の言葉が理解出来ているのなら是非聞いて欲しいことがある」

その言葉に喜助は違和感を覚えた。今まで他人が猫である喜助に向かつて真剣に話しかけてきたことなんてただの一度もなかつたらだ。それは初めての経験であるし、何より気持ち悪いものだつた。この人間は喜助が人語を解するという事実を理解して、その上で話しかけている。

その事実があまりに不気味で、喜助は思わず反抗する態度を忘れてしまい、その場に固まつた状態で征四郎を見上げていた。

「これから先、お前は選択を迫られる。それはお前の一生を左右する大きな選択だ」

唐突にそう告げられ、喜助はわけがわからないままオウム返しのように聞き返す。

『選択？ 一体何の選択を迫られるつてんだ？』

相手は猫又征四郎、しかし喜助は征四郎の神妙な面持ちから何か重大なことを知らされているのかという緊張感が芽生え、つい相手が敵であることを忘れ素直に問うていた。しかし征四郎はそんな喜助の問いに答えることなく、そのまま話を続けた。

まるでハルがいない間に、この瞬間にしか告げることが出来ないとでもいうような様子で、征四郎の目線は真っ直ぐと玄関の方で次男坊と話をしているハルから逸らさぬよう注意しながら、喜助に向けて言葉を発する。

「お前は近い内、残酷な選択をしなければいけなくなる。だがそれは選択次第で回避出来るものだ。お前が本当に心の底からハルさんのことを大切に思っているのなら、そして残酷な選択を回避したければ、しばらくの間外出するのを控えた方がいい。俺から言えるのはこれだけだ」

無表情の中に切羽詰まつたよつた焦燥感を漂わせた征四郎の横顔から、それが真実味を帯びた言葉だと理解した喜助は不安に駆られた。突然敵だと認識している人間から意味不明な言葉を投げかけられ、その詳細を説明されることもないままああしろこいつしろと言われたところで素直に従えるはずがない。

むしろその言葉の真意を、理由を話してもらわなければ納得出来るわけがなかつた。

不安が増している喜助は自然と声の音量が上がつて、追いすがるよつた形で征四郎に詰め寄る。

『おい、わけわかんねえぞ！　お前は一体何の話をしてるんだよ！　ハルが何だつて？　選択つて一体どんな選択なんだよ！　それを言つてくれなくちゃどうしようもねえだろうが！　なあおいー』

どうにか征四郎から詳しく述べてやろうと詰め寄った喜助であったが、傍から見れば大きな鳴き声を上げて征四郎を威嚇している光景にしか映らず、玄関先から喜助の鳴き声を聞きつけたハルが慌てて戻ってきた。

「まあどうしたの、喜助！　征四郎さんにおいたをしちゃいけないわよ」

喜助が野生の本能を剥き出しにして征四郎に襲いかかるとしているように見えたハルが、征四郎から喜助を引きはがすように抱き上げると、まるで人間の赤ん坊を宥めるように「よしよし」と言いながら、優しく背中や頭を撫でつけて落ち着かせようとしていた。しかしそんなことで喜助が落ち着くはずもない。征四郎からまだ何も真相を聞き出していないのだから。

せめてこれから自分の身に何が起きるのか、誰から何を選択させられるのか、ハルと何の関係があるのか。

何か知っているであろう征四郎からそれらを聞き出せない限り、喜助が落ち着くことなど不可能だった。

『『言えよー、言えってばー！　お前はオレに何が言いたいんだ、答えろよー！』』

一向に落ち着く気配を見せない喜助に対し、ハルは困ったような表情で征四郎を見つめると、ひとまず家まで送つてもらった礼を言うとこのまま帰つてもらうよう促した。

征四郎もまたハルというより喜助を氣遣うような眼差しで何度も振り返りながら、一礼すると門外へと消えて行つた。

残酷な選択？

ハルを大切に思つなら？

そんなことをお前に言われる筋合いなんてない。
オレはお前なんかよりずっとハルを思つてる！

大切に思つてる！

だから何を言つてるか知らないが、お前に心配される謂われなん
かねえ！

このオレがハルを襲うとでも言つのか。

そんなことをこのオレがするはずない！

ハルを傷付けることなんて、このオレがするわけないんだ！

他の奴等にもそんなこと絶対させない！

このオレが絶対にさせないんだ！

オレがハルを守るんだから、この先一生！

あいつの言つ通りになんかならないんだ、絶対に！

やつぱりオレは、あいつのことが大嫌いだ！

猫の耳の記憶（∞）～忠告～（後書き）

毎度の「ことながらトロトロ更新」めんねこです。
スランプと云うわけでもないのですが、どうにもプライベートが忙
しく執筆する為の十分な時間が取れず、集中力も長く続かないとい
う状態がずっと続いてこんな体たらくになってしまっています。
楽しみにしてくれてる読者様には大変心苦しいです。
完結だけは必ずお約束しますので、どうぞ長くお読みください。
つたらありがたいと思います。

今後も一ヶ月更新、あるいはそれも叶わない月があるかと思われま
すが、今後も「猫又と色情狂」をよろしくお願ひいたします。
重ねて、ここまで読んでくださった本当にありがとうございます（

――）

あの日の記憶（9）～ハルの気持ち～（前書き）

あとがきに謝罪と更新が遅れた理由（言い訳）を綴っています。
読まなくても構わないですが、気が向いたら……どうぞ（^_^・・）

黙の田の記憶（9）～ハルの気持ち～

喜助は後悔していた。

なぜハルの言つ通り、外出することを避けなかつたのか。そのまま言つことを聞いていればこいつして「彼等」に捉まることもなかつたはずであった。

いや、もしかしたらそれを見越した上で、「忠告」だつたのかかもしれない。

まさかとは思うが、これが偶然であるとは到底思えなかつた。

ハルの言葉を無視したことは喜助にとって飼い主の言いつけを破る行為であつたが、それ以上に猫又征四郎へ対する抵抗の表れであつたと言つた方が正しかつたかもしれない。

「外へ出るな」という言葉は飼い主であるハルからの言葉ではなく、征四郎に従つた言葉であると喜助は捉えていた。だからこそその言葉に従つうということは征四郎を認めたことになつてしまつ。喜助はそれが最も苦痛であつた。自分にとつて最大の好敵手である相手の言つ事を聞く義理はない。

その言葉の裏にどんな意味が隠されていよつとも、喜助はハルの言つことしか、自分が唯一認めた、愛した飼い主の命令にしか絶対服従しないということを貫こうと思っていたのだ。

しかしそれも結局は矛盾した行為になる。

忠告の出所が征四郎であつたとしても、それをハルが口にしたことで飼い主の命令となる。

そこにどんな意味が、意図が、含みがあらうともそれが覆ることはない。

喜助はそれに逆らつたのだ。

だからこそ、これは報いかもしない。

愛するハルの言葉に従わなかつた、これが喜助に対する罰なのだ。

ハルが征四郎に忠告されたその日から、喜助は外出することを禁じられてしまった。

厳密に言えば喜助一匹で家から出ることを禁止されていた。ハルと一緒にいる時ならば一緒に家の外まで出歩くことも出来たが、基本自由を好む猫にとって飼い主の監視付き、しかも出歩く距離が限定されてしまうとなると非常に窮屈な生活と言わざるを得なかつた。ハルも暇ではない。四六時中喜助と一緒にいるわけでも、片時も目を離さないというわけには当然いかず、どうしてもハルが喜助の側を離れなければいけない時は、喜助の首輪に細い紐を付けて家の縁側にある柱に括り付けておいた。

晴れの日ならば縁側で日向ぼっこが出来る。縁側を下りた側には喜助専用のトイレがこしらえてある。ハルが面倒を見られない時の為にわざわざ準備したものである。継母が特に気に咎めていた猫の糞尿の処理、これだけはどうしても継母を煩わせるわけにはいかない。ただでさえ未だに喜助の存在を否定している継母だ。

これを理由に喜助を家から追い出しかねないと思ったハルは、次男に相談し、簡易的ではあるが喜助専用のトイレを作ったのである。とはいっても凝つた造りではなく、ただ単に縁側の側に底が浅いボールがひとつきり。その中には砂をたくさん入れてあるだけだ。数日放つたらかしにするわけではないので、ハルが帰宅した時にこのボールの中に喜助が用を足した物をハルが毎日片付けるのだ。

喜助の面倒は自分が見ると言つた。その言葉を違えることなく、ハルは喜助の餌やりも糞尿の後始末もきちんと愛情持つてこなしてきたのだ。

「『めんね喜助、こんなトイレで。お前も色々不満があると思つけど、我慢してね』

ハルは喜助に謝り、いつものように優しく頭を撫でる。

喜助にかかるればトイレの場所などいくらでも確保出来るのだが、

この紐で拘束されでは行動範囲が限られてしまう。確かにこのトイ
レはない、と喜助は思った。

ぶくぶくと肥えた喜助の体にこのボールは心許ない広さである。
これでは用を足した後にちょっと砂を搔き出しただけでボールの外
に砂を散らす結果になるのは、喜助の目から見ても明らかであつた。
これも継母の手を焼く必要のないようになると作ったものであろうと
わかつてはいたのだが、これでは砂を搔き出す喜助自身もかなり気
を使わなければならぬ程だつた。

これはこれでハルが喜助の為に思つて作つたものなんだと無理矢
理納得させ、甘えた声で鳴いてみせたが、自分でもどこか虚しい声
に聞こえたのはきっと氣のせいではない。

一匹で歩き回るという自由が無くなつただけで、こんなにも不便
な出来事が増えてしまう。それならいつそ征四郎の言つことなんて
聞かなければいいのにと喜助は思つたが、ハルに言葉が通じない時
点でそれを伝える術はなかつた。

とにかくハルの為にも我慢するしかない。

最初はそんな風に思えた。

しかしそんな思いは数日経たない内にすぐさま消えてなくなつて
しまつた。

そもそも理由がいまひとつよくわからない。

今までずっと自由に過ごして来たのに、ぱつと出てきた人間の男
の言葉一つでどうして自由を奪われなければいけないのか？

その理由をきちんと説明し、納得いくようなものであつたなら喜
助も理解し、大人しく従つていたかもしけない。

しかし実際はどうだろう。

意味深な言葉を言われただけで、その具体的な理由は何もわかつ
てはいない。

ただわけもわからず自由を奪われ、行動範囲を制限され、外界か
ら閉ざされたような気分を味わつてはいるだけだ。

やがて喜助の胸の奥底からふつふつとした怒りが湧いて來た。

むかむかとやるせない怒りに、喜助の気性は荒くなる。やがてその怒りはハルの家でお手伝いをしている者達にまで及んだりした。実際に怪我をさせることはなかつたが、喜助に何もしていらないのに威嚇したり、引っ搔く素振りを見せたりしたおかげで、お手伝いの者達が喜助を怖がるようになつてしまつた。

その凶暴さに継母がヒステリーを起こしたりしたが、それ以上の粗相をしたわけじゃないのですぐさまハルの父親や次男に宥められ、その場を収めることは出来たが、ハルだけはそうはいかなかつた。外出出来ないことによほどストレスが溜まつてゐるんだろうと思つたハルは、その日から喜助の側にいる時間が増えたりした。

それでも根本的な解決には至らない。

ハルの口から征四郎の名が飛び出す度に、喜助はハルであろうと容赦なく不機嫌な態度を取るようになつてしまつた。

(「一体どつちが大切なんだ？ 征四郎か、オレか。オレが大切ならこんな紐、取つてくれよ！ オレは外を出歩きたいんだ！ 前みたいに自由に歩き回りたいんだよ。ハルは知らないかもしれないけど、オレにだつて友達はいる。悪友ばかりだけど、適當な会話をしたり一緒に昼寝したり、近所にいたずらして遊んだり。オレにだつて猫同士の付き合いつてもんがあるんだ。だからお願ひだよ、ハル。あんな奴の言つ事なんて聞いてないで、オレからこの紐を取つてくれよ）

しかし喜助の思いとは裏腹にハルが喜助一匹を自由にすることはなかつた。

ハルもまた辛かつたのだ。日に日に喜助が不機嫌になつていくのは飼い主としてずっと見て來たハルにだつてよくわかつてゐた。それでも征四郎に言われた言葉が頭から離れずにいたのだ。

喜助同様に言葉の全てを理解したわけじゃない。核心を語ることなく、どこか遠回しに話していた征四郎の言葉の半分も理解していなかつたのだろう。それでもハルにはある光景が目に浮かぶようだつた。

もし喜助が自動車に轢かれてしまつたらどうしよう。

無機質な物体が無情にも愛する飼い猫を轢いてしまつたら。

ゴムで出来た素材で、ハルも触れたことがあるが思つていた以上に固かつたあのタイヤ。地面の上を走るあのタイヤに喜助が巻き込まれてしまつたら、それはどれだけ無残な光景なんだろうと。

想像しただけでも恐ろしかつた。それを征四郎から教わつたような気がした。最悪の事態を招く前に飼い主がそれを事前に阻止しなければいけない。それが出来るのはハルだけなんだと思つた。

そして皮肉にも征四郎からそれを教わつてから、ハルはこれまでに何度も自動車に撥ねられた動物の死骸を目にするようになつた。その殆どは野良猫で、悠々と道を歩いていた猫が猛スピードで走る車に轢かれ、死んでいる姿が大半だつた。

ある猫は車にぶつかつた衝撃で体が弾んで道の端に転がつて行った。ある猫は車のタイヤに踏みつぶされ、かるうじて猫だと判別出来る程度にぐちゃぐちゃになつていた。

そんな事故が車の普及と共に後を絶えず、死体を片付ける市役所の職員はうんざりしていると誰かが話しているのを聞いた。

そう、これは喜助の為なんだ。

ハルはそう自分に言い聞かせ、少しでも喜助の機嫌を取るようにと、更に甘やかして育てるようになつてしまつた。

しかしそんなハルの思いとは裏腹に甘やかされている喜助は更に増長し、ハルに牙をむく行為こそしないが少しずつ言いつけを破るようになつていた。喜助自身ハルに忠実でありたいと思う気持ちがまだ残つているのか、ほんのささいな抵抗のつもりでわざとハルに怒られるようなことをやり始める。

最初は用意された餌を決まつた時間に食べずに残し、後になつて台所で食べ物を押借して困らせてやろうかと実践したが、喜助は自分の首輪から伸びる紐が縁側の柱に括り付けられたことをすつかり失念しており、結局夕食の時間までひもじく鳴く羽目になつてしまつたのは言つまでもない。

これまでハルの言いつけ通りに生活してきた喜助にとつて、ハルの定めたルールに逆らうことが思つていた以上に困難であることを今頃になつて悟る。しかし喜助は諦めなかつた。先程の作戦は浅慮過ぎた。せめてこの紐が届く範囲で出来る抵抗を示さなくてはいけない。そう考えた喜助が取つた行動はやはりトイレの中で用を足さず、わざと縁側の周囲あちこちに糞をばらまく程度しか思い付かなかつた。

猫の糞が縁側周辺に散らばつてゐるのを先に発見したのは家の手伝いさんである。ほぼ悲鳴に近い声を上げるや否や真っ先に縁側へやつて来たのは継母だつた。継母もまた奇声を発するとお手伝いさんの手に持つていった箒を取り上げ、喜助を殴りにかかる。

紐の範囲は限られていたが、重たい体を揺らしながら継母の攻撃を回避する喜助。激昂した継母がこれでは埒が明かないと喜助の首輪に付いた紐を掴み取り、それをぐいぐい手繰り寄せてあつさりと喜助を捕獲した。

さすがの喜助も自由を奪われた状態では成す術がない。継母の怒りに狂つた般若のような顔が間近に迫り、恐怖におののいた喜助が断末魔のような鳴き声を上げた時、ハルが駆け寄り継母から喜助を救出した。

縁側に散らばつた喜助の糞を指さし怒鳴り散らす継母にハルは始終平謝りしている。そんな飼い主の姿を見てさすがにこれはやり過ぎてしまつたかもしけないと反省の色を見せる喜助。結果的に喜助は自由を取り戻すどころかハルの信用度を格下げしてしまつただけに終わった。

ハルを困らせたところで自由を得られるわけではない。そんなこ

とは最初からわかつっていたはずなのに、やるせない怒り、不平不満、征四郎への嫉妬、それらが喜助の心を一杯に満たし、冷静な判断を下すことが出来なくなっていたようだ。

ようやく落ち着きを取り戻した喜助は、縁側に散らかした喜助の糞を懸命に後処理したハルを見やる。その顔からはいつもの屈託のない笑みが消え失せ、どこか悲しみの色を浮かべていた。

そんなハルの沈痛な面持ちに胸が痛んだ喜助はその場から逃げ出したくなつた。しかし紐によつて行動範囲を制限された喜助がハルから逃げることは敵わない。ただただハルの方を見ないように、視界に入らないように背を向けるだけだった。

その間にもハルが鼻をすする音が聞こえてきた。
泣いている？

自分が泣かせてしまった。

それに気付いた途端、喜助の胸に激痛が走る。

いたたまれない気持ちに襲われた喜助は、紐を食いちぎつてでもその場から逃げ出したかった。

しかしそんなことをしてもハルを更に悲しませるだけだ。

ハルは自分を必要としてくれているはずなのだから。

喜助だってハルがいなければ生きてる価値もない。

この命はハルからもらつた大切な生命なのだから。

やがて喜助は逃げ出そうとする気持ちを捨て去つた。

申し訳なさそうにゆっくり後ろを振り向くと、月の光を浴びたハルがこちらを見て優しく微笑んでいる。

少し泣き腫らした瞳がやけに痛々しかつた。

ハルはゆっくりと両手を広げ、喜助を迎える。抱っこを求めている。

あんな酷いことをした喜助のことを抱き留めようと、ハルは両手を広げて笑っている。

いつもの優しい微笑、喜助が大好きな笑み、とてもとても大切なハルの両腕の中へと喜助は歩み寄つた。

少し震えた声で鳴く。

殆ど涙声に近い声で鳴きながら、喜助は精一杯ハルに謝った。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

そんな喜助をハルは優しく抱き締め、頭を、背中を撫でる。

耳元では囁くような細い声でハルが「喜助」と名を呼んだ。

そして消え入るような小さな声で、最後にこいつひつたような気が

した。

「「めんね、……喜助」

■■の田の記憶(9)～ハルの気持ち～（後書き）

かなり更新が遅くなつて申し訳ありませんでした。
ここから先は見苦しい言い訳です（笑）

実はこの話をパソコンで書いていた時、突然エラーになつてしまい、
保存どころかバックアップもとつていなかつたので、全文失う羽目
になつてしまつたのです！

そしてまた最初から書き直すことにして……（、・：）

まあ全文書き直す前に、あまりのショックにしばらく執筆する気力
を完全に失つてしまつて放心状態。そのまま数カ月が過ぎる結果と
なつたのです。

とりあえずこの無事に書き上げる事が出来たので、即日更新
と相成りました。前回からかなり日数が経つてしまつてるので、こ
の話の内容どころかこの作品 자체忘れ去られていないことを切に願
っております（笑）

本当にお待たせしました！

そして「みんなで（――）m

今後もよろしくお願ひいたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3216j/>

猫又と色情狂

2012年1月10日20時26分発行